

釜ノ口遺跡Ⅲ

9次・10次・11次調査

2014

松山市教育委員会

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

かま の くち い せき

釜ノ口遺跡Ⅲ

9次・10次・11次調査



2014

松山市教育委員会

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

序 言

本書は、平成 11 年から平成 22 年にかけて小坂釜ノ口地区において実施した 3 遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

一連の調査成果として、まず釜ノ口遺跡 9 次調査では、弥生時代後期の土器、木製品、石製品、種子などが出土し、集落内を区画する溝や水田に伴う給排水溝の可能性のある溝を発見しました。釜ノ口遺跡 10 次調査では弥生時代後期の土器、炭化材、焼土を伴う焼失住居を検出し、その廃絶状況が明らかになりました。同遺跡では縄文時代早期の石製品と晩期の土器が出土し、当該地区では希有な縄文期の痕跡を発見することができました。また、釜ノ口遺跡 11 次調査では、弥生時代後期の土器、木製品、石製品が出土し、とりわけ杭材は出土状況から見て、護岸工事の一部を検出した可能性が考えられます。

以上のように、松山平野を代表する弥生時代の集落遺跡である釜ノ口遺跡群の構造を考えるうえで、貴重な情報を得ることができました。

このような成果を上げることができたのも、埋蔵文化財に対する関係各位のご理解とご協力の賜物と深く感謝申し上げます。

平成 26 年 3 月

松山市教育長 山本 昭弘

例 言

1. 本書は、松山市教育委員会と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成 11・12 年度に、松山市教育委員会と財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センターが平成 22 年度に、松山市小坂釜ノ口地区内で実施した宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本報告書の遺構は、呼称を略号で記述した。
SB：竪穴建物、SD：溝、SR：自然流路、SK：土坑、SA：柵列、SP：柱穴、
SX：性格不明遺構
3. 本書で使用した標高数値はすべて海拔標高を示し、方位は国土座標を基準とした真北である。
4. 基本層位や遺構埋土の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（1988）に準拠した。
5. 遺構の製図および遺物の実測・製図は、水本完児、高尾和長の指示のもと、池内芳美、木西嘉子、田崎真理、多知川富美子、戸川安子、西本三枝、平岡直美、山下満佐子が行った。
6. 遺物の復元は、和泉順子、江島淳子、寺尾いずみ、松本美代子が行った。
7. 遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。
8. 写真図版は遺構撮影を水本、高尾、大西朋子が行い、遺構撮影および図版作成は大西が行った。
9. 本書の執筆は水本と高尾が担当し、編集は水本が担当し、宮内慎一と平岡、山下の協力を得た。浄書は中村紫が担当した。
10. 本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターが保管・収蔵している。
11. 報告書抄録は、巻末に掲載している。

目 次

第1章	はじめに…………… (水本) ……	1
第1節	調査に至る経緯……………	1
第2節	調査・刊行組織……………	
第3節	遺跡の立地と歴史的環境……………	3
第2章	釜ノ口遺跡9次調査…………… (水本) ……	6
第1節	調査の経緯……………	6
第2節	層 位……………	7
第3節	遺構と遺物……………	10
第4節	小 結……………	52
第3章	釜ノ口遺跡10次調査…………… (水本) ……	55
第1節	調査の経緯……………	55
第2節	層 位……………	56
第3節	遺構と遺物……………	59
第4節	小 結……………	80
第4章	釜ノ口遺跡11次調査…………… (高尾) ……	83
第1節	調査の経緯……………	83
第2節	層 位……………	85
第3節	遺構と遺物……………	
第4節	小 結……………	100
第5章	調査の成果と課題…………… (水本) ……	105

挿図目次

第1章 はじめに

第1図	周辺遺跡分布図	5
-----	---------	---

第2章 釜ノ口遺跡9次調査

第2図	調査地測量図	6	第21図	SD3 (1層) 出土遺物実測図 (2)	33
第3図	北壁・西壁土層図	8	第22図	SD3 (1層) 出土遺物実測図 (3)	34
第4図	遺構配置図	9	第23図	SD3 (1層) 出土遺物実測図 (4)	35
第5図	SD2 断面図	10	第24図	SD3 (1層) 出土遺物実測図 (5)	36
第6図	SD2 出土遺物実測図	11	第25図	SD3 (1層) 出土遺物実測図 (6)	37
第7図	SD3 遺物出土状況図 (1)	13	第26図	SD3 (1層) 出土遺物実測図 (7)	38
第8図	SD3 遺物出土状況図 (2)	15	第27図	SD3 (1層) 出土遺物実測図 (8)	39
第9図	SD3 断面図	17	第28図	SD3 (1層) 出土遺物実測図 (9)	40
第10図	SD3 (3層) 出土遺物実測図 (1)	18	第29図	SD3 (1層) 出土遺物実測図 (10)	41
第11図	SD3 (3層) 出土遺物実測図 (2)	19	第30図	SD3 (1層) 出土遺物実測図 (11)	42
第12図	SD3 (3層) 出土遺物実測図 (3)	20	第31図	SD3 (1層) 出土遺物実測図 (12)	43
第13図	SD3 (3層) 出土遺物実測図 (4)	21	第32図	SD3 (1層) 出土遺物実測図 (13)	44
第14図	SD3 (3層) 出土遺物実測図 (5)	22	第33図	SD3 (1層) 出土遺物実測図 (14)	45
第15図	SD3 (2層) 出土遺物実測図 (1)	24	第34図	SD3 (1層) 出土遺物実測図 (15)	46
第16図	SD3 (2層) 出土遺物実測図 (2)	25	第35図	SD3 (1層) 出土遺物実測図 (16)	47
第17図	SD3 (2層) 出土遺物実測図 (3)	26	第36図	SD3 (層不明) 出土遺物実測図	49
第18図	SD3 (2層) 出土遺物実測図 (4)	27	第37図	SD4～6 断面図	50
第19図	SD3 (2層) 出土遺物実測図 (5)	28	第38図	SD6 出土遺物実測図	51
第20図	SD3 (1層) 出土遺物実測図 (1)	32	第39図	SD1 断面図・出土遺物実測図	52

第3章 釜ノ口遺跡10次調査

第40図	調査地測量図	55	第52図	SK1～3 出土遺物実測図	69
第41図	遺構配置図	57	第53図	SK5 測量図・出土遺物実測図	70
第42図	南壁土層図	58	第54図	SK8 測量図・出土遺物実測図	
第43図	西壁土層図	59	第55図	SK11 測量図・出土遺物実測図	71
第44図	SB1 測量図・出土遺物実測図	60	第56図	SA1～6 測量図	72
第45図	SD1～3 断面図	61	第57図	SA1・3～6 出土遺物実測図	73
第46図	SD1 出土遺物実測図	62	第58図	SD5・6・8・9 断面図	74
第47図	SD2・SD3 出土遺物実測図	63	第59図	SD5・6・8 出土遺物実測図	76
第48図	SD7 断面図	64	第60図	SK6・SK7 測量図・出土遺物実測図	77
第49図	SD7 出土遺物実測図 (1)	65	第61図	SK12 測量図・出土遺物実測図	78
第50図	SD7 出土遺物実測図 (2)	66	第62図	柱穴・包含層・地点不明出土遺物実測図	79
第51図	SK1～3 測量図	67			

第4章 釜ノ口遺跡11次調査

第63図	遺構配置図	84	第67図	SR1 上層出土遺物実測図 (1)	89
第64図	SR1 測量図	86	第68図	SR1 上層出土遺物実測図 (2)	90
第65図	SR1 遺物出土状況図	87	第69図	SR1 下層出土石製品実測図	91
第66図	SR1 下層出土遺物実測図	88	第70図	SR1 木製品出土状況図	92

第71図 SR1 出土木製品実測図 (1)……………93	第76図 SX2 測量図……………97
第72図 SR1 出土木製品実測図 (2)……………94	第77図 SX2 出土遺物実測図……………98
第73図 SR1 出土木製品実測図 (3)……………95	第78図 SX3 測量図……………99
第74図 SR1 出土木製品実測図 (4)……………96	第79図 SX3 出土遺物実測図
第75図 SX1 測量図……………97	第80図 SX4 測量図

第5章 調査の成果と課題

第81図 釜ノ口遺跡9次調査出土の線刻土器 (1) ……108	第82図 釜ノ口遺跡9次調査出土の線刻土器 (2) ……109
---------------------------------	---------------------------------

表目次

第1章 はじめに

表 1 調査地一覧…………… 1

第2章 釜ノ口遺跡9次調査

表 2 溝一覧……………53	表 3 柱穴一覧……………53
----------------	-----------------

第3章 釜ノ口遺跡10次調査

表 4 柵列一覧……………81	表 6 溝一覧……………81
表 5 竪穴建物一覧	表 7 土坑一覧

第4章 釜ノ口遺跡11次調査

表 8 柱穴一覧……………101	表 13 SR1 下層出土遺物観察表 石製品……………103
表 9 自然流路一覧	表 14 SR1 出土遺物観察表 木製品
表 10 性格不明遺構一覧	表 15 SX2 出土遺物観察表 土製品……………104
表 11 SR1 下層出土遺物観察表 土製品	表 16 SX2 出土遺物観察表 石製品
表 12 SR1 上層出土遺物観察表 土製品……………102	表 17 SX3 出土遺物観察表 土製品

第5章 調査の成果と課題

表 18 釜ノ口遺跡9次調査出土の木器一覧……………107	表 19 釜ノ口遺跡9次調査出土の線刻土器一覧……………110
-------------------------------	---------------------------------

写真図版目次

第2章 釜ノ口遺跡9次調査

図版 1	1. 遺構検出状況 (東より)	2. SD2 遺物出土状況 (南西より)
	3. SD3 遺物出土状況① (南西より)	
図版 2	1. SD3 遺物出土状況② (東より)	2. SD3 遺物出土状況③ (南より)
	3. SD3 遺物出土状況④ (南より)	
図版 3	1. SD3 遺物出土状況⑤ (東より)	2. SD3・SD6 完掘状況 (東より)
図版 4	1. SD2・SD3 完掘状況 (北東より)	2. 遺構完掘状況 (東より)
図版 5	1. SD2・SD3 (3層) 出土遺物	
図版 6	1. SD3 (2層) 出土遺物	
図版 7	1. SD3 (1層) 出土遺物①	

- 図版 8 1. SD3 (1層) 出土遺物②
- 図版 9 1. SD3 (1層) 出土遺物③
- 図版 10 1. SD3 (1層) 出土遺物④
- 図版 11 1. SD3 出土遺物、SD3 出土の線刻土器①
- 図版 12 1. SD3 出土の線刻土器②
- 図版 13 1. SD3 出土の線刻土器③
- 図版 14 1. SD3 出土の木製品①
- 図版 15 1. SD3 出土の木製品②
- 図版 16 1. SD3 出土の木製品③
- 図版 17 1. SD3 出土の木製品④

第3章 釜ノ口遺跡 10次調査

- 図版 18 1. 東半部完掘状況 (北より) 2. 中央部完掘状況 (北より)
- 図版 19 1. 西半部完掘状況 (東より) 2. SB1 完掘状況 (南東より)
- 3. SB1 遺物出土状況 (北東より) 4. SD1 遺物出土状況① (東より)
- 5. SD1 遺物出土状況② (東より)
- 図版 20 1. SD7 遺物出土状況① (北西より) 2. SD7 遺物出土状況② (北西より)
- 3. SK1 遺物出土状況 (北より) 4. SK3 完掘状況 (西より)
- 5. SA1 完掘状況 (南西より) 6. SA1 遺物出土状況 (南西より)
- 7. SA4・SA5 完掘状況 (南より) 8. SA6 遺物出土状況 (北東より)
- 図版 21 1. 出土遺物①
- 図版 22 1. 出土遺物②

第4章 釜ノ口遺跡 11次調査

- 図版 23 1. 遺構検出状況 (西より) 2. SR1 遺物出土状況 (北西より)
- 図版 24 1. SR1 木製品出土状況 (北より) 2. SR1 木製品出土状況 (東より)
- 図版 25 1. SR1 机出土状況 (東より) 2. SR1 杓子出土状況 (北より)
- 図版 26 1. 遺構完掘状況 (西より) 2. SR1 完掘状況 (北東より)
- 図版 27 1. SR1 出土木製品①
- 図版 28 1. SR1 出土木製品②
- 図版 29 1. SR1 出土木製品③
- 図版 30 1. SR1 出土木製品④

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

今回報告する釜ノ口遺跡9次・10次・11次調査は、宅地開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査である。調査は文化財保護法第57条の2（現93条）の届出を受け、愛媛県教育委員会の指示に基づき行った。なお、調査地は松山市が指定する周知の埋蔵文化財包蔵地『No.110 釜ノ口遺物包含地』と『No.113 枝松五丁目遺物包含地』内に所在する。

釜ノ口遺跡は、昭和47年度からこれまでに8度の発掘調査が実施されている。縄文時代は釜ノ口遺跡1次調査より、ナイフ形の有舌尖頭器が1点出土し、弥生時代後期では釜ノ口遺跡6次・7次・8次調査にて焼失住居が検出されている。また、8次調査の竪穴建物からは白色のガラス小玉1点が出土し、溝からは青銅製の破鏡が1点出土している。

釜ノ口遺跡9次・10次調査は、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが行い、11次調査は財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センターが行った。なお、これらの調査における基礎的な整理作業は各調査年度に実施したが、本格的な整理作業と報告書作成作業については、公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センターが平成25年度に行った。

表1 調査地一覧

遺跡名	所在地（松山市）	面積（㎡）	調査期間
釜ノ口遺跡9次調査	小坂三丁目436番1、437番1	989.87	平成11年10月18日～ 平成12年1月31日
釜ノ口遺跡10次調査	小坂四丁目39番1、40番、 41番1	2,514.00	平成12年4月10日～ 同年8月4日
釜ノ口遺跡11次調査	小坂四丁目390番の一部	約68.00	平成22年10月12日～ 同年11月11日

第2節 調査・刊行組織

（1）調査組織

〔平成11年度〕

松山市教育委員会

教育長 池田 尚郷
事務局 局長 團上 和敬
次長 森脇 将
次長 赤星 忠男
文化教育課 課長 松平 泰定

財団法人松山市生涯学習振興財団

理事長 中村 時広
事務局 局長 二宮 正昌
次長 河口 雄三
埋蔵文化財センター 所長 河口 雄三
次長 田所 延行

はじめに

課長補佐 馬場 洋
係 長 三好 清二

調査係長 田城 武志
調 査 員 梅木 謙一 (調査担当)
水本 完児 (調査担当)
大西 朋子 (写真担当)

[平成 12 年度]

松山市教育委員会

教育長 中矢 陽三
事 務 局 局 長 團上 和敬
参 事 森脇 将
次 長 赤星 忠男
文化教育課 課 長 馬場 洋
課長補佐 八木 方人
係 長 三好 清二

財団法人松山市生涯学習振興財団

理 事 長 中村 時広
事 務 局 局 長 二宮 正昌
次 長 江戸 孝
次 長 森 和朋
埋蔵文化財センター 所 長 中川 隆
専 門 監 野本 力
調査係長 田城 武志
調 査 員 梅木 謙一 (調査担当)
水本 完児 (調査担当)
大西 朋子 (写真担当)

[平成 22 年度]

松山市教育委員会

教育長 山内 泰
事 務 局 局 長 藤田 仁
企画官 勝谷 雄三
企画官 青木 茂
企画官 佐々木乾二
文化財課 課 長 駒澤 正憲
主 幹 森 正経
副主幹 三好 博文

財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

理 事 長 一色 哲昭
事 務 局 局 長 松澤 史夫
次 長 砂野 元昭
施設利用推進部 部 長 中越 敏彰
埋蔵文化財センター
所長兼考古館館長 重松 佳久
調査リーダー 栗田 茂敏
主 任 高尾 和長 (調査担当)
大西 朋子 (写真担当)

(2) 刊行組織 [平成 25 年度]

松山市教育委員会

教育長 山本 昭弘
事 務 局 局 長 榊田 二郎
企画官 梶川 明彦
企画官 津田 慎吾

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

理 事 長 一色 哲昭
(前任、～6/4)
理 事 長 中山 紘治郎
(6/5～)

文化財課 課長 若江 俊二
主幹 篠原 昭二

事務局 局長 中西 真也
次長兼総務部長 中野 忠
施設利用推進部 部長 玉井 弘幸
埋蔵文化財センター
所長兼考古館館長 田城 武志
調査研究リーダー 山之内志郎
調査研究リーダー 橋本 雄一
主任 水本 完児（編集担当）
大西 朋子（写真担当）

第3節 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地

道後平野は、その北東部を高縄半島の大部分を占める高縄山系の南西面に、また、東から南東部を四国山脈北東麓に限られ、西方の海岸線に向かって扇状に開けた沖積平野である。平野には、高縄山系に源を発し、北東から南西方向に流れる石手川と、四国山脈東三方が森に水源を持ち、西流する重信川の2大河川がある。この2河川は、それぞれいくつかの支流を集めながら西流し、伊予灘に注いでいる。平野は、これらの河川の沖積作用によって形成されている。その構成を大雑把にみると、平野北方の石手川扇状地、及びその西方にひろがる氾濫原、扇状地の北に延びる沖積低地、平野南方の重信川扇状地、及びその中流域以西にひろがる大規模な氾濫原に加えて、両河川の間において、石手川の支流である小野川により形成された比較的小規模な扇状地などが主なものである。本書で構成される各遺跡が所在する小坂地区は、石手川扇状地左岸の扇端付近、おおよそ海拔30mを前後する位置に載っている。

2. 歴史的環境

釜ノ口遺跡は、これまでに8度の調査が実施され、弥生時代から中世までの遺構や遺物が確認されている。ここでは、同遺跡を中心として周辺遺跡の紹介を行う。

(1) 旧石器～縄文時代

旧石器時代の資料はないが、縄文時代では釜ノ口遺跡1次調査にて早期に時期比定される石器が出土している。このほか、釜ノ口遺跡7・8次調査からはAT火山灰を検出した。松山平野内では、遺跡東方にある樽味・桑原地区や東本地区でAT火山灰が検出されており、これらは分布範囲が知れる貴重な資料となっている。

(2) 弥生時代

前期の資料はなく、榎田遺跡より中期後半期の土坑が検出されている。後期になると、広範囲に遺跡の広がりがみられる。竪穴住居は釜ノ口遺跡（1・2・6～8次調査）及び拓南中学校遺跡で検出され、このうち、釜ノ口遺跡（6～8次調査）検出の住居では焼土や炭化材が多数検出されており、これらは焼失住居と考えられている。また、住居内からは柱材や礎板が良好な状態で遺存しており、当時の住居構造が知れる貴重な資料である。遺物では、ガラス小玉の出土例が多く、釜ノ口遺跡8次調査検出のSB2からは89点が出土している。このほか、釜ノ口遺跡1次調査検出のSB2からは鉄鏃や管玉の出土がある。また、同8次調査では溝SD3内から斜行櫛歯紋帯鏡（破鏡）が出土したほか、編み物や木製品、種子（ヒョウタン・ウリ）が出土した貯蔵穴も検出されている。このように、松山平野において釜ノ口遺跡からは木材や木器、種子などの出土事例が極めて多く、これらの遺物が遺存するための様々な地形や環境等の条件が整った地域であったことがわかる。これらのことから、弥生時代後期を通して釜ノ口遺跡一帯には集落が継続的に営まれ、なおかつ、平野内でも有数の拠点集落のひとつであったと考えられる。

(3) 古墳時代

釜ノ口遺跡2次調査からは、古墳時代初頭の掘立柱建物、同8次調査では完形品を伴った土坑が検出されている。また、西天山遺跡2次調査では包含層中より小型器台など、古墳時代前期に時期比定される遺物が出土している。

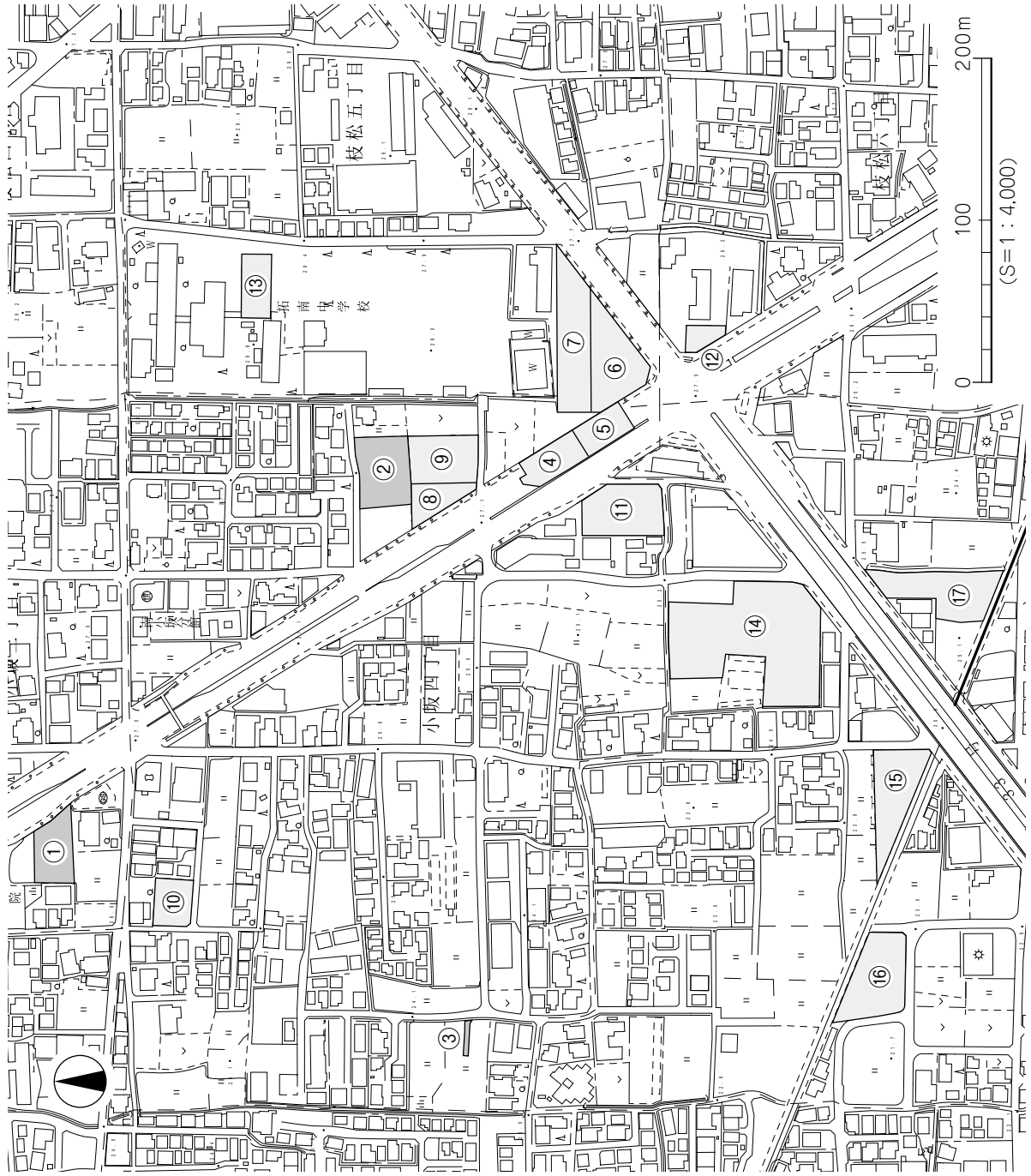
(4) 古代～中世

古代の遺構は少なく、西天山遺跡1次調査にて平安期の河川が検出されている。一方、中世では小坂八斗藪遺跡より13世紀代の溝や自然流路が検出されているほか、釜ノ口遺跡8次調査では同時期の水田耕作に伴う溝や足跡が発見されている。

【参考文献】

- 松山市史料集編集委員会 1986 松山市史料集第2巻考古編Ⅱ
大山 正風 1973『釜ノ口遺跡調査報告書』松山市文化財調査報告書第5集
高尾 和長 1997『釜ノ口遺跡Ⅱ－6次・7次・8次調査』松山市文化財調査報告書第60集
藤原 敏秀 1991『榎田遺跡』松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ
藤原 敏秀 1991『西天山遺跡』松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ
栗田 茂敏 1992『西天山遺跡2次調査』松山市埋蔵文化財調査年報Ⅳ
栗田 茂敏 1992『小坂八斗藪遺跡』松山市埋蔵文化財調査年報Ⅳ
高尾 和長 1996『東本遺跡4次調査・枝松遺跡4次調査』松山市文化財調査報告書第54集
梅木 謙一 1992『桑原地区の遺跡』松山市文化財調査報告書第26集
河野 史知 1997『桑原地区の遺跡Ⅲ』松山市文化財調査報告書第58集
相原 浩二 2010『東本遺跡－11次・12次調査』松山市文化財調査報告書第143集

- ① 釜ノ口遺跡 9次調査
- ② 釜ノ口遺跡 10次調査
- ③ 釜ノ口遺跡 11次調査
- ④ 釜ノ口遺跡 1次調査
- ⑤ 釜ノ口遺跡 2次調査
- ⑥ 釜ノ口遺跡 3次調査
- ⑦ 釜ノ口遺跡 4次調査
- ⑧ 釜ノ口遺跡 5次調査
- ⑨ 釜ノ口遺跡 6次調査
- ⑩ 釜ノ口遺跡 7次調査
- ⑪ 釜ノ口遺跡 8次調査
- ⑫ 枝松遺跡 1次調査
- ⑬ 拓南中学校構内遺跡
- ⑭ 榎田遺跡
- ⑮ 西天山遺跡 1次調査
- ⑯ 西天山遺跡 2次調査
- ⑰ 小坂八斗藪遺跡



第1図 周辺遺跡分布図

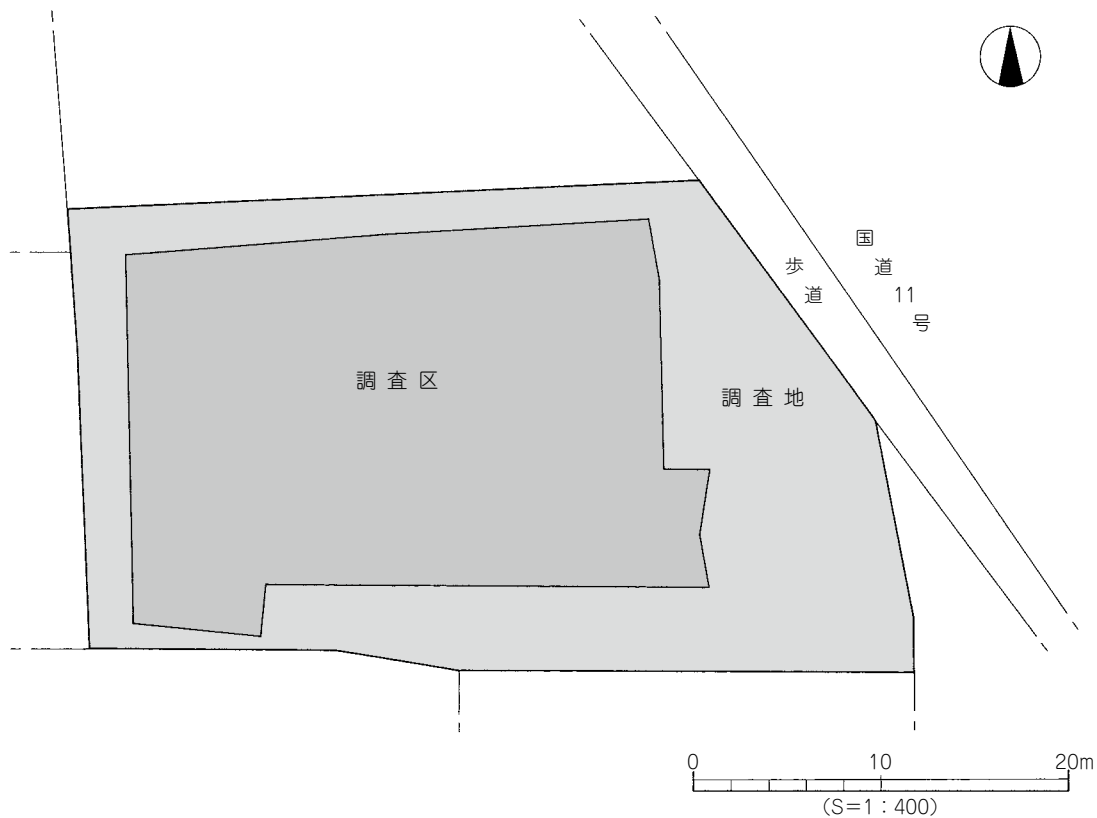
第2章 釜ノ口遺跡9次調査

第1節 調査の経緯

1998（平成10）年9月、福見愛子氏より松山市小坂三丁目436番1・437番1における宅地開発にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願が松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。申請地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『No.110 釜ノ口遺跡』内にあり、当地域は弥生時代後期の集落地帯として知られている。釜ノ口遺跡は現在までに8度の調査が実施され、竪穴建物12棟、土坑6基、溝7条等、弥生時代後期の集落関連遺構や遺物が検出されている。

これらのことから、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は、申請地内における埋蔵文化財の有無と遺跡の範囲や性格を確認するため、1998（平成10）年10月13日に試掘調査を実施することになった。調査の結果、溝を検出し、溝からは弥生土器片が多数出土した。

この結果を受け、文化教育課と申請者の両者は遺跡の取り扱いについて協議を重ね、宅地開発に伴って消失する遺跡に対し、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、弥生時代後期の集落構造解明を主目的とし、文化教育課の指導のもと埋文センターが主体となり、1999（平成11）年10月18日より本格調査を開始した。



第2図 調査地測量図

第2節 層位

1. 基本層位 (第3図)

調査地は、松山平野南東部、標高 27.00m に立地する。調査で確認した土層は、以下の六種類 (第 I～第 VI 層) である。

基本層位は、第 I 層造成土、第 II 層耕作土、第 III 層床土、第 IV 層黒褐色粘質土、第 V 層褐色～暗褐色粘質土、第 VI 層始良 Tn 火山灰である。

第 I 層：造成土で、厚さ 10～60cm を測る。調査地全域で検出した。

第 II 層：灰色土で、厚さ 3～25cm を測る。近現代の耕作土で、調査地全域で検出した。

第 III 層：褐色土に灰色土が混入するもので、厚さ 4～20cm を測る。第 II 層に伴う床土で、調査地北東部を除く全域で検出した。

第 IV 層：黒褐色粘質土で、土質の違いにより二層に分層される。

第 IV ①層：黒褐色粘質土で、厚さ 2～40cm を測る。調査地北東部を除く地域で検出した。弥生時代や古墳時代の土器を含む遺物包含層である。また、第 IV 層 ①上面では、古墳時代の溝 1 条 (SD1) と遺物を検出した。

第 IV ②層：黒褐色粘質土に褐色粘土が混入するもので、厚さ 5～10cm を測る。調査地北西部の一部で検出した。

第 V 層：褐色～暗褐色粘質土で、土色・土質の違いにより三層に分層される。

第 V ①層：褐色粘質土で、厚さ 2～17cm を測る。調査地北東部と南西部の一部、及び中央部で検出した。第 V 層 ①上面では、弥生時代の溝 2 条 (SD2・SD6) と遺物を検出した。

第 V ②層：褐色粘質土に小礫が混入するもので、厚さ 5～20cm を測る。調査地北半部で検出した。第 V 層 ②上面では、弥生時代の溝 3 条 (SD3・4・5) を検出した。

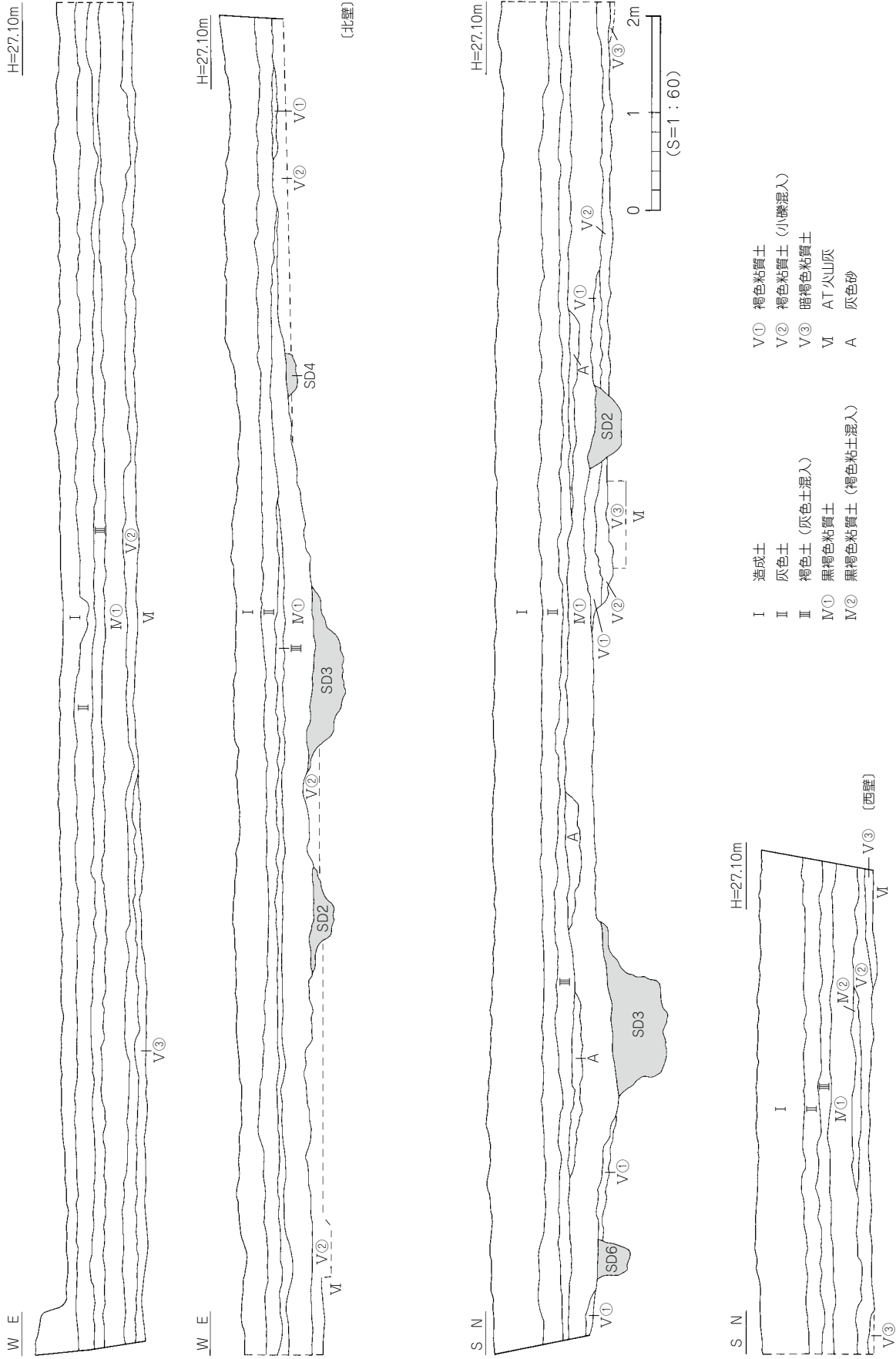
第 V ③層：暗褐色粘質土で、厚さ 4～20cm を測る。調査地北西部、中央部、及び北東部の一部を除く地域で検出した。

第 VI 層：広域テフラである始良 Tn 火山灰 (AT 火山灰) である。

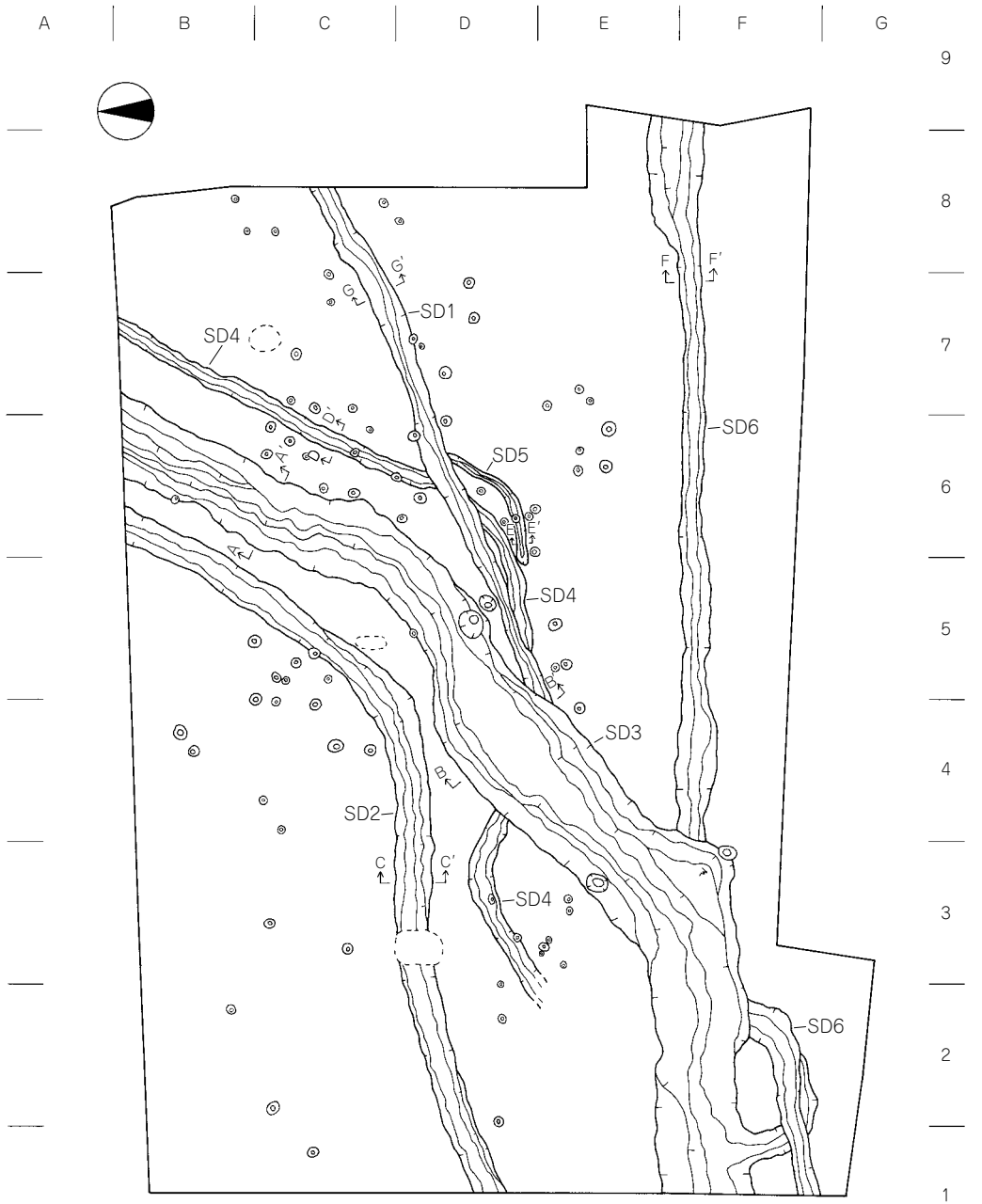
検出した遺構や出土遺物より、第 V 層は弥生時代、第 IV 層は古墳時代までに堆積したものと推測される。なお、調査にあたり調査地内を 4m 四方のグリッドに分けた。グリッドは北から南へ A・B・C・D……G、西から東へ 1・2……9 とし、A1・A2……G9 といったグリッド名を付けた。グリッドは、遺構の位置表示や遺物の取り上げに利用した。

2. 検出遺構・遺物 (第4図、図版1)

調査では、溝 6 条 [SD2～6:弥生時代後期、SD1:古墳時代後期] と柱穴 84 基を検出した。遺物は、遺構や包含層及び重機掘削時に出土したもので、弥生土器 (後期中葉～後葉)、須恵器 (古墳後期後葉)、木器、石器、種子である。



第3図 北壁・西壁土層図



※ A-A'~G-G'は
断面図ポイントを示す。

0 5m
(S=1:200)

第4図 遺構配置図

第3節 遺構と遺物

調査では、弥生時代から古墳時代の遺構や遺物を確認した。遺構は、溝6条と柱穴84基を検出している。以下、検出層位ごとに遺構・遺物の説明を行う。

1. 第V層上面検出遺構

第V層上面では、溝5条（SD2～6）と柱穴84基（SP1～84）を検出した。

(1) 溝

SD2（第4・5図、図版1）

調査区北東部～西端中央部B6～D1区で検出した溝で、調査区内を緩やかに「L」字状に折れ曲がり、北側と西側は調査区外へ続く。調査区北壁側は第V②層、西壁側は第V①層上面で検出し、第IV①層が溝上面を覆う。規模は検出長22.30m、幅0.88m、深さ15～36cmを測る。断面形態は舟底形状を呈し、埋土は黒褐色粘質土に砂が混入するものである。遺物は完形品を含む多量の弥生土器や、モモの種1点が出土した。なお、土器の中には豊後地方からの搬入品が含まれている。

出土遺物（第6図、図版5）

甕形土器（1～8）

1～5は「く」の字状口縁で、1の胴部内面にはタテ方向のヘラケズリ調整を施す。6は口縁部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文1条を施す。7は上げ底、8は平底の底部で、7の外面にはヘラミガキ調整、内面はヘラケズリ調整を施す。

壺形土器（9～12）

9は豊後地方からの搬入品。口径23.3cm、底径5.0cm、器高36.3cmを測る復元完形品で、口縁端面に山形文、口縁上端面には浮文を貼り付け、頸部には5条の凸帯と浮文、胴部には4条の凸帯を貼り付ける。色調は暗黄褐色を呈し、胎土中に角閃石を少量含む。12は長頸壺の完形品で、胴下半部に1×3cm大の孔を穿つ（焼成後穿孔）。口頸部外面にはハケメ調整、胴部外面はハケメ調整後、ヘラミガキ調整を加える。

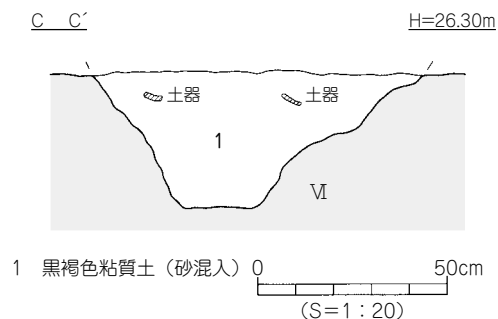
鉢形土器（13・14）

13・14は「く」の字状口縁で、13の内面にはヘラケズリ調整を施す。

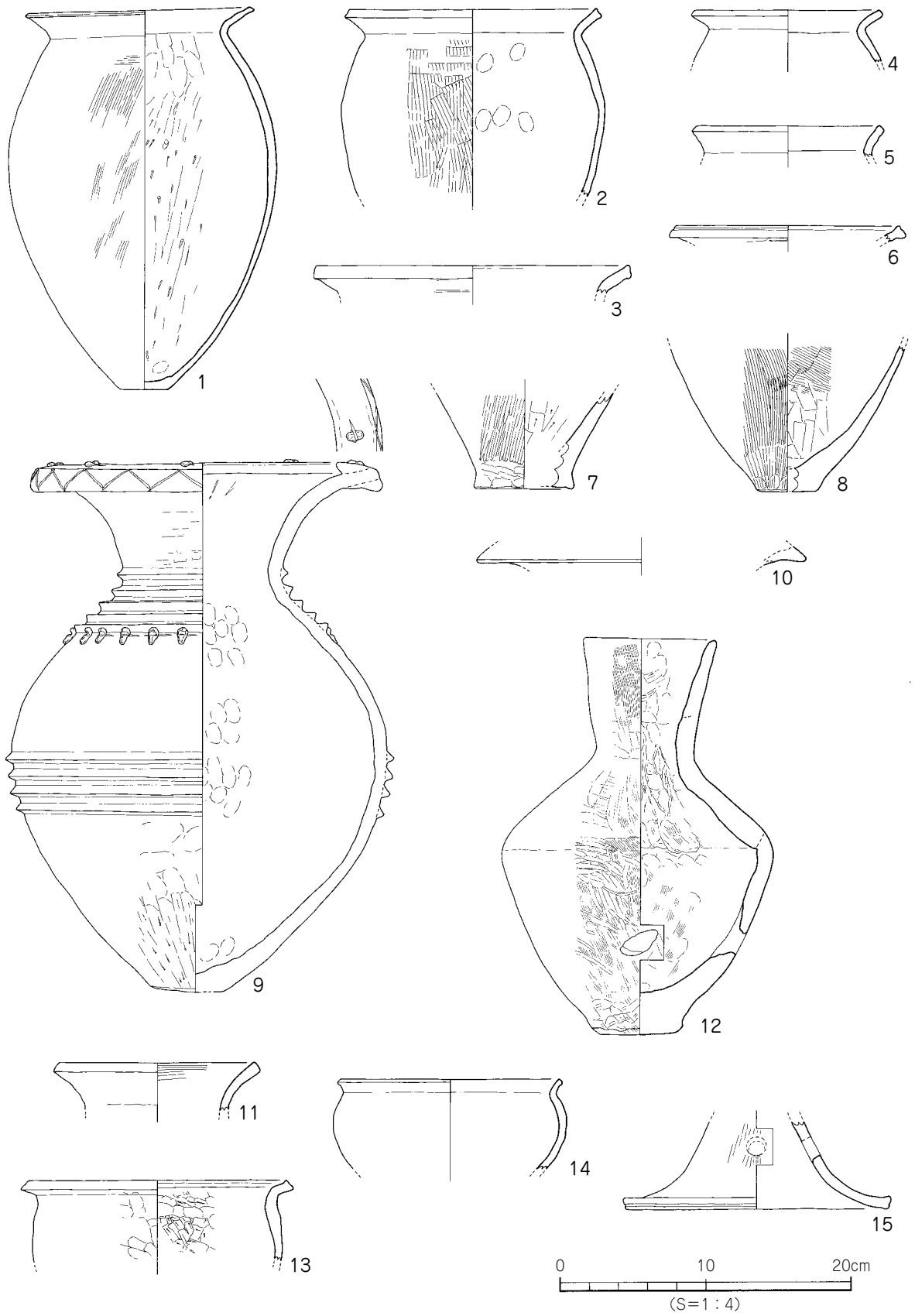
高坏形土器（15）

15は脚部片で、柱部に径1.4cm大の円孔を2箇所に見取す。脚裾部端面には、凹線文1条が巡る。

時期：出土遺物の特徴より、SD2の埋没時期は弥生時代後期中葉とする。



第5図 SD2断面図



第6図 SD 2 出土遺物実測図

SD3 (第4・7～9図、図版1～4)

調査区北東部～南西部 B7～F1 区で検出した溝で、調査区を縦断しながら西に向かって緩やかに「L」字状に折れ曲がり、溝の北側と西側は調査区外へ続く。SD3は溝 SD1 に先行し、SD4 と SD6 より後出する。第V②層上面での検出であり、溝上面を第IV①層が覆う。規模は検出長 28.80m、幅 2.40～3.41m、深さ 10～110cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は六層に分層され、1層：黒褐色粘質土、2層：黒褐色粘質土（褐色粘質土がブロック状に混入）、3層：灰色砂と黒褐色粘質土の混合層、4層：黒色粘質土（細砂混入）、5層：灰色砂、6層：AT火山灰（ブロック）である。

遺物は完形品を多数含む大量の土器が出土したほか、木器や木製品が数多く出土した。土器の中には豊後地方や西南四国地方から搬入品や外来系土器のほか、線刻を施した土器や赤色顔料の付着する土器が数多く含まれている。また、木器には杓子状木製品やサザエ突き、竪杵、平鋏、泥よけ具などがある。このほか、石製品や種子（モモ科・ウリ科）が出土した。これらの遺物は1層や2層及び3層中から出土したものであるが、多くの遺物は1層中からの出土である。ここでは、層位別に出土遺物を掲載する。

1) 第3層出土遺物（第10～14図、図版5）

第3層中からは西南四国型の甕形土器のほか、線刻土器や赤色顔料の付着する土器などが出土した。なお、本層中からは泥よけ具や平鋏などの木製品と種子 73点が出土している。

甕形土器（16～19）

16は「く」の字状口縁で、口縁端面に2条の凹線文を施す。17～19は西南四国型の甕。17は口縁端面に凹線文1条、胴部内面下半部にはタテ方向のヘラケズリ調整を施す。18は口径20.8cm、底径7.2cm、器高30.2cmを測る完形品で、口縁部外面に粘土帯を貼り付け、胴上部は張りをもち、底部はわずかに上げ底を呈する。外面はハケメ調整、胴部内面にはタテ方向のヘラケズリ調整を施す。19は口縁部外面に粘土帯を貼り付け、櫛描直線文を施す。頸部には5条の沈線文と浮文、二段の刻目を施す。色調は、内外面共に灰黄褐色を呈する。

壺形土器（20～22）

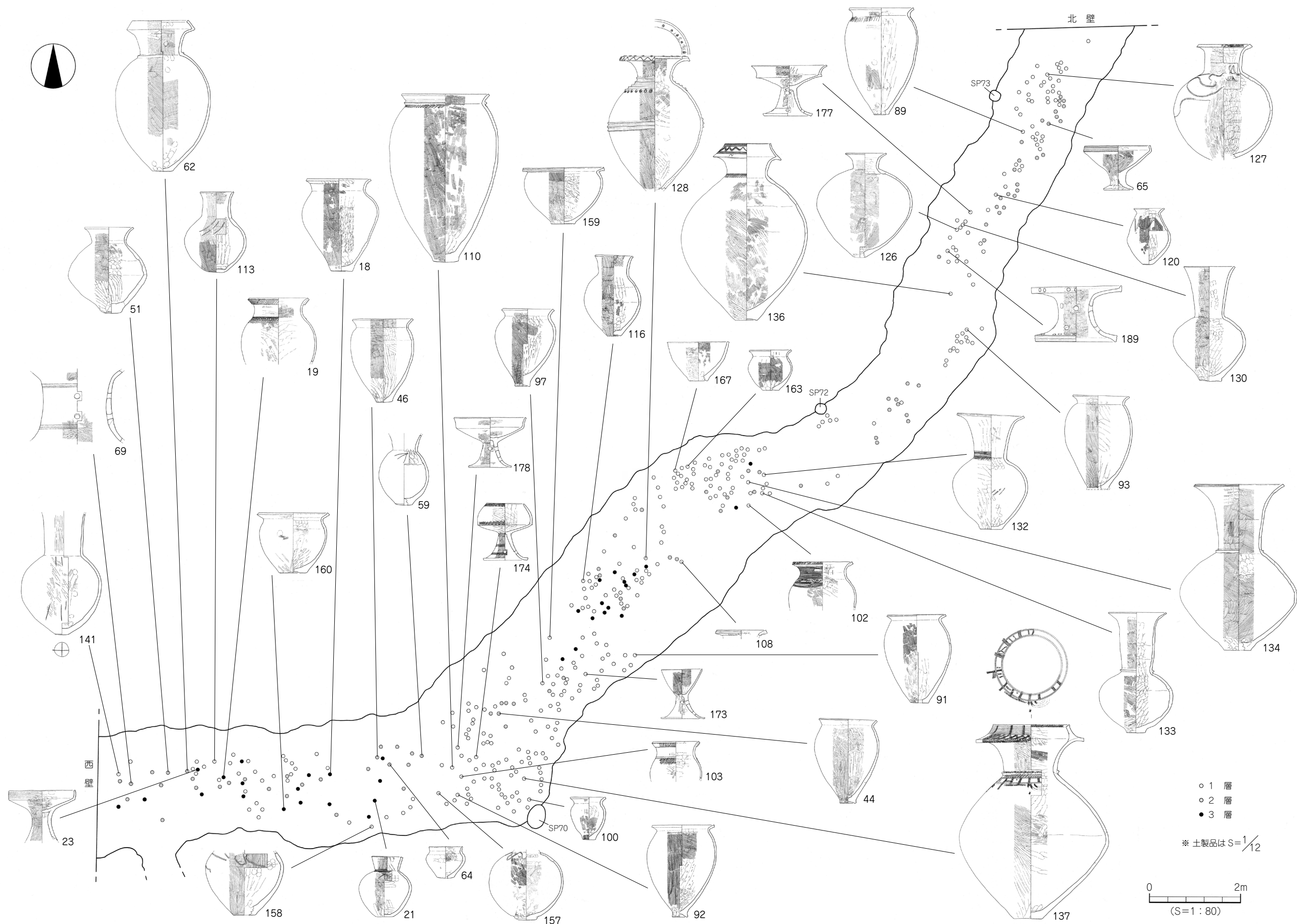
20は複合口縁壺で、口縁部に4条の沈線文、頸部には押圧凸帯文を貼り付ける。21は口縁部を一部欠損する直口壺で、肩部に鳥足状の線刻を施す。22は口径9.6cm、底径5.3cm、器高14.2cmを測る小型の短頸壺で、口縁部外面に凹線文1条、肩部に径0.5cm大の円孔（2個一対）を2箇所施す。内外面共に丁寧なヘラミガキ調整を施し、胎土中に少量の角閃石を含む。

高坏形土器（23）

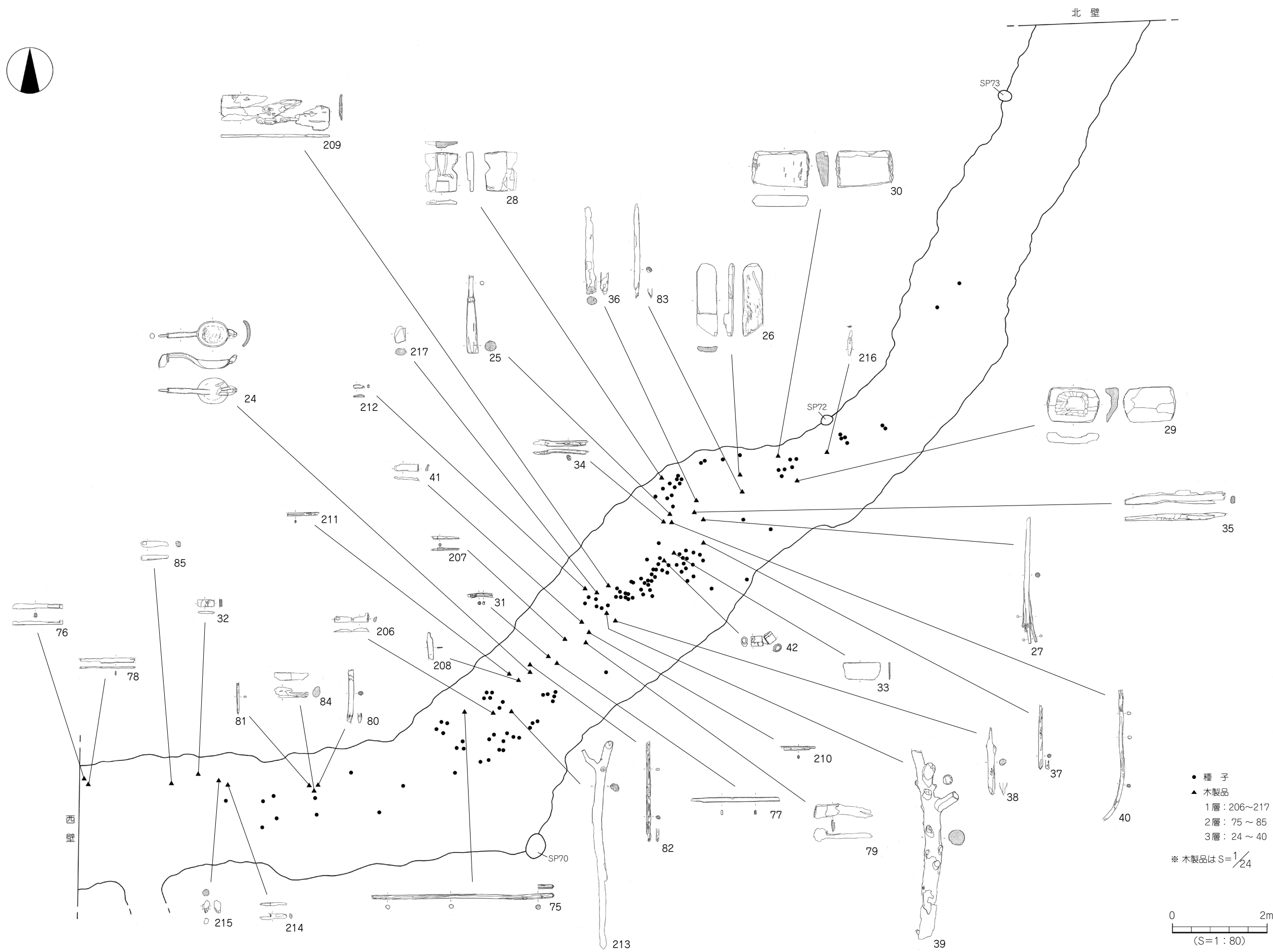
23は口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端面に凹線文4条、脚柱部に沈線文5条を施す。外面には赤色顔料が付着し、胎土中には結晶片岩や角閃石を少量含む。

木製品（24～42）

24は丸木を削り貫いて作られた杓子状木製品で、サクラ属を素材に用いている。長さ49.0cm、幅16.2cm、最大厚3.3cmを測り、容器部分は楕円形を呈し、長径20.0cm、短径16.0cm、深さ約3.5cm、柄部分は直径3cmを測る。柄部の先端は下方に湾曲し、厚さ1.5cmを測る。なお、容器部分の裏面には首部や柄部が表現されており、丁寧な細工が施されている。25は竪杵で上部にくびれをもち、柄部は一部欠損している。現存長49.5cm、幅7.0cm、最大厚6.3cmを測り、柄部径は2.5cmである。先端には、部分的に腐りが認められる。素材は、ヤブツバキである。26は梯子で、全面に加工を施し、上部厚3.0cm、

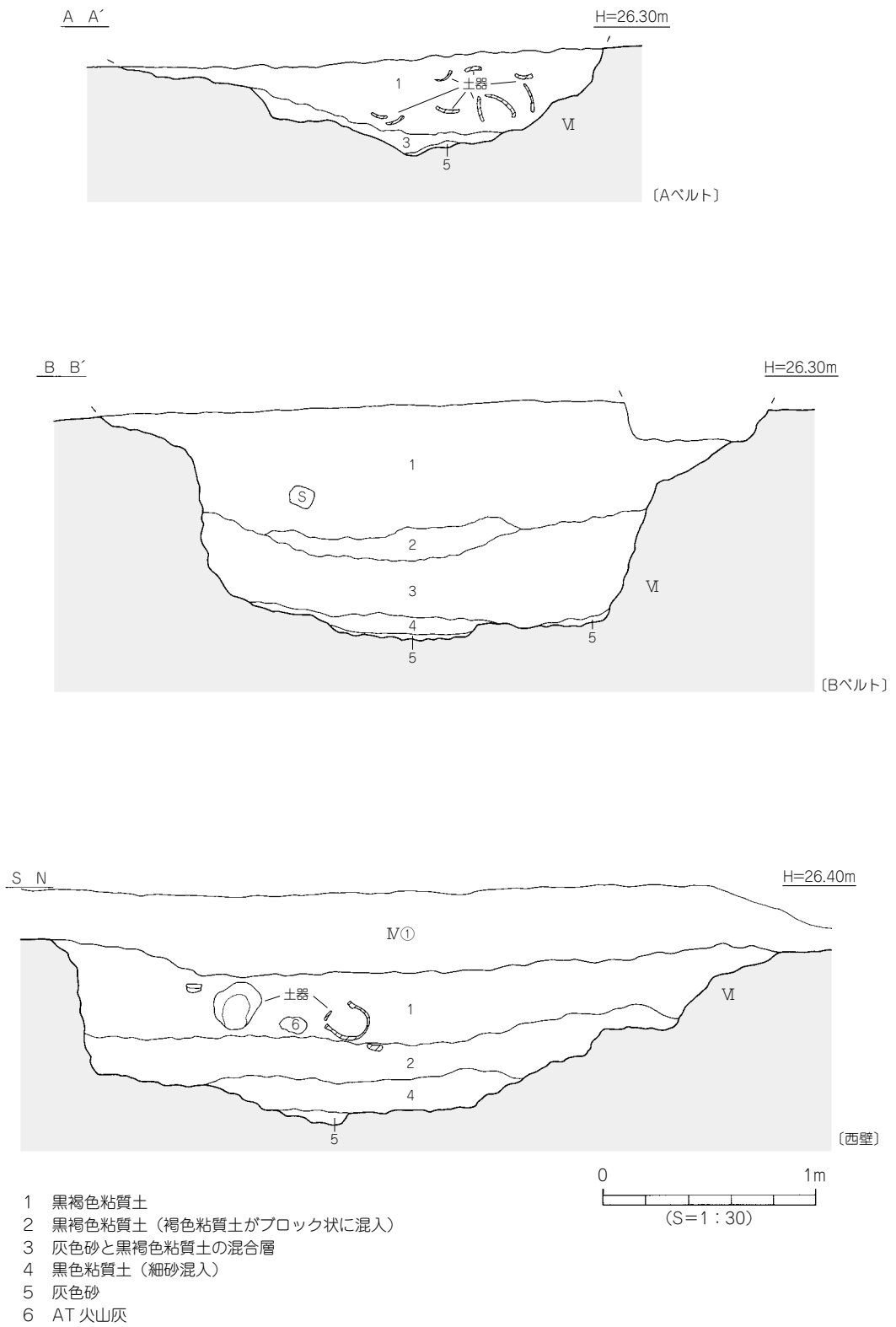


第7図 SD3遺物出土状況図(1)

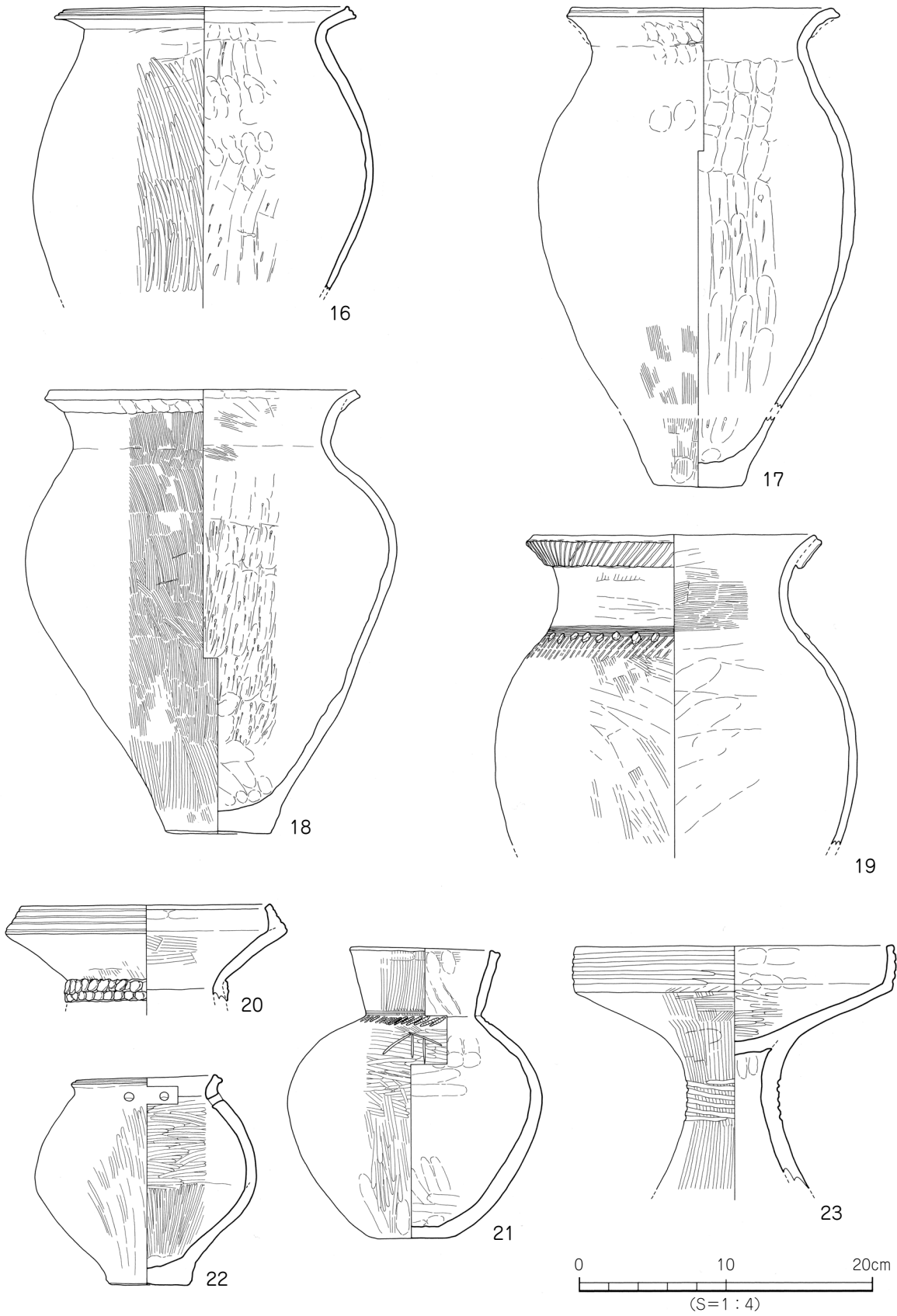


第8図 SD3遺物出土状況図(2)

遺構と遺物

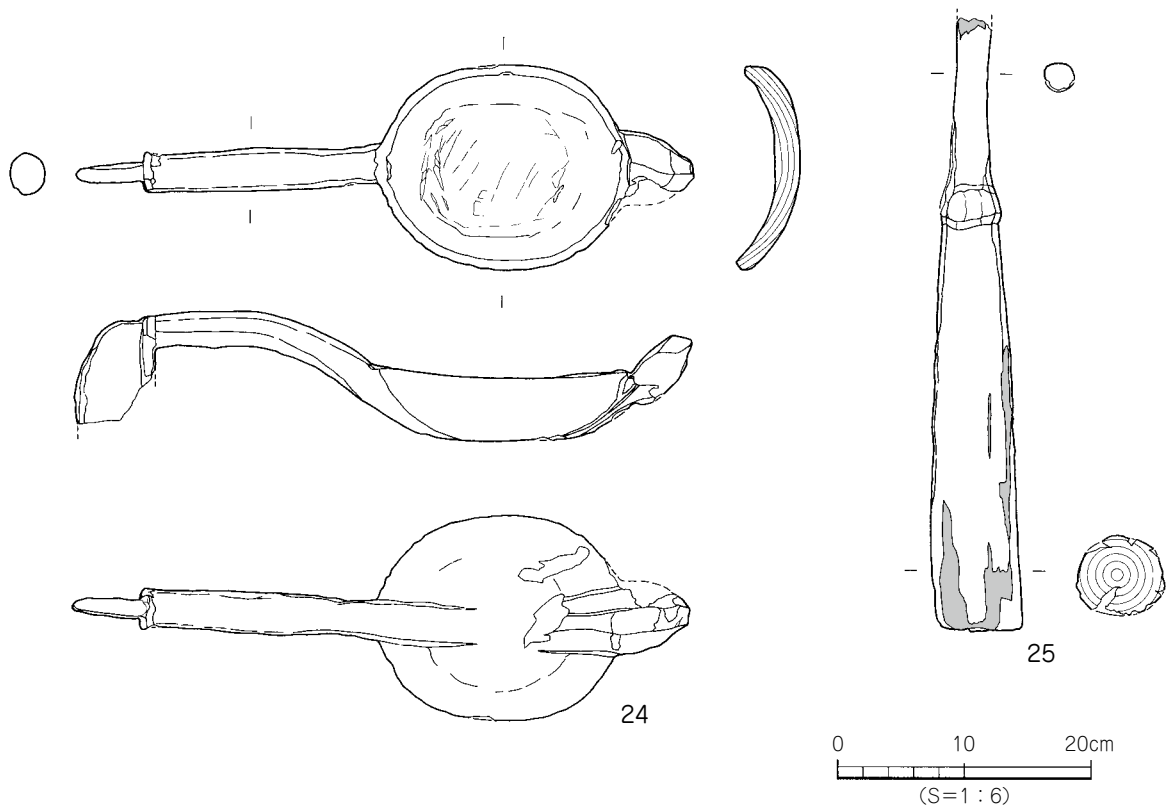


第9図 SD3断面図

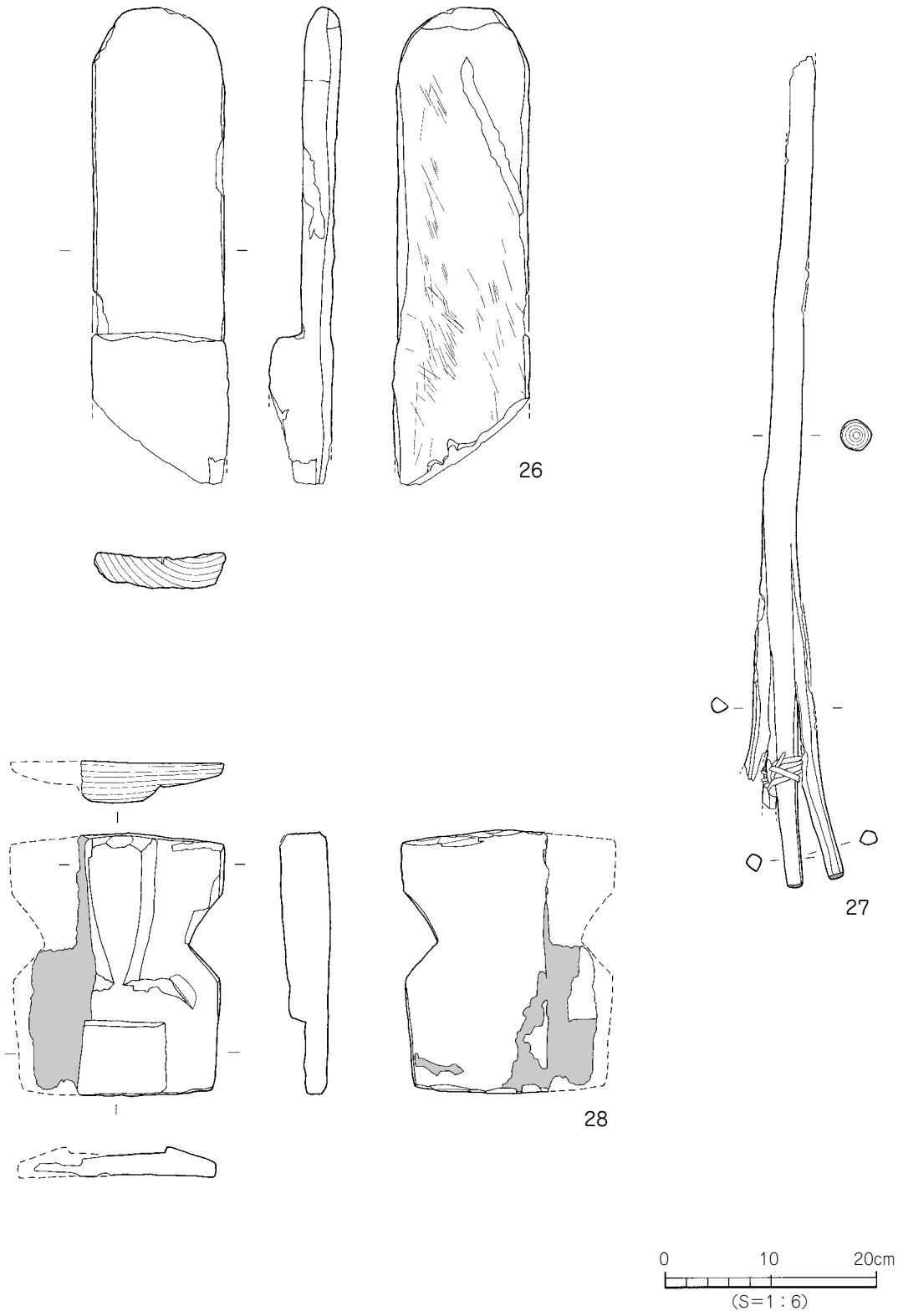


第10図 SD3(3層)出土遺物実測図(1)

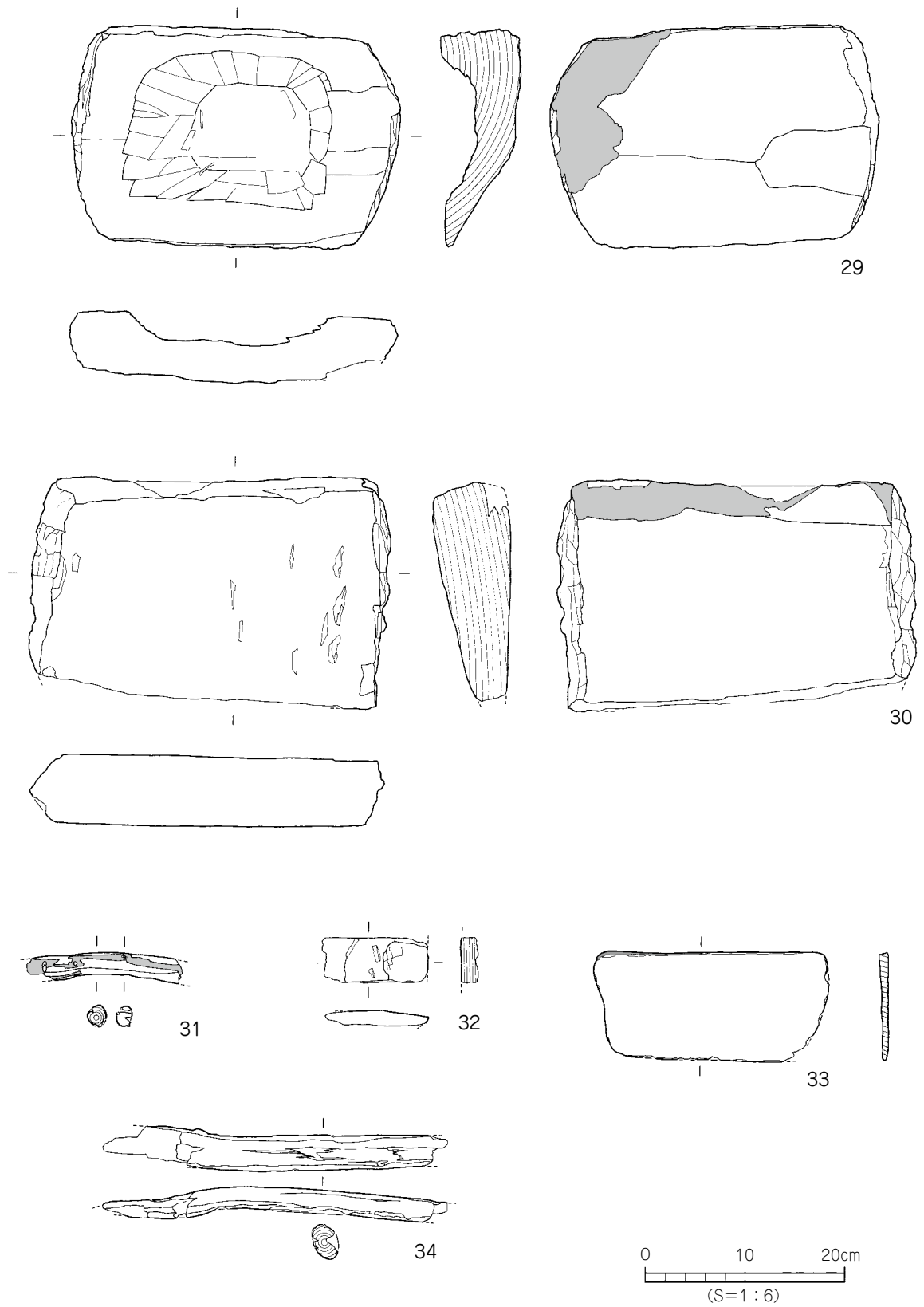
下部厚 6.0cmを測る。シイ属を素材としており、裏面には無数の切り傷痕を残す。27 は漁労具のサザエ突きで、コナラ属アカガシ亜属を素材としている。先端部は 4 本に分かれており (2 本は一部欠損)、それらの先端部は焼け焦げている。28 は平鍬の未製品で、長さ 25.2cm、幅 18.0cm、最大厚 4.6cmを測る。平面形態は縦長の長方形を呈し、両側縁がくびれており、一部に腐りが認められる。29・30 は泥よけ具の未製品で、29 の表面には径 15 × 20cm、深さ 3.5cm程度の凹みがあり、凹み部分と両側面にはハツリの痕跡を顕著に残す。28 ~ 30 の素材は、コナラ属アカガシ亜属を用いている。31 は網の枠板と考えられるもので、直径 2 ~ 5mm大の孔を 3 箇所に通す。使用素材は、カツラである。32 は板状の加工品で、表面には斜め方向の加工痕を残す。33 は最大厚 1.0cmを測る板状の加工材で、図左上側面には焼け焦げた痕跡が残る。34 はやや湾曲した棒状の加工品で、図左側端部には面取りした加工面をもつ。35 は棒状の加工材で、図左側面には斜め方向の面取り加工が施されている。32・33 はコナラ属アカガシ亜属、34 はカツラ、35 はコナラ属クヌギ節を素材として用いている。36 は杭状の加工材で、先端部を加工して尖らせており、下半部には一部樹皮が残る。なお、表面には部分的に腐りが認められる。37・38 は杭で、先端部を加工して尖らせている。38 は、上部に 2 箇所加工面をもつ。39 は建築用の部材と考えられるもので、上部には一部、面取り加工が見られる。40・41 は加工材であるが、最終的には薪として使用されたものである。41 の図右側面には斜め方向の加工面をもち、41 の左側面及び 40 の下半部は全面に焼け焦げ痕を残す。使用された木材は、36・39 がサクラ属、37・38 がサカキ、40 がアワブキ属、41 はマツ属である。42 はサクラ、もしくは樺の樹皮である。



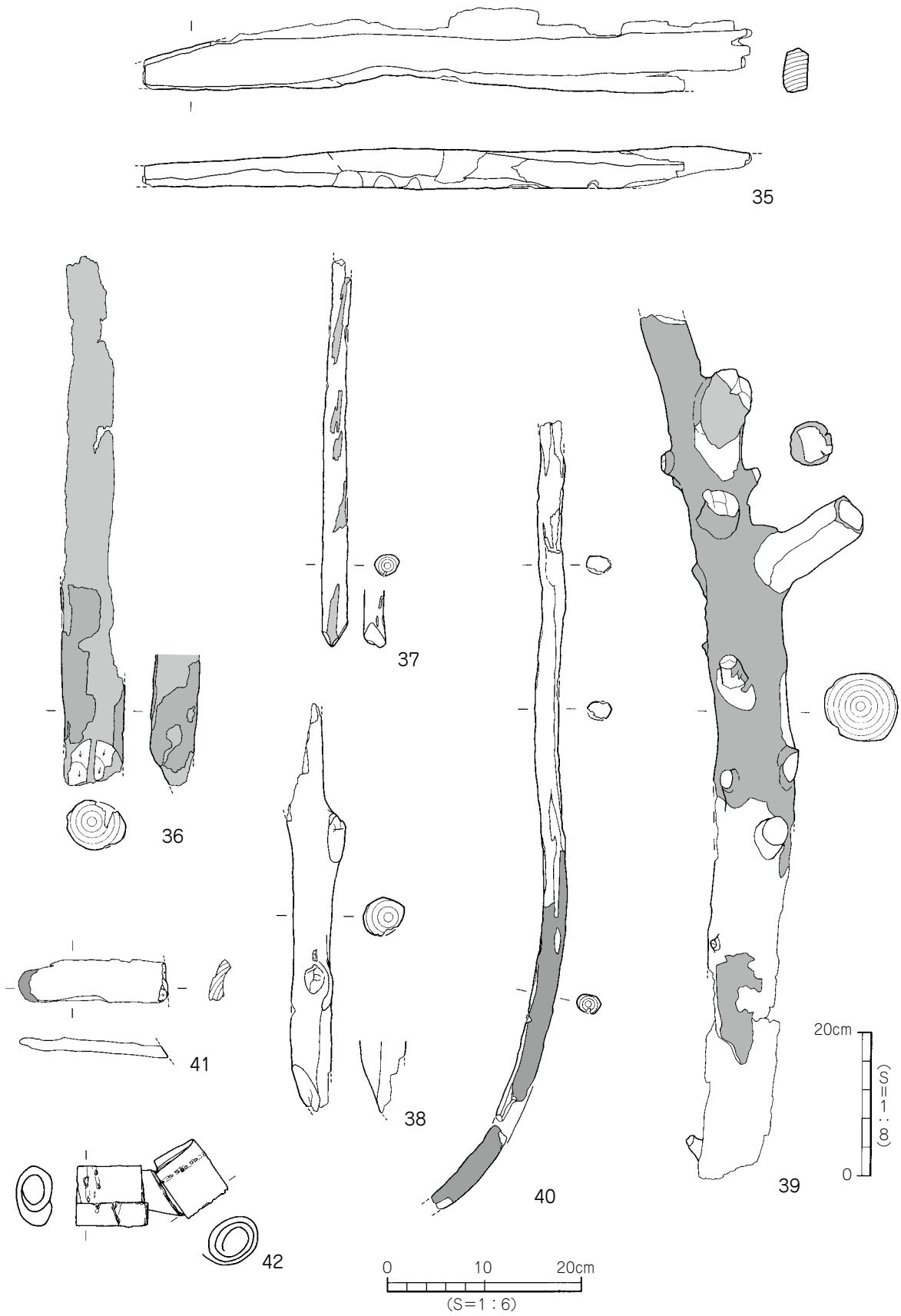
第 11 図 SD 3 (3 層) 出土遺物実測図 (2)



第12図 SD3(3層)出土遺物実測図(3)



第13図 SD 3 (3層) 出土遺物実測図 (4)



第14図 SD 3 (3層) 出土遺物実測図 (5)

2) 第2層出土遺物 (第15～19図、図版6)

第2層中からは甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、器台形土器のほか石器が出土した。土器には西南四国型の甕や壺のほか、線刻土器や赤色顔料が付着する土器が含まれている。また、第1層と同様、本層中からは木製品や種子11点が出土している。

甕形土器 (43～49)

43は口縁端面に凹線文2条、肩部に二段の刺突文と鳥足状の線刻を施す。44・45はほぼ完形品で、口縁端面はナデ凹み、44の胴部外面にはハケメ調整、内面は板状工具によるナデ上げがみられる。45の胴上半部外面にはヘラミガキ調整、下半部には板状工具によるナデ、内面はハケメ調整を施す。46の外面にはハケメ調整、胴上部内面にはモミ圧痕が残り、胴下半部内面は板状工具によるナデを施す。なお、45の外面は二次焼成を受けている。47・48は同一個体で、内外面にはハケメ調整後、ヘラミガキを加える。49は西南四国型の甕で、口縁部に粘土帯を貼り付けている。

壺形土器 (50～62)

50は太頸壺で、口縁端面に凹線文2条、頸部に刺突文を施す。51～56は長頸壺。51・52の口頸部は短く外反し、52の口縁端面には1条の凹線文を施す。53～56は長い頸部をもち、53の肩部には耳状のつまみ2個をもち、56は大型品で、肩部に断面三角形の凸帯を貼り付ける。57は西南四国型の壺で、口縁端面に凹線文2条を施し、内外面には赤色顔料が付着する。58～61は長頸壺の頸部及び胴底部。59の肩部には鳥足状の線刻、61にはヘラ状工具による線刻がみられる。また、60の外面には、二段の半截竹管文を施す。62は口径18.3cm、底径6.9cm、器高49.2cmを測る複合口縁壺で、口縁端部は内傾する面をなし、頸部に断面三角形の凸帯を貼り付ける。

鉢形土器 (63・64)

63の口縁部は外反し、外面には煤が付着する。64は小型品で、1/2の残存である。

高坏形土器 (65～67)

65は口縁部に凹線文4条を施し、外面にはハケメ調整、内面はヘラミガキ調整を施す。1/2の残存。66は短く外反する口縁部をもち、坏部内外面にはヘラミガキ調整を施す。67はエンタシス状の柱部と脚部に段をもち、脚部には段の上下に径0.9cm大の円孔7個を穿つ。

器台形土器 (68～70)

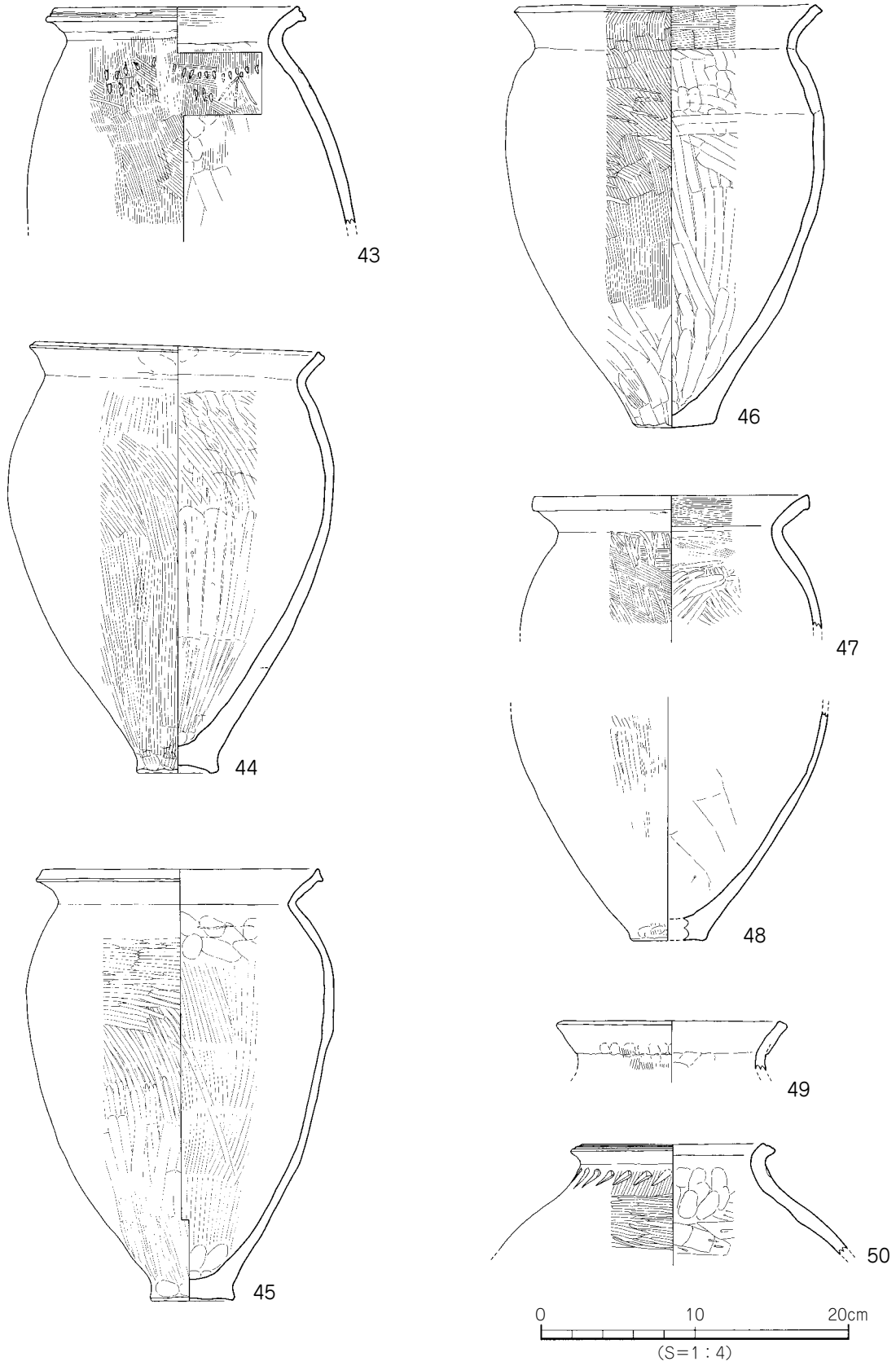
68は口縁部片で、内外面に丁寧なヘラミガキ調整を施す。69・70は柱部片で、69は沈線と径1.8cm大の円孔、70は径1.6cm大の円孔を穿つ。

石器 (71～74)

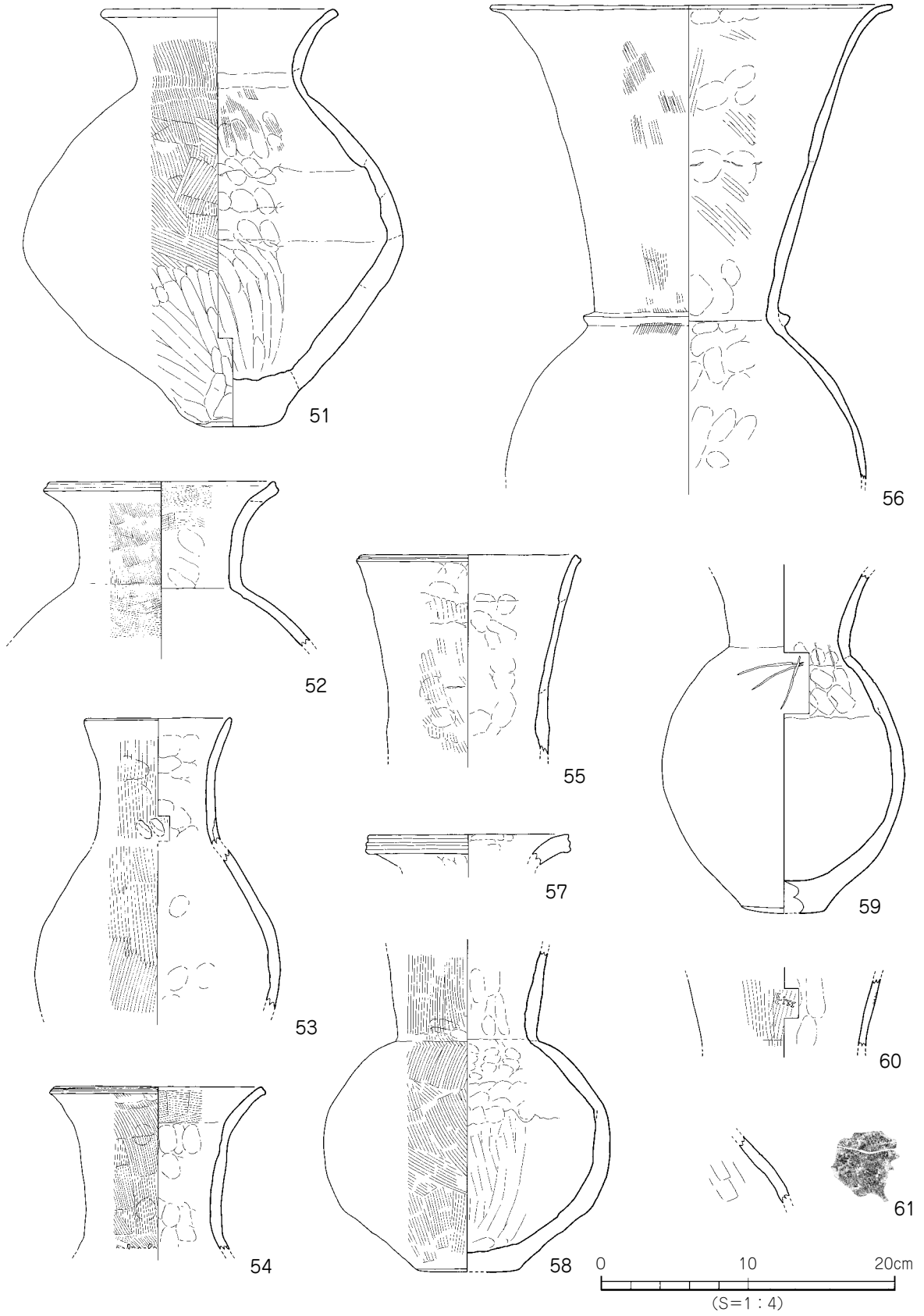
71は敲石で、敲打痕を顕著に残す。花崗岩製。72は砥石で、1面の砥面をもち、安山岩製。73は砥石または台石である。花崗岩製。74は作業台で、幅15.1cm、長さ20.2cm、厚さ9.1cmを測る。花崗岩製。

木製品 (75～85)

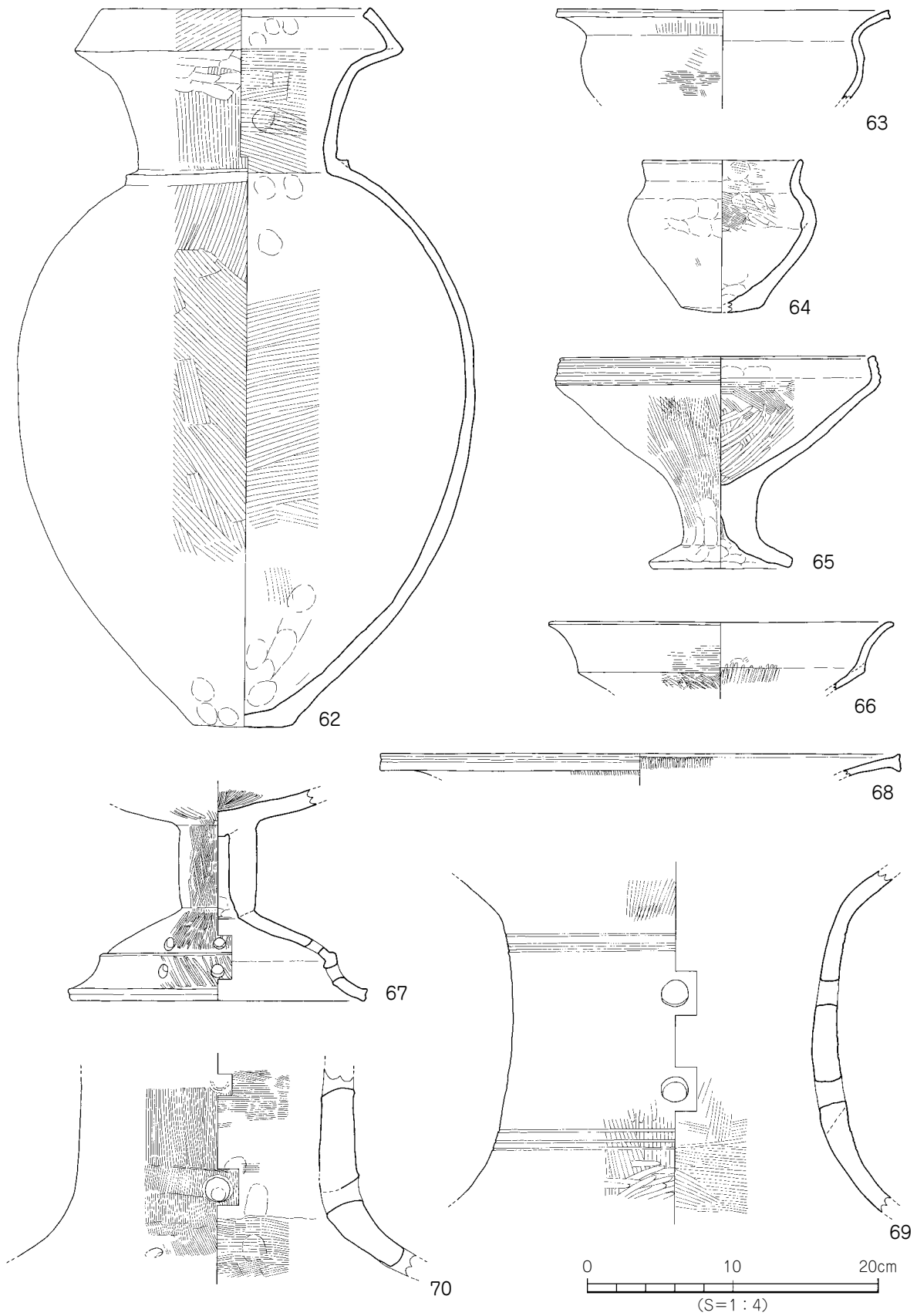
75～77は棒状の加工品で、75の図右側面には加工面をもち、76の図右側面には長さ10cm程度のホゾ状の凹みがあり、77の図左側面には抉りがみられる。使用木材は75がツブラジイ、76はカヤ、77はシイ属である。なお、76の表面には焼け焦げが認められることから、最終的には薪として使用されたものである。78はシイ属を素材とする板状の加工品で、材の周囲に加工面をもち、79はサクラを素材とする部材片で、遺存状態は良好でなく、全面に腐りがみられる。80・81は杭状の加工材



第15図 SD3(2層)出土遺物実測図(1)

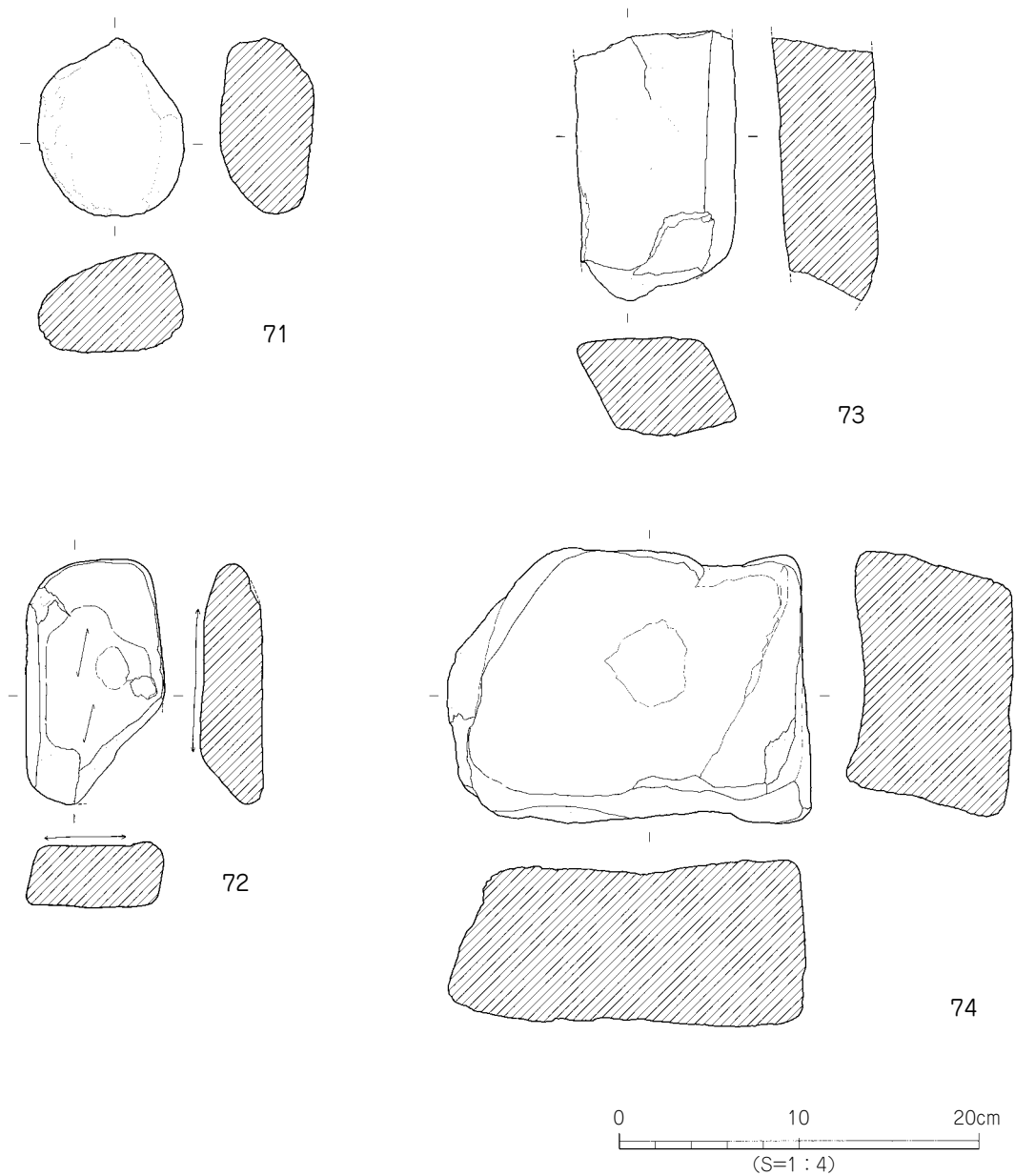


第16図 SD 3 (2層) 出土遺物実測図 (2)

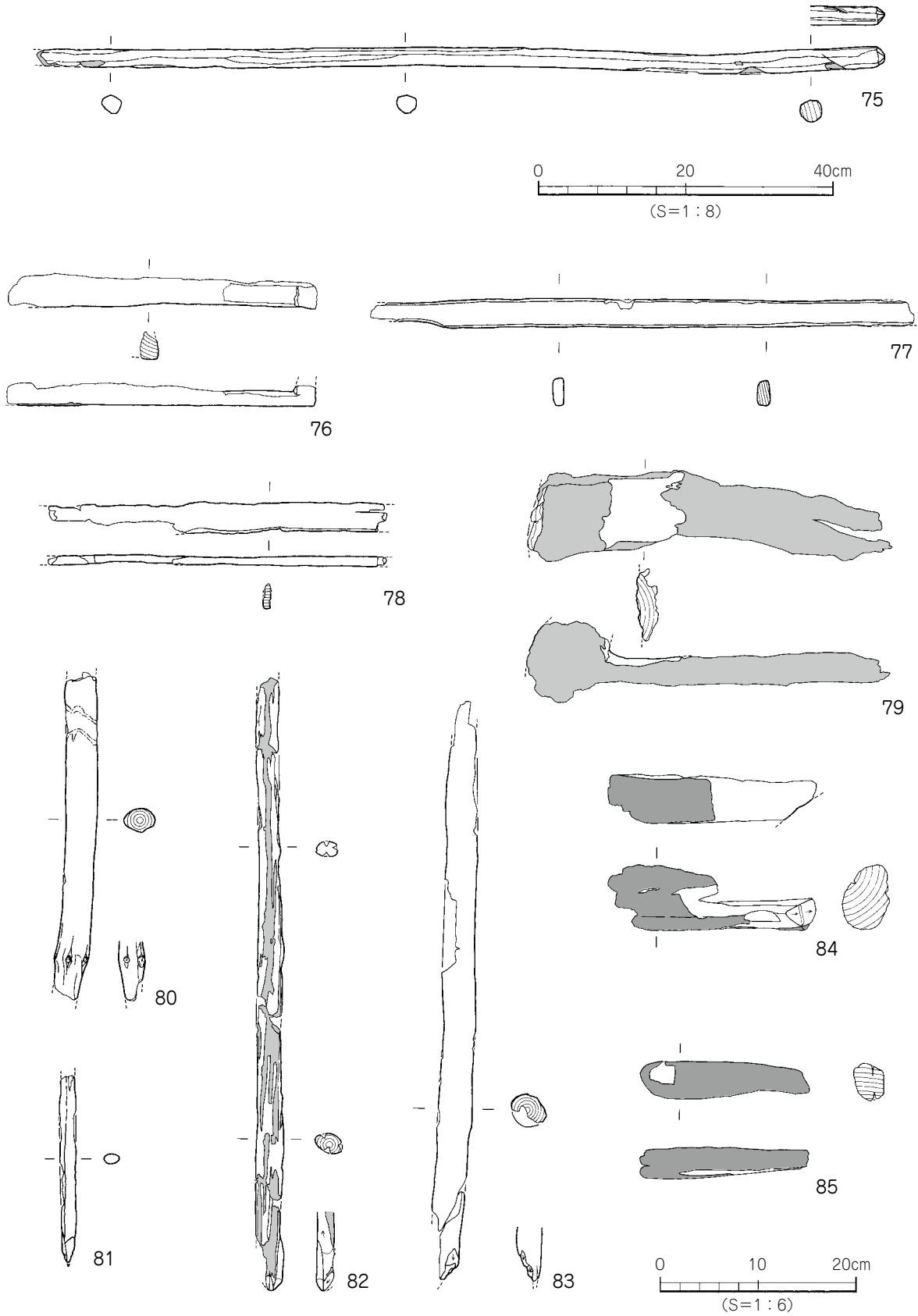


第17図 SD3(2層)出土遺物実測図(3)

で、80は上部に幅2～3cm程度の凹みもち、先端部は加工により尖らせている。素材は80がマツ属、81はムクノキを用いている。82・83は杭で、82の表面には数箇所腐りがみられ、83は自然面を残す。84・85は薪として使用されたもので、84の図右側面には斜め方向の加工面を残す。使用された素材は82が散孔材、83はスノキ属、84はシイ属、85はカヤである。



第18図 SD3(2層)出土遺物実測図(4)



第19図 SD 3 (2層) 出土遺物実測図 (5)

3) 第1層出土遺物(第20～35図、図版7～11)

第1層中からは大量の土器や石器のほか、木製品と種子60点が出土した。土器の中には豊後地方からの搬入品や西南四国型の土器のほか、多数の線刻土器が含まれている。

甕形土器(86～112)

甕形土器には大型品、中型品、小型品がある。86～97は中型品。口縁部は「く」の字状を呈し、底部は平底と上げ底とがある。86・88・90は口縁端面に凹線文を施し、86・87の頸部には刻目、88・89の頸部には「ノ」の字状文を施す。なお、86・89の胴部内面にはヘラケズリ調整を施す。91・92の口縁部は上方に拡張し、91の胎土中には結晶片岩、92は赤色酸化土粒を含む。91～93は1/2の残存。94・95は同一個体で、口縁部はやや外反し、胴上半部には板状工具によるナデ、下半部はハケメ調整を施す。96・97は短胴で、96の口縁部は上方に拡張し、96は上げ底、97は厚みのある上げ底をなす。なお、胴部内面にはタテ方向のヘラケズリ調整を施す。98～101は小型品。口縁部は「く」の字状を呈し、底部は平底ないし上げ底を呈する。99の口縁部は下方に拡張し、胴部内面にはタテ方向のヘラケズリ調整を施す。なお、98・99・101の外面には煤が付着する。102～108は西南四国型の甕。102～106の口縁部外面に粘土帯を貼り付け、102～104の口縁部には刻目を施す。102の頸部には櫛描沈線文、沈線文間に木口による二段の刻目、103は沈線文2条と浮文、刻目、105は刻目を施す。107は胴部片で、浮文と刻目をもつ。108は口縁部下半に粘土帯を貼り付け、口縁端面に凹線文2条を施す。口縁部内外面には、赤色顔料が付着する。109～112は大型品。口縁部は「く」の字状を呈し、109の口縁端面には凹線文2条を施す。110の頸部には断面三角形の凸帯を貼り付け、凸帯下に刻目をもつ。111は頸部に刻目、胴下半部には線刻を施す。

壺形土器(113～158)

壺形土器には長頸、細長頸、短頸、複合口縁壺がある。長頸のものは太頸で、頸部下位が締まるもの(113～119)と内傾する頸部をもつもの(120)、太頸でやや短い口頸部をもつもの(121～125)、直立する頸部に大きく外反する口頸部をもつもの(126～128)がある。113は口径10.9cm、底径5.2cm、器高25.6cmを測るほぼ完形品で、肩部に3条の線刻を施す。114は頸部に沈線文と刻目、115は弧状の線刻を施す。116・117は復元完形品で、116は口径11.6cm、底径4.4cm、器高26.8cm、117は口径10.8cm、底径5.3cm、器高28.2cmを測り、116の外面にはハケメ調整を施す。119の口縁部は長く外反し、頸部に断面三角形の凸帯を貼り付ける。122は球形の胴部に短い口頸部をもつ。123は口縁端部を上方に拡張し、口縁端面に凹線文2条を施す。124・125は西南四国型の壺。口縁部に粘土帯を貼り付け、口縁端面に凹線文、125の内外面には赤色顔料が付着する。126は扁球形の胴部をもち、口縁端部は丸く仕上げる。127は口縁端面に櫛描波状文と半截竹管文(二段)、肩～胴部上半部には半截竹管状の工具による流線状の線刻が描かれている。128は豊後地方からの搬入品。底部を一部欠損するものの、ほぼ完形品で、口縁端面に山形文、口縁上端面には楕円形状の浮文(16個残存)を貼り付けた後、押圧を加える。頸部と胴部には断面三角形の凸帯を貼り付け、肩部には口縁上端面と同様の浮文(32個)が貼り付けられている。胎土中には石英、長石、金ウンモのほか角閃石と赤色酸化土粒が少量含まれている。

129～133は細長頸壺。129は口径15.5cm、底径6.2cm、器高31.5cmを測る完形品で、外面にはハケメ調整を施す。130の胴下半部には弧状の線刻、131の頸部には刻目をもつ。132は口縁部を上方に拡張させ、口縁端面に凹線文1条を施し、頸部には櫛描沈線文と刻目をもつ。133は頸部に凸帯1条

を貼り付け、底部は突出する平底である。134は大型品。口径28.7cm、底径8.3cm、器高54.4cmを測る大型品で、口縁端面には沈線文2条、頸部には凸帯を貼り付ける。なお、内外面にはハケメ調整を施す。135～137は複合口縁壺。135は口縁部が袋状を呈し、「V」字状の線刻が残る。136・137は口縁部が「く」の字状に屈曲し、口縁端部は内傾する面をもつ。136は口径15.0cm、器高57.8cmを測り、口縁部には櫛描沈線文と波状文、頸部には沈線文と刻目を施す。胴部外面にはナナメないシタテ方向のヘラミガキ調整がみられる。137は口径25.0cm、器高63.8cmを測り、口縁部にはタテ及びヨコ方向の沈線文と斜格子目文、口縁接合部と口縁端面には波状文を施す。さらに、頸部には凸帯を貼り付け、凸帯上に刻目、肩部にはタテ及びヨコ方向の沈線文と刻目、及び半截竹管文を施す。また、多重沈線文による弧状の線刻がみられる。外面には、ナナメないシタテ方向のヘラミガキ調整を施す。

138～144は頸・胴部～底部である。138・140の胴上半部には弧状と直線的な線刻があり、139の頸部には直線状の線刻がみられる。141は肩部に2本、胴下半部に3本の直線的な線刻があり、底部外面には「+」状の線刻を施す。142は頸部片で、櫛描沈線文と波状文を施す。143は突出部をもつ胴底部で、胴部中位には「M」字状の凸帯を貼り付け、突出する底部には2条の沈線が巡る。外面はタテ方向の丁寧なヘラミガキ調整を施す。144は頸部に櫛描沈線文と半截竹管文があり、外面はハケメ調整後、ヘラミガキを加える。

145～153は肩部片。145は4条一対による弧状の線刻をもち、146は波状、147は直線的な線刻を施す。148は3本の線刻があり、外面には赤色顔料が付着する。149は3条の直線文、150には鳥足状の線刻がみられる。151・152は小片で、波状の線刻を施す。153は豊後系の壺で、頸部に断面三角形の凸帯を貼り付け、凸帯下に楕円形状の浮文（4個）を貼り付ける。

154～158は胴～底部。154は胴下半部に線刻があり、底部外面には半截竹管文を施す。155は直線的な3本の線刻、156～158には波状の線刻を施す。

鉢形土器（159～176）

鉢形土器には大型品、中型品、小型品がある。

159～161・167は中型品、162～166・168～172は小型品である。159～166は口縁部が「く」の字状を呈し、底部は平底ないし上げ底である。159・160の口縁部は拡張され、159の口縁端面には凹線文2条を施す。159の体部下半外面にはタテ方向のヘラミガキ、159・160の体部内面にはヘラケズリ調整を施す。163・164の頸部には径0.6cm大の円孔を穿つ。165は大きく外反する口縁部をもち、底部は突出する上げ底をなす。内外面共に、タテ方向の丁寧なヘラミガキ調整がみられる。166は口縁部から体部にかけて直線的な線刻が2本みられる。167～172は直口口縁の鉢で、底部は平底ないし上げ底を呈し、168・169は内面に指頭痕を顕著に残す。172は口径9.5cm、器高8.5cmを測る完形品で、底部に径2mm大の孔を穿つ。173・174は脚付鉢で、173は口径13.3cm、底径14.2cmを測る。脚部は外反し、柱部と脚裾部には径1.1cm大の円孔を3箇所穿つ。174は完形品で、口径12.3cm、底径14.2cm、器高18.8cmを測る。体部は内湾し、口縁部に櫛描沈線文と波状文、体部下半には波状文と刻目を施す。脚部には沈線文（三段）と径1.1cm大の円孔4個を穿つ。外面はヘラミガキ、体部内面には板状工具によるナデを施す。なお、脚部外面には赤色顔料が一部付着している。175・176は大型品。外反口縁で、175の体部外面には木口による刻目を施す。176は口径45.0cmを測り、口縁部を拡張させ、口縁端面に沈線文2条と半截竹管文を施した後、円形浮文（2個一対）を3箇所に貼り付ける。

高坏形土器（177～187）

177は段、178～180は稜をもって屈曲し、179の口縁部にはヘラ描き波状文を施す。177・178の脚部はラッパ状に開き、177の脚裾部と178の脚柱部には径1.1cm大の円孔を4箇所につ。177・179・180の坏部内外面には丁寧なヘラミガキ調整を施す。181・182の坏部下位に明瞭な屈曲部をもち、181の口縁部に沈線文2条、屈曲部には3～4条の沈線を施す。182の柱部には、径1cm大の円孔を3箇所につ。183～187は脚部。183・184は一段、185は二段の円孔をつ。なお、186の外面には赤色顔料が付着する。187はエンタシス状の柱部をもつ脚部片で、裾部に径1.3cm大の円孔を2箇所につ。

器台形土器（188～191）

188は口縁部片で、口縁端部に2条の沈線が巡る。189は復元完形品で、口径29.4cm、底径25.5cm、器高18.4cmを測る。口縁部は上方に拡張し、口縁端面に2個一対の竹管文を8箇所、柱部には径1.5cm大の円孔6個を二段、柱裾部には2個一対の竹管文を8箇所につ。なお、脚裾端部には凹線文2条が施されている。柱部外面はタテ方向のヘラミガキ、柱上部内面にはヨコ方向のヘラミガキ、柱下部内面はハケメ調整を施す。190は柱部片で、沈線文と沈線文間に山形文と径1.6cm大の円孔をつ。191は脚裾部片で、裾端面には凹線文4条、柱部には円孔を看取る。

器種不明品（192・193）

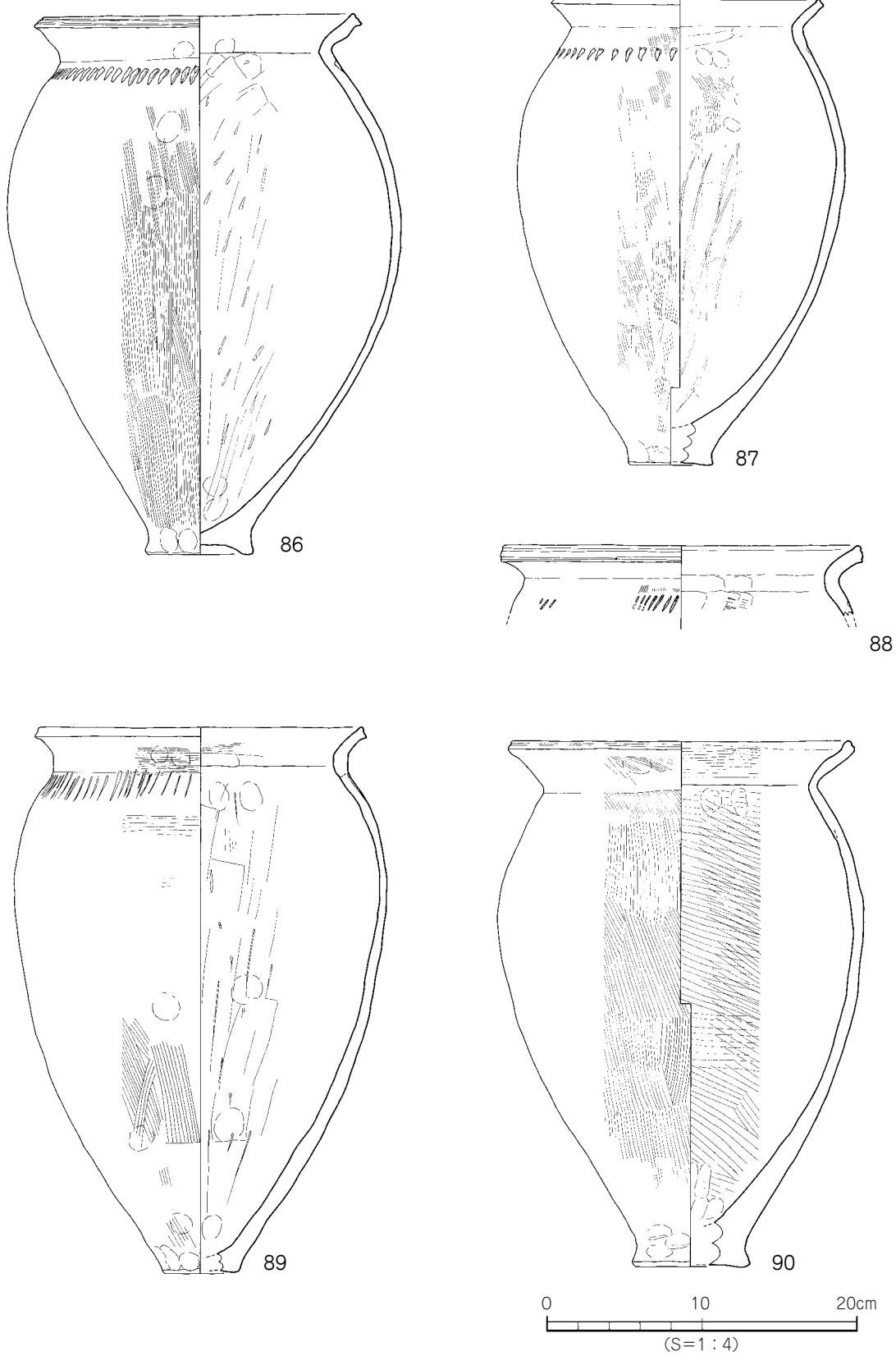
192は複合口縁壺の口縁拡張部である可能性のある土器で、竹管文を施す。193は小片ではあるが匙形土製品の可能性があり、内外面には指頭痕を顕著に残す。

石器（194～205）

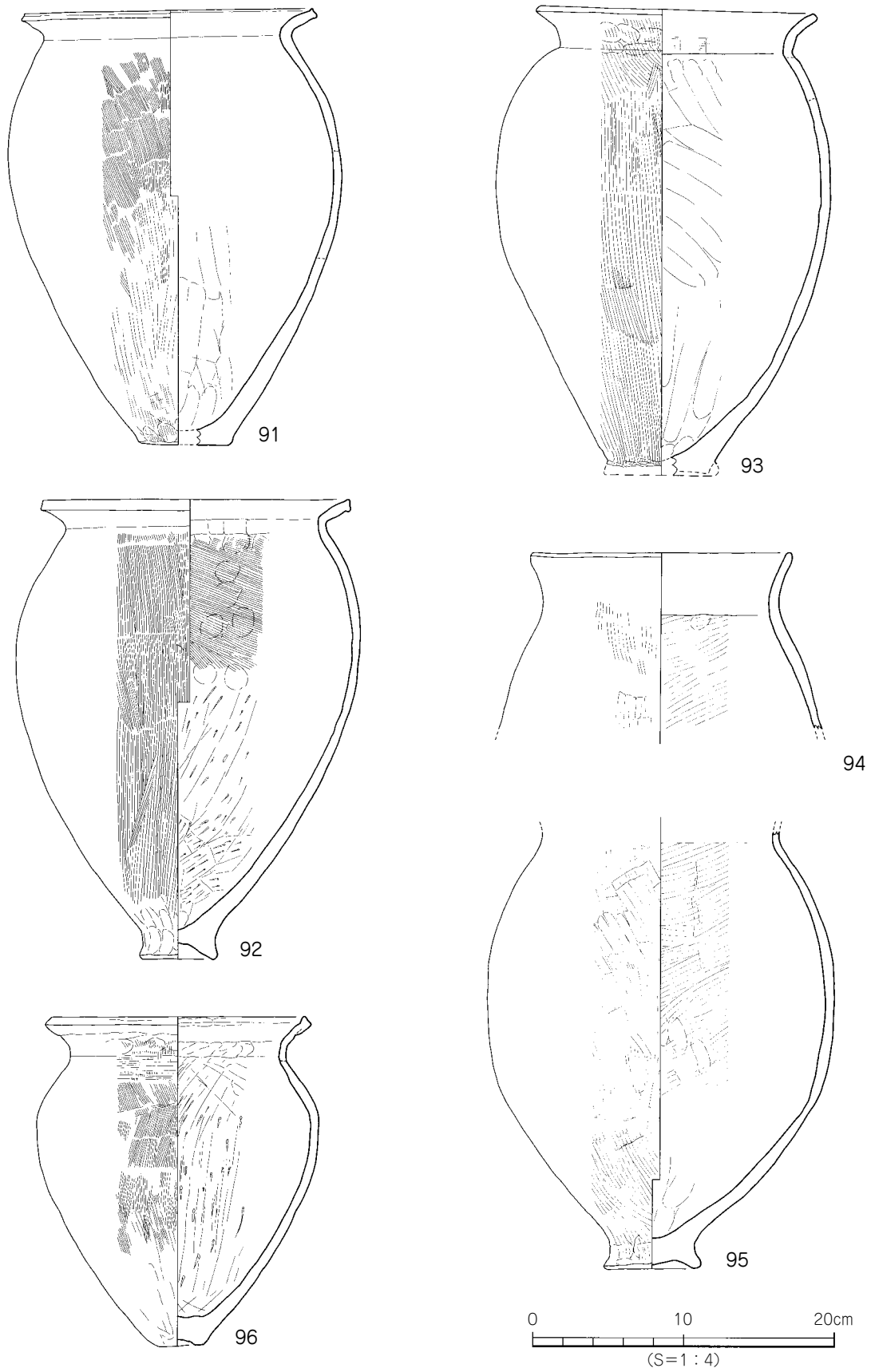
194は石庖丁で研磨段階の未成品であり、自然面を残す。結晶片岩製。195～200は砥石で195は3面、196～199は1面、200は2面の砥面をもつ。195は石英粗面岩、その他は結晶片岩製。201～203は敲石。花崗岩製。204は石錐で、長さ21.7cm、幅8.6cm、厚さ5.8cm、重量1.42kgである。器面は研磨され、部分的に煤が付着する。205はヘラ状の石製品で、長さ9.6cm、幅1.9cm、厚さ0.35cm、重さ14.36gを測る。器表面は研磨され、基部には貫通する直径0.7cm大の孔をつ。

木製品（206～217）

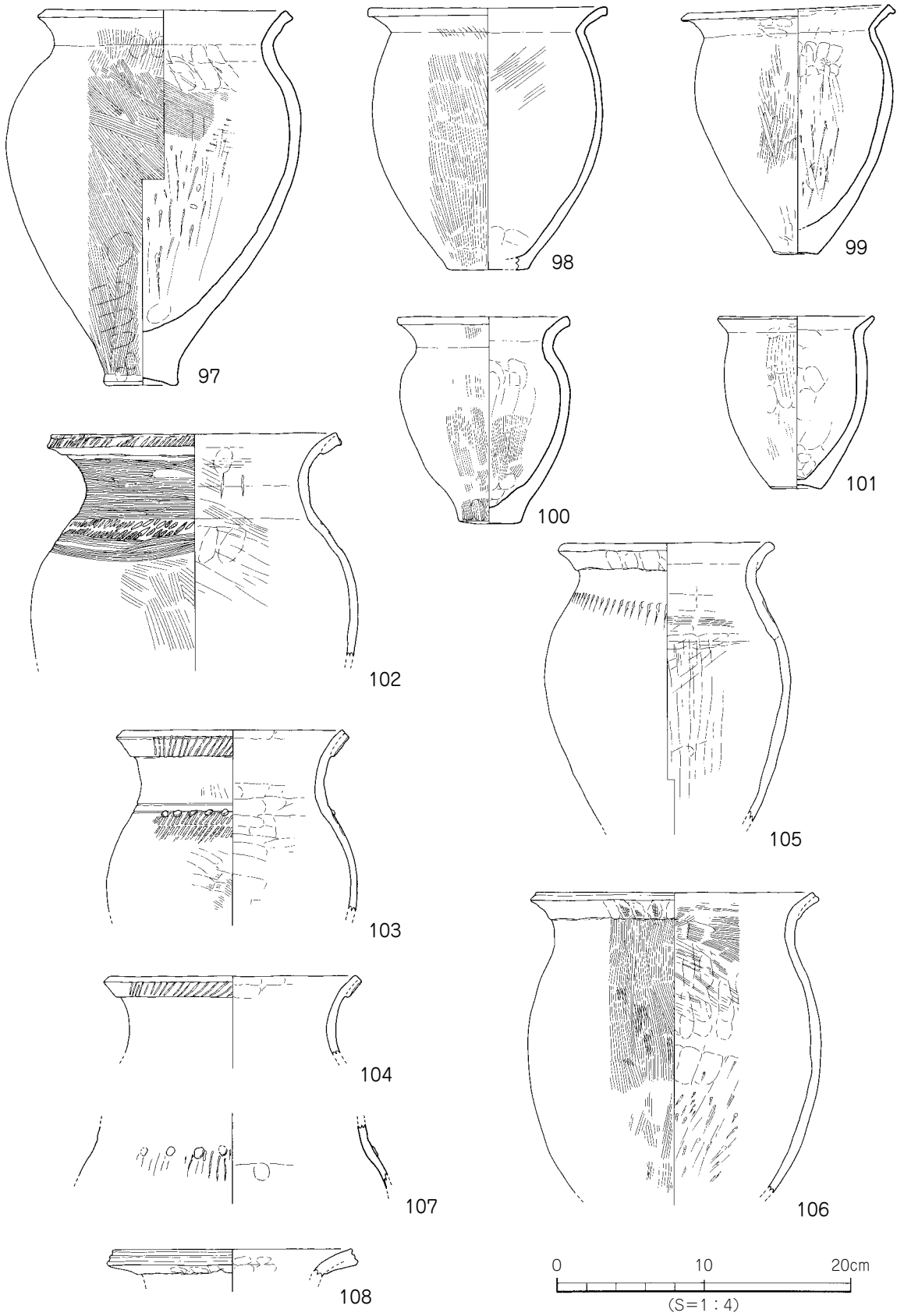
206～208は器種不明の加工品で、206の裏面全体は欠損しているが、両側面には面取り加工が施されている。207の図左側部分は柄状を呈し、締め付けられた痕跡が認められる。208は最大厚0.6cmを測る板状の木器で、鋏の一部である可能性があり、上部には抉りと思われる凹みをもつ。使用された木材は、206がコナラ属クヌギ節、207はヒノキ、208はコナラ属アカガシ亜属である。209はヒノキを使用した板状の加工品で、部分的に焼け焦げがみられる。210～212は棒状の加工品。断面形態は楕円形状を呈し、212の表面全体には面取り加工を施す。210はコナラ属アカガシ亜属、211はカキノキ属、212は散孔材を素材としている。213・214は建築用の部材と考えられるもので、213の上部には2箇所につ。214の図左側面には柄穴の可能性をもつ抉りがみられる。213の素材にはスノキ属、214はヒノキを用いている。215・216は杭と思われる木片で、216の裏面は欠損し、図右側面は加工により尖らせている。なお、表面には2箇所につ。215はマツ属複雑管束亜属、216は針葉樹である。217は斜め方向の面取りが施される材であるが、表面に焼け焦げがみられることから、最終的には薪として使用されたと考えられる。素材は、ヒノキを用いている。



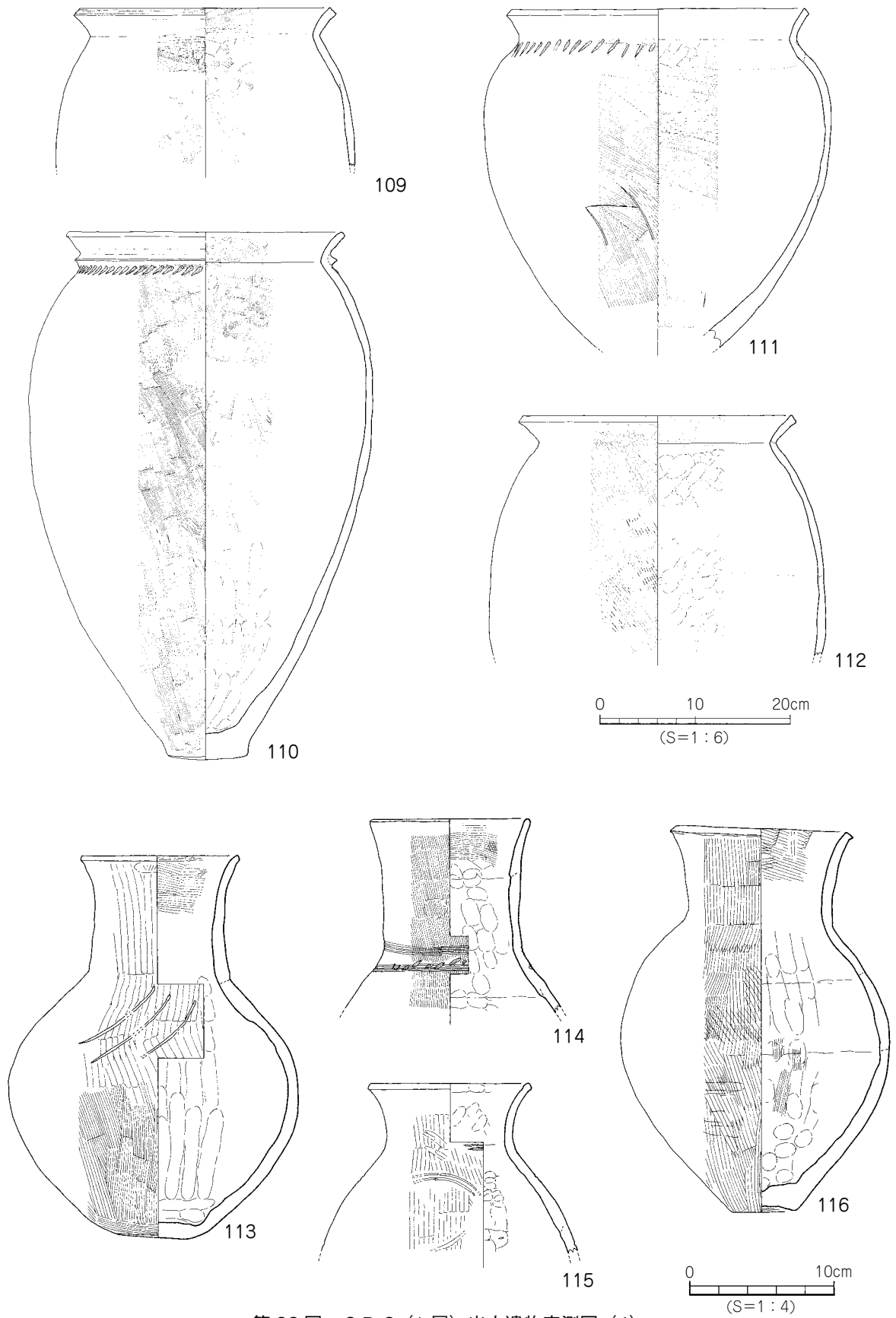
第20図 SD3(1層)出土遺物実測図(1)



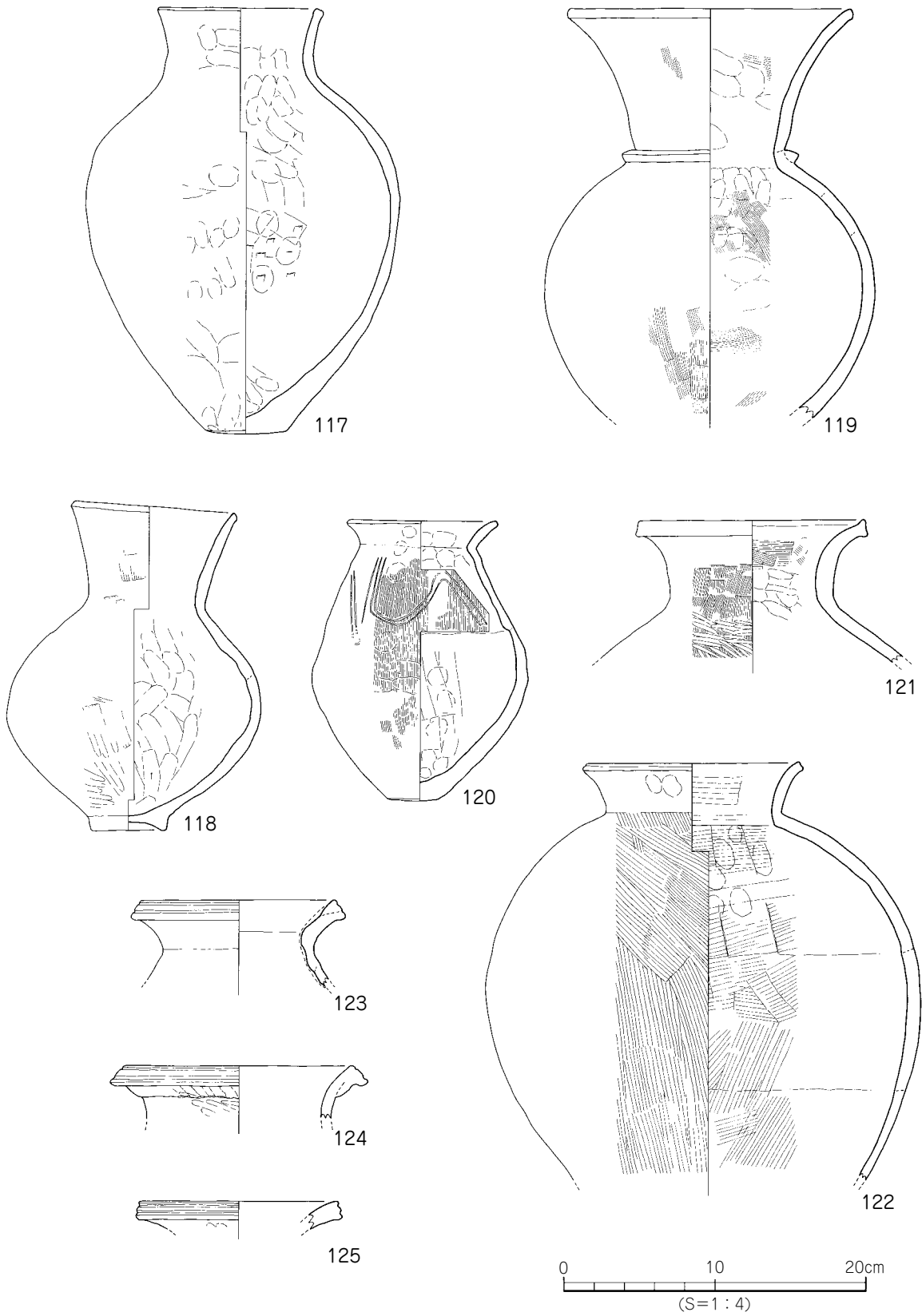
第21図 SD3(1層)出土遺物実測図(2)



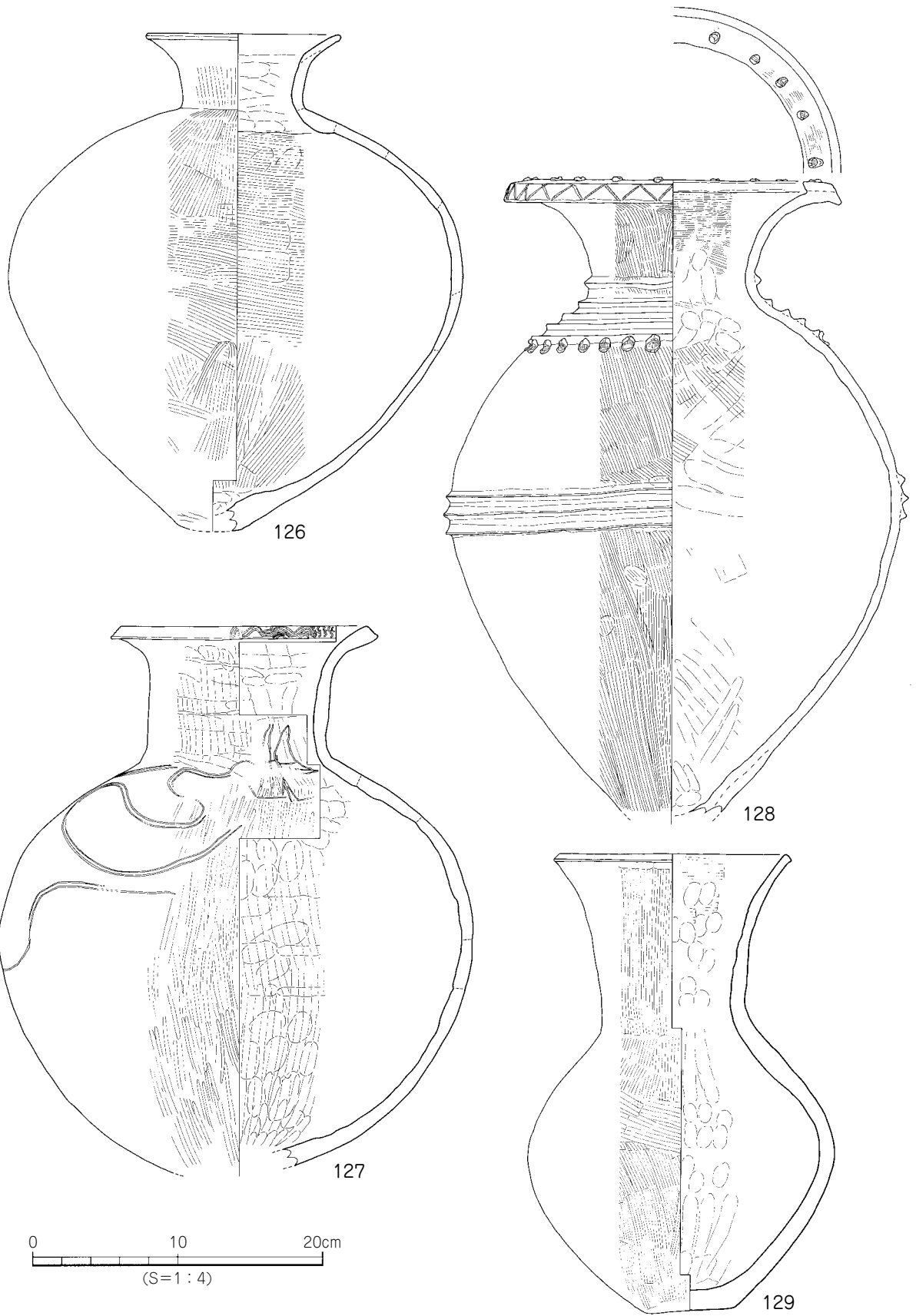
第22図 SD3(1層)出土遺物実測図(3)



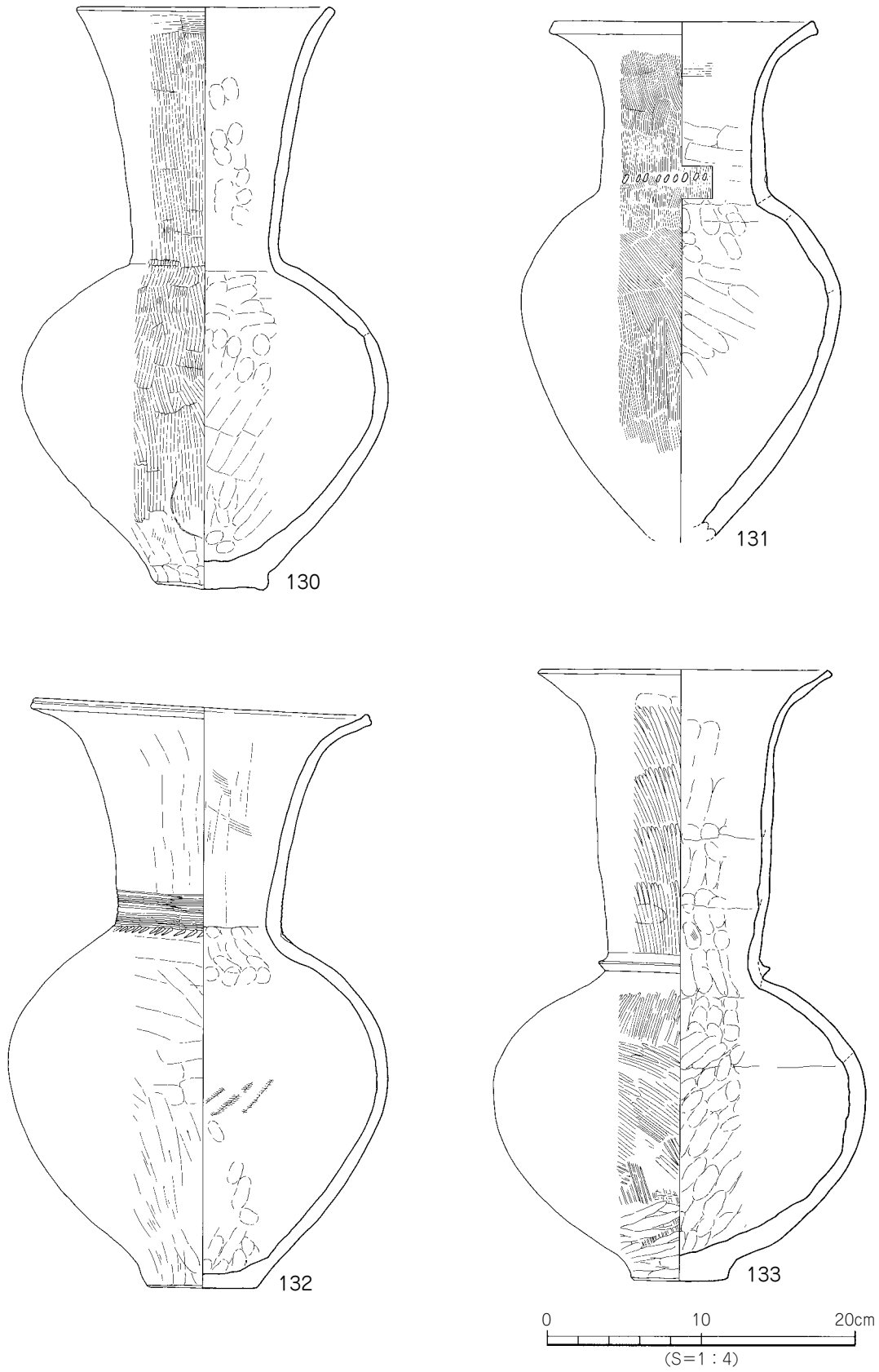
第23図 SD 3 (1層) 出土遺物実測図 (4)



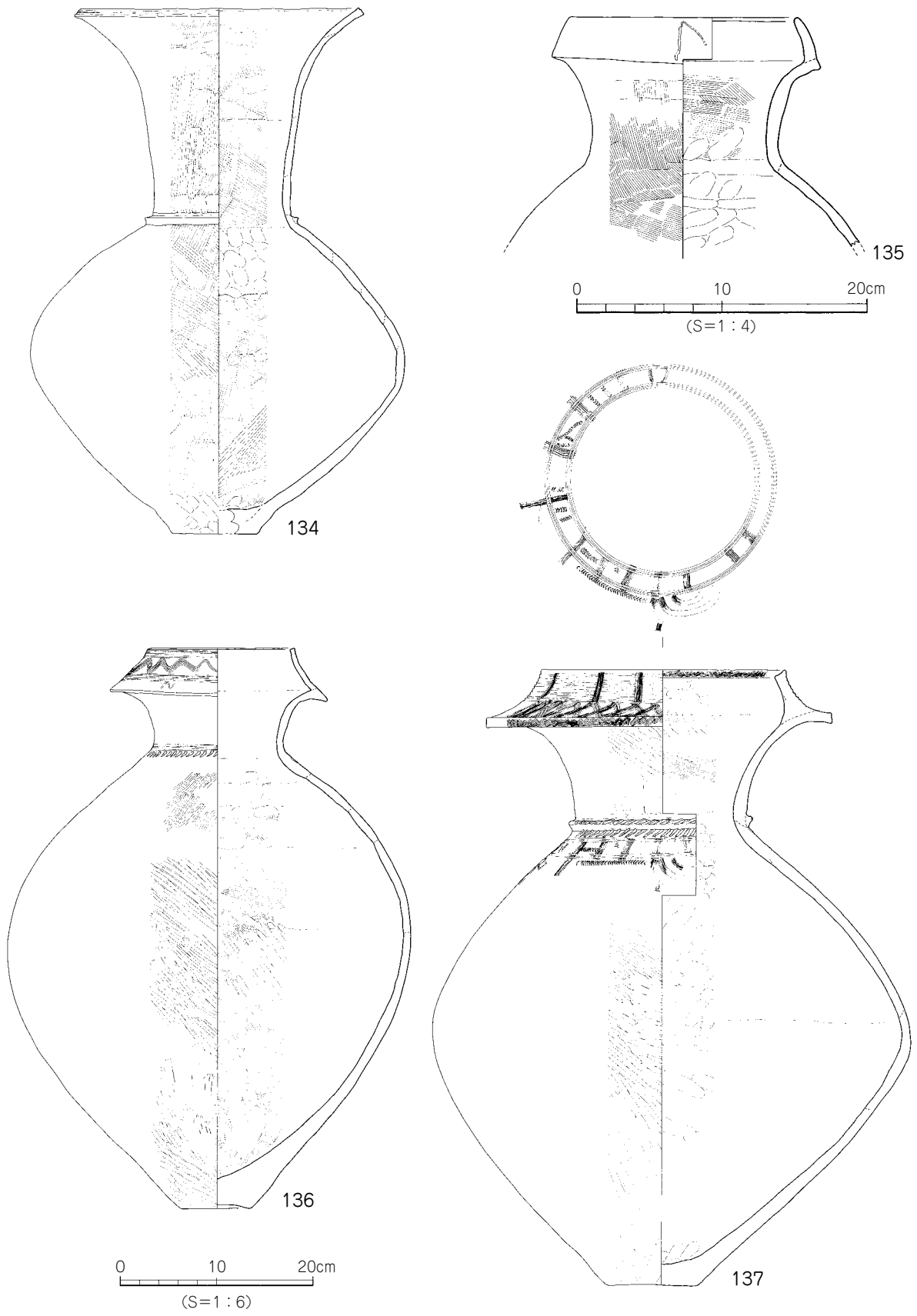
第24図 SD3(1層)出土遺物実測図(5)



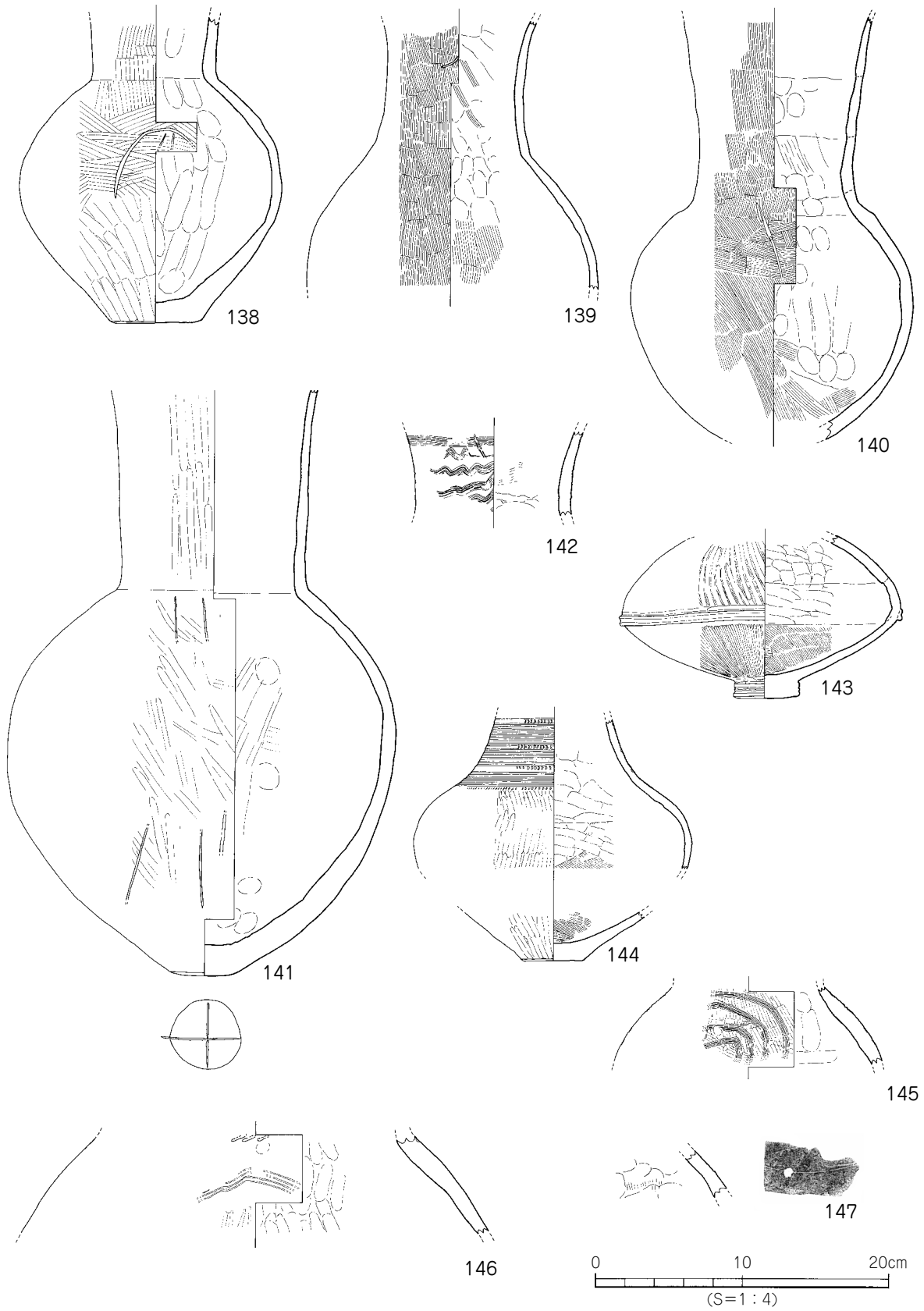
第25図 SD3(1層)出土遺物実測図(6)



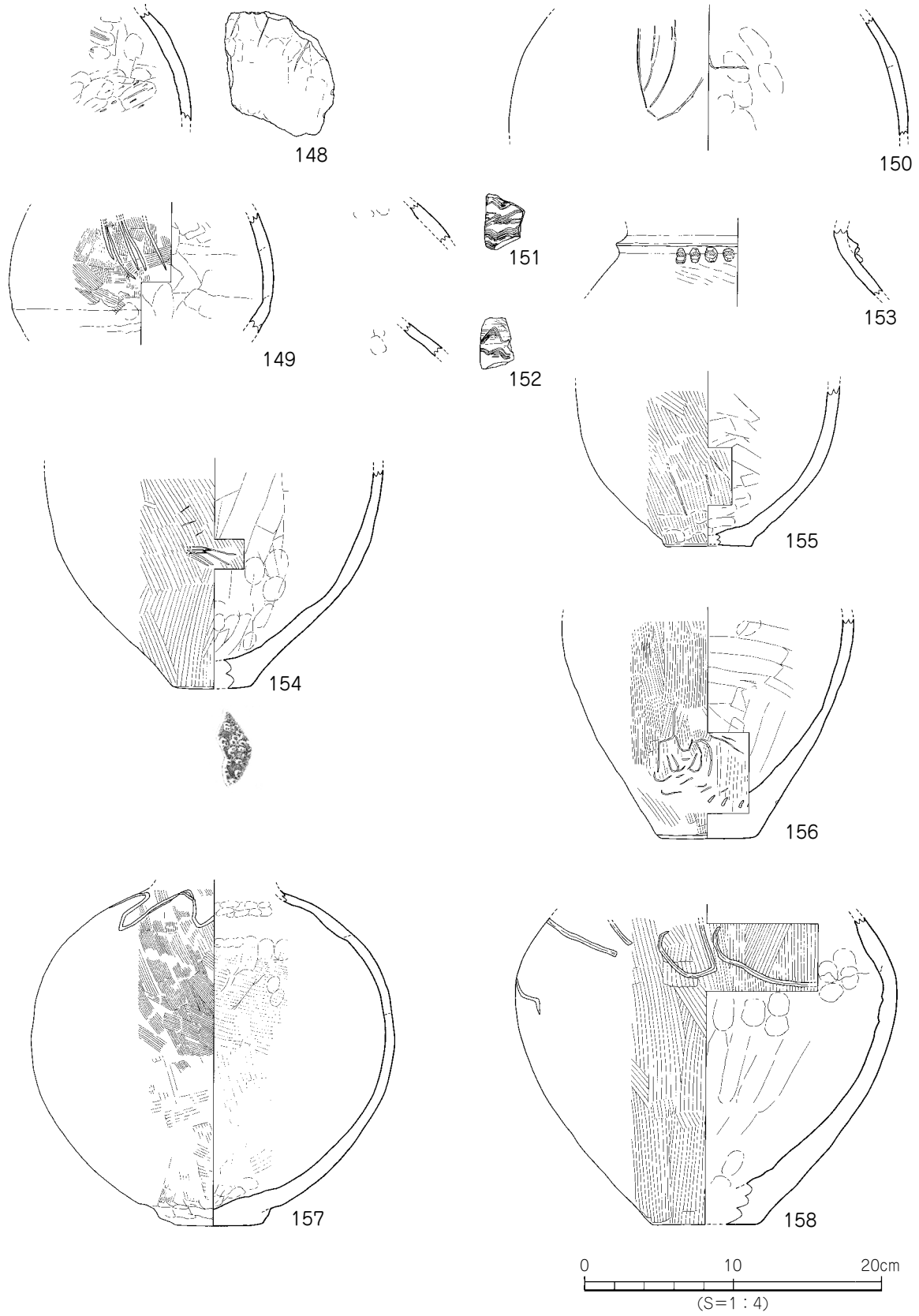
第26図 SD3(1層)出土遺物実測図(7)



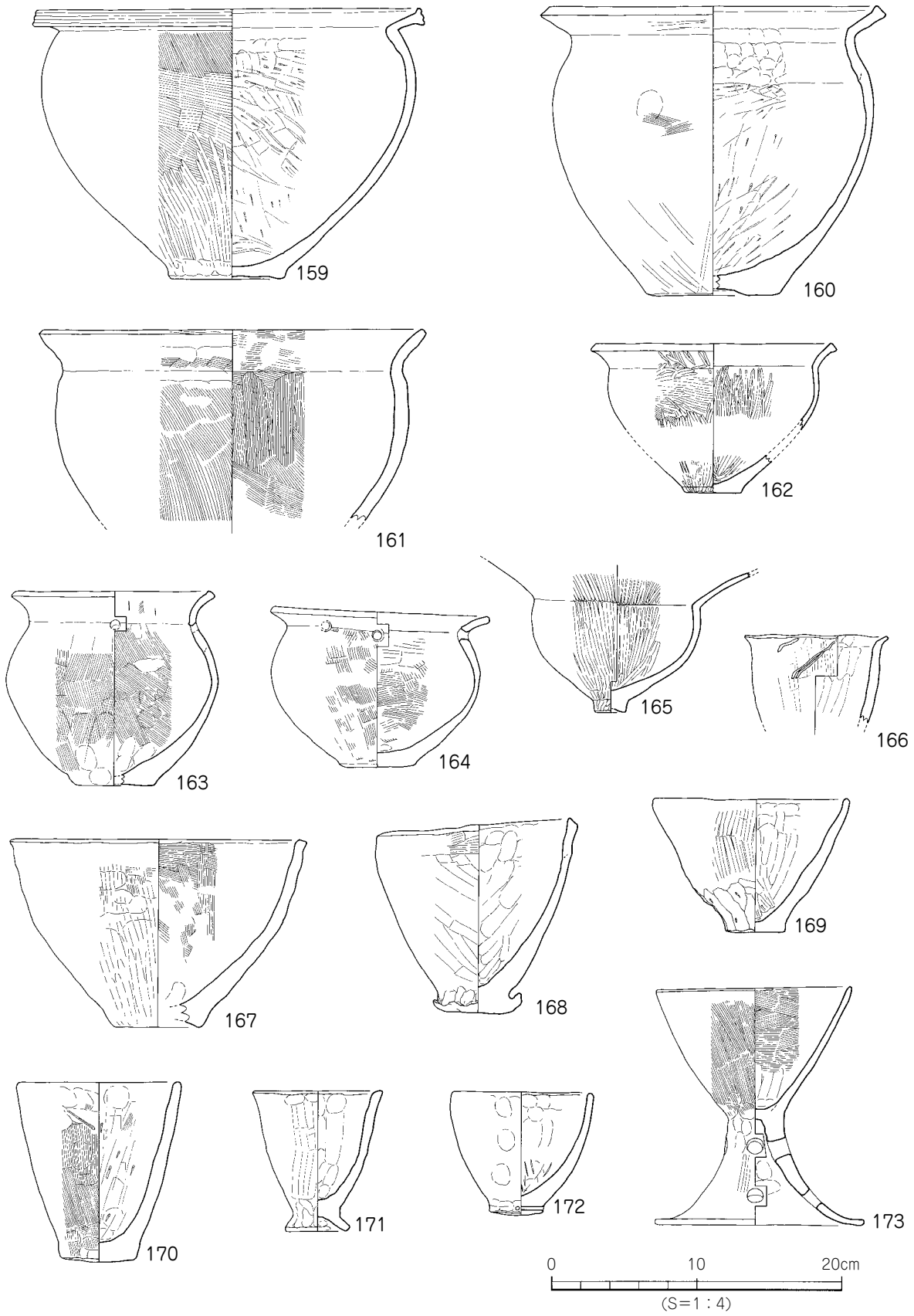
第27図 SD3(1層)出土遺物実測図(8)



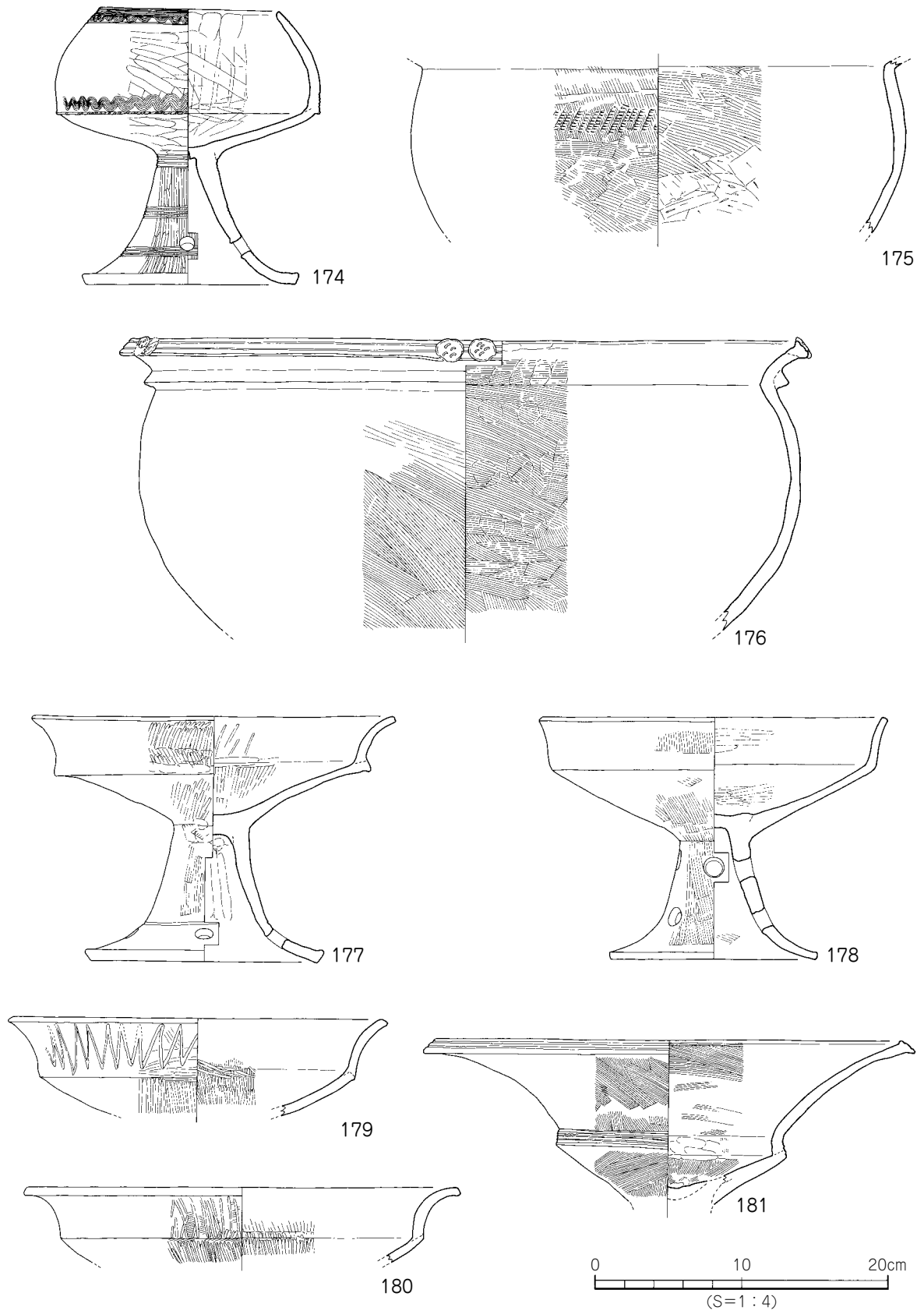
第28図 SD3(1層)出土遺物実測図(9)



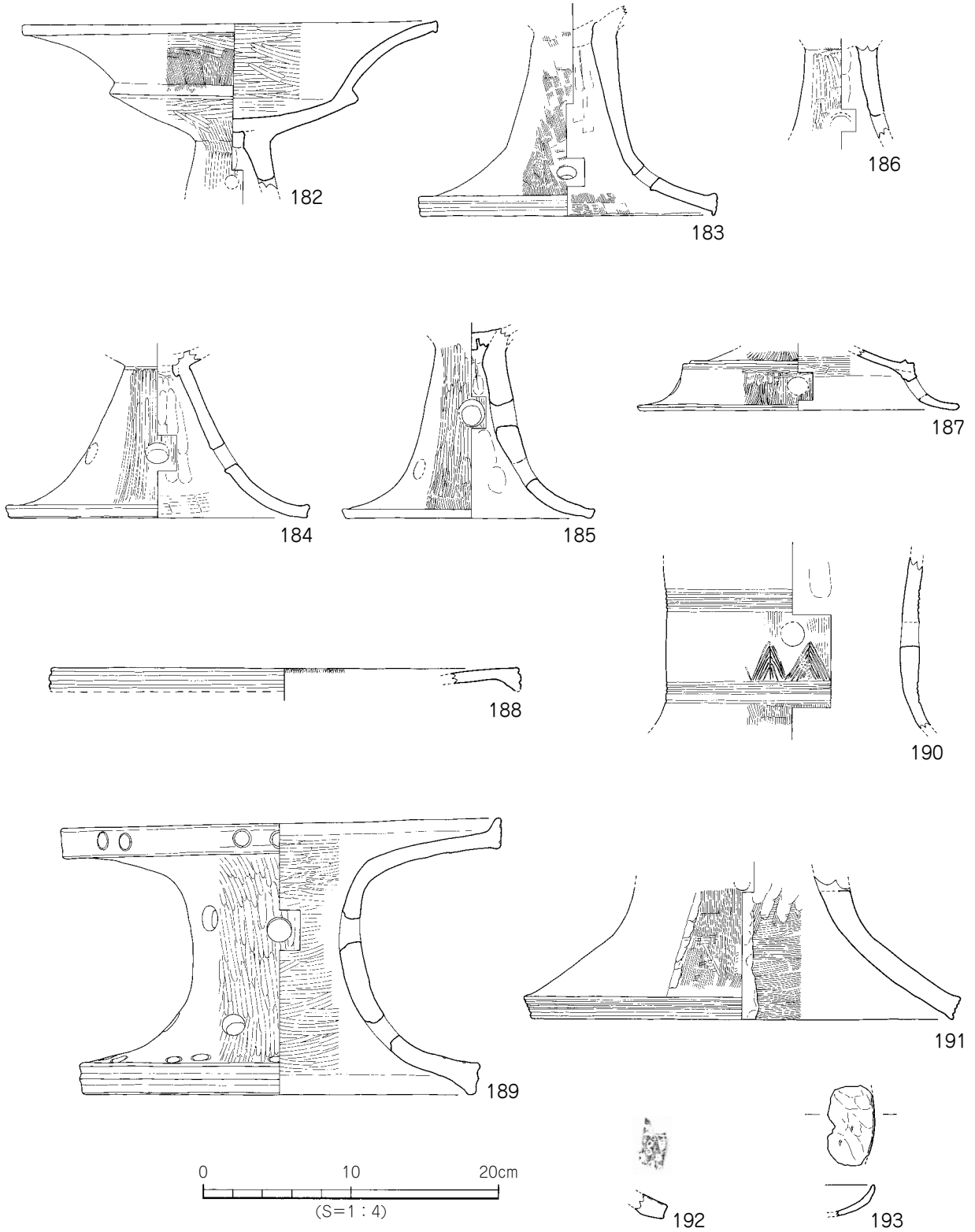
第29図 SD 3 (1層) 出土遺物実測図 (10)



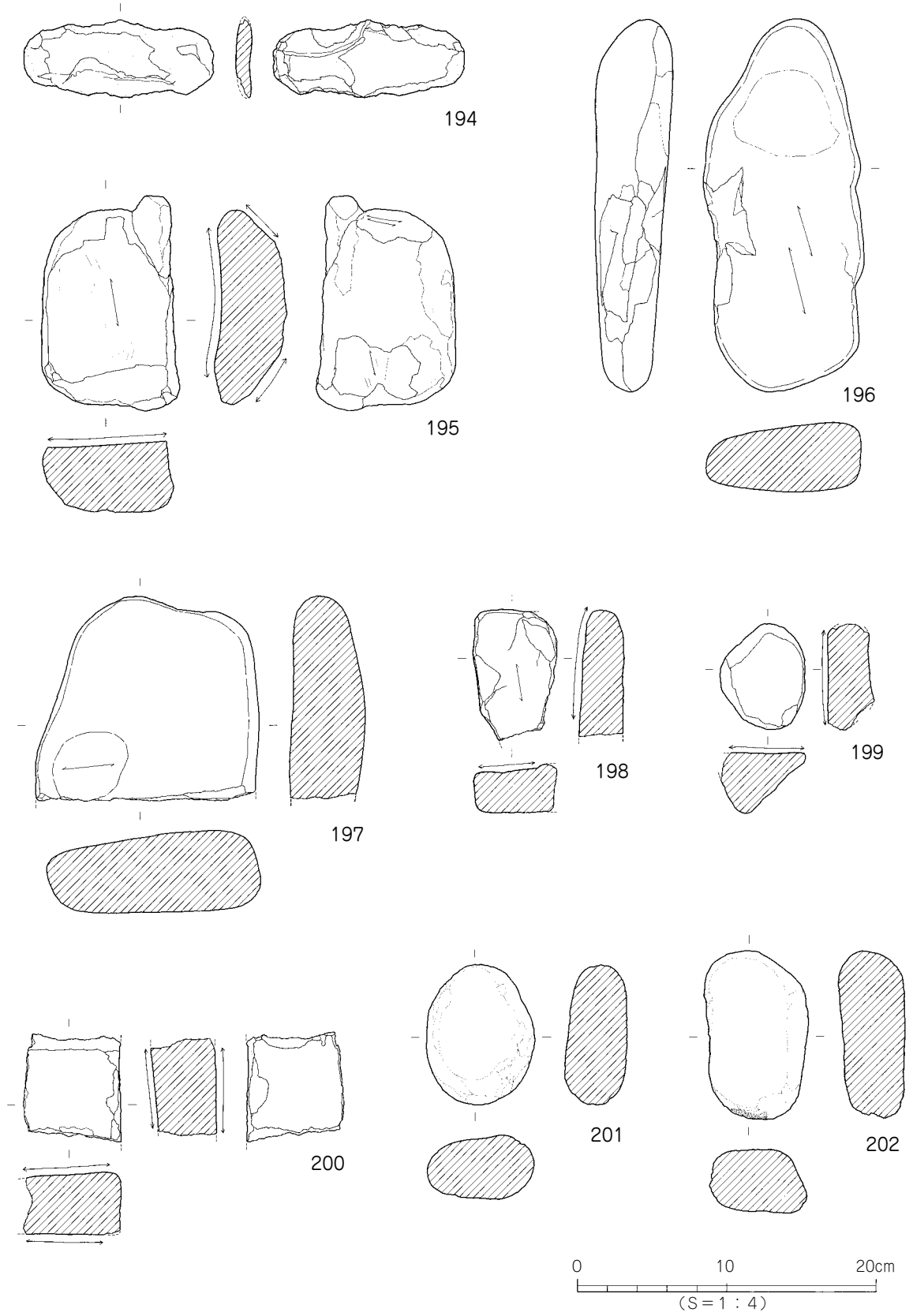
第30図 SD3(1層)出土遺物実測図(11)



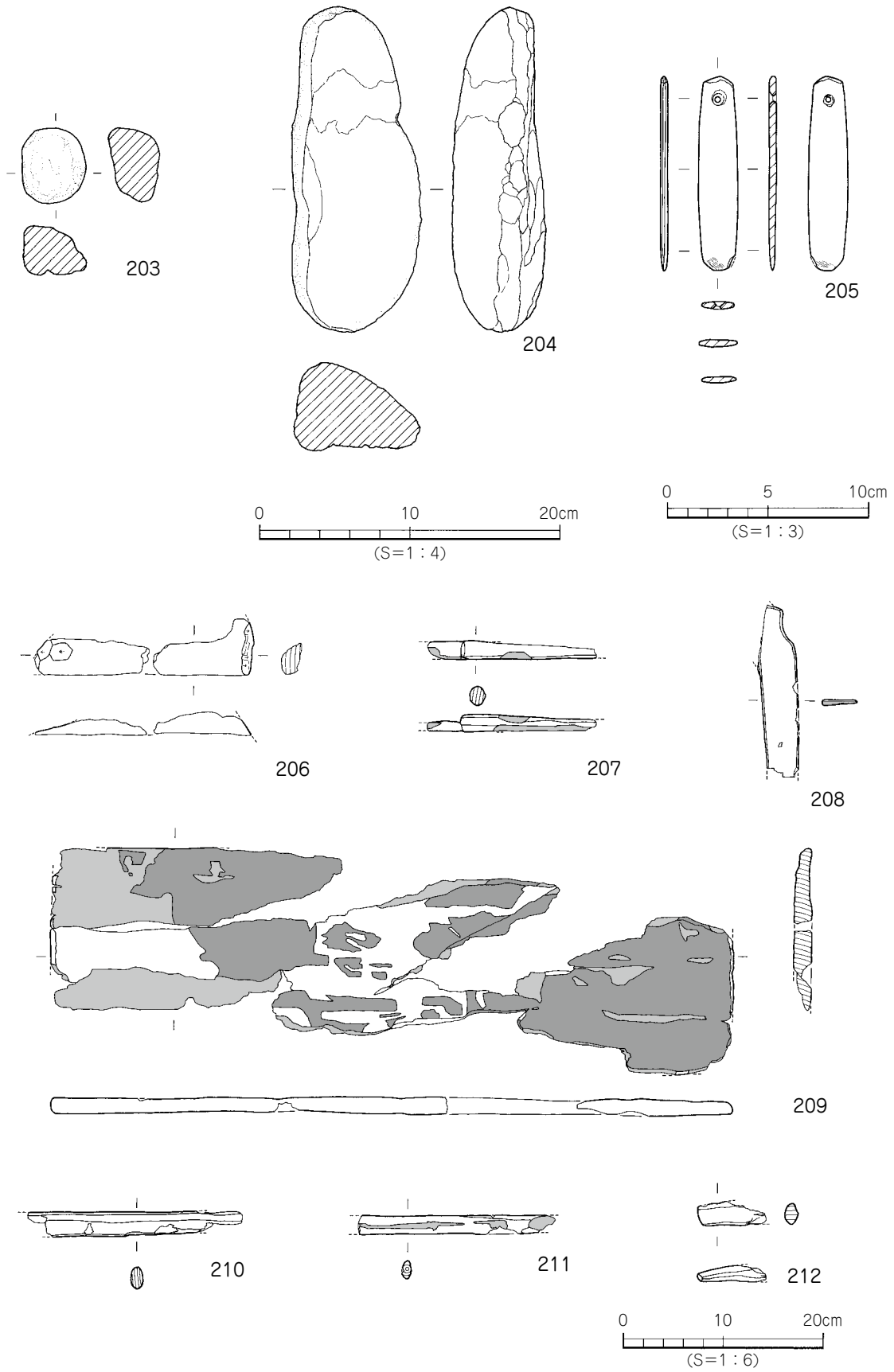
第31図 SD 3 (1層) 出土遺物実測図 (12)



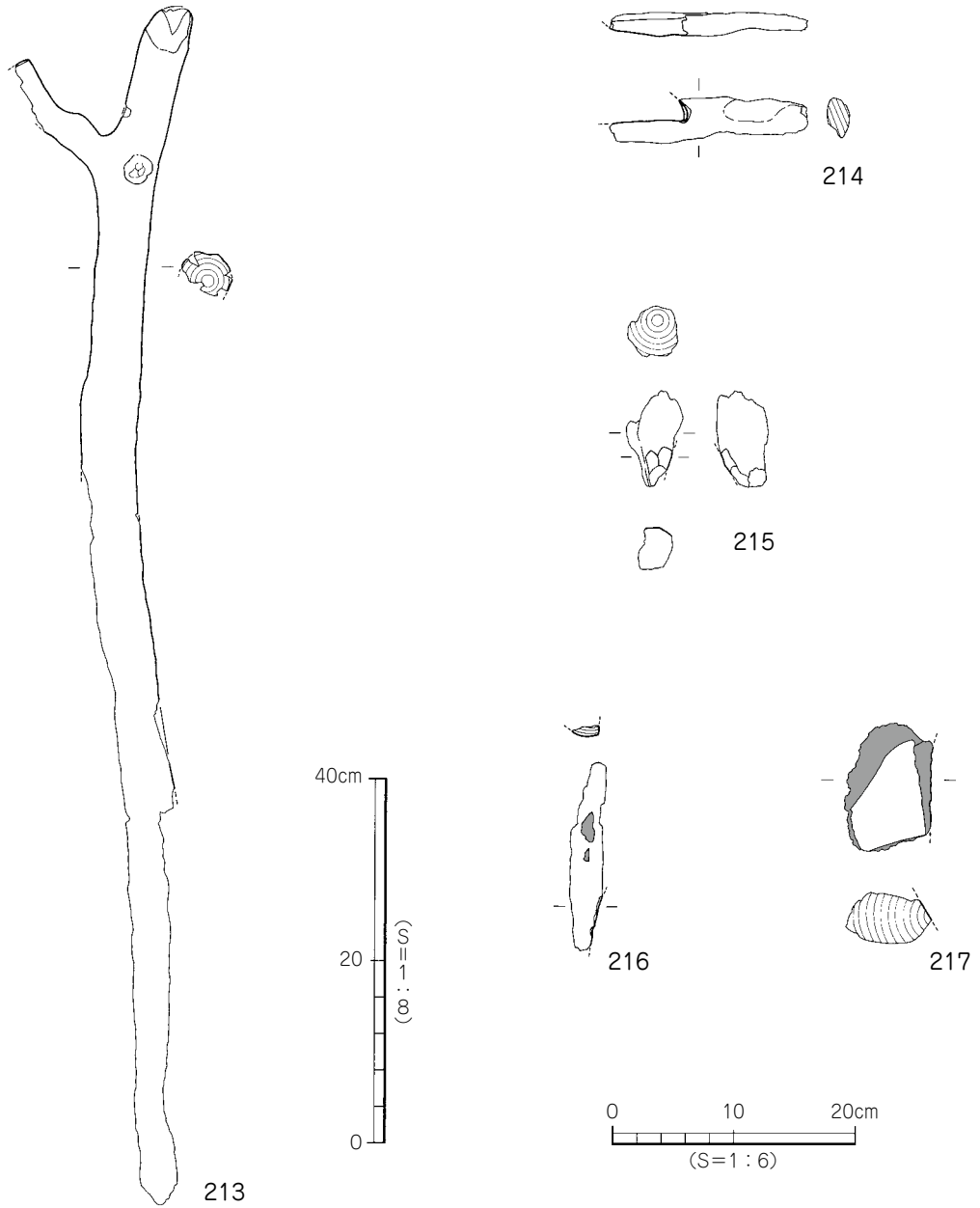
第32図 SD 3 (1層) 出土遺物実測図 (13)



第33図 SD3(1層)出土遺物実測図(14)



第34図 SD3(1層)出土遺物実測図(15)



第 35 図 S D 3 (1 層) 出土遺物実測図 (16)

4) 出土層位不明の遺物 (第36図、図版11)

甕形土器 (218・219)

218は口径16.4cm、底径5.5cm、器高27.6cmを測る完形品。口縁部は拡張され、口縁端面に凹線文2条を施す。底部は上げ底で、胴部外面にはハケメ調整後、ヘラミガキを施す。219は西南四国系の甕で、口縁部には粘土帯を貼り付けている。

壺形土器 (220～225)

220～222は外傾する長い頸部をもち、220の頸部には木口による刻目、胴上半部には「×」状の線刻がある。221は肩部に刻目と鳥足状の線刻をもつ。222は異形品で肩部の張りは強く、口縁部は直立する。完形品。223～225は肩部片で、223は鳥足状、224は直線状、225は波状の線刻を施す。

鉢形土器 (226～229)

227は中型品、その他は小型品である。226の口縁部は上方に拡張し、底部は平底風である。227は口縁部が直立気味に立ち上がり、頸部に刻目をもつ。228は完形品で口縁部は短く外反し、底部は平底となる。体部下半外面には、ナナメ方向のヘラミガキを施す。229は手づくね土器で、内外面には指頭痕を顕著に残す。

高坏形土器 (230)

230の口縁部は短く外反し、柱部下位には径0.7cm大の円孔を穿つ。

石器 (231)

231は携帯用の砥石で、1面の砥面をもつ。結晶片岩製。

時期：出土遺物の特徴より、SD3は弥生時代後期中葉の溝とする。

SD4 (第4・37図)

調査区北東部～中央部B7～D2区で検出した溝で、調査区内を緩やかに「L」字状に折れ曲がり、北東部は調査区外へ続く。SD4は、SD1とSD3に先行する。第V②層上面での検出であり、溝上面は第IV①層が覆う。規模は検出長22.80m、幅0.40～0.57m、深さ4～6cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色粘質土単層である。溝内から、遺物は出土していない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、SD3に先行することから、概ね弥生時代後期中葉以前とする。

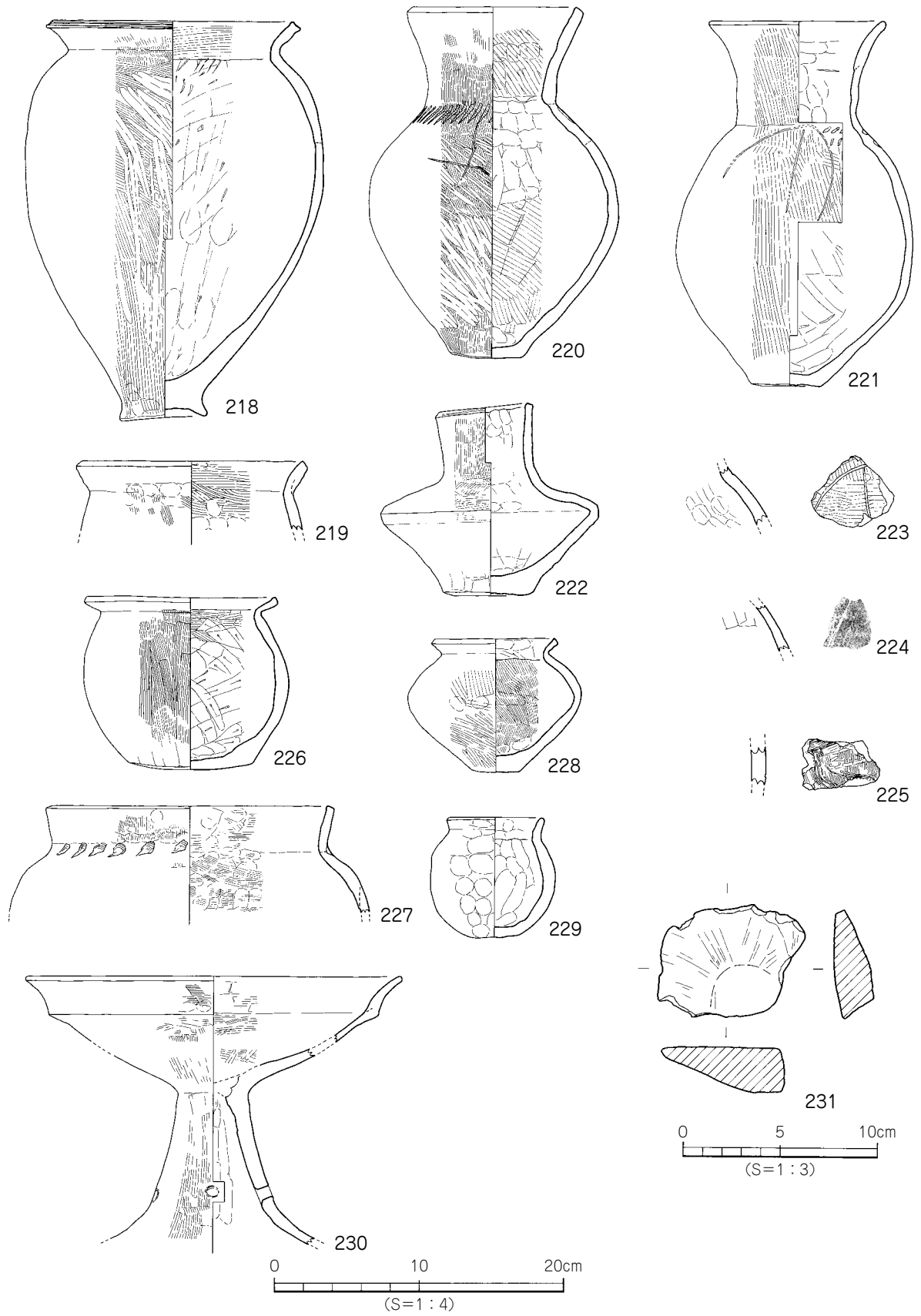
SD5 (第4・37図)

調査区中央部東側D5・6区で検出した溝で、SD1(古墳時代)に先行する。なお、SD5は、第V②層上面での検出である。規模は検出長4.10m、幅0.20～0.40m、深さ4cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黒褐色粘質土単層である。溝内から、遺物は出土していない。

時期：出土遺物はないがSD1に先行することや埋土がSD3やSD4と類似することから、概ね弥生時代後期の溝とする。

SD6 (第4・37図、図版3)

調査区南側E9～F1区で検出した溝で、SD3に先行する。調査区南側を東西に横断し、東側と西側は調査区外へ続く。第V①層上面での検出であり、第IV①層が覆う。規模は検出長30.90m、幅0.56



第36図 S D 3 (層不明) 出土遺物実測図

～1.60m、深さ2～12cmを測る。断面形態は舟底状を呈し、埋土は二層に分層され、上層は黒褐色粘質土、下層は灰色砂と黒褐色粘質土の混合土である。遺物は弥生土器や石器のほか、モモ科の種子1点が出土した。なお、土器の中には線刻が施された破片1点が含まれている。

出土遺物（第38図）

232・233は甕形土器。232は「く」の字状口縁を呈し、内外面にはハケメ調整を施す。233の底部は上げ底をなし、外面にタテ方向のヘラミガキ調整を施す。234～236は壺形土器。234・235の口縁部は外反し、234の口縁端面には1条の沈線が巡る。236は肩部片で、直線的な線刻がみられる。237は高坏形土器の柱部片で、外面にヘラミガキ調整を施す。238～243は、弥生時代前期の土器である。238は甕形土器の胴部片で、ヘラ描き沈線文2条を施す。239～243は壺形土器で、ヘラ描き沈線文を施す。244は砂岩製の砥石で、2面の砥面をもつ。

時期：出土遺物の特徴より、弥生時代後期前葉とする。

2. 第IV層上面検出遺構

SD1（第4・39図）

調査区北東部～中央部C8～E5区で検出した溝で、SD3～5より後出する。北東－南西方向に伸びる溝で、東側は調査区外に続く。規模は検出長15.80m、幅0.50～0.70m、深さ2～13cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰色砂単層である。遺物は埋土中より、土師器片や須恵器片が数点出土した。

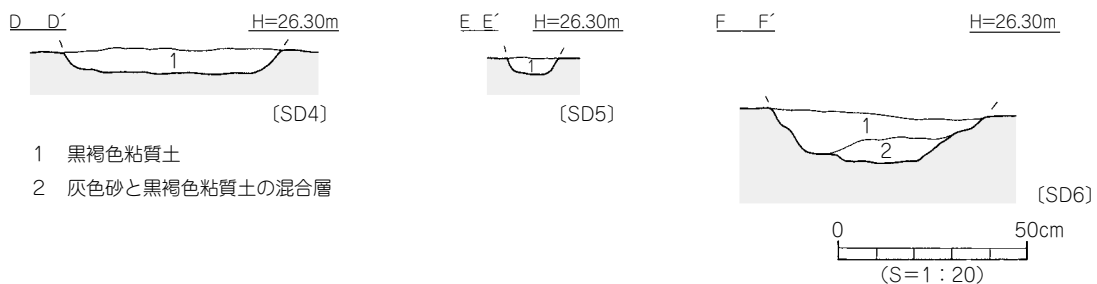
出土遺物

245～248は須恵器坏身片。245～247のたちあがりは低く内傾し、端部は尖る。たちあがり径11.7～12.2cmを測り、底部外面1/3の範囲に回転ヘラケズリ調整を施す。248のたちあがりは欠損し、受部径15.0cmを測る。

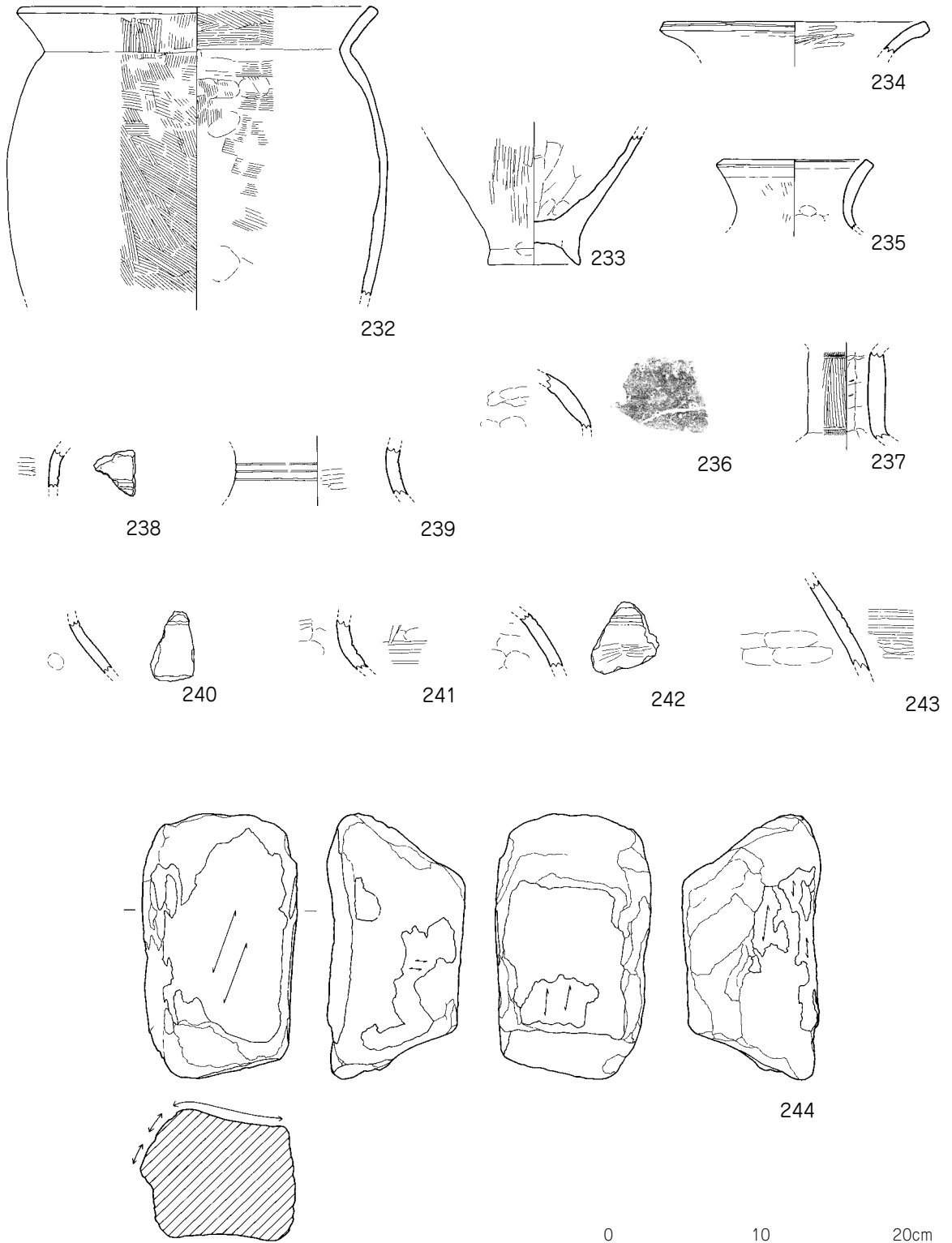
時期：検出層位や出土した須恵器の特徴より古墳時代後期、6世紀後葉とする。

3. その他の遺構と遺物

調査で検出した柱穴は、84基である（表3）。平面形態は円形と楕円形とがあり、規模は径0.10～0.80m、深さ4～30cmを測る。柱穴掘り方埋土は黒褐色土、黒色土、褐色土の三種類があり、遺物は弥生土器小片が少量出土した。

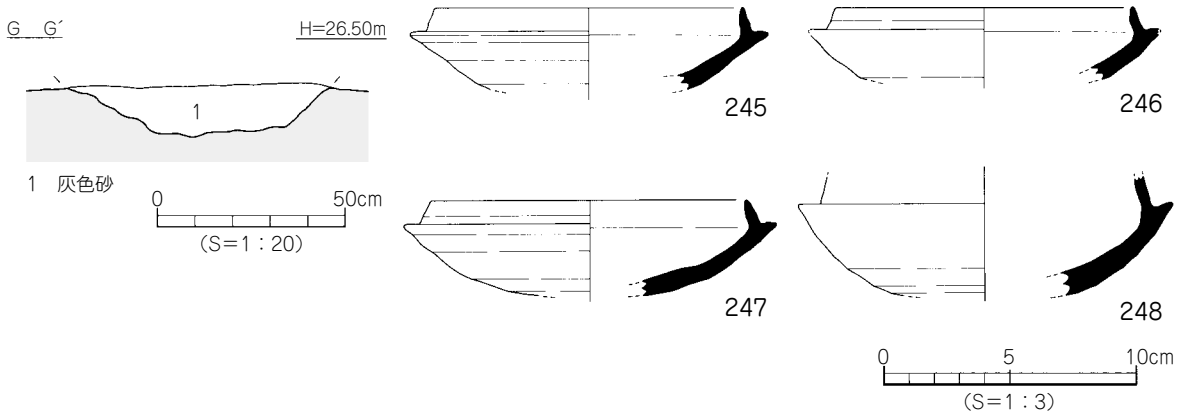


第37図 SD4～6断面図



0 10 20cm
(S=1:4)

第38図 SD6出土遺物実測図



第39図 SD1断面図・出土遺物実測図

第4節 小 結

釜ノ口遺跡9次調査では、弥生時代や古墳時代の遺構・遺物を確認した。弥生時代の遺構は溝5条(SD2～6)があり、溝内からは土器や石器のほかに木器や種子が出土した。このうち、SD3は最大幅3.41m、深さ110cmを測る北東-南西方向にのびる溝で、溝内からは完形品を含む大量の土器のほか、木器や種子が数多く出土した。土器の中には豊後地方や西南四国地方からの搬入品(外来系土器を含む)や線刻を施した土器、赤色顔料が付着した土器が含まれている。特に、松山平野内では豊後地方からの搬入品は、これまでに小破片しか出土しておらず、完形品での出土は初例となる。出土した木器には杓子状木製品や竪杵、サザエ突きなどの製品と平鍬や泥よけ具などの未製品があり、他には建築部材や杭なども含まれている。このほか、モモ科やウリ科などの種子144点が溝内から出土している。出土した土器の特徴より、SD3は弥生時代後期前葉には存在しており、埋没時期は弥生時代後期中葉頃と考えられる。検出状況から、SD3は集落を区画するための溝もしくは水田や畑耕作に伴う給排水路として機能していたものと推測される。また、SD2からはSD3と同様、豊後地方からの搬入品(完形品)が出土している。出土遺物や検出状況より、SD6は弥生時代後期前葉、SD2・3は後期中葉、SD4は後期中葉以前の溝と考えられる。

一方、古墳時代の遺構は溝SD1があげられる。第IV層黒褐色粘質土上面から掘削された溝で、最大幅0.70m、深さ13cmを測る。SD1は灰色砂で埋没しており、水路的な機能を有していた溝と考えられる。釜ノ口遺跡が所在する小坂地区では古墳時代の資料が少なく、今後、同地区における古墳時代集落を解明するうえで貴重な資料といえる。

今回の調査では搬入品の出土による他地域との交流や、当時使用された木製品の様相など、小坂地区における弥生後期集落の一端が判明した。今後は小坂地区北方に展開する中村松田遺跡との関係を含め、同地区における弥生集落の全容解明が急務となろう。

遺構一覧 — 凡例 —

地区欄 グリッド名を記載。

埋土欄 複数の土層がある場合には、「黒褐色粘質土 他」と記載。

出土遺物欄 土器名称を略記した。

例) 弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器、木→木器、石→石器、種→種子

表2 溝一覧

溝 (SD)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	C8 ~ E5	レンズ状	15.80 × 0.70 × 0.13	灰色砂	土師・須恵	6世紀後葉	
2	B6 ~ D1	舟底状	22.30 × 0.88 × 0.36	黒褐色粘質土 (砂混入)	弥生・種	弥生後期中葉	
3	B7 ~ F1	逆台形状	28.80 × 3.41 × 1.10	黒褐色粘質土 他	弥生・石・木・種	弥生後期中葉	
4	B7 ~ D2	皿状	22.80 × 0.57 × 0.06	黒褐色粘質土		弥生後期中葉以前	
5	D5・6	レンズ状	4.10 × 0.40 × 0.04	黒褐色粘質土		弥生後期	
6	E9 ~ F1	舟底状	30.90 × 1.60 × 0.12	黒褐色粘質土 他	弥生・石・種	弥生後期前葉	

表3 柱穴一覧

(1)

柱穴 (SP)	地区	平面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	備考
1	C1	楕円形	0.27 × 0.22 × 0.10	黒褐色土		
2	C2	楕円形	0.32 × 0.26 × 0.18	黒褐色土		
3	B2	円形	0.20 × 0.20 × 0.08	黒褐色土		
4	D1	円形	0.21 × 0.20 × 0.11	黒褐色土		
5	D2	円形	0.20 × 0.20 × 0.07	褐色土		
6	D2	円形	0.19 × 0.19 × 0.08	褐色土		
7	C3	楕円形	0.26 × 0.21 × 0.12	黒褐色土		
8	C3	円形	0.29 × 0.28 × 0.22	黒褐色土		
9	E3	円形	0.13 × 0.13 × 0.06	褐色土		
10	E3	円形	0.10 × 0.10 × 0.06	黒褐色土		
11	E3	円形	0.24 × 0.23 × 0.21	黒褐色土	弥生	
12	E3	円形	0.12 × 0.12 × 0.06	黒褐色土		
13	E3	円形	0.18 × 0.18 × 0.10	黒褐色土		
14	E3	円形	0.15 × 0.14 × 0.16	黒褐色土		
15	C4	円形	0.15 × 0.14 × 0.06	黒褐色土		
16	C4	円形	0.20 × 0.20 × 0.16	黒褐色土		
17	C4	円形	0.32 × 0.30 × 0.14	黒褐色土		
18	C4	円形	0.40 × 0.40 × 0.22	黒褐色土		
19	C4・5	円形	0.30 × 0.30 × 0.26	黒褐色土	弥生	
20	C4・5	円形	0.22 × 0.21 × 0.16	黒褐色土		
21	C4	楕円形	0.26 × 0.20 × 0.06	黒褐色土		
22	C4	円形	0.38 × 0.37 × 0.14	黒褐色土		
23	C4	円形	0.31 × 0.30 × 0.25	黒褐色土		
24	B・C5	円形	0.32 × 0.31 × 0.28	黒褐色土	弥生	
25	C5	円形	0.24 × 0.24 × 0.17	黒褐色土		
26	C5	円形	0.21 × 0.20 × 0.08	褐色土		
27	C5	円形	0.20 × 0.20 × 0.16	褐色土	弥生	
28	C5	円形	0.26 × 0.25 × 0.19	褐色土		SD2を切る
29	C4	円形	0.19 × 0.18 × 0.10	褐色土		
30	E4	円形	0.20 × 0.20 × 0.19	黒褐色土		
31	E5	円形	0.24 × 0.23 × 0.19	黒褐色土		
32	E5	円形	0.22 × 0.21 × 0.18	黒褐色土		

釜ノ口遺跡9次調査

柱穴一覧

(2)

柱穴 (S P)	地 区	平面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	備 考
33	E5	楕円形	0.42 × 0.36 × 0.26	黒褐色土	弥生	
34	D・E6	円形	0.20 × 0.18 × 0.30	黒褐色土	弥生	
35	D6	円形	0.22 × 0.22 × 0.26	黒褐色土	弥生	
36	E6	円形	0.18 × 0.18 × 0.08	褐色土		
37	E6	円形	0.29 × 0.28 × 0.09	褐色土		
38	E6	円形	0.30 × 0.29 × 0.18	黒褐色土		
39	E6	円形	0.18 × 0.18 × 0.09	褐色土		
40	E7	円形	0.20 × 0.20 × 0.11	褐色土		
41	D7	円形	0.40 × 0.38 × 0.22	黒褐色土		
42	E7	円形	0.22 × 0.21 × 0.13	褐色土		
43	D7	円形	0.16 × 0.15 × 0.11	褐色土		SD1 を切る
44	D7	円形	0.11 × 0.11 × 0.10	褐色土		
45	D7	円形	0.30 × 0.30 × 0.22	黒褐色土		
46	D7	円形	0.29 × 0.28 × 0.26	黒褐色土	弥生	
47	D6	円形	0.35 × 0.35 × 0.22	黒褐色土	弥生	
48	D6	円形	0.20 × 0.20 × 0.11	褐色土		SD4 を切る
49	D6	円形	0.23 × 0.22 × 0.20	黒褐色土	弥生	
50	C6	円形	0.25 × 0.25 × 0.25	黒褐色土		
51	C6	円形	0.22 × 0.22 × 0.20	黒褐色土		
52	C6	円形	0.21 × 0.20 × 0.16	黒褐色土		
53	C6	円形	0.22 × 0.21 × 0.19	黒褐色土	弥生	
54	C6	円形	0.17 × 0.16 × 0.08	黒褐色土		
55	C6	円形	0.20 × 0.20 × 0.11	黒褐色土		
56	C6	円形	0.18 × 0.17 × 0.06	黒褐色土		SD4 底面検出
57	C7	円形	0.18 × 0.18 × 0.10	黒褐色土		
58	C6	円形	0.19 × 0.18 × 0.10	褐色土		
59	C7	円形	0.20 × 0.20 × 0.11	黒褐色土		
60	C6	円形	0.22 × 0.21 × 0.12	褐色土		
61	C7	楕円形	0.40 × 0.32 × 0.22	黒褐色土	弥生	
62	B8	円形	0.12 × 0.11 × 0.06	褐色土		
63	B8	円形	0.17 × 0.16 × 0.08	褐色土		
64	C8	円形	0.17 × 0.17 × 0.06	褐色土		
65	C7・8	楕円形	0.26 × 0.20 × 0.12	黒褐色土		
66	C7	円形	0.20 × 0.20 × 0.10	褐色土		
67	D8	円形	0.16 × 0.15 × 0.09	黒褐色土		
68	C8	円形	0.15 × 0.15 × 0.08	黒褐色土		
69	D3	円形	0.17 × 0.17 × 0.11	褐色土		SD3 を切る
70	F3	楕円形	0.41 × 0.33 × 0.20	褐色土	弥生	SD3 を切る
71	E3	円形	0.55 × 0.52 × 0.10	黒色土		
72	D5	円形	0.15 × 0.15 × 0.09	褐色土		SD3 を切る
73	B6	円形	0.16 × 0.15 × 0.11	褐色土		SD3 を切る
74	D3	楕円形	0.18 × 0.12 × 0.04	黒色土		
75	D6	円形	0.17 × 0.17 × 0.16	褐色土	弥生	SD5 を切る
76	D5	楕円形	0.59 × 0.56 × 0.26	黒褐色土	弥生	
77	D・E6	円形	0.23 × 0.23 × 0.22	黒褐色土	弥生	
78	D6	円形	0.19 × 0.18 × 0.08	黒褐色土		
79	D6	円形	0.16 × 0.16 × 0.04	黒色土		
80	D6	円形	0.20 × 0.20 × 0.10	黒褐色土		
81	E7	円形	0.22 × 0.22 × 0.22	黒褐色土		
82	D6	円形	0.28 × 0.27 × 0.20	黒褐色土	弥生	
83	D6	円形	0.33 × 0.31 × 0.18	褐色土		SD1 を切る
84	D5	楕円形	0.80 × 0.70 × 0.23	褐色土		SD3 を切る

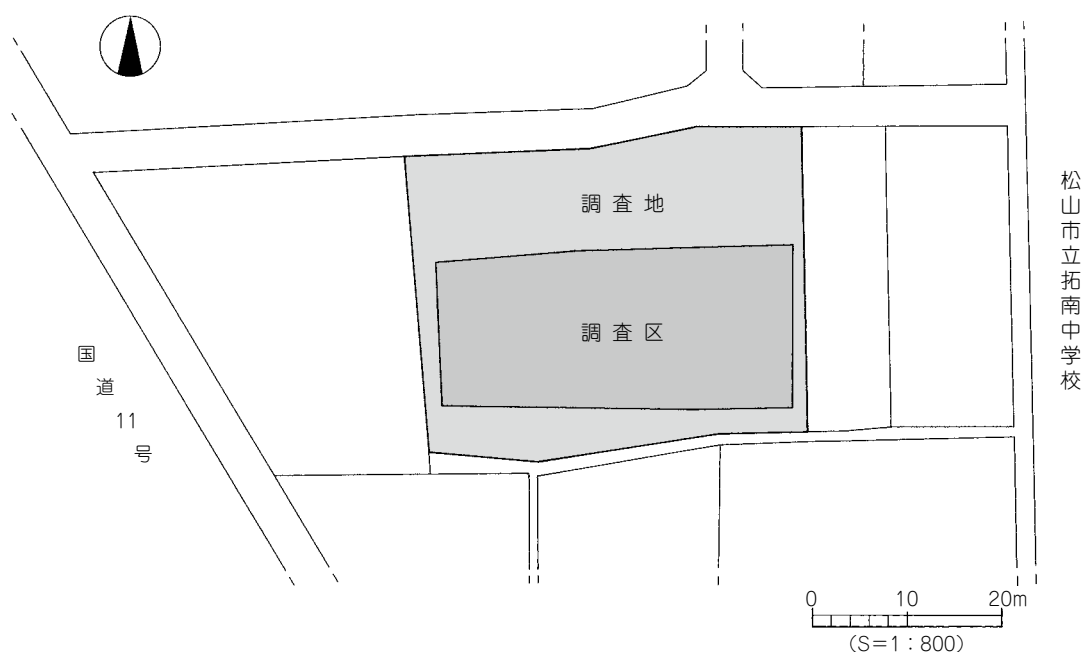
第3章 釜ノ口遺跡 10次調査

第1節 調査の経緯

1998(平成10)年5月、岡田サチエ氏、紀之内サトル氏、岡田茂氏より松山市小坂四丁目39番1・40番・41番1内における宅地開発にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願が松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。申請地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『No.113 枝松五丁目遺物包含地』内にあり、弥生時代後期の集落地帯として知られている。釜ノ口遺跡は、現在までに9度の調査が実施され、竪穴建物12棟、土坑6基、溝13条等が検出されている。このうち、弥生時代の竪穴建物には主柱の基部や礎板を検出するものがあり、竪穴住居の構造研究に関して良好な資料を得ている。また、土坑内からは木製品や種子が検出されており、松山平野では数少ない出土事例となっている。

これらのことから、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター(以下、埋文センター)は申請地内における埋蔵文化財の有無と遺跡の範囲や性格を確認するため、1999(平成11)年8月30日と31日の二日間で試掘調査を実施することとなった。調査の結果、竪穴建物や溝、土坑、柱穴を検出し、遺物は弥生土器が出土した。

この結果を受け、文化教育課と申請者の両者は遺跡の取り扱いについて協議を重ね、宅地開発によって消失する遺跡に対し、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は弥生時代後期の集落構造解明を主目的とし、文化教育課の指導のもと埋文センターが主体となり、2000(平成12)年4月10日より本格調査を開始した。



第40図 調査地測量図

第 2 節 層 位 (第 42・43 図)

調査地は、松山平野南東部、標高 27.6m に立地する。調査で確認した土層は、以下の八種類（第 I ～第 VIII 層）である。

第 I 層：造成土で、調査地南東部を除くほぼ全域にみられ、層厚 15 ～ 60cm を測る。

第 II 層：灰色土で、層厚 3 ～ 50cm を測る。近現代の耕作土で、ほぼ調査地全域で検出した。

第 III 層：黄褐色土（床土）で、層厚 5 ～ 25cm を測る。調査地南東部の一部を除くほぼ全域で検出した。

第 IV 層：暗褐色土で、土質の違いにより二層に分層される。

第 IV①層：暗褐色土に褐色土と黒色土が混入するもので、層厚 5 ～ 25cm を測る。調査地南西部で検出した。

第 IV②層：暗褐色土に褐色土が混入するもので、層厚 2 ～ 30cm を測る。調査地南東部～南側中央部、南西部の一部で検出した。

第 V 層：黒色粘質土で、層厚 3 ～ 30cm を測る。調査地中央部西側の一部と南西部の一部を除く地域で検出した。なお、本層上面にて堅穴建物や溝、土坑、柱穴を検出した。

第 VI 層：褐色～茶褐色粘質土で、土色の違いにより二層に分層される。本層上面にて溝や土坑、柱穴を検出した。

第 VI①層：茶褐色粘質土で、層厚 5 ～ 30cm を測る。調査地西側中央部～南西部、南側中央部で検出した。

第 VI②層：褐色粘質土で、層厚 3 ～ 20cm を測る。調査地南東部～南側中央部で検出した。

第 VII 層：暗茶褐色粘質土で、土質の違いにより二層に分層される。

第 VII①層：粘性の強い暗茶褐色粘質土で、層厚 10 ～ 30cm を測る。調査地南東部～南側中央部で検出した。

第 VII②層：暗茶褐色粘質土に砂が混入するもので、層厚 3 ～ 25cm を測る。調査地西側全域、南東部の一部と南側中央部で検出した。本層上面にて、溝や柱穴を検出した。

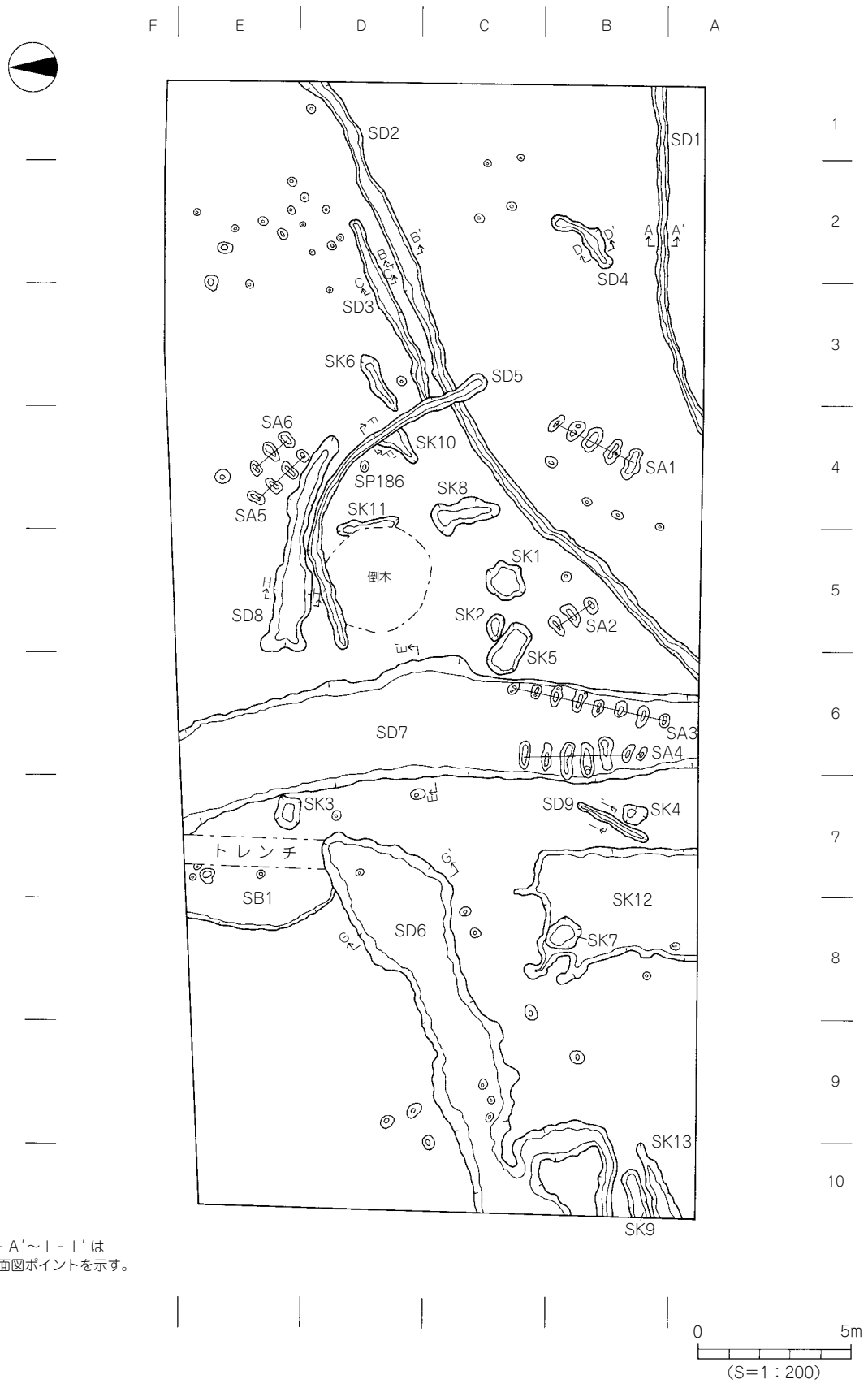
第 VIII 層：黄色粘質土で、土質の違いにより二層に分層される。なお、本層は AT 火山灰層である。

第 VIII①層：粘性の強い黄色粘質土で、層厚 5 ～ 30cm を測る。調査地南東部～南側中央部で検出した。

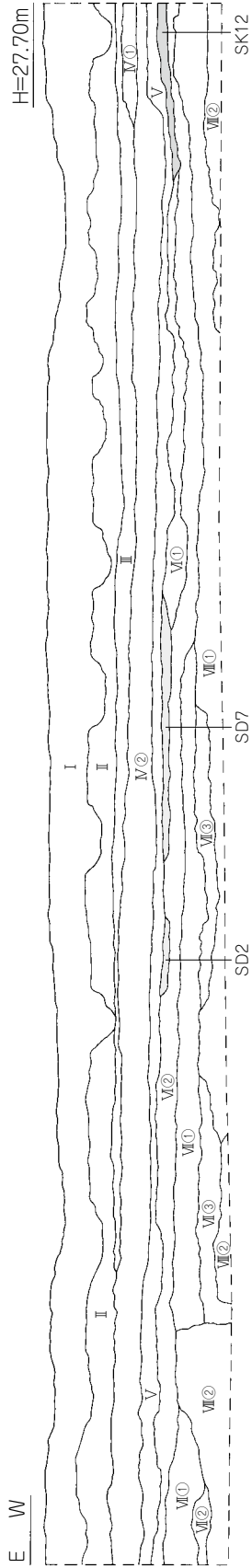
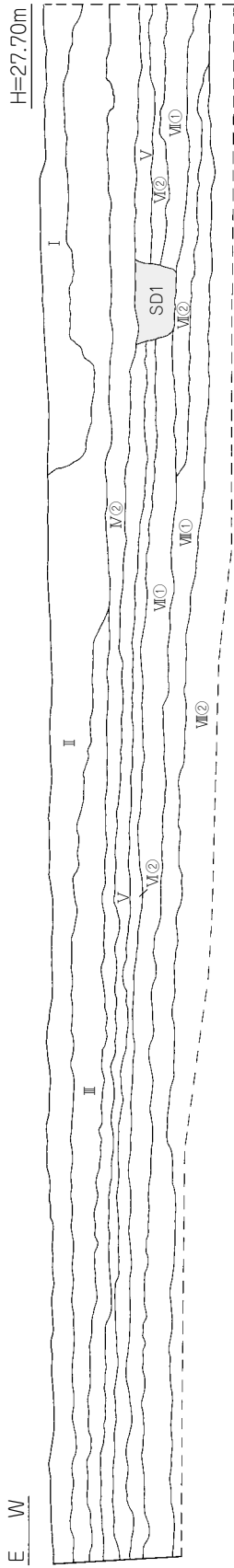
第 VIII②層：黄色粘質土に小礫が混入するもので、層厚 3 ～ 50cm を測る。調査地南東部と南西部で検出した。

検出した遺構や出土遺物より、第 VI 層は弥生時代、第 V 層は古墳時代までに堆積したものと推測される。なお、調査にあたり調査地内を 4m 四方のグリッドに分けた。グリッドは南から北へ A・B・C・D・E・F、東から西へ 1・2……10 とし、A1・A2……F10 といったグリッド名を付けた。グリッドは、遺構の位置表示や遺物の取り上げに利用した。

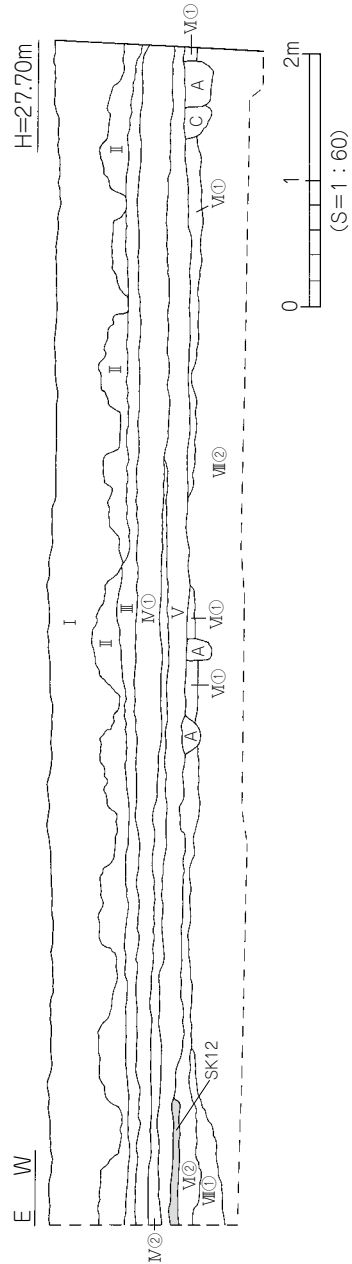
層位



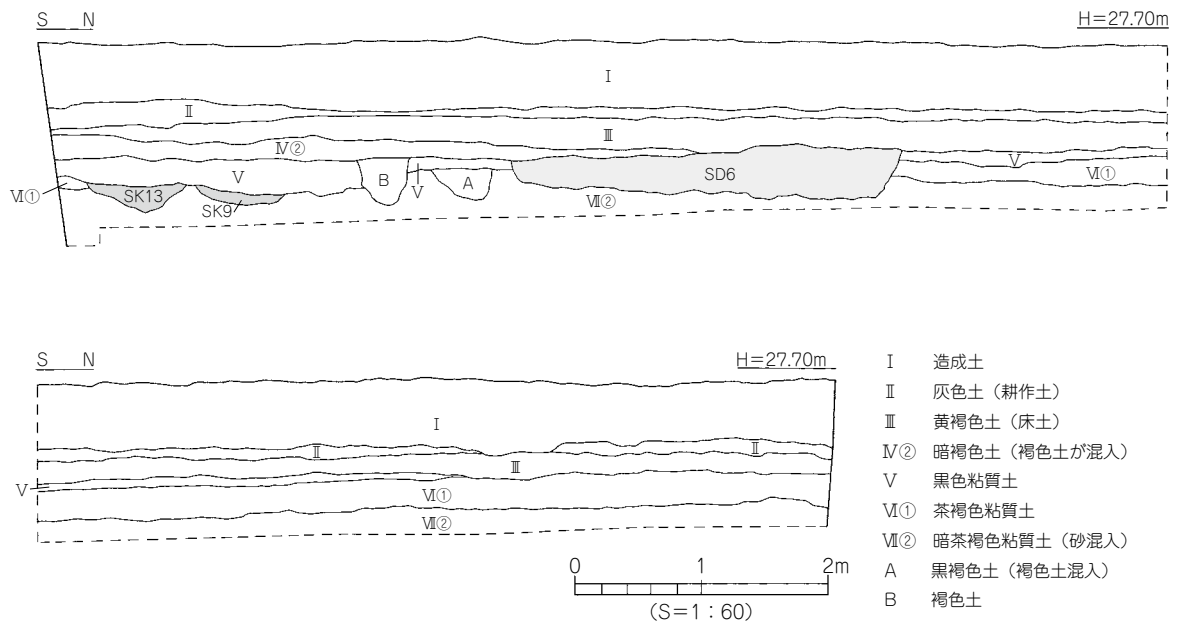
第41図 遺構配置図



- I 造成土
- II 灰色土 (耕作土)
- III 黄褐色土 (床土)
- IV(1) 暗褐色土 (褐色土と黒色土が混入)
- IV(2) 暗褐色土 (褐色土が混入)
- V 黒色粘質土
- VI(1) 茶褐色粘質土
- VI(2) 褐色粘質土
- VI(1) 暗茶褐色粘質土
- VI(2) 暗茶褐色粘質土 (砂混入)
- VI(1) 黄色粘質土
- VI(2) 黄色粘質土 (小礫混入) } AT火山灰
- A 黒褐色土 (褐色土混入)
- C 黒褐色土



第 42 図 南壁土層図



第43図 西壁土層図

第3節 遺構と遺物

本調査では、弥生時代から古墳時代の遺構と遺物を確認した。検出した遺構は竪穴建物1棟、溝9条、土坑13基、柵列6列、柱穴83基、倒木1基である。

1. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、竪穴建物1棟(SB1)、溝4条(SD1～3・7)、土坑8基(SK1～3・5・8・9・11・13)、柵列6基(SA1～6)、倒木1基を検出し、遺物は弥生土器と石器が出土した。

(1) 竪穴建物

SB1 (第41・44図、図版19)

調査区北西部D7～E8区で検出した建物で、建物東半部は試掘トレンチによって削平され、南側は溝SD6(古墳時代)に一部削平され、北側は調査区外に続く。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長4.68m、東西検出長1.95m、壁高は17～28cmを測る。床面には貼床が施されており、貼床の厚さは10cmを測る。床面は比較的硬く平坦である。埋土は三層に分層され、1層は黒褐色粘質土、2層は黒褐色粘質土(黄色土と砂がブロック状に混入)、3層は黒褐色土(褐色土がブロック状に混入)である。なお、3層は検出状況から建物床面修築のための貼床土と考えられる。

貼床上面からは4基の柱穴を検出したが、このうち2基の柱穴(SP①・④)は配置から支柱穴の可能性はある。なお、SP①からは炭化材の小片が出土している。また、建物南東部から北側の壁体沿いには幅15～20cm、深さ2～4cm程度の溝が巡っており、周壁溝と考えられる。

遺物は貼床上面から弥生土器片(甕形土器・壺形土器)のほか、炭化材や焼土が出土した。これらの状況から、SB1は火災による焼失住居の可能性はある。

出土遺物

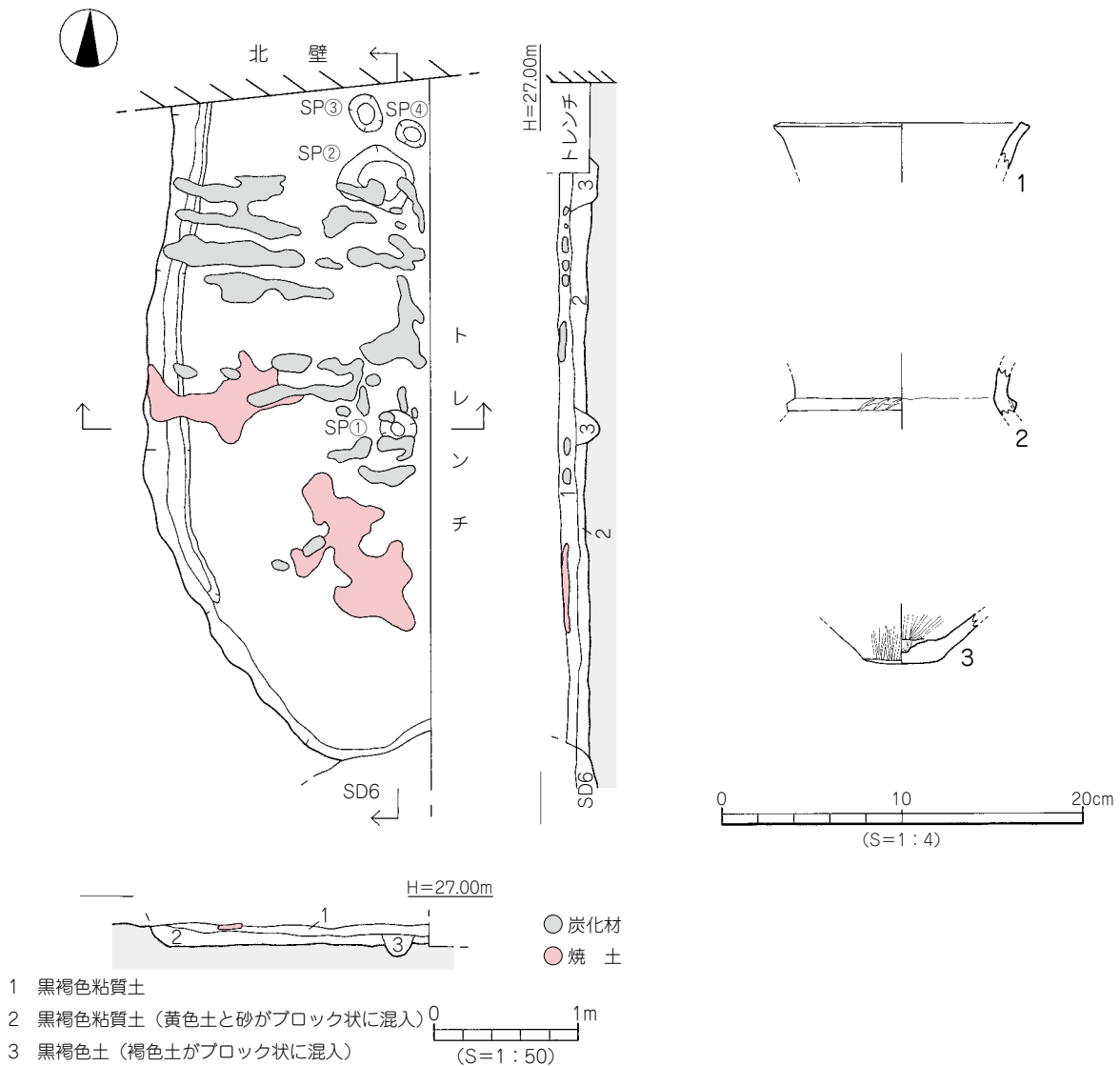
1 は壺形土器の口縁部小片で、口縁端部はナデ凹む。2 は壺形土器の頸部片で、断面三角形状の凸帯を貼り付け、凸帯上に刻目を施す。3 は壺形土器の底部で、外面にはタテ方向のヘラミガキ調整を施す。

時 期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、SB1 の廃棄・埋没時期は弥生時代後期前葉とする。

(2) 溝

SD1 (第 41・42・45 図、図版 19)

調査区南東部 A4～B1 区で検出した東西方向の溝で、溝の両端は調査区外に続き、溝上面は第 IV ②層が覆う。規模は検出長 11.50m、幅 0.35m、深さ 23cm を測る。断面形態は「U」字状を呈し、埋土は黒褐色粘質土単層である。遺物は埋土中より、完形品を含む弥生土器が出土した。



第 44 図 SB1 測量図・出土遺物実測図

出土遺物（第46図、図版21）

4～6は甕形土器。口縁部は「く」の字状を呈し、口縁端部は「コ」字状をなす。6の外面にはタテ方向のハケメ調整、内面は口縁部がハケメ調整、胴部はタテないしナメ方向のヘラケズリ調整を施す。7は壺形土器。口縁部は外反し、口縁端部は「コ」字状をなす。8・9は鉢形土器。8の口縁部は短く外反し、9の口縁端部は丸みをもつ面をなす。10は高坏形土器の完形品で、口径23.8cm、底径14.6cm、器高19.5cmを測る。口縁部は短く外反し、脚柱部には上下二段に径1.3cm大の円孔を4箇所につ。坏脚部の接合は、充填技法による。11は蓋形土器。口縁部の一部を欠損するものの、ほぼ完形品で、口径15.1cm、器高10.6cmを測る。色調は橙褐色を呈し、内外面には指頭痕を顕著に残す。12は甕形土器、13は壺形土器の底部で平底となる。

時期：出土遺物の特徴より、SD1の埋没時期は弥生時代後期後葉とする。

SD2（第41・42・45図、図版21）

調査区東半部A6～E1区で検出した北東－南西方向に延びる溝で、中央部は溝SD5（古墳時代）に一部削平され溝両端は調査区外に続く。溝上面は、第V層が覆う。規模は検出長23.20m、幅0.60m、深さ7cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色粘質土単層である。遺物は弥生土器のほか、縄文時代の石器が出土した。

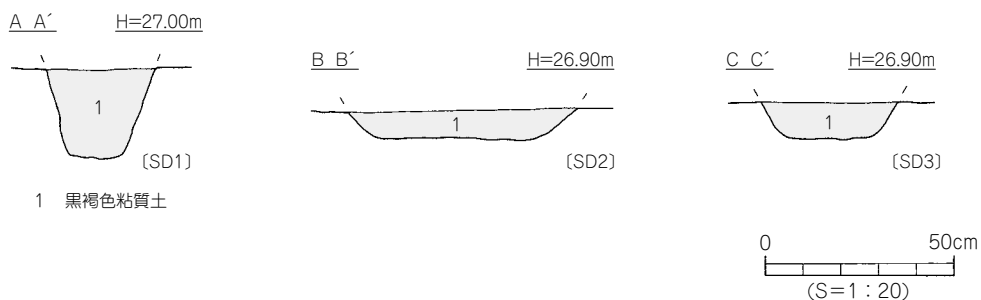
出土遺物（第47図）

14は甕形土器、15は複合口縁壺の口縁部片で、14の口縁端部は「コ」字状を呈し、15は尖り気味である。16～21は鉢形土器。16～18は口縁部が外反し、16の内外面にはヘラミガキ調整を施す。19・20は直口口縁で、20の外面には指頭痕が残る。21は脚付鉢で、脚部に径1.1cm大の円孔を4箇所につ。22～25は高坏形土器。22は柱部に径1.5cm大の円孔を穿ち、坏脚部の接合は充填技法による。23・24は脚柱部片で、23には径1.4cm大の円孔2個を看守する。25は脚裾部片で、径1.8cm大の円孔を穿つ。いずれも、外面にはヘラミガキ調整を施す。26・27は器台形土器、28～31は支脚形土器である。28は受部片で、指頭痕を顕著に残す。32は甕形土器、33は鉢形土器の底部で、32は平底、33は突出する上げ底を呈する。34は縄文時代晩期の抉りをもつ凹基無茎石鏃で、全面に敲打痕を残す。頁岩製。

時期：出土遺物の特徴より、SD2の埋没時期は弥生時代後期中葉とする。

SD3（第41・45図）

調査区北東部C3～D2区で検出した北東－南西方向に延びる溝で、溝西端部はSD5に削平されて



第45図 SD1～3断面図

いる。規模は検出長 6.30m、幅 0.60m、深さ 9cm を測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色粘質土単層である。遺物は、弥生土器の壺形土器片が 1 点出土した。

出土遺物 (第 47 図、図版 21)

35 は壺形土器の肩部片で、竹管文 5 個が列をなす。

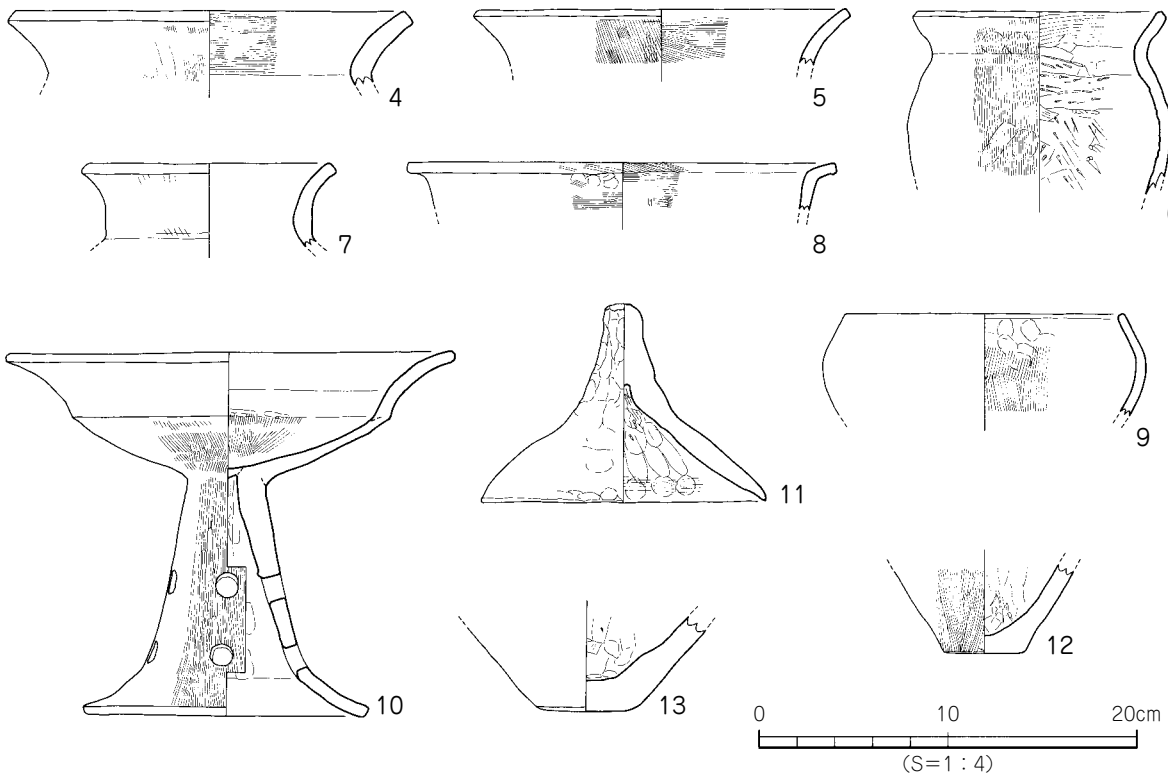
時期：出土遺物が僅少で時期特定は困難であるが、SD3 の埋没時期は弥生時代後期前葉としておく。

SD7 (第 41・42・48 図、図版 20)

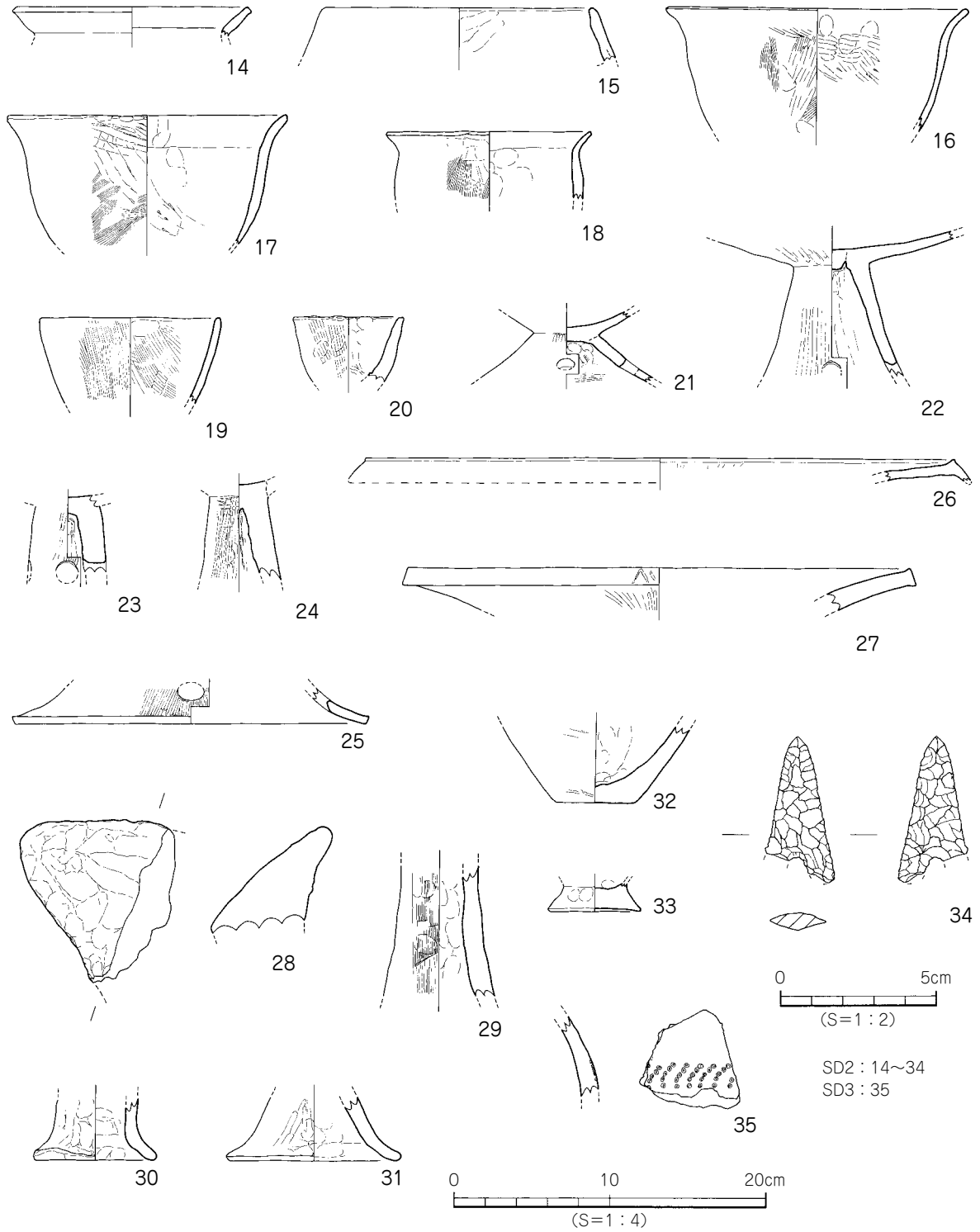
調査区中央部 A6～E7 区で検出した南北方向の溝で、溝東側上面は第 V 層が覆う。規模は検出長 17.00m、幅 3.80m、深さ 10cm を測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色粘質土 (少量の砂混入) である。遺物は弥生土器のほか、縄文土器や石器が出土した。

出土遺物 (第 49・50 図、図版 21・22)

36～39 は甕形土器。36～38 は「く」の字状口縁を呈し、器表面にはハケメ調整を施す。39 は土佐型甕で、口縁部には粘土帯を貼り付け、胎土中には砂粒のほか角閃石を少量含む。40～49 は壺形土器。40 は広口壺で、口縁部を上下方に拡張している。41～44 は複合口縁壺。43・44 は口縁部に櫛描波状文を施す。45 は長頸壺の頸部片で、頸部下に断面三角形の凸帯を貼り付ける。46～49 は頸～肩部片で、頸部に凸帯を貼り付け、46 は凸帯上に刻目、47 は斜格子目文、48 は斜線文を施す。なお、49 は凸帯下に刻目を施す。50～54 は甕形土器、55～61 は壺形土器の底部である。62・63 は鉢形土器。62 は大型品で、推定口径 36.4cm を測る。63 は脚付鉢で、脚部内外面には丁寧なヘラミガ



第 46 図 SD1 出土遺物実測図



第47図 SD2・SD3出土遺物実測図

キ調整を施す。64～69は高坏形土器。64は坏部片で、坏部下位に不明瞭な稜をもつ。65～69は脚部片で、径1.2～1.6cm大の円孔を穿つ。70～72は器台形土器で、口縁端面に櫛描沈線文を施す。73・74は支脚形土器。73は角状突起部で、指頭痕を顕著に残す。74は平面形態が台形状を呈し、台部上面は凹む。75は所謂コシキ形土器で、壺形土器の転用品であり、径0.9～1.7cm大の楕円形状の孔を穿つ（焼成後穿孔）。76は縄文時代晩期の深鉢で、口唇部より下がった位置に粘土紐を貼り付け、刻目を施す。77・78は緑色片岩製の石庖丁で、77は研磨段階に破損した未成品である。78は、側面に抉りをもつ。

時 期：出土遺物には時期幅が認められるが、SD7の埋没時期は弥生時代後期中葉とする。

(3) 土 坑

SK 1 (第 41・51 図、図版 20)

調査区中央部 C5 区で検出した土坑で、平面形態は不整円形を呈し、規模は径 1.18～1.25m、深さ 15cm を測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑西側には高さ 10cm 程度のテラス状の平坦部をもつ。埋土は二層に分層され、1 層は黒色粘質土、2 層は黒色粘質土と黄色土の混合層である。遺物は埋土中より、弥生土器片が散在して出土した。

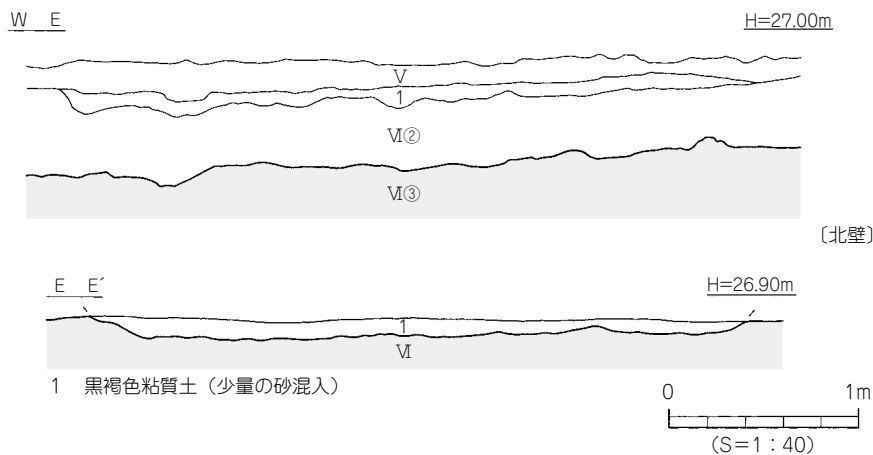
出土遺物 (第 52 図)

79は甕形土器。口縁部は外反し、口縁端面に凹線文1条を施す。80は広口壺の口縁部片、81・82は頸部片である。81の頸部には沈線文2条、82は刻目をもつ凸帯を貼り付ける。83は推定口径32.6cmを測る大型の鉢形土器で、口縁端部は上下方に拡張し、口縁端面に凹線文1条を施す。84・85は高坏形土器で、坏部下位に稜をもつ。86は甕形土器、87は鉢形土器の底部で平底をなす。

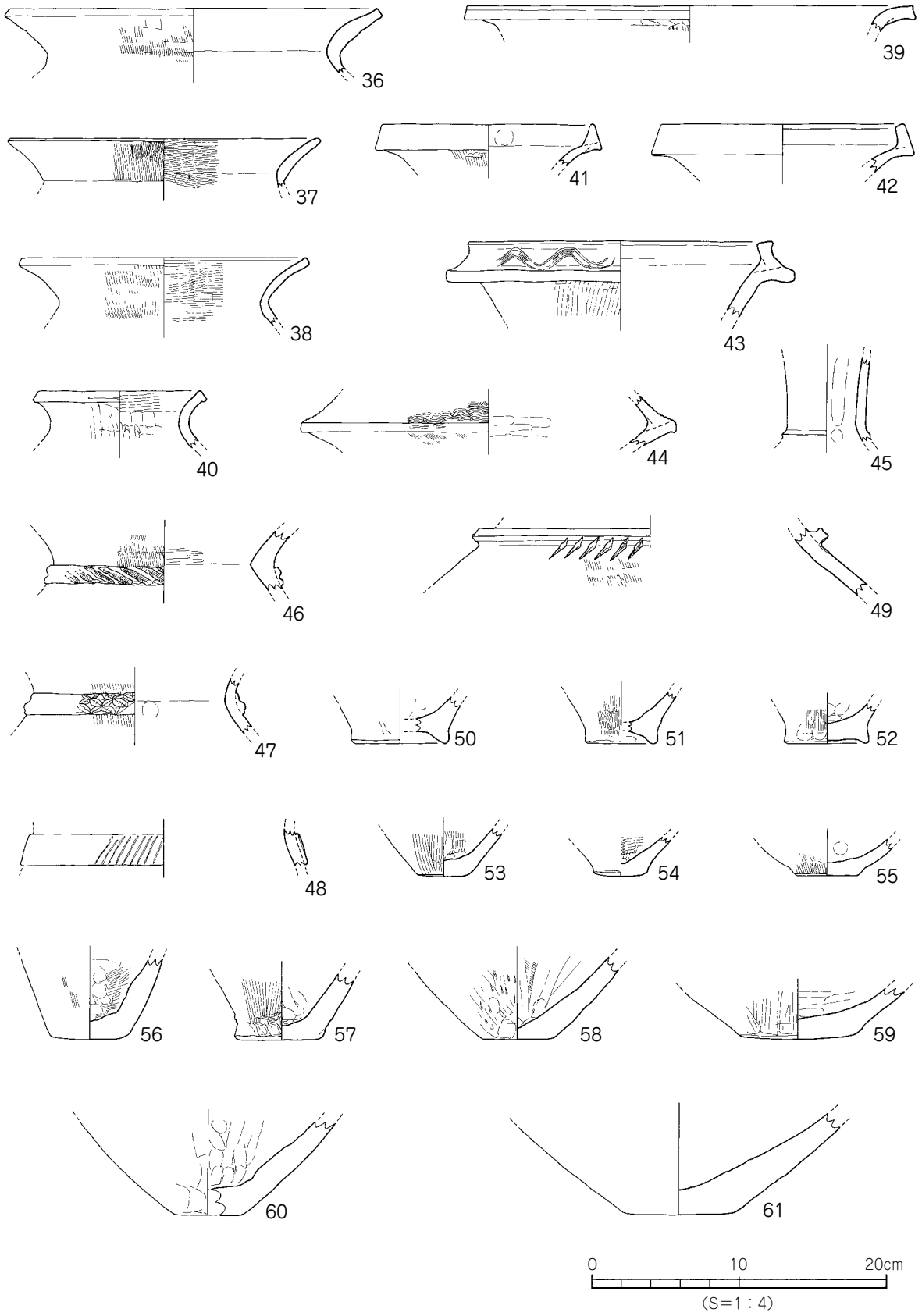
時 期：出土遺物の特徴より、SK1は弥生時代後期前葉とする。

SK 2 (第 41・51 図)

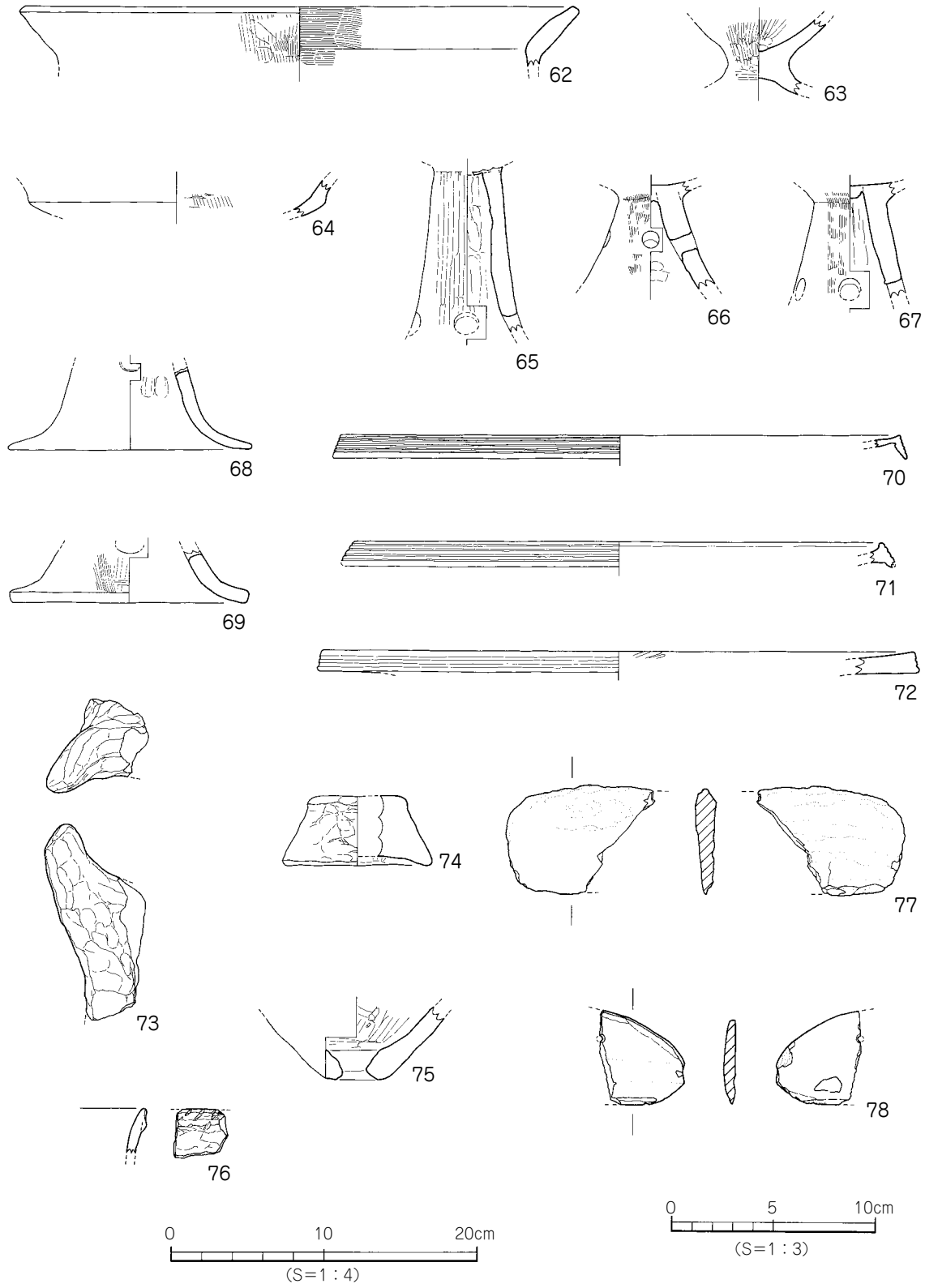
調査区中央部 C5 区で検出した土坑で、SK5 と一部重複している。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径 0.93m、短径 0.50m、深さ 10cm を測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒色粘質土単層である。遺物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。



第 48 図 SD 7 断面図



第 49 図 SD 7 出土遺物実測図 (1)



第 50 図 SD 7 出土遺物実測図 (2)

出土遺物 (第 52 図)

88 は「く」の字状口縁を呈する甕形土器で、口縁端部は先細りする。89 は複合口縁壺で、口縁端部は面をもつ。90 は高坏形土器の坏部片で、坏部下位に稜をもつ。91・92 は甕形土器の底部で、上げ底をなす。

時期：出土遺物の特徴より、SK2 は弥生時代後期前葉とする。

SK 3 (第 41・51 図、図版 20)

調査区中央部北西寄り D・E7 区で検出した土坑で、平面形態は楕円形を呈し、規模は長径 1.00m、短径 0.70m、深さ 18cm を測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑東側には高さ 15cm 程度のテラス状の平坦部をもつ。埋土は二層に分層され、埋土上位は黒褐色粘質土、土坑基底面付近には褐色粘質土が堆積する。遺物は埋土中より、弥生土器片が比較的多く出土した。

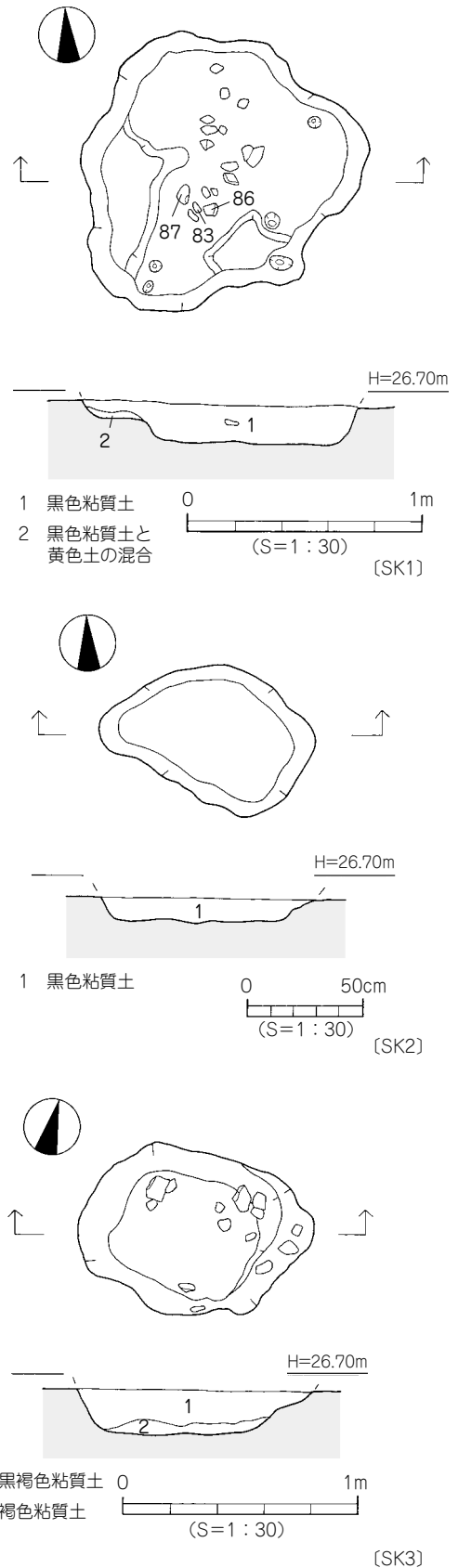
出土遺物 (第 52 図、図版 22)

93～95 は甕形土器。93 は口径 20.0cm、底径 5.1cm、器高 33.1cm を測る復元完形品で、口縁部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文 2 条を施す。底部は上げ底で、胴部外面には粗いハケメ調整、内面はタテ方向のヘラケズリ調整を施す。96・97 は壺形土器。96 は口縁部を上方に拡張し、口縁端面に凹線文 3 条を施す。97 は頸部片で、凸帯を貼り付け、凸帯下に刺突文と、その下部に 1 条の沈線を施す。98 は鉢形土器で、口縁部はわずかに外反する。99 は支脚形土器の脚部片で、内外面には指頭痕を顕著に残す。100・101 は壺形土器の底部で、100 の外面には線刻が見られる。

時期：出土遺物の特徴より、SK3 は弥生時代後期前葉とする。

SK 5 (第 41・53 図)

調査区中央部 C5・6 区で検出した土坑で、SK2 と一部重複している。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径 1.90m、短径 1.05m、深さ 10cm を測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑東側壁体は緩やかに立ち上がる。埋土は、黒褐色粘質土単層である。遺物は、弥生土器片が少量出土した。



第 51 図 SK 1～3 測量図

出土遺物

102 は「く」の字状口縁を呈する甕形土器で、口縁端部は「コ」字状をなす。103 は広口壺で、口縁端面に凹線文 3 条を施す。104 は複合口縁壺で、口縁端部は面をもつ。

時期：出土遺物の特徴より、SK5 は弥生時代後期前葉とする。

SK 8 (第 41・54 図)

調査区中央部東寄り C4・5 区で検出した土坑で、平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径 2.07m、短径 0.72m、深さ 10cm を測る。断面形態は壁体が緩やかに立ち上がる逆台形状を呈し、埋土は黒褐色粘質土単層である。遺物は埋土中より、弥生土器片が出土した。

出土遺物 (図版 22)

105 ～ 108 は壺形土器。105 は広口壺で、口縁端面に山形文を施す。106・107 は複合口縁壺で、106 の口縁部には楡描沈線文と波状文、107 は沈線文を施す。108 は頸部片で、刻目をもつ凸帯を貼り付ける。109 は甕形土器、110 は壺形土器の底部で上げ底をなす。

時期：出土遺物には時期幅が認められるが、SK8 は弥生時代後期中葉とする。

SK 11 (第 41・55 図)

調査区中央部東寄り D4・5 区で検出した土坑で、土坑西半部は倒木と重複する。平面形態は長楕円形を呈し、規模は南北長 2.00m、東西検出長 0.40m、深さ 10cm を測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色粘質土単層である。遺物は埋土中より、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物 (図版 22)

111 は甕形土器で口縁部は外反し、口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。内外面共に、ハケメ調整を施す。112 は複合口縁壺で、楡描沈線文と山形文を施す。113 は広口壺の口縁部片で、口縁端面に凹線文と竹管文、口縁上端面には竹管文を施す。114 は鉢形土器の底部で、突出部をもつ上げ底をなす。

時期：出土遺物の特徴より、SK11 は弥生時代後期後葉とする。

SK 9 (第 41・43 図)

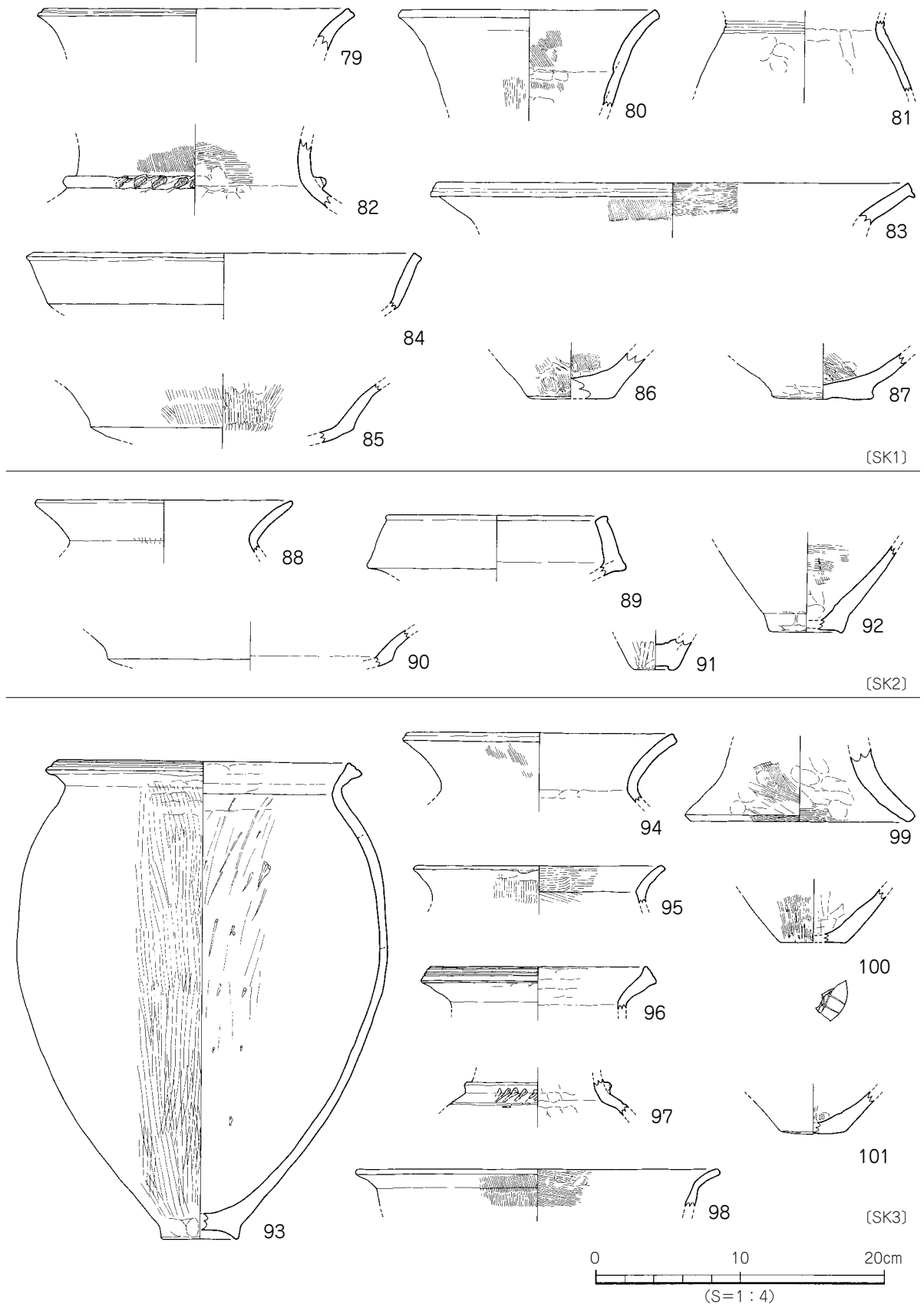
調査区南西部 B10 区で検出した土坑で、土坑西半部は調査区外に続く。土坑上面は、第 V 層が覆う。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長 1.50m、南北長 0.52m、深さ 10cm を測る。断面形態は浅い逆台形状を呈し、埋土は黒色粘土単層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出状況より概ね弥生時代後期の遺構とする。

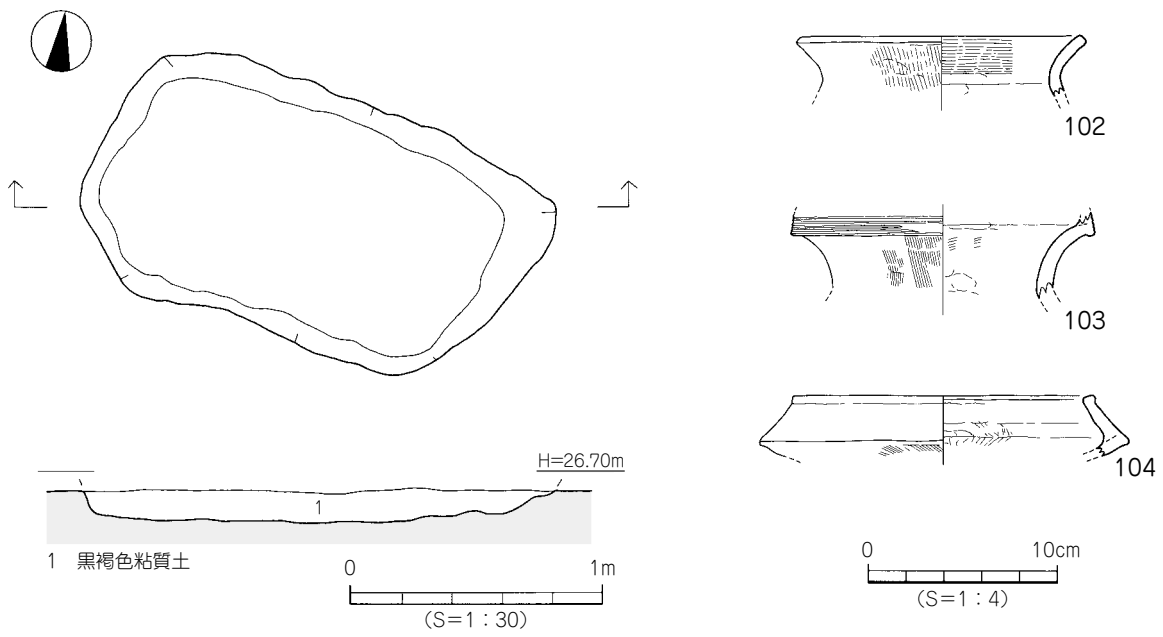
SK 13 (第 41・43 図)

調査区南西部 A・B10 区で検出した土坑で、土坑西半部は調査区外に続く。土坑上面は、第 V 層が覆う。平面形態は長楕円形を呈し、規模は東西検出長 2.70m、南北長 0.60m、深さ 20cm を測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒色粘土である。土坑内からは、遺物の出土はない。

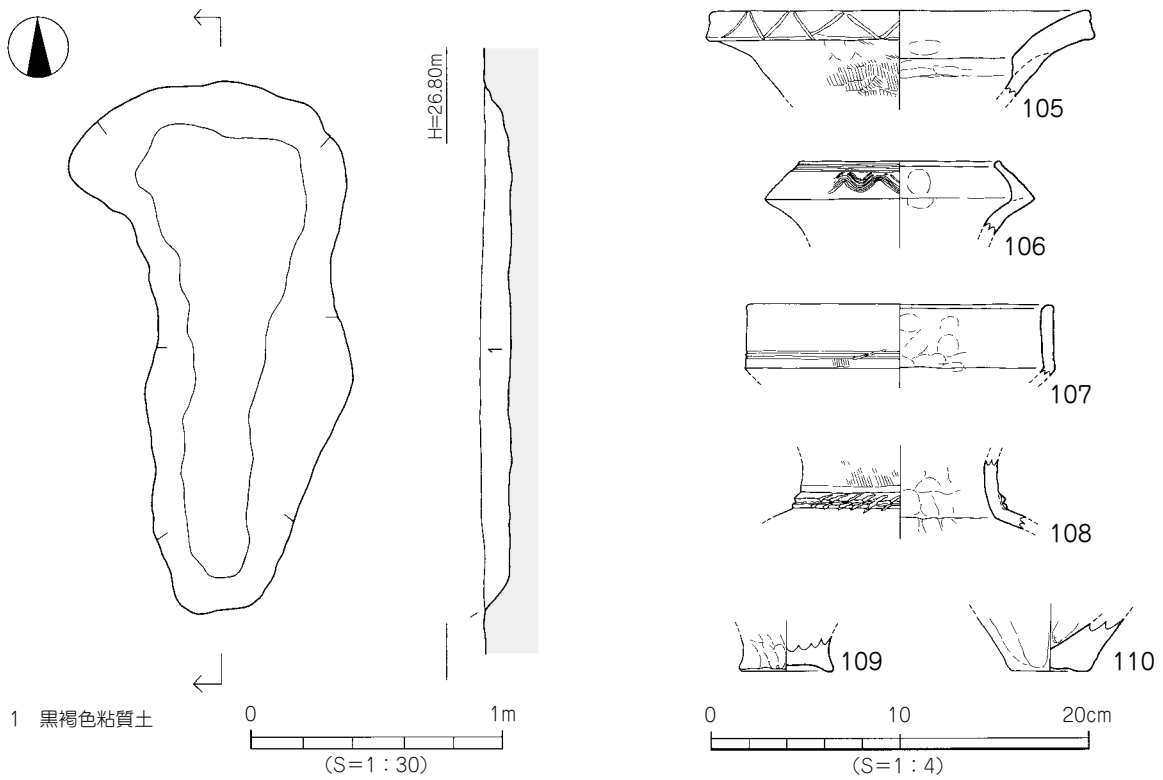
時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、検出状況より概ね弥生時代後期の遺構とする。



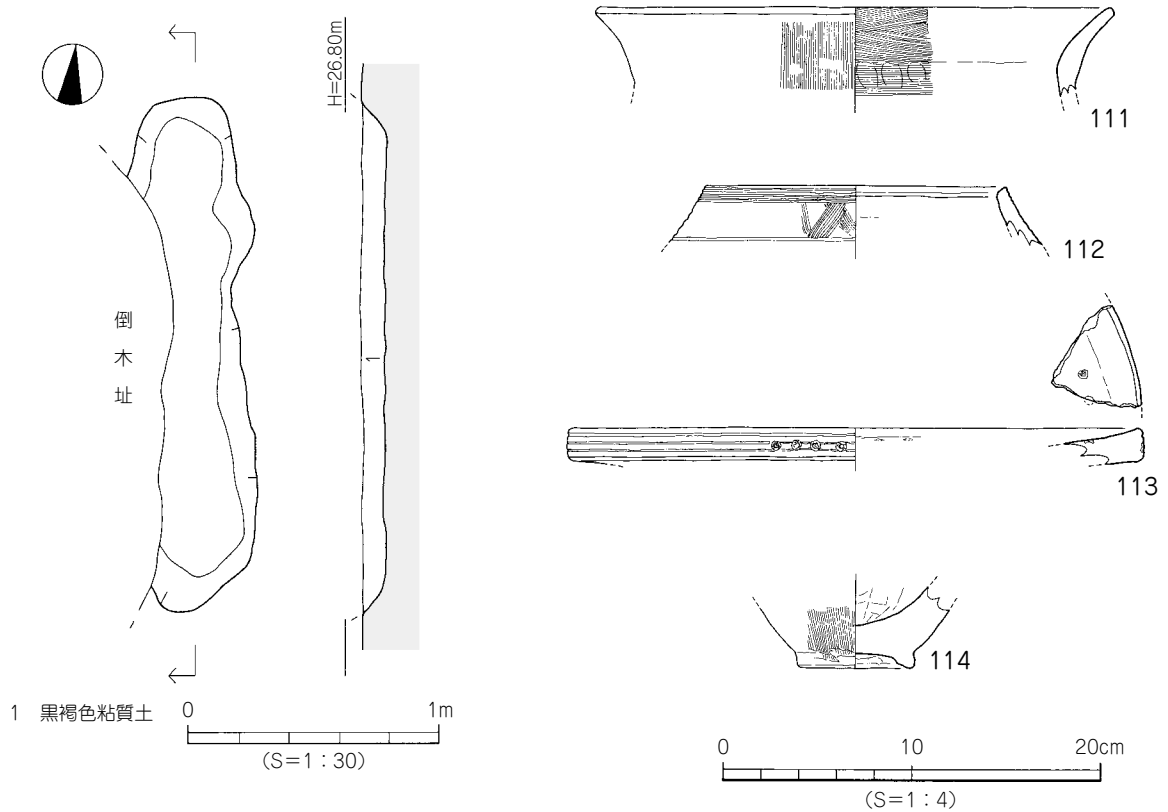
第 52 図 SK 1 ~ 3 出土遺物実測図



第 53 図 SK 5 測量図・出土遺物実測図



第 54 図 SK 8 測量図・出土遺物実測図



第 55 図 SK 11 測量図・出土遺物実測図

(4) 柵 列

SA 1 (第 41・56 図、図版 20)

調査区南東部 B4 区に位置する柵列で、5 基の柱穴からなり、検出長 3.10m を測る。各柱穴の平面形態は不整楕円形を呈し、規模は径 0.50～0.70m、深さ 4～8cm を測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色粘質土単層である。遺物は、弥生土器片が少量出土した。

SA 2 (第 41・56 図)

調査区中央部南寄り B5 区で検出した柵列で、3 基の柱穴からなり、規模は検出長 1.56m を測る。各柱穴の平面形態は不整楕円形を呈し、規模は径 0.33～0.50m、深さ 8～10cm を測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色粘質土単層である。柱穴内から、遺物は出土していない。

SA 3 (第 41・56 図)

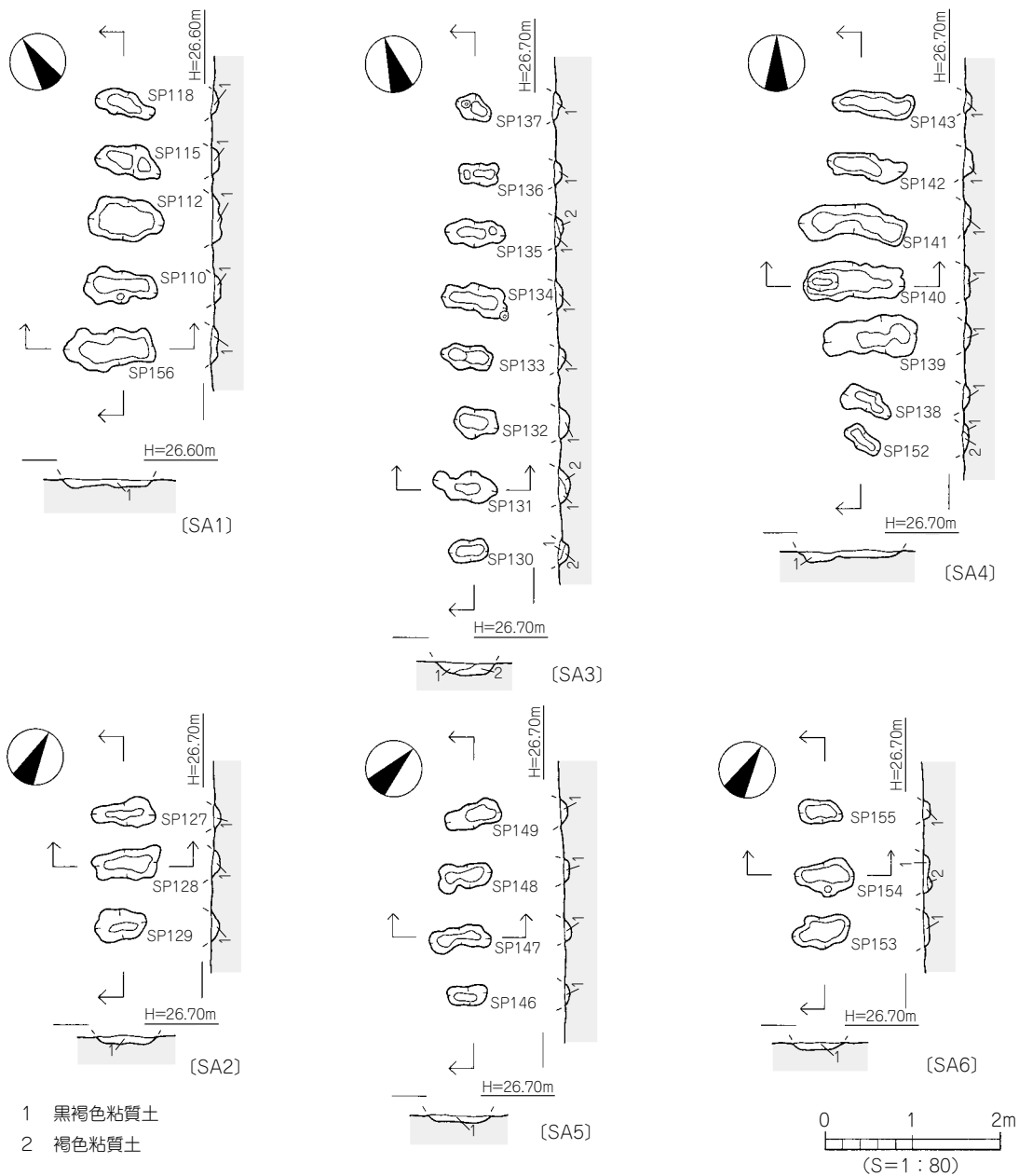
調査区中央部南寄り A6～C6 区に位置する柵列で、溝 SD7 掘り下げ後の基底面にて検出した遺構である。SA3 は 8 基の柱穴からなり、検出長 5.70m を測る。各柱穴の平面形態は不整楕円形を呈し、規模は径 0.32～0.53m、深さ 4～14cm を測る。柱穴掘り方埋土は黒褐色粘質土を基調とし、褐色粘質土が混入する柱穴もある。遺物は、弥生土器片が数点出土した。

S A 4 (第 41・56 図、図版 20)

調査区中央部南寄り B・C6 区に位置する柵列で、溝 SD7 掘り下げ後の基底面にて検出した遺構である。SA4 は 7 基の柱穴からなり、検出長 4.16m を測る。各柱穴の平面形態は不整楕円形を呈し、規模は径 0.31 ~ 0.79m、深さ 4 ~ 16cm を測る。柱穴掘り方埋土は黒褐色粘質土を基調とし、褐色粘質土が混入する柱穴もある。遺物は、弥生土器片が少量出土した。

S A 5 (第 41・56 図、図版 20)

調査区中央部北東寄り D・E4 区で検出した柵列で 4 基の柱穴からなり、検出長 2.26m を測る。各柱穴の平面形態は楕円形を呈し、規模は径 0.32 ~ 0.45m、深さ 5 ~ 10cm を測る。柱穴掘り方埋土は、

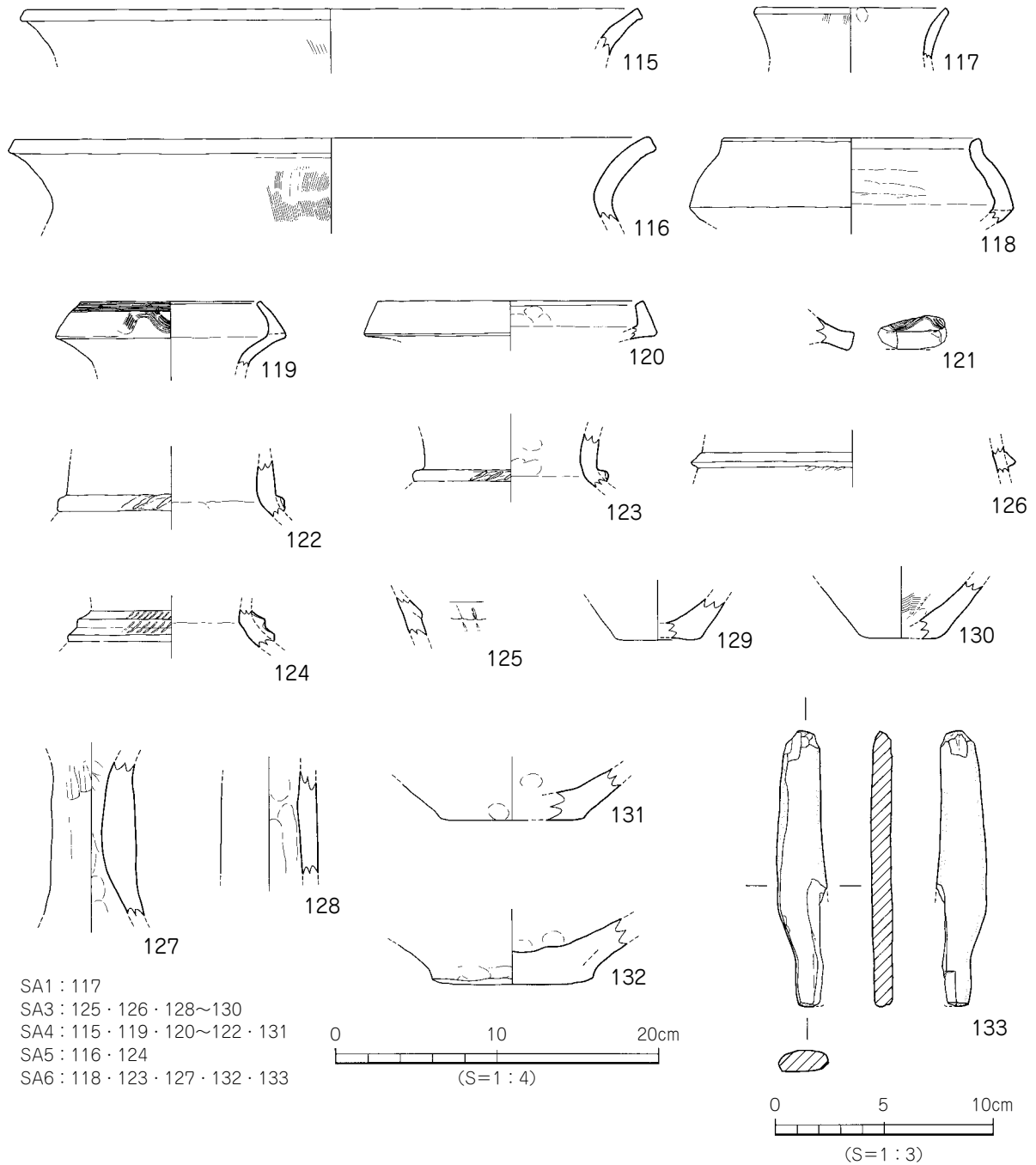


第 56 図 S A 1 ~ 6 測量図

黒褐色粘質土単層である。遺物は、弥生土器片が少量出土した。

SA 6 (第 41・56 図、図版 20)

調査区中央部北東寄り D・E4 区で検出した柵列で 3 基の柱穴からなり、検出長 1.70m を測る。各柱穴の平面形態は楕円形を呈し、規模は径 0.35～0.52m、深さ 4～10cm を測る。柱穴掘り方埋土黒褐色粘質土を基調とし、褐色粘質土が混入する柱穴がある。遺物は、弥生土器片や石器が出土した。



第 57 図 SA 1・3～6 出土遺物実測図

柵列出土遺物（第 57 図、図版 22）

117 は SA1、125・126・128～130 は SA3、115・119・120～122・131 は SA4、116・124 は SA5、その他は SA6 出土品。

115・116 は甕形土器または鉢形土器の口縁部片。外反口縁で、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。117～126 は壺形土器。117 は太頸壺で、口縁端部は「コ」字状をなす。118～121 は複合口縁壺で、118・119 の口縁部は内湾、120 は「く」の字状に屈曲する。119 は楡描沈線文と波状文、121 は波状文を施す。122～126 は頸部片で、122～125 は凸帯上に刻目、126 は凸帯下に刻目をもつ。127・128 は高坏形土器の脚柱部片、129・130 は甕形土器、131・132 は壺形土器の底部で、平底となる。133 は棒状の敲打具で、両端に敲打痕を残す。緑色片岩製。

時期：出土遺物の特徴より、SA3・4 は弥生時代後期後葉、SA5・6 は弥生時代後期前葉、SA1・2 は弥生時代後期とする。

2. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、溝 4 条（SD5・6・8・9）、土坑 4 基（SK6・7・10・12）があり、遺物は須恵器や土師器が出土した。

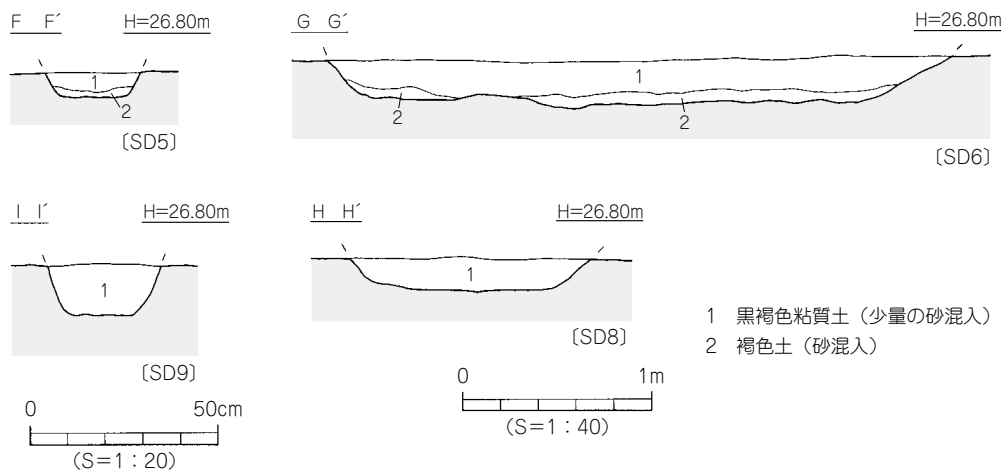
(1) 溝

SD5（第 41・58 図）

調査区中央部東寄り C3～D5 区で検出した東西方向に湾曲して延びる溝で、SD2 や SD3 及び SK10 に後出する。規模は検出長 11.60m、幅 0.50m、深さ 12cm を測る。断面形態は深さのある皿状を呈し、埋土は二層に分層され、上層は黒褐色粘質土（少量の砂混入）、下層が褐色土（砂混入）である。遺物は弥生土器や土師器、須恵器の破片が出土した。

出土遺物（第 59 図、図版 22）

134 は複合口縁壺で、口縁端部に刻目、口縁部に波状文を施す。135 は二重口縁壺で、口縁部はやや外反し、波状文 6 条以上を施す。136 は高坏形土器の口縁部片で、口縁端面に波状文を施す。137 は支脚形土器で、角状突起部の一部が欠損している。138 はミニチュア土器である。139・140 は須恵



第 58 図 SD5・6・8・9 断面図

器坏蓋の小片で丸みのある稜をもち、口縁端部は内傾する面をもつ。

時期：出土した須恵器の特徴より、SD5は6世紀前葉とする。

SD6（第41・43・58図）

調査区西側B10～D7区で検出した北東－南西方向の溝で、溝東端はSB1を切り、西側は調査区外に続く。溝上面は、第V層が覆う。規模は検出長14.00m、幅0.20～3.20m、深さ10～15cmを測る。断面形態は壁体が緩やかに立ち上がるレンズ状を呈し、埋土は二層に分層され、上層は黒褐色粘質土（少量の砂混入）、下層が褐色土（砂混入）である。遺物は、埋土中より弥生土器や須恵器の破片が少量出土した。

出土遺物（第59図）

141は弥生土器の壺形土器。頸部に断面三角形の凸帯2条を貼り付け、凸帯の上下に刺突文を施す。142・143は須恵器坏蓋。142は推定口径14cmを測り、口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。143は小片で、口縁部外面に刻目を施す。

時期：出土した須恵器の特徴より、SD6は6世紀後葉とする。

SD8（第41・58図）

調査区中央部東寄りD4～E5区で検出した東西方向の溝で、規模は検出長7.00m、幅1.30m、深さ15cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黒褐色粘質土（少量の砂混入）である。遺物は、埋土中より弥生土器や須恵器の破片が少量出土した。

出土遺物（第59図）

144は弥生土器の壺形土器。頸部片で、断面三角形の凸帯を貼り付ける。145は須恵器広口壺で、口縁下に凸線1条が巡り、頸部外面には回転カキメ調整を施す。

時期：出土した須恵器の特徴より、SD8は6世紀前葉とする。

SD9（第41・58図）

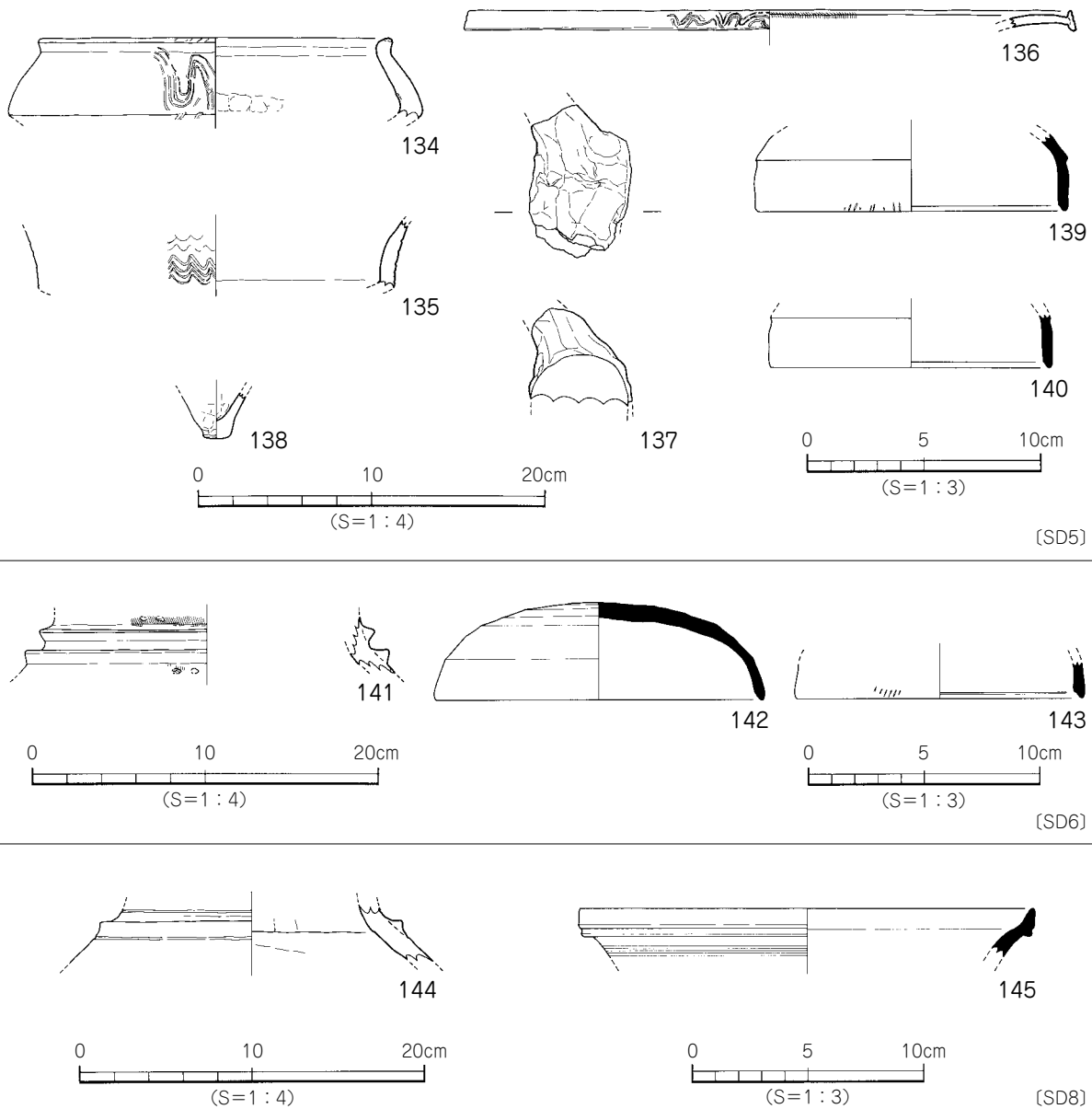
調査区中央部南西よりB7区で検出した南北方向の溝で、規模は検出長2.60m、幅0.60m、深さ28cmを測る。断面形態は「U」字状を呈し、埋土は黒褐色粘質土（少量の砂混入）である。溝内から、遺物は出土していない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、SD8と埋土が酷似することから、SD9の埋没時期は概ね古墳時代後期、6世紀前葉とする。

（2）土坑

SK6（第41・60図）

調査区中央部東寄りD3・4区で検出した土坑で、平面形態は長楕円形を呈し、規模は長径2.08m、短径0.48m、深さ12～18cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色粘質土単層である。遺物は、埋土中より土師器片や須恵器片が少量出土した。



第 59 図 SD 5・6・8 出土遺物実測図

出土遺物

146 は須恵器坏蓋。小片で推定口径 11.8cm を測る。断面三角形の鋭い稜をもち、口縁端部は内傾する。

時 期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、概ね 6 世紀前葉とする。

SK 7 (第 41・60 図)

調査区南西部 B8 区で検出した土坑で、SK12 と重複する。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径 1.25m、短径 1.00m、深さ 40cm を測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色粘質土単層で

ある。遺物は、埋土中より土師器片や須恵器片が数点出土した。

出土遺物

147 は須恵器有蓋高坏の蓋。つまみ径 3.4cm を測り、中央部が突出する。

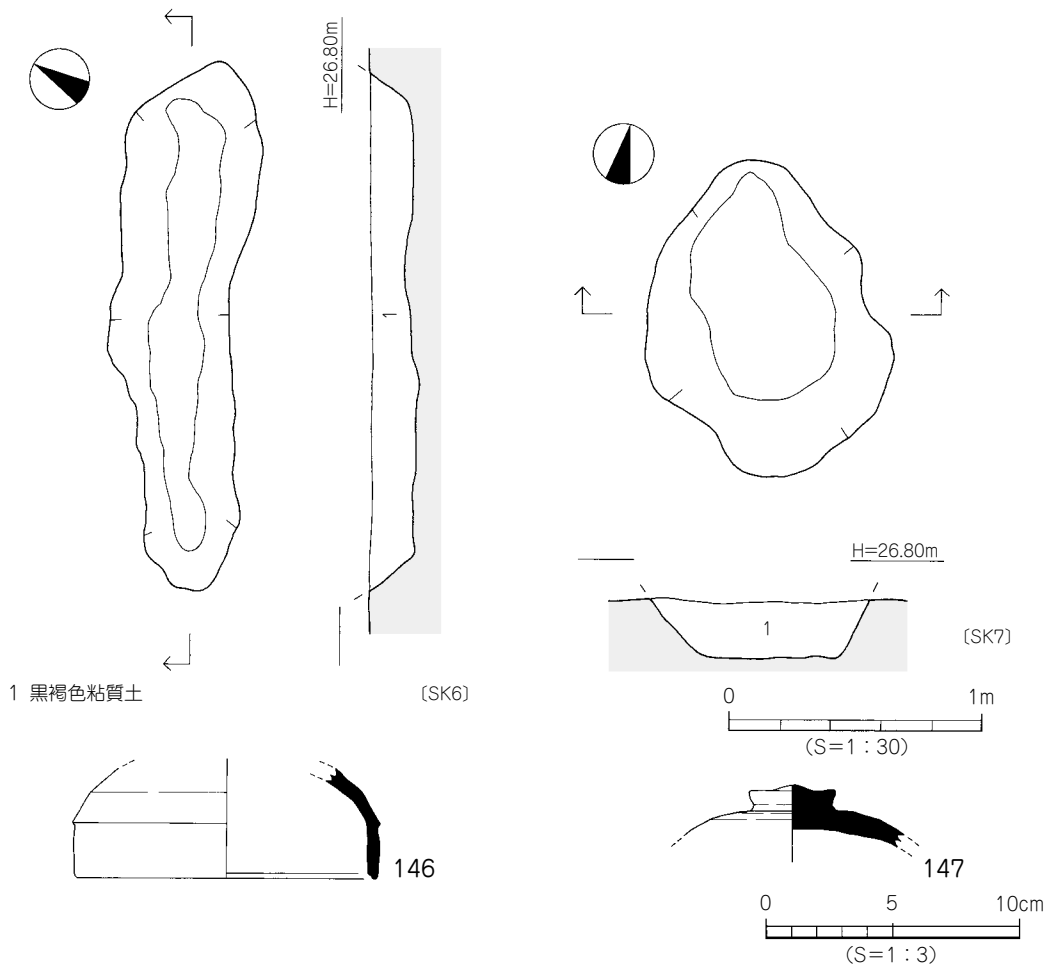
時 期：出土遺物が僅少で時期特定は困難であるが、概ね 6 世紀前葉とする。

S K 12 (第 41・42・61 図)

調査区南西部 A7～C8 区で検出した土坑で、SK7 と重複する。平面形態は不整長方形を呈し、規模は東西長 3.50m、南北検出長 5.85m、深さ 40～50cm を測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色粘質土（砂混入）である。遺物は埋土中より弥生土器や土師器、須恵器のほか、ガラス玉が出土した。

出土遺物 (図版 22)

148～152 は弥生土器。148 は甕形土器の口縁部片で、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。149 は広口壺で、口縁端面に凹線文 3 条を施す。150 は推定口径 32.4cm を測る大型の複合口縁壺で、櫛描波状文と山形文とが組み合う。151 は壺形土器の頸部片で、4 条の沈線文と二段の半截竹管文を施す。152 は支脚形土器で、台部上面は凹む。153 は須恵器有蓋高坏の蓋。口径 12.5cm を測り、つまみ中央部が凹む。154～156 はガラス小玉。154・155 は直径 4.0mm、厚さ 1.9mm、重さ 0.034g、156 は直径 3.9



第 60 図 S K 6・S K 7 測量図・出土遺物実測図

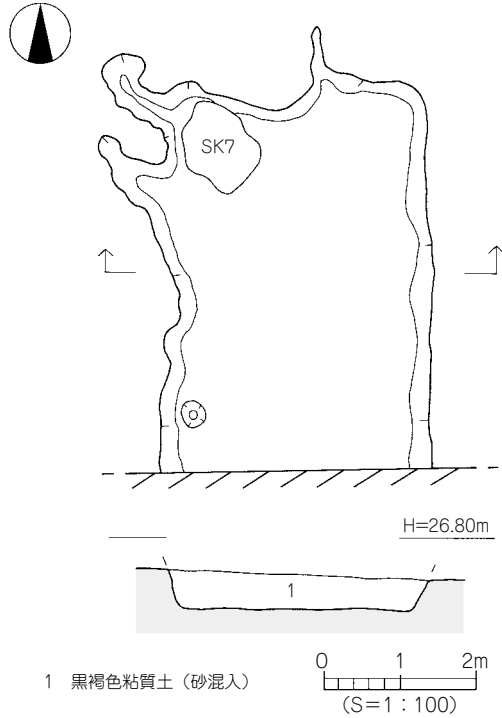
mm、厚さ 3.1mm、重さ 0.057g を測り、色調は紺色を呈する。

時 期：出土した須恵器の特徴より、SK12 は 6 世紀前葉とする。

S K 10 (第 41 図)

調査区中央部東寄り D4 区で検出した土坑で、土坑東側は溝 SD5 (6 世紀前葉) に削平されている。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は東西検出長 1.40m、南北長 0.70m、深さ 10cm を測る。断面形態は浅い逆台形状を呈し、埋土は黒褐色粘質土単層である。土坑内からは、遺物の出土はない。

時 期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、SD5 に先行することから、概ね 6 世紀前葉以前とする。



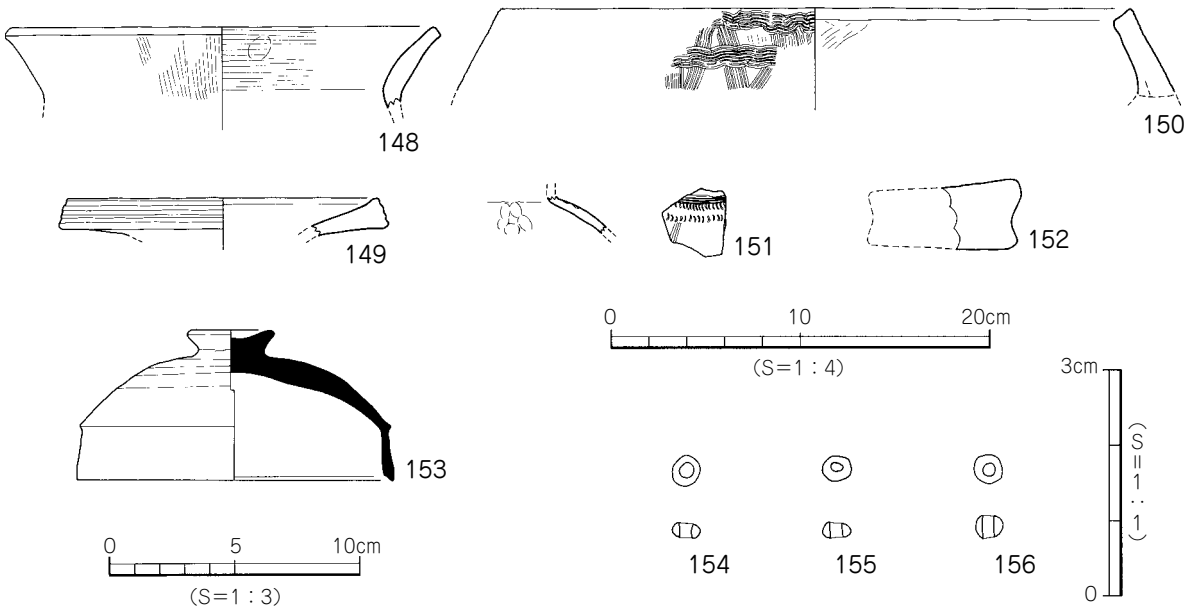
3. 時期不明の遺構と遺物

調査では遺構内からの出土遺物がなく、他の遺構との重複関係の認められない時期特定の困難な遺構(溝・土坑)がある。ここでは、時期不明の遺構として掲載する。

(1) 溝

S D 4 (第 41 図)

調査区南東部 B2 区で検出した北東-南西方向の短い溝で、規模は検出長 2.50m、幅 0.40m、深さ 8cm を測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒色粘土単層である。



第 61 図 S K 12 測量図・出土遺物実測図

(2) 土 坑

SK 4 (第 41 図)

調査区中央部南西寄り B7 区で検出した土坑で、平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径 0.90m、短径 0.60m、深さ 20cm を測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒色粘土単層である。

4. その他の遺構と遺物

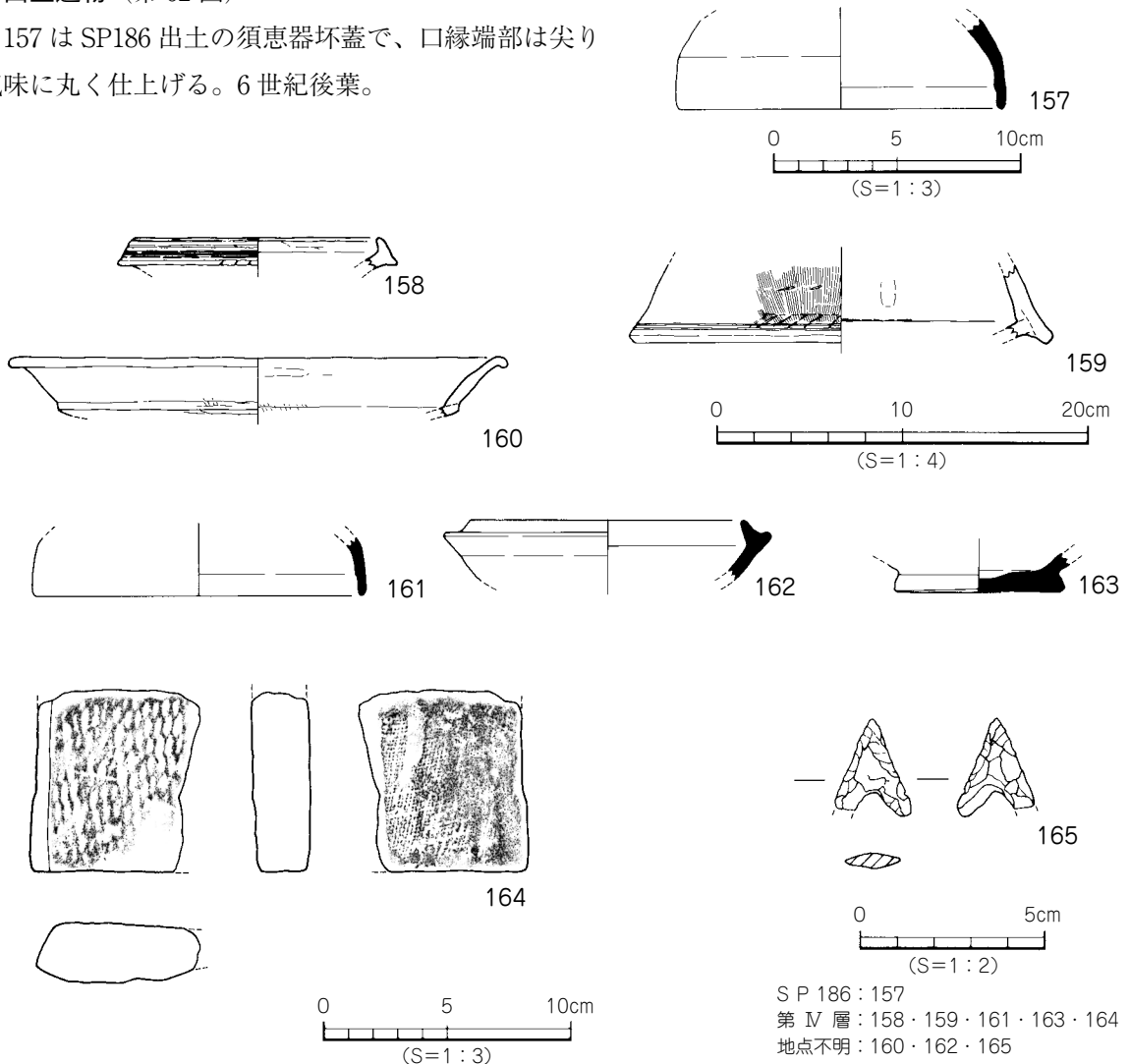
調査では、83 基の柱穴を検出した。このほか、包含層掘削時や重機掘削時に遺物が出土した。なお、これらの遺物は出土層位や出土地点が不明であるため、ここでは地点不明出土遺物として取り扱う。

(1) 柱 穴 (第 41 図)

調査では、83 基の柱穴 (柵列柱穴 27 基を含む) を検出した。柱穴掘り方埋土は四種類あり、①黒褐色粘質土、②黒色粘質土、③黒褐色粘質土 (褐色粘質土混入)、④黒色粘土である。このうち、埋土①の柱穴内からは須恵器片や土師器片が数点出土した。

出土遺物 (第 62 図)

157 は SP186 出土の須恵器坏蓋で、口縁端部は尖り気味に丸く仕上げる。6 世紀後葉。



第 62 図 柱穴・包含層・地点不明出土遺物実測図

(2) 包含層・地点不明出土遺物 (第 62 図、図版 22)

158・159・161・163・164 は第Ⅳ層、その他は地点不明出土品。158～160 は弥生土器。158 は弥生時代中期後葉の広口壺で、口縁端面に凹線文 5 条を施す。159 は弥生時代後期の複合口縁壺で、沈線文と刺突文を施す。160 は高坏形土器の口縁部片である。161～163 は須恵器。161 は坏蓋、162 は坏身である。6 世紀後葉。163 は円盤高台状の底部をもつ坏で、底部外面には回転糸切り痕を残す。12 世紀。164 は平瓦で、凸面に細縄叩き、凹面には布目痕を残す。色調は、灰黄色を呈する。9 世紀。165 は打製の凹基無茎石鏃で、基部を一部欠損している。サヌカイト製で、重量 1.16g を測る。

第 4 節 小 結

釜ノ口遺跡 10 次調査は、弥生時代集落の範囲や構造解明を主目的として行った。調査の結果、縄文時代から古墳時代までの遺構や遺物を確認した。

弥生時代後期中葉の溝 SD2 からは、縄文時代早期とされる石鏃が 1 点出土した。本遺跡が所在する小坂地区では釜ノ口遺跡 1 次調査にて同時期の石器 1 点が出土しているが、松山平野内でも該期の土器や石器が出土した事例は極めて少ない。また、SD2 と同時期の溝 SD7 からは縄文時代晩期の深鉢片が出土したが、小坂地区では該期の遺物の出土は初例となる。

弥生時代では、竪穴建物 1 棟と溝 4 条 (SD1～3・7)、土坑 8 基 (SK1～3・5・8・9・11・13)、柵列 6 基 (SA1～6) を検出した。このうち、SB1 は直径 4.6m 以上を測る円形建物で、周壁溝や支柱穴、貼床を検出した。遺物は貼床上面にて土器や石器のほかに炭化材や焼土を検出した。その状況から、SB1 は火災による焼失住居の可能性がある。これまでに実施した釜ノ口遺跡の調査では、6 次・7 次・8 次調査にて同様の焼失住居が検出されている。注目される遺構には、柵列がある。柵列は径 31～73cm、深さ 4～16cm を測る楕円形状の掘り方をもつ数基の柱穴で構成されており、弥生時代後期を通して段階的に構築されたものである。このほか、検出した 4 条の溝は SD3 が後期前葉、SD2・7 が後期中葉、SD1 が後期後葉に時期比定される。また、6 基の土坑のうち SK1～3・5 は後期前葉、SK8 は後期中葉、SK11 は後期後葉、SK9・13 は後期段階の遺構である。

古墳時代の遺構は、溝 4 条 (SD5・6・8・9) と土坑 4 基 (SK6・7・10・12) である。土坑はすべて古墳時代後期前葉に時期比定されるものであり、このうち SK12 からは紺色を呈するガラス小玉 3 点が出土している。一方、溝は SD6 が後期後葉、他の溝はすべて後期前葉頃の遺構である。いずれの溝も粘質土で埋没しているが、埋土中に少量の砂が含まれていることからわずかな水流が存在したものと推測される。釜ノ口遺跡 9 次調査でも後期後葉の溝が検出されており、小坂地区における古墳時代集落の様相や変遷、及び広がりを知るうえで今回の調査成果は貴重なものといえよう。

今回の調査では、小坂地区での弥生時代後期における居住域の範囲や、古墳時代集落の存在を推測される資料が得られた。今後は、小坂地区一帯での調査結果を検討し、弥生時代後期や古墳時代集落の構造を究明しなければならない。

遺構一覧 — 凡例 —

以下の表は、本調査地検出の遺構の計測値及び観察一覧である。記載内容は、以下のとおりである。

地区欄 グリッド名を記載。

規模欄 () : 検出値

埋土欄 複数の土層がある場合には、「黒褐色粘質土 他」と記載。

出土遺物欄 土器名称を略記した。

例) 縄文→縄文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器

石→石器

表4 柵列一覧

柵列(SA)	地区	方向	柱穴規模 長径×短径×深さ (m)	柱穴埋土	出土遺物	時期	備考
1	B4	北東-南西	0.70 × 0.50 × 0.04 ~ 0.08	黒褐色粘質土	弥生	弥生後期	
2	B5	北西-南東	0.50 × 0.33 × 0.08 ~ 0.10	黒褐色粘質土		弥生後期	
3	A6 ~ C6	北北東-南南西	0.53 × 0.32 × 0.04 ~ 0.14	黒褐色粘質土 褐色粘質土	弥生	弥生後期後葉	SD7 床面検出
4	B・C6	南北	0.79 × 0.31 × 0.04 ~ 0.16	黒褐色粘質土 褐色粘質土	弥生	弥生後期後葉	SD7 床面検出
5	D・E4	北西-南東	0.45 × 0.32 × 0.05 ~ 0.10	黒褐色粘質土	弥生	弥生後期前葉	
6	D・E4	北西-南東	0.52 × 0.35 × 0.04 ~ 0.10	黒褐色粘質土 褐色粘質土	弥生・石	弥生後期前葉	

表5 竪穴建物一覧

竪穴(SB)	地区	平面形	規模 長径×短径×深さ (m)	内部施設	埋土	出土遺物	時期	備考
1	D7 ~ E8	(円形)	(4.68) × (1.95) × 0.17 ~ 0.28	周壁溝・柱穴・貼床	黒褐色粘質土 他	弥生	弥生後期前葉	SD6 に切られる

表6 溝一覧

溝(SD)	地区	断面形	方向	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	A4 ~ B1	「U」字状	東西	11.50 × 0.35 × 0.23	黒褐色粘質土	弥生	弥生後期後葉	
2	A6 ~ E1	皿状	北東-南西	23.20 × 0.60 × 0.07	黒褐色粘質土	弥生・石	弥生後期中葉	SD5 に切られる
3	C3 ~ D2	皿状	北東-南西	6.30 × 0.60 × 0.09	黒褐色粘質土	弥生	弥生後期前葉	SD5 に切られる
4	B2	皿状	北東-南西	2.50 × 0.40 × 0.08	黒色粘土		時期不明	
5	C3 ~ D5	皿状	東西	11.60 × 0.50 × 0.12	黒褐色粘質土 他	弥生・土師・須恵	6世紀前葉	SD2・3 を切る
6	B10 ~ D7	レンズ状	北東-南西	14.00 × 3.20 × 0.15	黒褐色粘質土 他	弥生・須恵	6世紀後葉	SB1 を切る
7	A6 ~ E7	皿状	南北	17.00 × 3.80 × 0.10	黒褐色粘質土 (砂混入)	弥生・縄文・石	弥生後期中葉	
8	D4 ~ E5	レンズ状	東西	7.00 × 1.30 × 0.15	黒褐色粘質土 (砂混入)	弥生・須恵	6世紀前葉	
9	B7	「U」字状	南北	2.60 × 0.60 × 0.28	黒褐色粘質土		6世紀前葉	

表7 土坑一覧

(1)

土坑(SK)	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	C5	不整形円形	逆台形状	1.25 × 1.18 × 0.15	黒色粘質土 他	弥生	弥生後期前葉	
2	C5	楕円形	逆台形状	0.93 × 0.50 × 0.10	黒色粘質土	弥生	弥生後期前葉	
3	D・E7	楕円形	逆台形状	1.00 × 0.70 × 0.18	黒褐色粘質土 他	弥生	弥生後期前葉	

釜ノ口遺跡 10 次調査

土坑一覧

(2)

土坑 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
4	B7	不整楕円形	逆台形状	0.90 × 0.60 × 0.20	黒色粘土		時期不明	
5	C5・6	楕円形	逆台形状	1.90 × 1.05 × 0.10	黒褐色粘質土	弥生	弥生後期前葉	
6	D3・4	長楕円形	逆台形状	2.08 × 0.48 × 0.18	黒褐色粘質土	土師・須恵	6世紀前葉	
7	B8	不整楕円形	逆台形状	1.25 × 1.00 × 0.40	黒褐色粘質土	土師・須恵	6世紀前葉	
8	C4・5	不整楕円形	逆台形状	2.07 × 0.72 × 0.10	黒褐色粘質土	弥生	弥生後期中葉	
9	B10	楕円形	逆台形状	1.50 × 0.52 × 0.10	黒色粘土		弥生後期	
10	D4	不整楕円形	逆台形状	1.40 × 0.70 × 0.10	黒褐色粘質土		6世紀前葉以前	SD5 に切られる
11	D4・5	長楕円形	逆台形状	2.00 × (0.40) × 0.10	黒褐色粘質土	弥生	弥生後期後葉	
12	A7 ~ C8	不整長方形	逆台形状	(5.80) × 3.50 × 0.50	黒褐色粘質土 (砂混入)	弥生・土師・ 須恵・ガラス玉	6世紀前葉	
13	A・B10	長楕円形	逆台形状	2.70 × 0.60 × 0.20	黒色粘土		弥生後期	

第4章 釜ノ口遺跡 11次調査

第1節 調査の経緯

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

2010(平成22)年8月トラスト・ワン株式会社代表取締役 兵頭淳氏(以下、申請者)より、松山市小坂四丁目390番における開発工事にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認申込書が、松山市教育委員会文化財課(以下、文化財課)に提出された。

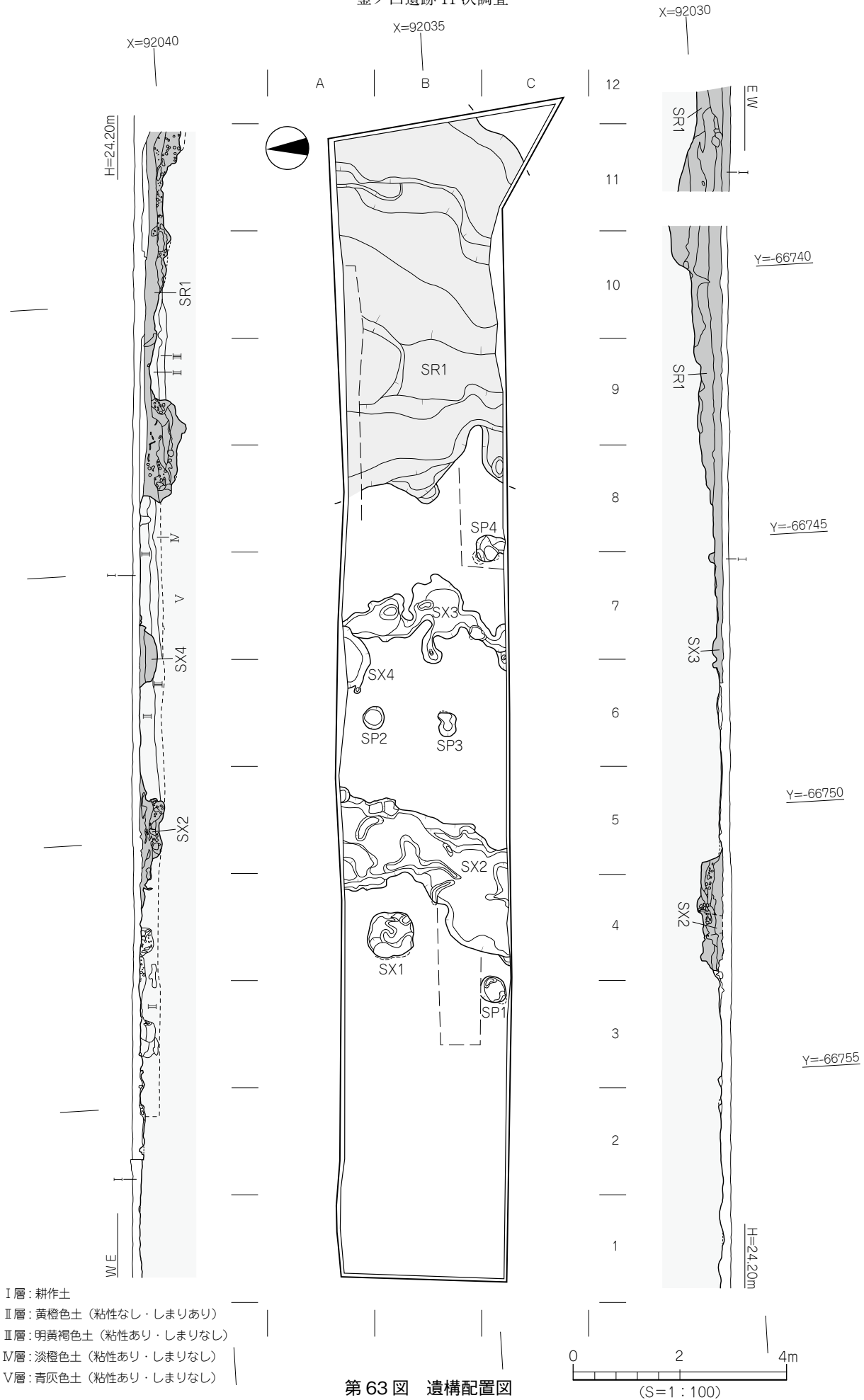
申請地は松山平野を西流する石手川中流域の左岸、標高24.00mに位置し、松山市埋蔵文化財包蔵地『No.110 釜ノ口遺跡』内に所在する。これまでに釜ノ口遺跡は1次から10次までの調査が行われ、弥生時代の集落関連遺構が多数検出されている。1次調査では竪穴住居、4次・5次調査からは土坑状遺構を検出し、弥生時代後期の遺物が多量に出土している。なお、6次・7次・10次調査からは弥生時代後期の焼失住居を検出した。7次調査で検出した3棟の竪穴住居の炉からはガラス玉が出土し、住居廃絶に伴う祭祀と考えられている。8次調査では、弥生時代後期の竪穴住居4棟と貯蔵穴などを検出した。遺物では住居内から破鏡、貯蔵穴からは弥生時代後期の土器とともに種子や木器、編み籠状の植物遺体などが当時のままの姿で出土した。9次調査からは弥生時代後期の溝を検出し、在地土器に混じって木製品や豊後系の壺などが出土している。このように、調査地周辺は弥生時代後期の集落関連遺構や遺物が多数検出された地域である。

これらのことから、申請地における埋蔵文化財の有無を確認する必要があるため、2010(平成22)年8月に文化財課の指導のもと、財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター(以下、埋文センター)は試掘調査を実施した。その結果、土坑や溝、柱穴などの遺構を検出し、さらには遺構埋土中から弥生土器や鉄製品、木製品が出土したことから、申請地内に遺跡が存在することを確認した。このことから、申請者と文化財課、埋文センターの三者は協議を行い、申請地内で確認された遺跡に対して記録保存を目的とした発掘調査(本格調査)を実施することとなった。

(2) 調査の経緯

発掘調査は、2010(平成22)年10月12日～同年11月11日の間に実施した。調査に先立ち、トラロープを用いて安全対策を施した後に調査地の線引きを行った。調査地は幅約3m、長さ約20mである。調査地に隣接して仮設テントと仮設トイレを設置し、発掘機材の搬入を行った。10月12日に重機を使用して東側から西側に向かって掘削を行い、北側を掘削土置き場とした。掘削は、試掘調査の結果に基づき地山上面まで行き、調査区東側より遺構の精査を行った。その結果、自然流路1条と柱穴4基、性格不明遺構4基を検出した。遺物は遺構内より弥生土器や石製品、木製品が出土した。11月11日に遺構完掘状況の写真撮影と測量を行い、道具の片づけ後、備品を撤去し屋外調査を終了する。

釜ノ口遺跡 11 次調査



- I層: 耕作土
- II層: 黄橙色土 (粘性なし・しまりあり)
- III層: 明黄褐色土 (粘性あり・しまりなし)
- IV層: 淡橙色土 (粘性あり・しまりなし)
- V層: 青灰色土 (粘性あり・しまりなし)

第2節 層位 (第63図)

調査地は松山平野北東部、石手川左岸の扇状地に立地し、標高は24.00mを測る。調査以前は水田として使用されていた。調査地の基本層位は、以下の五層である。なお、Ⅲ～Ⅴ層は調査区北壁沿いに設定したトレンチにて確認したもので、遺構はⅡ層上面での検出である。

I層：耕作土 調査区全域で検出し、層厚10～20cmを測る。

Ⅱ層：黄橙色土〔10YR8/6〕(粘性なし・しまりあり) 調査区全域で検出した。

Ⅲ層：明黄褐色土〔2.5Y7/6〕(粘性あり・しまりなし)

Ⅳ層：淡橙色土〔5YR8/3〕(粘性あり・しまりなし)

Ⅴ層：青灰色土〔5B6/1〕(粘性あり・しまりなし)

第3節 遺構と遺物

検出した遺構は、自然流路1条、柱穴4基、性格不明遺構4基である。遺物は遺構内から出土したもので、弥生土器(甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器)、土師器、須恵器、石製品(台石、敲石、砥石)、木製品(杓子、机、柱材、杭)、種子(桃、瓢箪)があり、その数量は遺物収納用テンバコ(600×440×150mm)8箱、長尺コンテナ(1,340×335×195mm)1箱である。遺構の帰属時期は、出土遺物や埋土より弥生時代中期後葉から古墳時代中期である。以下、検出した遺構ごとに報告を行う。

(1) 自然流路(SR)

SR1 (第64・65図、図版23～26)

SR1は調査区中央部から東側A8～C12区に位置し、流路北側と南側、及び東側は調査区外に続く。規模は検出長3.00m、検出幅7.20m、深さ100cmを測る。断面形態はレンズ状を呈するが、調査区南壁では西側より緩やかに傾斜し、約9m付近で深く落ち込む。埋土は13層に分かれ、①層：黒褐色土〔7.5YR3/1〕(粘性強・硬くしまりあり) ②層：黒褐色土〔7.5YR3/1〕(細砂混じり、粘性強・しまりなし) ③層：黒褐色土〔7.5YR3/1〕(褐灰色土〔7.5YR5/1〕と浅黄橙色土〔7.5YR 8/4〕がブロック状に混入、粘性強・しまりなし) ④層：黒褐色土〔7.5YR3/1〕(細砂混じり、褐灰色土〔7.5YR5/1〕と浅黄橙色土〔7.5YR 8/4〕がブロック状に混入、粘性強・しまりなし) ⑤層：黒褐色土〔7.5YR3/1〕(1～2cm大の石が混入、褐灰色土〔7.5YR5/1〕と浅黄橙色土〔7.5YR 8/4〕がブロック状に混入、粘性強・しまりなし) ⑥層：灰色土〔10Y4/1〕(粘性なし・しまりなし・有機質あり) ⑦層：灰色砂〔N6/1〕(粘性なし・しまりなし) ⑧層：黒色土〔10YR2/1〕(粘性強・しまりなし・有機質あり) ⑨層：灰黄褐色土〔10YR4/2〕(粘性あり・しまりなし・有機質あり) ⑩層：黒色土〔10YR2/1〕(粘性強・しまりなし) ⑪層：浅黄色土ブロック(AT火山灰) ⑫層：③層+Ⅴ層(青灰色土、粘性あり・しまりなし) ⑬層：②層+砂+AT火山灰である。なお、⑥層～⑩層は調査区西側北壁の落ち込み部で検出した。

南壁①層はSX3まで薄く広がるが、西側掘り方が不明のため②層のはじまりを流路の西側掘り方

とした。調査区北壁では西側で急激に落ち込みがあり、東側でさらに深く落ち込む。なお、流路基底面は北東から南西に傾斜している。

遺物は弥生土器や土師器、石製品、木製品が出土した。流路西半部の②層中には弥生土器が集中しており、⑦層中からは杓子状木製品や木材などが出土した。一方、流路東半部の③層中からは木製の机や杭材のほか、④層中からは土師器片が数点出土した。なお、流路基底面付近では柱材が半截状態で出土したほか、杭材は打ちこまれていたものが倒れた状況を確認した。ここでは発掘調査時の状況をふまえ、④層と⑦層からの出土物を「下層出土遺物」、それ以外を「上層出土遺物」とし、土製品、石製品、木製品の順に遺物実測図を掲載している。

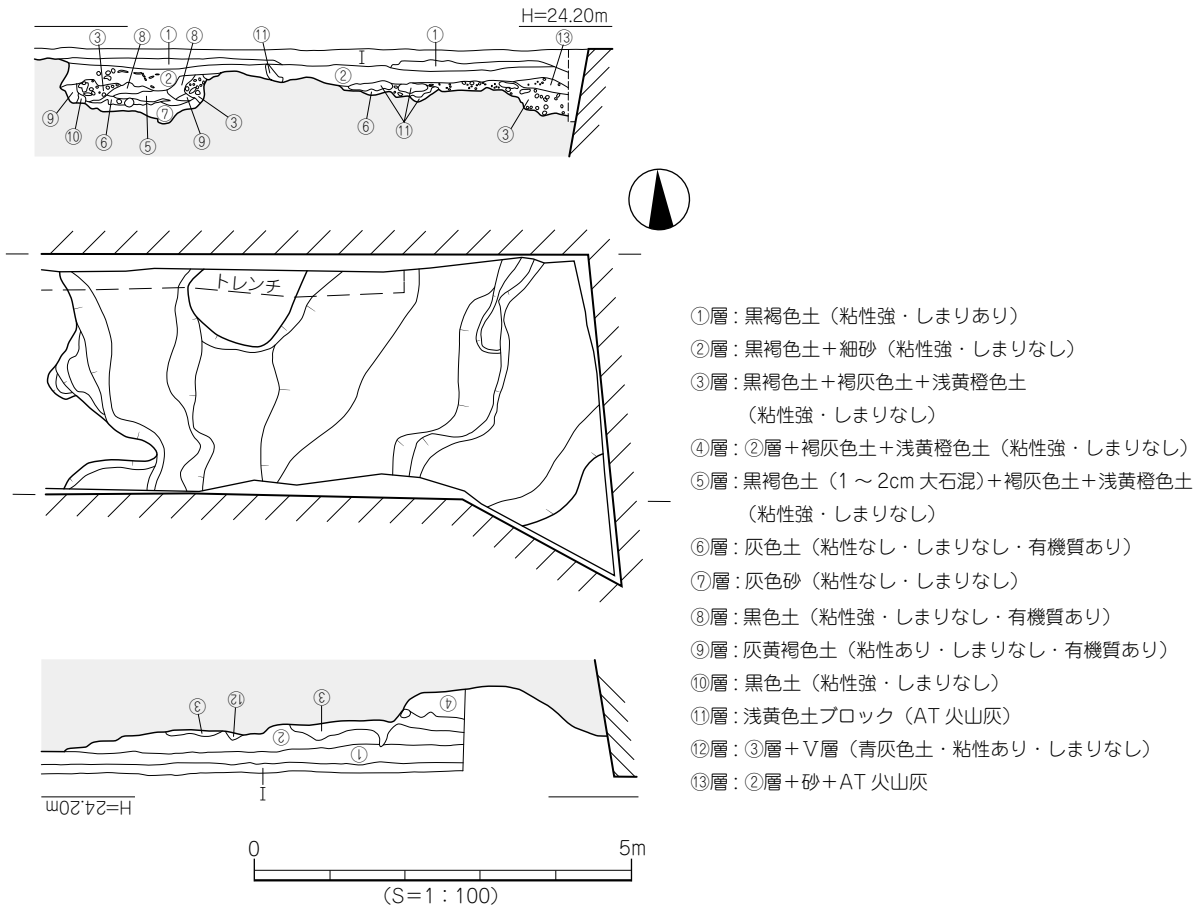
〔土製品〕

① 下層出土遺物 (第 66 図)

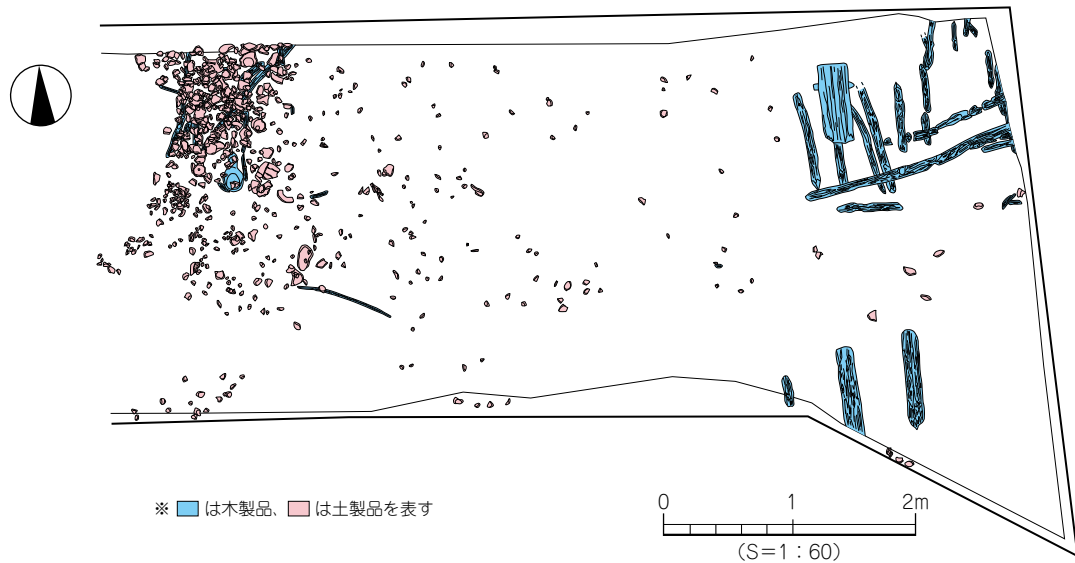
弥生土器

甕形土器 (1~8) : 1~3 は口縁部片で、1 は短く外反する口縁部、2 は「く」の字状の口縁部、3 は外傾する短い口縁部をもつ。4~8 は底部。4・5 は平底の底部から胴部にかけての破片で、6 は底部中央部がわずかに凹み、7 は平底、8 はわずかに上げ底をなす。

壺形土器 (9~14) : 9~12 は広口壺で、9 は口縁端面に 2 条の凹線文を施す。10 は直立し外反する口頸部、11 は外傾してわずかに外反する口縁部をもち、11 の内外面には煤が付着している。12 の口縁部は大きく外反し、口縁部及び頸部外面には指頭痕が残る。13 は直立する短い口縁部をもち、



第 64 図 SR1 測量図



第 65 図 SR1 遺物出土状況図

口縁端部は面をなす。14 は頸部片で断面三角形状の凸帯を貼り付け、凸帯上にヘラ状工具による斜格子目文を施す。

土師器

壺形土器 (15) : 口縁部は外傾し、口縁部中位にやや膨らみをもつ。頸部内面には、口頸部の境界までヘラケズリ調整を施す。

② 上層出土遺物 (第 67・68 図)

弥生土器

甕形土器 (16～21) : 16～18 は「く」の字状の口縁部をもち、18 は口縁端部に 2 条の凹線文を施し、外面には煤が付着している。19～21 は底部片で、くびれをもつ上げ底である。

壺形土器 (22～29) : 22・23 は広口壺で、22 は口縁部を上方に拡張し、5 条の沈線文を巡らす。23 は口縁端部を上下方に拡張し、2 条の凹線文を施す。24 は細頸壺で、口縁部はわずかに外反する。25 は平底の底部から立ち上がり、胴部中位に張りをもつ。26 は長頸壺の胴部片で、胴部中位に 3 条の沈線文を施す。27 は頸部に「M」字状の凸帯を貼り付け、凸帯上に刻目を施す。28・29 は底部で、28 の底部外面には 3 本の線刻が見られる (ヘラ記号か)。29 は突出する、わずかに上げ底の底部である。

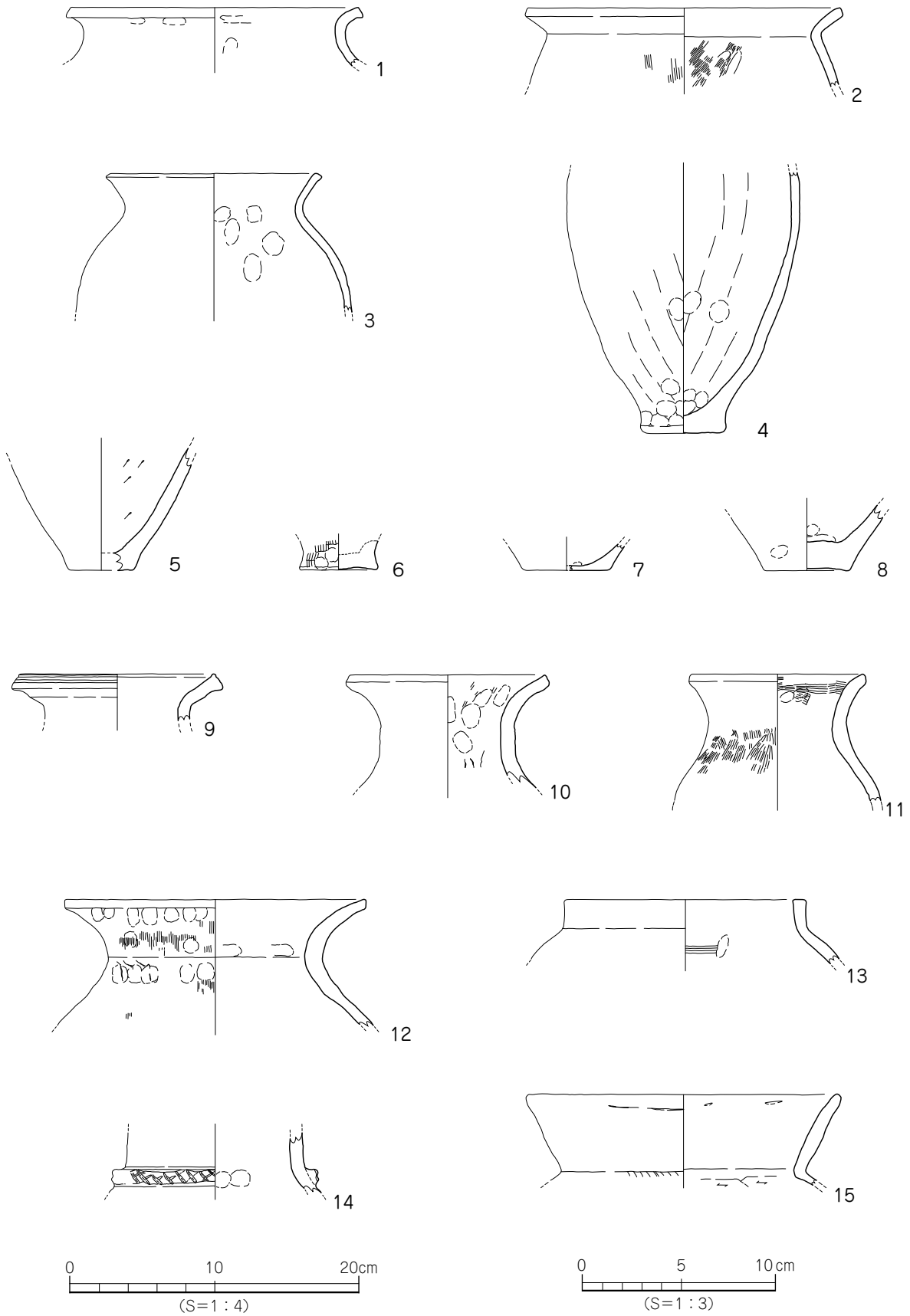
鉢形土器 (30～36) : 30 は完形品。小さな平底の底部より外傾する胴部に続き、口縁部は短く外反する。31 は肩部がわずかに張り、口縁部は直立し、口縁端部は先細りする。32～34 の口縁部は外反し、33 の口縁端部はナデによりわずかに凹む。34 の胴部には、工具による刺突列点文を巡らす。35 は小さな平底、36 は上げ底でたちあがりをもつ。

コシキ形土器 (37) : 上げ底の底部に、径 2.1cm の孔を穿つ (焼成前穿孔)。

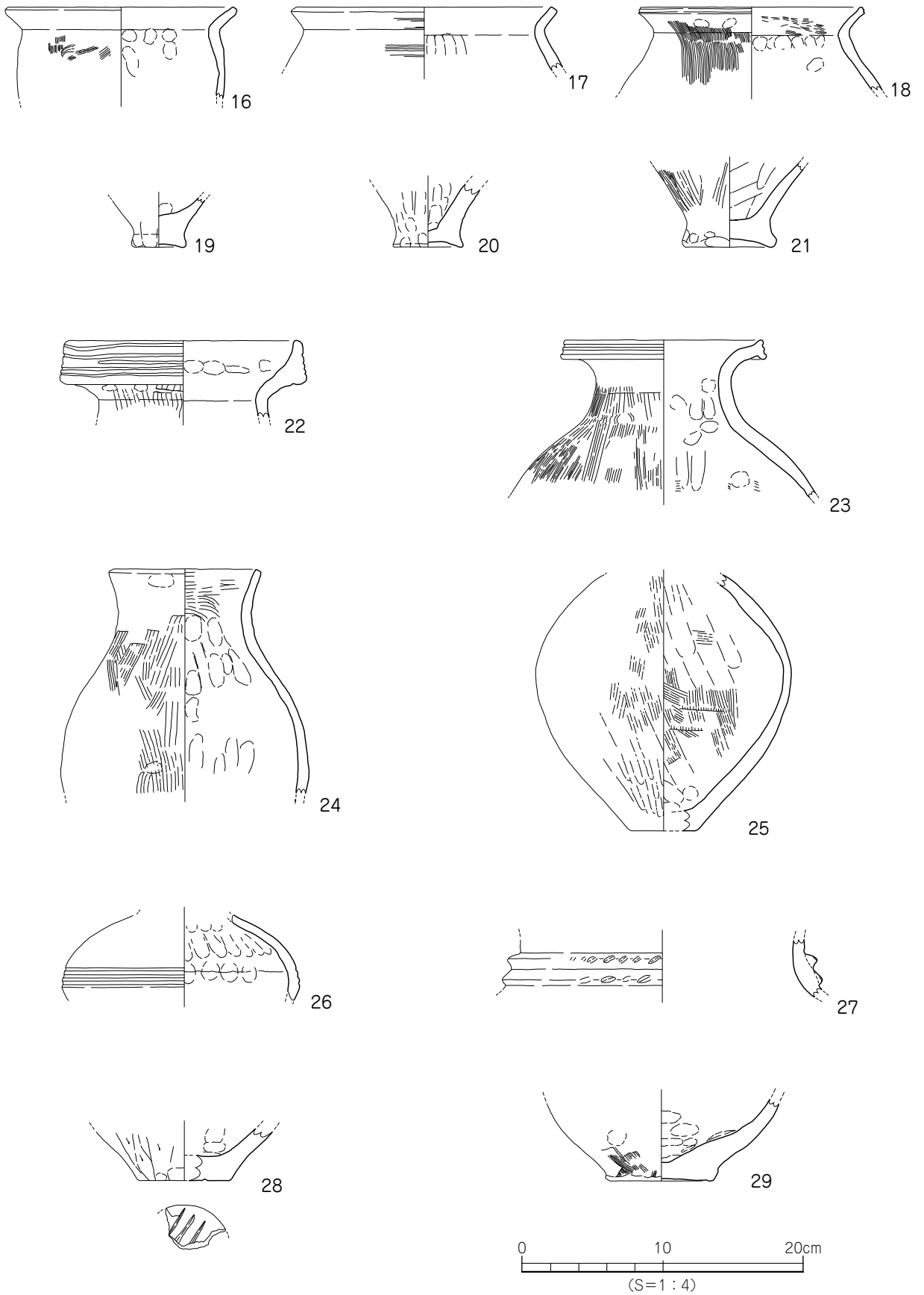
高坏形土器 (38～42) : 38～40 は坏部。38 は口縁部がわずかに外傾し、3 条の凹線文を巡らす。39・40 は稜をもって短く外反する口縁部をもち、40 の口縁端部は水平な面をもつ。41・42 は脚部。41 は径 1.2cm 大の円孔を 5 箇所につき、42 の脚部は「ハ」の字状に開き、脚裾端部はナデにより凹む。

支脚形土器 (43) : 中空で、受部は「U」字状にカットされる。

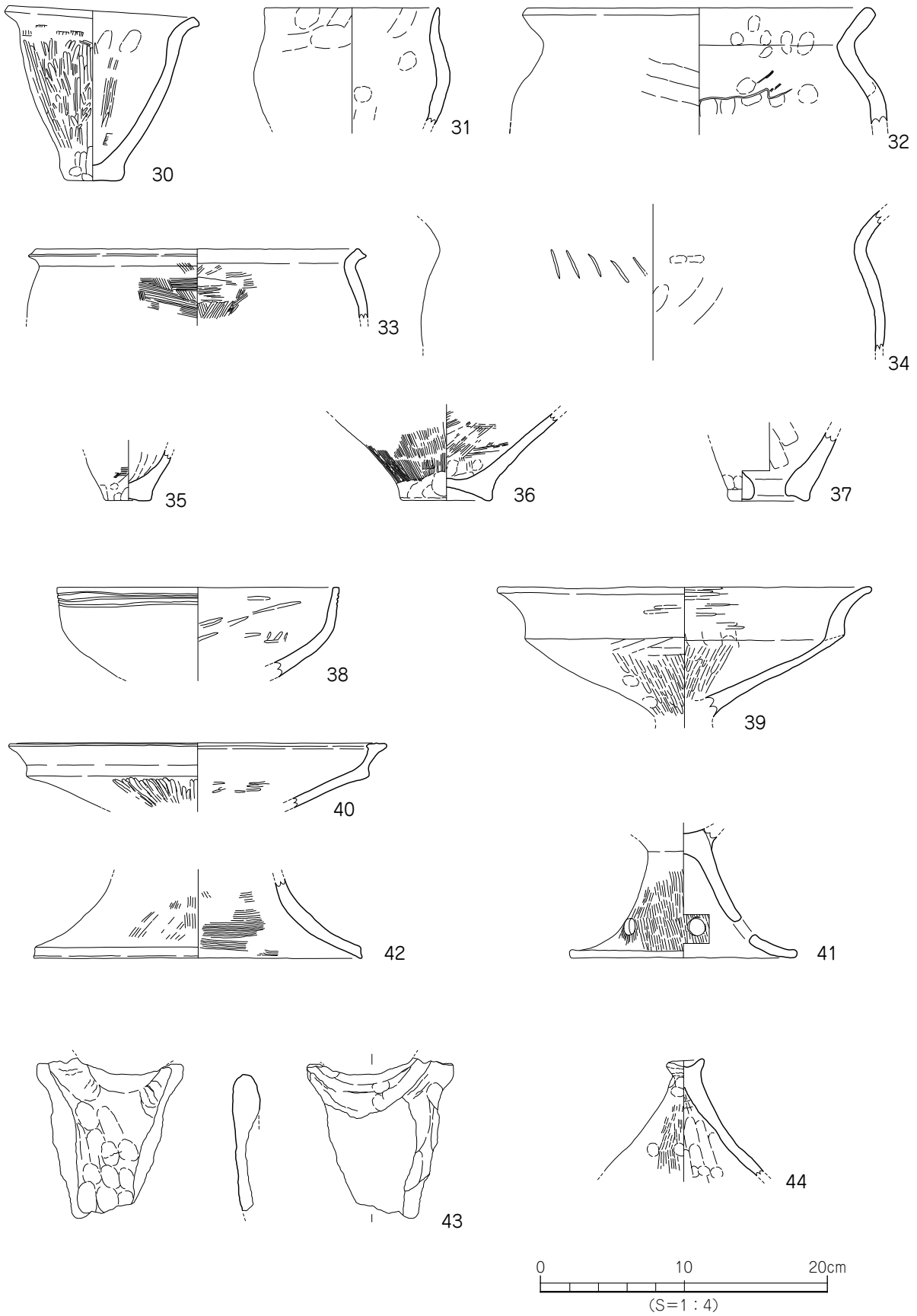
蓋形土器 (44) : 中央部が凹む小さなつまみをもち、裾部は「ハ」の字状に開く。



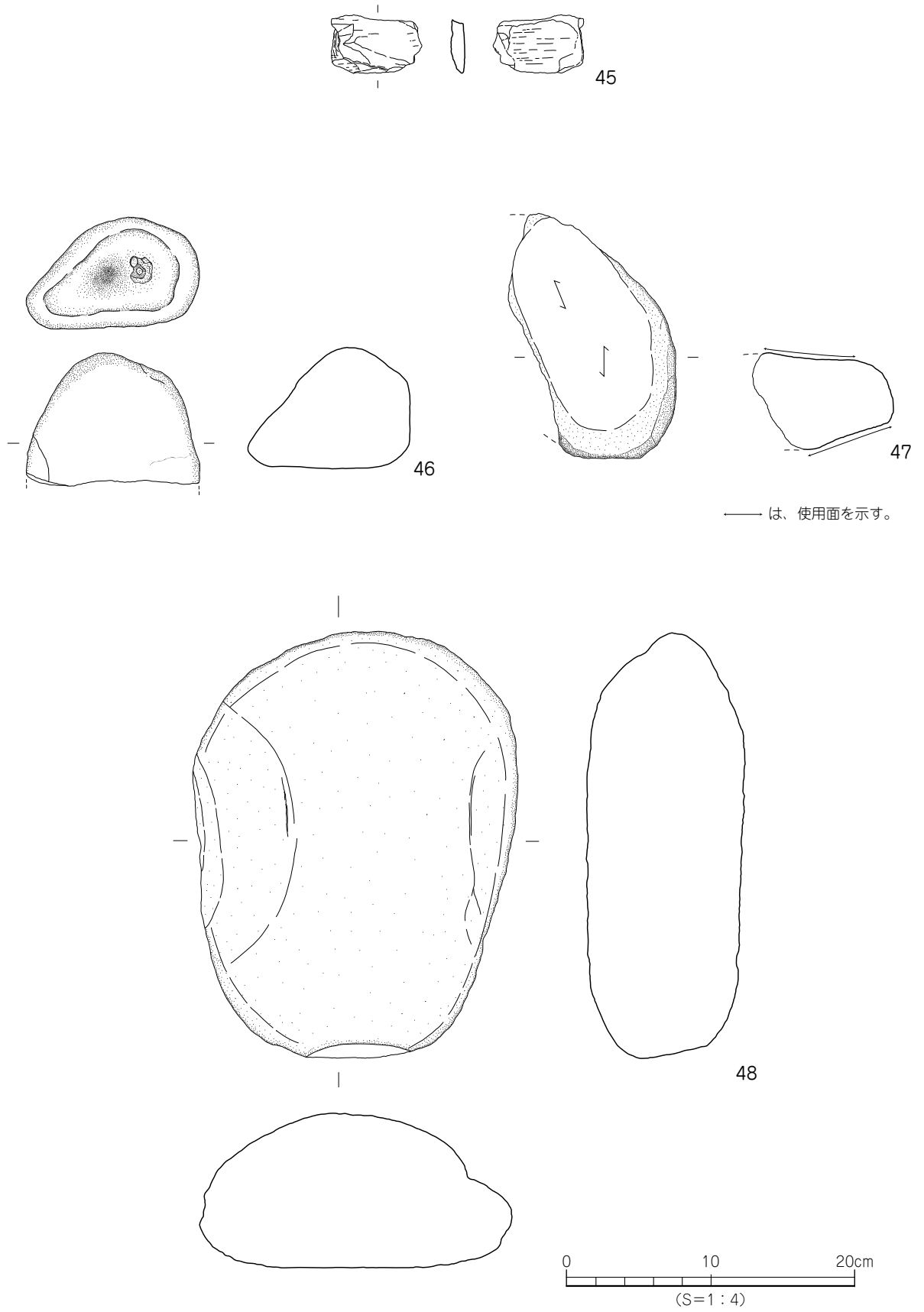
第 66 図 SR 1 下層出土遺物実測図



第 67 図 S R 1 上層出土遺物実測図 (1)



第 68 図 S R1 上層出土遺物実測図 (2)



第 69 図 S R 1 下層出土石製品実測図

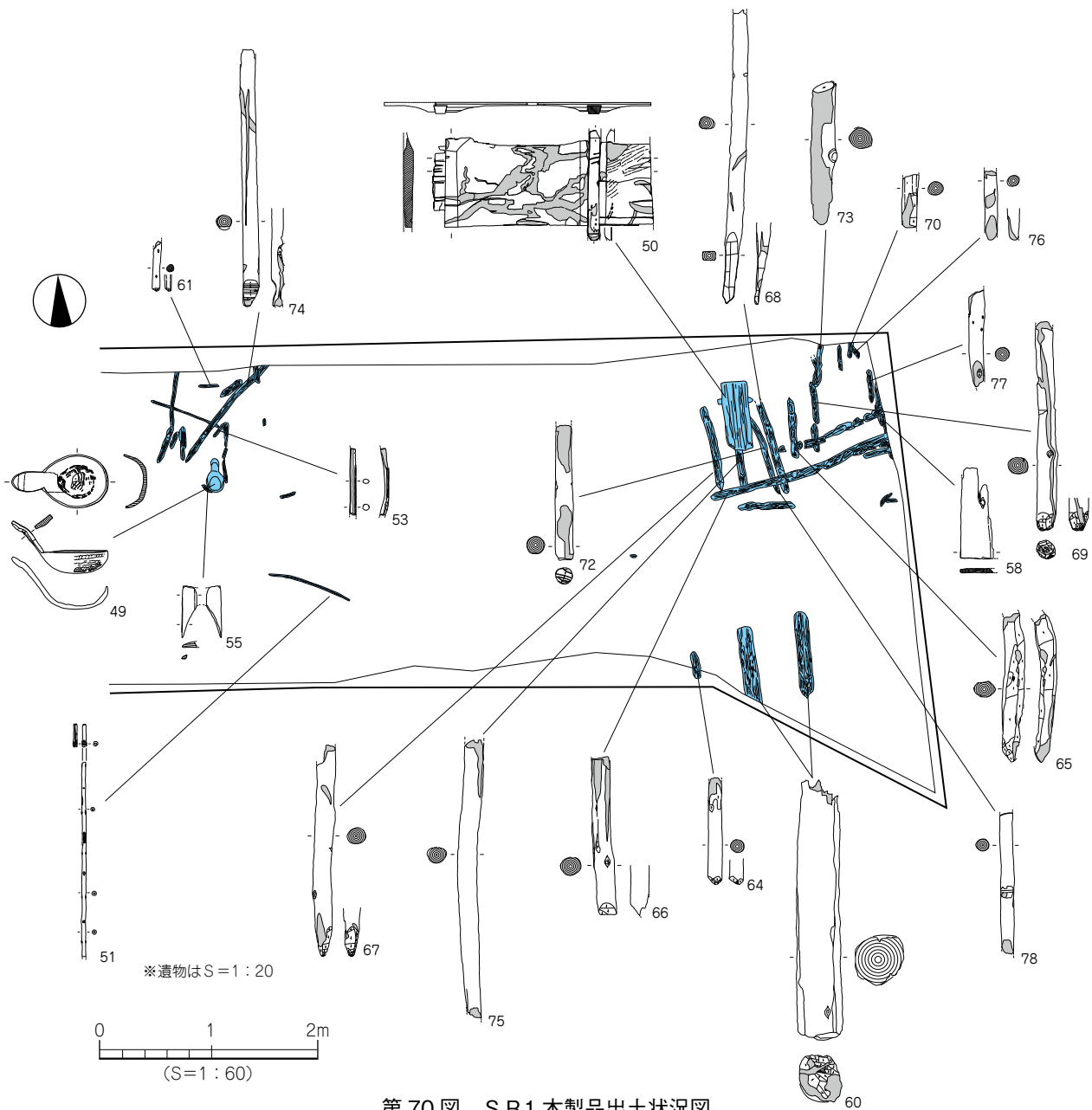
〔石製品〕

下層出土遺物（第 69 図）

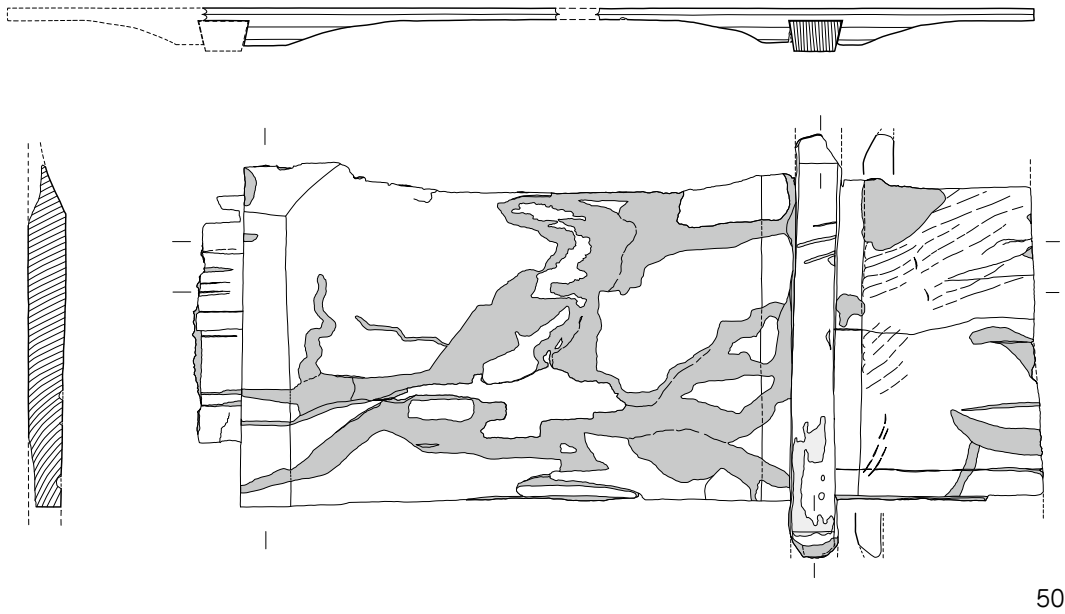
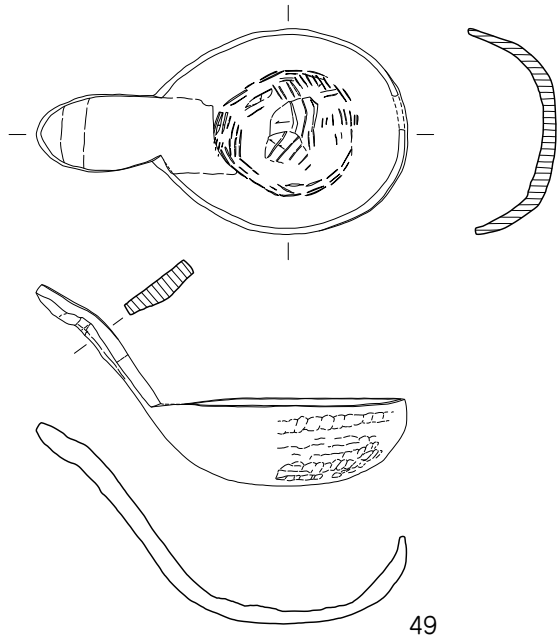
45 は石器素材、46 は敲石、47 は砥石、48 は台石である。

〔木製品〕（第 70 ～ 74 図、図版 27 ～ 30）

50 の机は上層出土品、その他は下層出土品である。49 は完形品の剝物の杓子、50 は指物の机である。50 の天板下面の端面近くには平行する溝を各 1 条ずつ穿ち、溝に脚部の木が残る。51 は竹製の弓と考えられ、加工痕が見られる。52・53 は棒状加工品、54・55 は切りくずである。56 は加工材、57 は木器素材（樹皮）、58 は板材、59 は角材、60 は柱材である。61～69 は杭。すべて芯持ち材で、加工痕が見られ、62・63・67・69 の先端はつぶれている。70～74 は芯持ち加工品、75～78 は部材で、78 のくびれは紐ずれの可能性がある。



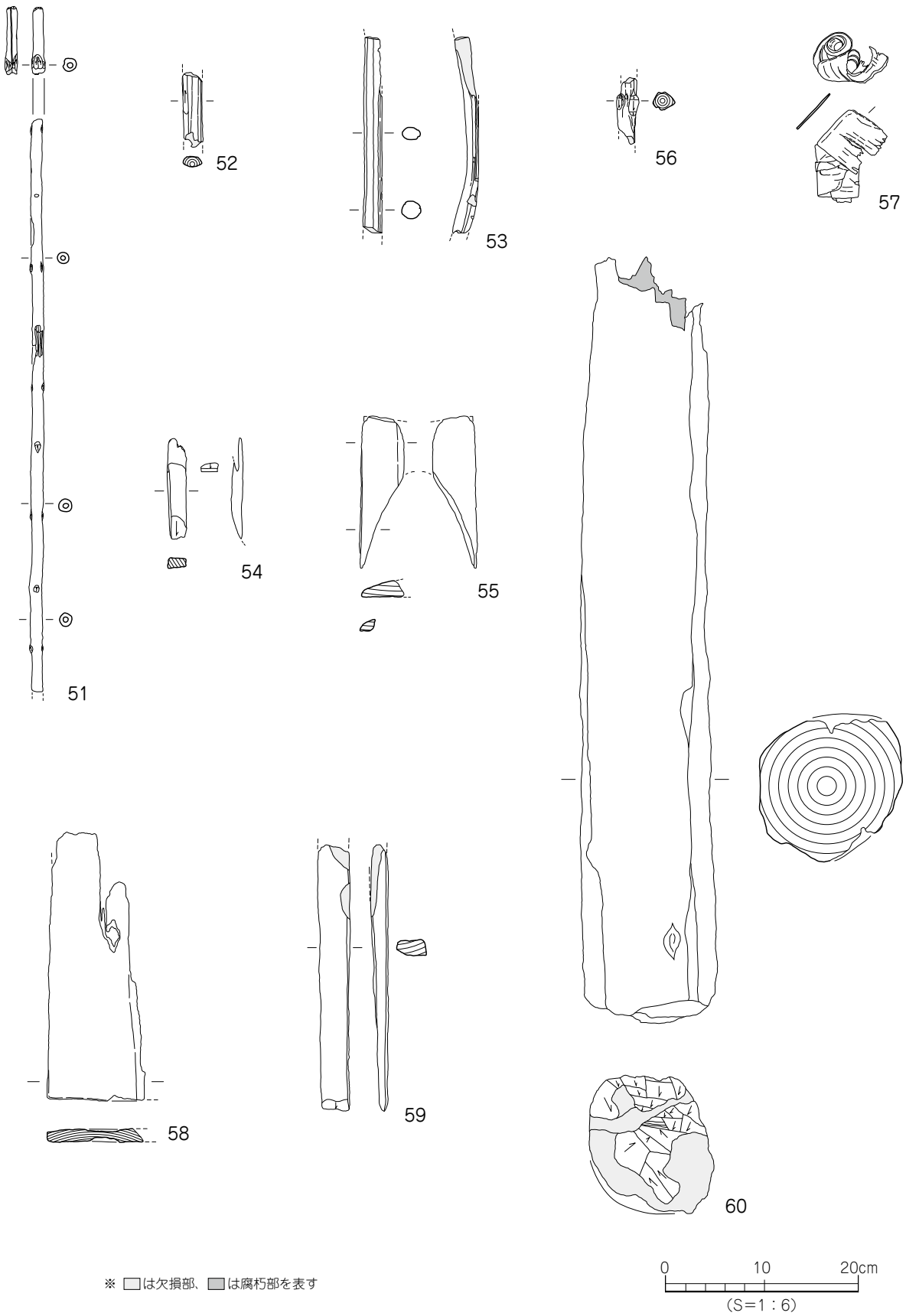
第 70 図 SR1 木製品出土状況図



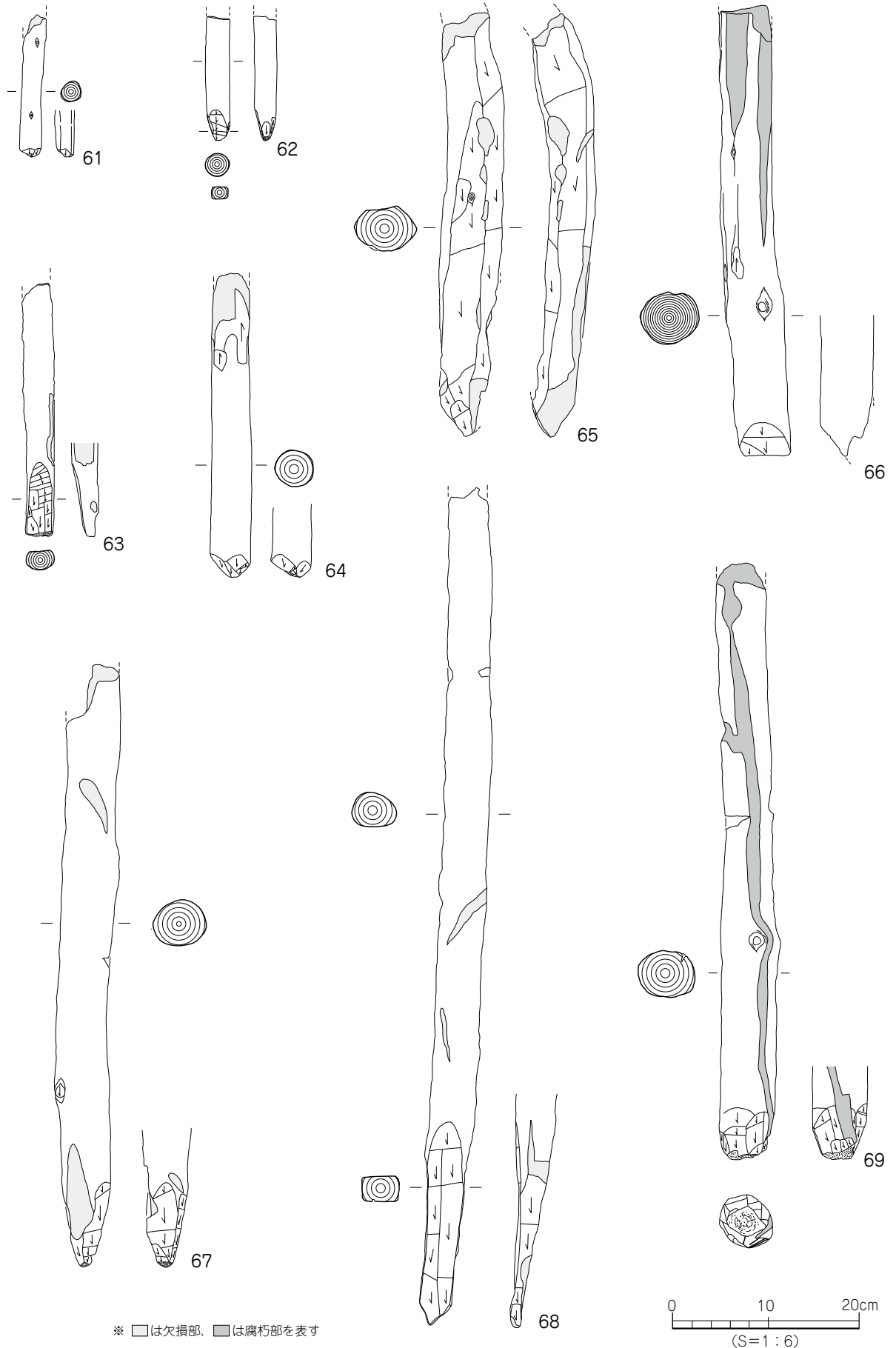
※ □は欠損部、■は腐朽部を表す

0 10 20cm
(S=1:6)

第71図 SR1出土木製品実測図(1)

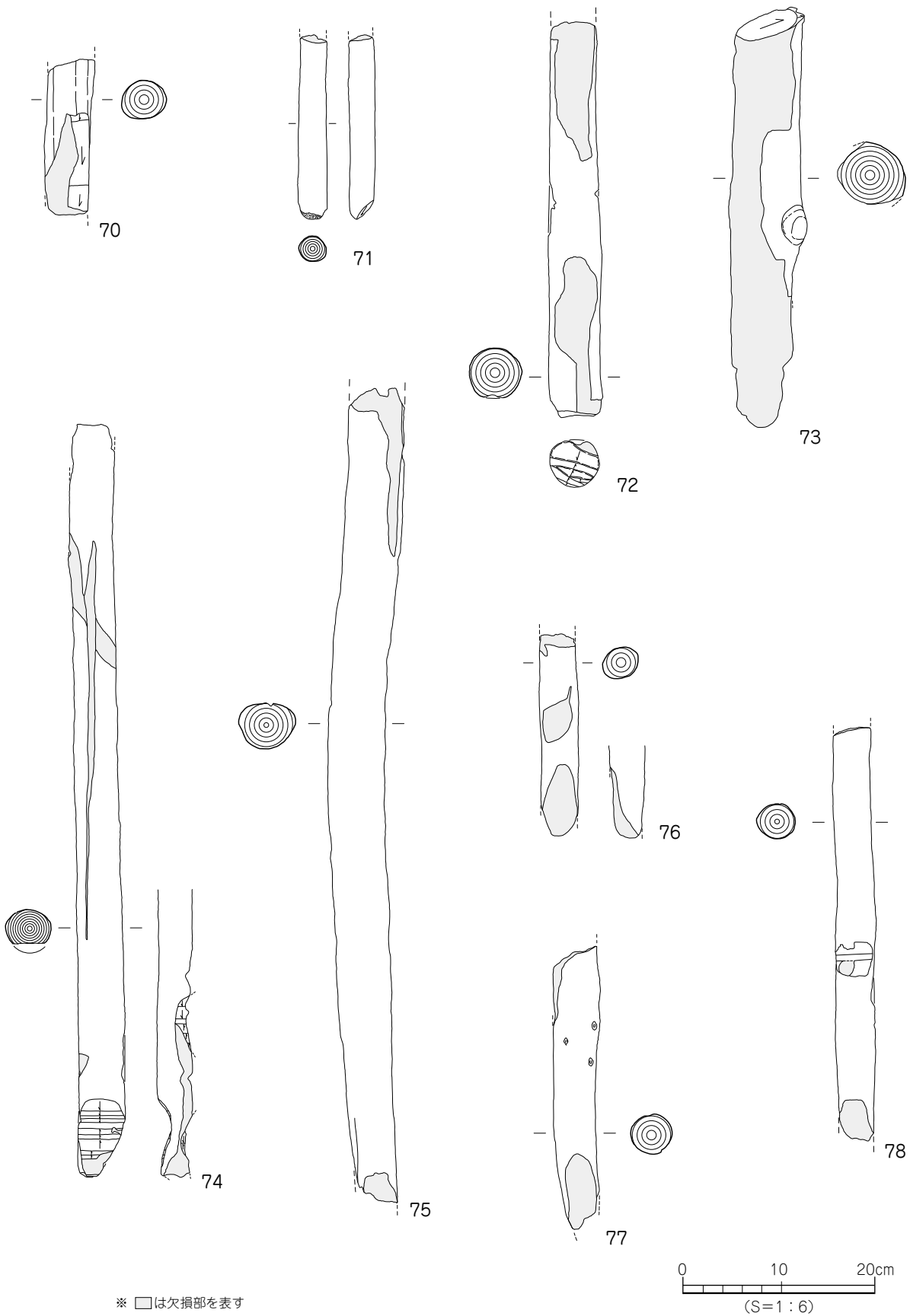


第 72 図 SR1 出土木製品実測図 (2)



※ □は欠損部、■は腐朽部を表す

第73図 SR1 出土木製品実測図 (3)



第 74 図 SR1 出土木製品実測図 (4)

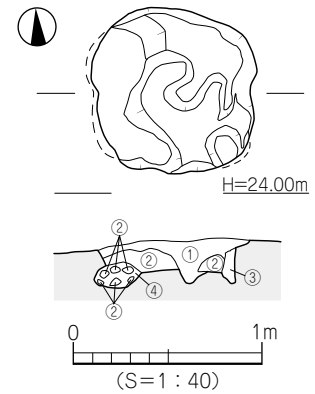
時期：流路西半部から出土した土器は、弥生時代中期後葉から後期中葉の特徴を示すものであるが、東半部出土の土師器片（15）は古墳時代中期の様相を呈している。検出状況からは、本来複数の流路が存在した可能性があり、最終的な流路の埋没は古墳時代中期と考えられる。

(2) 性格不明遺構 (SX)

SX1 (第75図)

SX1は調査区中央西部A・B4区で検出した。平面形態は不整形円形を呈し、規模は東西長0.85m、南北長0.95m、深さ25cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、遺構南西部の壁体は一部フラスコ状となる。埋土は①層：黒褐色土〔7.5YR3/1〕(1～5mm大の石粒を多く含む、粘性強・しまりあり)②層：灰白色土〔2.5YR8/2〕(粘性なし・しまりなし)③層：黒褐色土〔5YR2/1〕(粘性強・しまりなし)④層：黒褐色土〔5YR2/1〕(灰白色土〔2.5YR8/2〕がブロック状に混入、粘性強・しまりなし)である。遺物は弥生土器片が出土したが、特に層と層の隙間に砂が検出され、遺物は砂からの出土が多い。

時期：出土遺物より、弥生時代後期前葉とする。

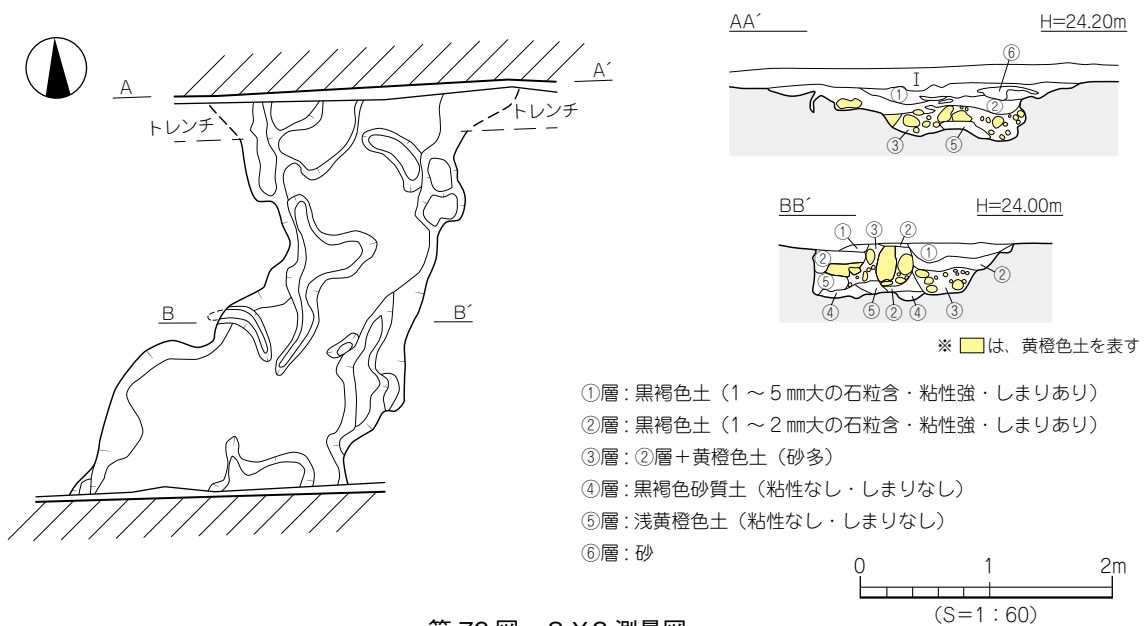


- ①層：黒褐色土
(1～5mm大の石粒多・粘性強・しまりあり)
- ②層：灰白色土 (粘性なし・しまりなし)
- ③層：黒褐色土 (粘性強・しまりなし)
- ④層：③層+灰白色土ブロック
(粘性強・しまりなし)

第75図 SX1測量図

SX2 (第76図)

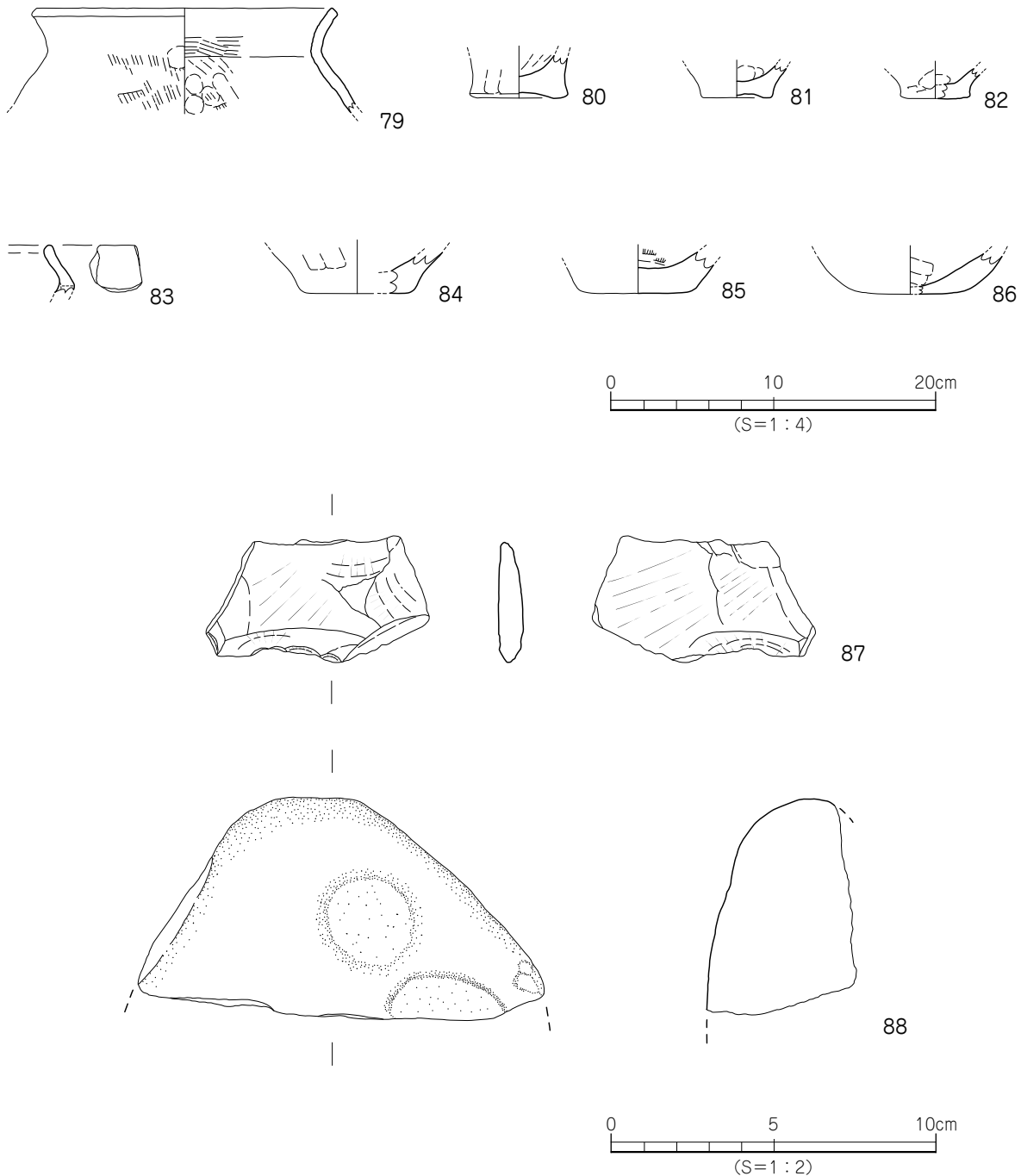
SX2は調査区中央西部A4～C5区に位置し、北側と南側は調査区外に続く。平面形態は不整形な溝状を呈し、規模は検出長3.00m、幅1.15～2.00m、深さ45cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、



- ①層：黒褐色土 (1～5mm大の石粒含・粘性強・しまりあり)
- ②層：黒褐色土 (1～2mm大の石粒含・粘性強・しまりあり)
- ③層：②層+黄橙色土 (砂多)
- ④層：黒褐色砂質土 (粘性なし・しまりなし)
- ⑤層：浅黄橙色土 (粘性なし・しまりなし)
- ⑥層：砂

第76図 SX2測量図

基底面には凹凸がある。埋土は 6 層に分かれ、①層：黒褐色土〔7.5YR3/1〕（1～5mm大の石粒を含む、粘性強・しまりあり）②層：黒褐色土〔5YR2/1〕（1～2mm大の石粒含む、粘性強・しまりあり）③層：黒褐色土〔5YR2/1〕（1～2mm大の石粒と砂を多く含む、黄橙色土〔10YR8/6〕混入）④層：黒褐色砂質土〔10YR3/1〕（粘性なし・しまりなし）⑤層：浅黄橙色土〔7.5YR8/3〕（粘性なし・しまりなし）⑥層：砂である。出土遺物には弥生土器片と石製品片、及び木材があるが、層と層の隙間に砂が検出されており、これらの遺物は砂からの出土が多い。



第 77 図 S X 2 出土遺物実測図

出土遺物 (第 77 図)

甕形土器 (79～82)：79は「く」の字状口縁を呈し、口縁端部は「コ」字状である。80・81は上げ底の底部片、82は小さな平底の底部である。

壺形土器 (83～86)：83は複合口縁壺で、口縁端部は丸みをもつ。84・85は平底、86は丸みをもつ平底である。

石製品 (87・88)：87はサヌカイト製の刃器、88は敲石である。

時期：出土遺物の特徴や埋土の堆積状況から、弥生時代後期前葉とする。

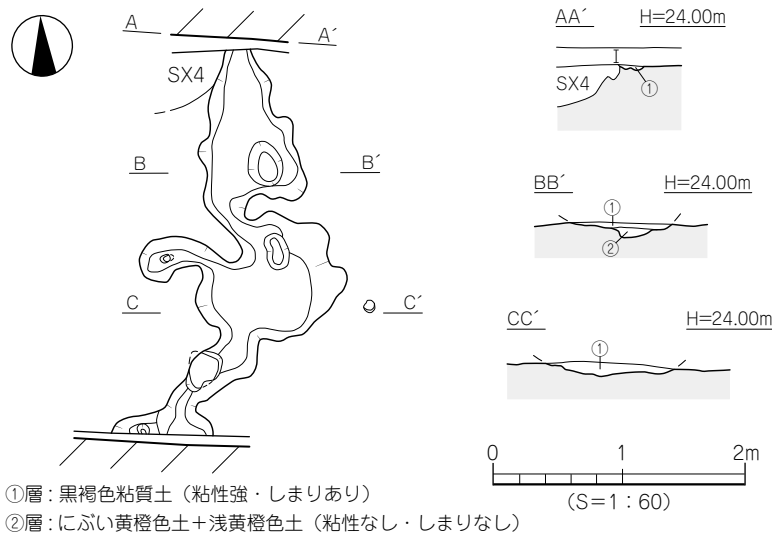
S X 3 (第 78 図)

SX3は調査区中央東部 A6～C7区に位置し、北側はSX4を切り北側、南側は調査区外に続く。平面形態は不整形な溝状を呈し、規模は検出長 3.00m、幅 0.20～1.70m、深さ 5～12cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、基底面には凹凸がある。埋土は2層に分かれ、①層：黒褐色粘質土 [10YR3/1] (粘性強・しまりあり) ②層：にぶい黄橙色土 [10YR6/4] (浅黄橙色土 [10YR8/4] 混入、粘性なし・しまりなし) である。遺物は、弥生土器が出土した。

出土遺物 (第 79 図)

89は甕形土器の底部で、わずかに突出する上げ底を呈する。

時期：出土遺物の特徴より、弥生時代後期前葉とする。

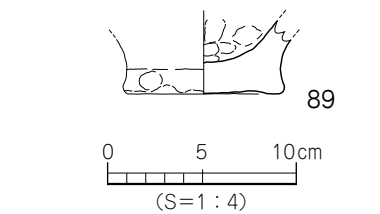


第 78 図 S X 3 測量図

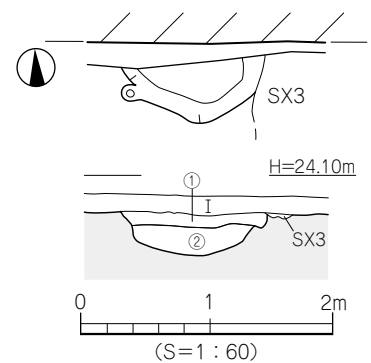
S X 4 (第 80 図)

SX4は調査区中央東部 A6・7区に位置し、東側はSX3に切られ、北側は調査区外に続く。平面形態は円形で、規模は検出長 1.90m、深さ 40cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は①層：黒褐色土、②層：黒褐色土 + AT 火山灰である。遺物は、出土していない。

時期：遺物が出土していないため時期特定は困難であるが、SX3に切られることから、弥生時代後期前葉以前としておく。



第 79 図 S X 3 出土遺物実測図



第 80 図 S X 4 測量図

(3) 柱 穴 (第 63 図)

調査区中央部と中央西部、中央東部で 4 基の柱穴 (SP1 ~ 4) を検出した。平面形態は不整形な円形または楕円形を呈し、規模は径 0.45 ~ 0.85m を測る。柱穴掘り方埋土は上部を黒褐色土 [7.5YR3/1] が覆い、浅黄橙色土 [7.5YR8/4] や褐灰色土 [7.5YR4/1]、灰白色土 [7.5YR8/2] がブロック状に混入する。遺物は、弥生土器片が出土した。

時 期：出土遺物や埋土から、SX1・2・3 と同じく弥生時代後期前葉とする。

第 4 節 小 結

本調査では、弥生時代から古墳時代までの遺構・遺物を検出した。検出した遺構には自然流路、性格不明遺構、柱穴がある。遺物では、弥生土器 (壺形土器、甕形土器、鉢形土器、高坏形土器、支脚形土器) や土師器のほか、石製品 (砥石、敲石)、木製品 (杓子、机、柱材、杭材) がある。

このうち、自然流路 SR1 からは多くの木製品が出土した。SR1 は弥生時代中期後葉から古墳時代中期頃まで存在したと考えられる流路である。流路東半部から出土した杭材は、縦方向に打ち込まれた杭に横方向の杭を組み合わせているのが看取でき、護岸工事の一部である可能性が考えられる。

出土した木製品のうち、什器類には完形の杓子 (刳物) があり、その他には指物の机がある。とりわけ机の出土は松山平野内では初例であり、古墳時代に使用された机の構造を解明するうえで大変貴重な資料である。小坂地区では、調査区北方に位置する釜ノ口遺跡 9 次調査検出の溝 SD3 からも杓子状木製品が出土している。また、釜ノ口遺跡 8 次調査検出の土坑内からは網籠や種子が出土し、住居内からは青銅鏡 (破鏡) のほか住居の柱穴内からは柱材が出土している。さらに、同 7 次調査で検出した 2 棟の竪穴住居からも柱材や礎盤が確認されている。

なお、発掘調査では SR1 の埋土を採取し、調査終了後、株式会社古環境研究所に依頼して植物珪酸体分析を行った。その結果、埋土中からはイネの珪酸体が検出されたが稲作跡の検証となる判断基準を下回っており、これらは何らかの形で流路内に混入したものと推定されている。また、イネ以外ではネザサ節型やメダケ節型及びヨシ属等の珪酸体が検出された。これらのことから当時、流路内はヨシ属が生育するような湿潤な環境であり、周辺の比較的乾燥した場所にはメダケ節等の竹笹類が多く分布し、部分的にはキビ属やウシクサ属等も見られたであろうとの分析結果を得た。

今回の調査を含め、松山平野内では出土事例の極めて少ない貴重な木製品が数多く出土していることや、権威の象徴でもある青銅鏡が出土した釜ノ口遺跡は、平野内における弥生時代後期の重要な集落のひとつと考えられる。今後は本調査を含め、広い範囲での集落構造や変遷を研究して行かねばならない。

遺構一覧

遺構・遺物一覧 — 凡例 —

- (1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
- (2) 遺構一覧表の記載について
埋土欄 複数の土層がある場合には、「黒褐色土 他」と記載。
- (3) 遺物観察表の各掲載について
法量欄 (): 推定復元値
調整欄 土製品の各部名称を略記した。
例) 底→底部
胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。
例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ。
() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
例) 石・長 (1~4) →「1~4mm大の石英・長石を含む」である。
焼成欄の略記について。◎→良好、○→良。

表 8 柱穴一覧

柱穴 (SP)	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	C3・4	円形	逆台形	0.55 × 0.45 × 0.16	黒褐色粘質土 (1~2mmの石粒混)	弥生土器	弥生後期前葉	
2	A・B6	円形	逆台形	0.85 × 0.80 × 0.40	黒褐色土 他	弥生土器	弥生後期前葉	
3	B6	楕円形	U字状	0.83 × 0.55 × 0.61	黒褐色土 他	弥生土器	弥生後期前葉	
4	B7~C8	楕円形	播鉢状	0.57 × 0.48 × 0.26	黒褐色粘質土 他	弥生土器	弥生後期前葉	

表 9 自然流路一覧

流路 (SR)	地区	方向	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	A8~C12	北東~ 南西	レンズ状	3.00 × (7.20) × 1.00	黒褐色土 他	弥生土器・土師器 須恵器・石製品 木製品・種子	弥生中期後葉 ~古墳中期	

表 10 性格不明遺構一覧

性格不明遺構 (SX)	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	A・B4	不整形円形	逆台形状	0.85 × 0.95 × 0.25	黒褐色土 他	弥生土器	弥生後期前葉	
2	A4~C5	溝状	逆台形状	3.00 × 1.15 ~ 2.00 × 0.45	黒褐色土 他	弥生土器 石製品・木材	弥生後期前葉	
3	A6~C7	溝状	レンズ状	3.00 × 0.20 ~ 1.70 × 0.05 ~ 0.12	黒褐色土 他	弥生土器	弥生後期前葉	SX4を切る。
4	A6・7	円形	レンズ状	1.90 × (1.70) × 0.40	黒褐色土 他		弥生後期前葉以前	SX3に切られる。

表 11 SR1下層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	甕	口径 (19.8) 残高 4.0	短く外反する口縁部。	ナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕	灰黄色 灰黄色	石 (1~2) ◎		
2	甕	口径 (21.6) 残高 5.4	「く」の字状口縁。口縁端部は「コ」 字状。	ヨコナデ ハケ(7本/cm)	ナデ ハケ(10本/cm)	にぶい橙色 にぶい橙色	石 (1) ◎		
3	甕	口径 (14.0) 器高 9.6	外傾する短い口縁部。	ナデ	ナデ 指頭痕	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石 (1~2) 金 ◎		
4	甕	底径 (5.9) 残高 18.0	平底の底部よりたちあがりをもつ。 胴部は細身である。	ナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕	黒褐色 褐灰色	石 (2) 金 ◎	煤付着	
5	甕	底径 (4.4) 残高 8.4	平底の底部にたちあがりをもつ。	ナデ	ケズリ	黒褐色 黒褐色	石 (1~2) ○		
6	甕	底径 5.2 残高 2.0	底部中央がわずかに凹む。	ハケ(5本/cm) ナデ 指頭痕	ハクリ	灰黄色 ハクリ	石 (1) ◎	黒斑	

釜ノ口遺跡 11 次調査

S R 1 下層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備 考	図版
				外面	内面				
7	甕	底径 (6.0) 残高 1.8	平底の底部。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 黄灰色	石 (1~2) 金 ◎		
8	甕	底径 (5.8) 残高 4.5	わずかに上げ底。	ナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1) ◎		
9	壺	口径 (13.4) 残高 3.2	口縁端面に2条の凹線文。	ナデ	ナデ	浅黄色 灰黄色	砂粒 金 ◎		
10	壺	口径 (13.4) 残高 7.8	直立し外反する口頸部。	ナデ	ハケ(6本/cm) 指頭痕	黄灰色 にぶい黄橙色	石 (1) 金 ◎		
11	壺	口径 11.8 残高 8.7	外傾してわずかに外反する口縁部。	ハケ(6本/cm)	ハケ(6本/cm) →ナデ	黄灰色 黄灰色	石・長 (1~2) ◎	煤附着	
12	壺	口径 (20.6) 残高 8.7	外反する口縁部。	ハケ(9本/cm) 指頭痕	ナデ 指頭痕	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石 (1~3) ◎	黒斑	
13	壺	口径 (16.4) 残高 4.4	直立する短い口縁部。口縁端部は「コ」字状で水平である。	ナデ	ナデ ハケ(6本/cm)	にぶい黄橙色 にぶい黄褐色	砂粒 ◎	黒斑	
14	壺	残高 4.1	頸部に1条の凸帯文を巡らし、ヘラ状工具による斜格子目文を施す。	ナデ	ナデ 指頭痕	灰黄色 灰黄色	石 (1) 金 ◎		
15	壺	口径 (16.0) 残高 4.7	外傾する口縁部。土師器。	ヨコナデ ハケ	ヨコナデ ヘラケズリ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	砂粒 ◎		

表 12 S R 1 上層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備 考	図版
				外面	内面				
16	甕	口径 (15.8) 残高 6.5	「く」の字状口縁。	ナデ ハケ(7本/cm)	ナデ 指頭痕	暗灰黄色 暗灰黄色	石 (1~2) ◎	黒斑	
17	甕	口径 (18.0) 残高 4.5	「く」の字状口縁。口縁端部は「コ」字状。	ヨコナデ ナデ	ナデ	灰黄褐色 にぶい黄橙色	石 (1) ◎		
18	甕	口径 (15.6) 残高 5.9	「く」の字状口縁。口縁端部に凹線文2条あり。	ヨコナデ ハケ(9本/cm)	ハケ(9本/cm) →ナデ 指頭痕	にぶい黄橙色 灰黄褐色	石 (1~2) 金 ◎	煤附着	
19	甕	底径 3.8 残高 3.5	くびれの上げ底。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 橙色	石 (1) ◎	黒斑	
20	甕	底径 (5.0) 残高 4.4	くびれの上げ底。	ナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕	灰黄褐色 黄灰色	石 (1~2) 金 ◎		
21	甕	底径 6.2 残高 5.9	くびれの上げ底。大型品。	ハケ→ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石 (1~2) ◎		
22	壺	口径 (16.0) 残高 5.4	短く外反する口縁部の端部は拡張され、口縁端面にヘラ状工具による5本の沈線文を施す。	ハケ(4本/cm) ナデ	ナデ 指頭痕	にぶい黄褐色 にぶい黄橙色	石 (1) ◎		
23	壺	口径 (14.0) 残高 11.1	外反する口縁部。口縁端部は上下に拡張され2条の凹線文を施す。	ハケ(4~5本/cm) →ナデ	ハケ(4~5本/cm) →ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1) 金 ◎		
24	壺	口径 (10.0) 残高 15.9	短く外傾してたちあがる口縁部。	ハケ(4本/cm)	ハケ(4~5本/cm) →ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1~2) ◎		
25	壺	底径 (4.6) 残高 18.2	胴部中位に張りをもつ。底部は平底。	ハケ→ナデ ミガキ	ハケ(7本/cm) →ナデ	にぶい橙色 褐灰色	石 (1~3) ◎	黒斑	
26	壺	胴部径 (16.8) 残高 6.0	胴部中位に最大径を測り、3条の沈線文を施す。	マメツ	ナデ 指頭痕	灰黄色 灰黄色	石・長 (1~5) ◎	接合痕	
27	壺	残高 4.1	頸部に2条の刻目凸帯文を巡らす。	ナデ	マメツ	橙色 にぶい黄橙色	石 (1~2) ◎		
28	壺	底径 (6.6) 残高 3.7	平底の底部。3条の線刻あり(ヘラ記号)。	ケズリ(ナデ)	ナデ 指頭痕	にぶい黄褐色 灰黄褐色	石 (1~2) 金 ◎		
29	壺	底径 (7.6) 残高 5.8	たちあがりをもつ厚い上げ底。	ハケ(8本/cm) →ナデ	ナデ	浅黄色・黒褐色 灰黄色	石 (1~3) 金 ◎	黒斑	
30	鉢	口径 13.0 底径 4.2 器高 12.2	小さな平底の底部より外傾する胴部、短く外反する口縁部。完形品。	ハケ(8本/cm) →ミガキ	ハケ(8本/cm) →ナデ	浅黄色 浅黄色	石・長 (1) ○		
31	鉢	口径 (12.0) 残高 8.1	肩部がわずかに張りをもち口縁部は直立する。口縁端部は尖り気味に細い。	指ナデ	ナデ 指頭痕	にぶい黄色 にぶい黄橙色	石 (1~2) ◎		
32	鉢	口径 (23.4) 器高 8.1	短く外反する口縁部。口端部は丸い。器壁が厚く粗雑な作り。	ナデ	ナデ 指頭痕	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石 (1~2) 金 ◎	接合痕	

遺物観察表

S R 1 上層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
33	鉢	口径 (22.4) 残高 4.8	短く外反する口縁部。口縁端部はナデによりわずかに凹む。	ヨコナデ ハケ(7~9本/cm)	ハケ(7本/cm)	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	砂粒 ◎	黒斑	
34	鉢	残高 9.7	外反する口縁部。頸部下に工具による刺突列点文を巡らす。	ナデ	指ナデ	浅黄色 灰黄色	石(1~2) 金 ◎		
35	鉢	底径 3.2 残高 3.5	小さな底部。底部中央部が凹む。	ナデ ハケ(6本/cm)	指ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石(1~2) ◎		
36	鉢	底径 6.4 残高 6.1	たちあがりをもつ上げ底。	ハケ(8本/cm) ハケ→ナデ	ハケ(7本/cm)	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石(1) 金 ◎		
37	コシキ	底径 5.2 残高 4.8	上げ底の底部に径2.1cmの穿孔。	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	石(1~2) ◎		
38	高坏	口径 (19.6) 残高 6.2	坏部片。口縁部がわずかに外傾し、口縁端部は「コ」字状。端部下外面に3条の凹線文を巡らす。	ナデ ミガキ	ミガキ	灰黄褐色 灰黄色	石・長(1) ◎		
39	高坏	口径 26.0 残高 9.0	稜をもって短く外反する口縁部。口縁端部は丸い。	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~5) 金 ◎		
40	高坏	口径 (25.8) 残高 4.5	稜をもって短く外傾する口縁部。口縁端部は水平な面をもつ。	ミガキ ヨコナデ	ミガキ ヨコナデ	橙色・黒色 にぶい橙色	石・長(1) 金 ◎		
41	高坏	底径 15.8 残高 8.9	円孔(φ1.2cm) 5ヶ。	ハケ(6本/cm) ナデ	ナデ	褐灰色 褐灰色	石・長(1~3) ◎		
42	高坏	底径 (22.8) 残高 5.5	「ハ」の字状に開く脚部。端部は凹む。	ハケ(7本/cm) ナデ	ヨコナデ ハケ(7本/cm)	にぶい黄色 にぶい黄色	石(1~2) ◎		
43	支脚	残高 11.1	中空。受部は「U」字状。	ナデ 指頭痕	ナデ 指頭痕	灰黄色 灰黄色	石・長(1~3) ◎		
44	蓋	つまみ径 2.6 残高 8.1	中央部が凹むつまみ。「ハ」の字状に広がる裾部。	ハケ(6本/cm) →ナデ	ナデ しぼり痕 指頭痕	にぶい黄橙色 褐灰色	石・長(1~2)雲母 ◎	黒斑	

表 13 S R 1 下層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
45	素材			4.10	6.20	0.95	40.80		
46	敲石	1/2		(9.20)	12.00	8.30	1,090.71		
47	砥石			16.95	9.70	6.30	1,418.78		
48	台石	完形		29.50	22.60	10.60	10,300.00		

表 14 S R 1 出土遺物観察表 木製品

(1)

番号	器種	残存	樹種	法 量			備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
49	杓子	完形	未同定	29.4	16.4	1.8	剝物。	27
50	机	約3/4	未同定	67.4	33.6	3.4	指物。	27-28
51	弓?	破片	竹	66.6	1.8	1.5	加工痕。	28
52	棒状加工品	破片	未同定	7.9	2.1	2.5	芯持ち材。加工痕あり。	
53	棒状加工品	破片	未同定	20.4	2.6	1.7	加工痕あり。	30
54	切りくず	破片	未同定	10.5	1.2	1.0	加工痕あり。	
55	切りくず	破片	未同定	15.8	5.6	1.7	加工痕あり。	
56	加工材	破片	未同定	6.9	2.3	2.3	芯持ち材。加工痕あり。	29
57	素材	破片	未同定	9.7	7.7	0.2	樹皮。	30
58	板材	破片	未同定	27.8	10.1	1.4	加工材。	
59	角材	破片	未同定	27.7	3.2	1.6	加工痕有り。	
60	柱材	破片	未同定	79.6	13.5	14.6	芯持ち材。加工痕あり。	30
61	杭	破片	未同定	15.2	2.3	2.1	芯持ち材。加工痕あり。	29

釜ノ口遺跡 11 次調査

S R 1 出土遺物観察表 木製品

(2)

番号	器種	残存	樹種	法 量			備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)		
62	杭	破片	未同定	13.6	2.6	2.5	芯持ち材。加工痕あり。先端つぶれ。	29
63	杭	破片	未同定	27.1	3.4	3.0	芯持ち材。加工痕あり。先端つぶれ。樹皮は白。	29
64	杭	破片	未同定	32.5	4.4	4.2	芯持ち材。加工痕あり。	29
65	杭	破片	未同定	45.3	6.6	6.8	芯持ち材。加工痕あり。	29
66	杭	破片	未同定	48.2	6.4	6.4	芯持ち材。加工痕あり。	29
67	杭	破片	未同定	66.0	6.1	6.7	芯持ち材。加工痕あり。先端つぶれ。	30
68	杭	破片	未同定	89.7	5.1	4.8	芯持ち材。加工痕あり。	30
69	杭	破片	未同定	63.9	6.0	6.0	芯持ち材。加工痕あり。先端つぶれ。	29-30
70	加工材	破片	未同定	16.2	4.9	4.0	芯持ち材。加工痕あり。	29
71	加工材	破片	未同定	19.3	3.1	1.5	芯持ち材。加工痕あり。	29
72	加工材	破片	未同定	41.2	5.5	5.2	芯持ち材。加工痕あり。	30
73	加工材	破片	未同定	43.7	8.1	7.7	芯持ち材。加工痕あり。	29
74	加工材	破片	未同定	78.4	4.9	3.6	芯持ち材。加工痕あり。	30
75	部材	破片	未同定	85.0	6.0	5.9		30
76	部材	破片	未同定	21.0	4.0	3.4		29
77	部材	破片	未同定	29.3	5.5	4.4		29
78	部材	破片	未同定	43.1	4.3	3.7	くびれは紐ずれか。	29

表 15 S X 2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
79	甕	口径 (18.0) 残高 6.4	「く」の字状口縁。口縁端部は「コ」字状。	ハケ(5本/cm) →ナデ	ハケ(4本/cm) →ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~2)金 ◎		
80	甕	底径 (6.0) 残高 2.6	上げ底の底部。	ナデ	工具によるナデ	褐灰色 にぶい黄橙色	石・長(1)金 ◎		
81	甕	底径 (4.4) 残高 2.0	わずかに上げ底の底部。	マメツ	指頭痕	灰黄色 灰黄色	石(1~2) ◎		
82	甕	底径 (4.3) 残高 1.8	小さな平底。	工具によるナデ	ナデ	灰色 浅黄色	石・長(1~3) ◎	黒斑	
83	壺	残高 2.9	複合口縁壺。口縁端部は丸みをもつ。	ナデ	ナデ	橙色 浅黄色	石・長(1) ◎		
84	壺	底径 (7.0) 残高 2.5	平底の底部。	工具によるナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~2) ◎		
85	壺	底径 7.0 残高 2.5	平底の底部。	ナデ	ハケ→ナデ	にぶい黄橙色 淡黄色	石・長(1~7) ◎	黒斑	
86	壺	底径 (6.7) 器高 2.5	丸みをもつ平底。	ナデ	工具によるナデ	にぶい黄橙色 黄灰色	石・長(1) ◎	黒斑	

表 16 S X 2 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
87	刃器	完形	サヌカイト	6.80	3.70	0.78	24.19		
88	敲石			(12.45)	(6.70)	(4.60)	479.64		

表 17 S X 3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
89	甕	底径 (8.4) 残高 3.9	平底の底部。	ナデ ◎ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 黄灰色	石・長(1~2) ◎	黒斑	

第5章 調査の成果と課題

釜ノ口遺跡9次・10次・11次調査では、縄文時代から古墳時代までの遺構や遺物を確認した。検出した遺構は、竪穴建物1棟、溝15条、自然流路1条、土坑12基、柵列6基、柱穴127基であり、遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、木器、種子などが出土した。以下、層位や集落変遷、及び出土品についてまとめを行う。

1. 層位

釜ノ口遺跡9次・10次・11次からは、広域テフラである始良 Tn 火山灰（AT 火山灰）を検出した。遺跡が所在する小坂地区では釜ノ口遺跡7次・8次調査で AT 火山灰が検出されているが、この火山灰は石手川左岸に所在する東本遺跡や樽味遺跡がある桑原地区一帯に分布が確認されており、今回の発見により火山灰の分布が桑原地区の西方まで広がっていることがわかった。このことは、平野内における AT 火山灰の分布範囲を知るうえで貴重な調査成果となる。さらに、旧地形は現在の地表面と同じく北東から南西に向けて傾斜していることも判明した。

2. 遺跡の変遷

(1) 縄文時代

釜ノ口遺跡10次調査からは、縄文時代早期の石鏃1点と縄文時代晩期の土器片1点が出土した。石鏃は弥生時代後期の溝SD2から出土したもので、小坂地区では釜ノ口遺跡1次調査にて同時期の石器が出土しているが、松山平野内では同時期の遺物の出土は極めて少ない。また、晩期の土器（深鉢）は弥生時代後期の溝SD7から出土したものであり、小坂地区では初例である。このように、縄文時代の資料は少なく、今後は周辺調査において縄文期における集落遺構の検出が期待される。

(2) 弥生時代

釜ノ口遺跡9次・10次・11次では、主に弥生時代後期の遺構や遺物を確認した。まず、9次調査からは後期前葉の溝1条と中葉の溝2条のほか、後期段階の溝2条を検出した。このうち、溝SD3からは完形品を含む大量の土器が出土した。この中には豊後地方や西南四国地方からの搬入品（もしくは外来系）や様々な線刻を施した土器、赤色顔料の付着する土器などが含まれている。土器以外では、木器や種子が数多く出土した。木器には杓子状木製品や竪杵、サザエ突きなどの製品と、平鍬や泥よけ具などの未製品とがあり、建築用部材や杭（最終的には薪として使用したものあり）もある。

次に10次調査では竪穴建物や溝、土坑、柵列など、弥生時代後期を通して様々な遺構が検出された。このうち、SB1は一辺4.6m以上を測る円形竪穴建物で、炭化材や焼土を検出したことから焼失住居と考えられる。周辺調査でも、釜ノ口遺跡6次・7次・8次調査にて同様の焼失住居が検出されており、当地における該期の共通した住居廃絶の様子がみてとれる。また、本調査で検出した6基の柵列は、長楕円形状の掘り方をもつ柱穴で構成されており、弥生後期を通して段階的に構築されていたこ

とが判明している。

11次調査では、土坑状の掘り方をもつ性格不明遺構4基と自然流路1条を検出した。前者は後期前葉に時期比定される遺構である。一方、後者のSR1は検出幅7.2mを測る南北方向に流れる流路で、粘性の強い黒褐色土や黒色土及び灰色砂で埋没している。流路内からは弥生時代中期後葉から後期中葉に時期比定される土器がまとまって出土したほか、古墳時代中期に時期比定される土器と杭や木製の机などが出土した。出土した杭の中には縦方向と横方向に組み合わせられたものがあり、何らかの護岸施設が存在した可能性が高い。稀少範囲の調査であったため、詳細については不明な点が多いが、少なくとも弥生時代中期後葉には流路が存在しており、その後、杭を使用した施設が流路内に存在していたものと考えられ、最終的な流路の埋没は出土した土器器片の特徴より古墳時代中期頃と考えられる。

多数の木製品が出土した釜ノ口遺跡は、松山平野内における弥生時代後期の重要な集落と考えられ、本調査を含め広い範囲での集落の構造を究明しなければならない。

(3) 古墳時代

釜ノ口遺跡9次・10次調査からは、古墳時代後期の遺構と遺物を確認した。9次調査では溝1条(SD1)を検出し、10次調査では溝3条(SD5・6・8)と土坑4基(SK6・7・10・12)を検出した。検出した溝は水路的な機能を有するものと推測されるが建物址は検出されておらず、溝の性格を含め、該期の集落様相は不明な点が多い。小坂地区では同時代の資料が少なく、今後の調査により古墳時代集落の様相解明が期待される。

3. 釜ノ口遺跡9次調査出土の木器・種子

弥生時代後期の溝SD3からは、大量の土器と共に数多くの木製品や木材が出土した(図版14～17)。木製品には堅杵や梯子、杓子状木製品、サザエ突きのほか平鋏や泥よけ具などの未製品が含まれている。そのほか、板状や棒状の加工品や建築部材、杭、薪などが出土している。とりわけ、製品を含む多くの木器は溝中央部付近に集中しており、粘質性の強い土壌内に埋没している。本調査出土の木器については、株式会社古環境研究所に分析を依頼して樹種同定を行った(表18)。その結果、使用された木材は様々で、堅杵はヤブツバキ、梯子はシイ属、杓子状木製品はサクラ、サザエ突きや平鋏、泥よけ具はブナ科(コナラ属アカガシ亜属)である。そのほかには、マツ科(ツガ・マツ属複雑維管束亜属)、ブナ科(ツブラジイ・シイ属・コナラ属クヌギ節)、カツラ、サカキ、スノキ、カキノキなどがある。

このほか、SD3からは144点の種実が出土した。内訳は溝下層の③層中から73点、中層の②層中から11点、上層の①層中からは60点が出土している。木器と同様、株式会社古環境研究所に依頼して種実同定や花粉分析を行った。その結果、出土した種実は樹木類と草本類であった。内訳はモモ核(75点)が主体であり、次いでヒョウタン類(39点)、ウリ類(22点)が続く。このほかにはヤマモモ(3点)、ブナ科果皮(3点)、ツブラジイ(2点)がある。花粉分析の結果からは、調査地や近隣地域では当時、イネ科やヨモギ属などが生育する環境であり、周辺では水田耕作やアブラナ科やソバ属などの畑作が営まれていたと推測されている。モモやヒョウタン類、ウリ類は栽培植物であり、これらの植物も調査地や周辺地域にて栽培されていたものと考えられている。

調査の成果と課題

表 18 釜ノ口遺跡 9 次調査出土の木器一覧

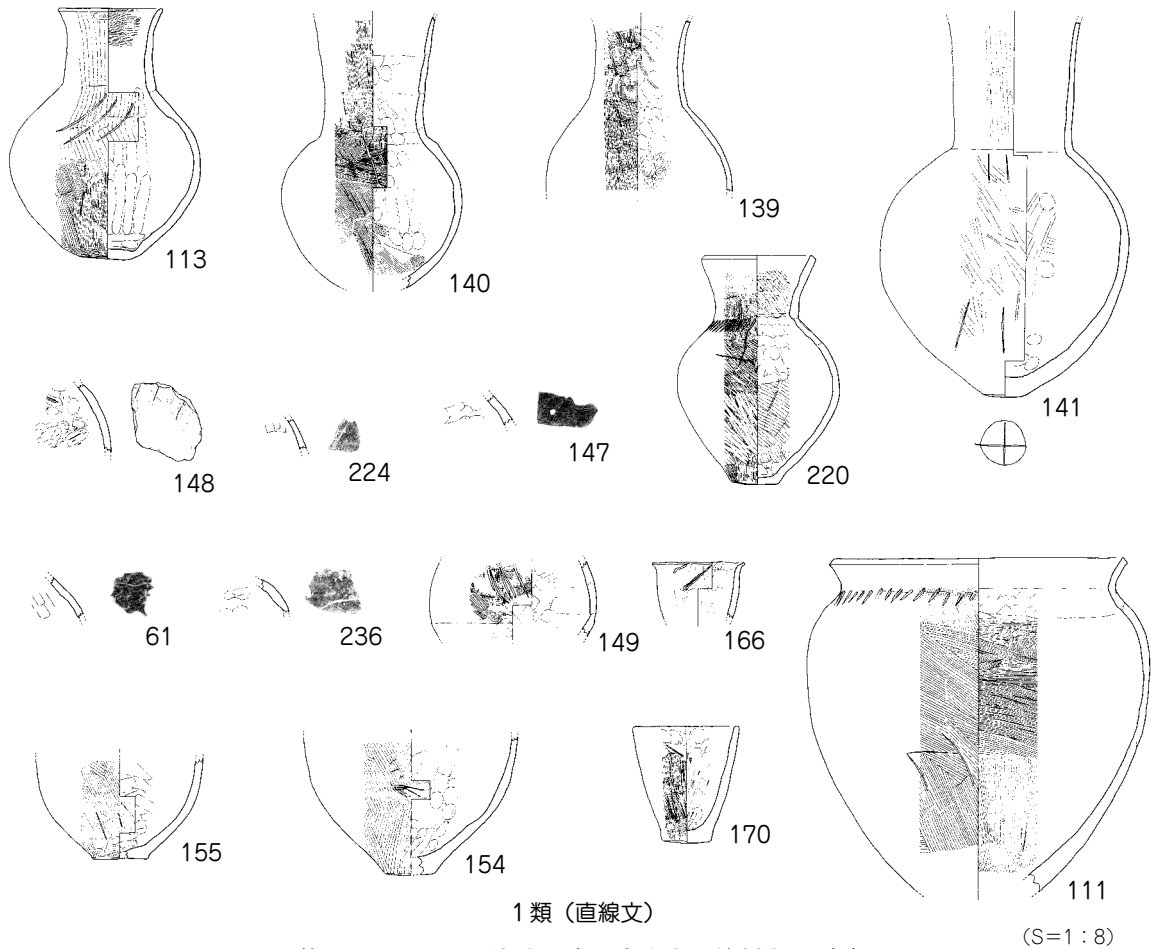
報告書 番号	器 種	出土層位	法 量			材 質	備考
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)		
24	杓子状木製品	3層	49.0	16.2	3.3	サクラ属	
25	竪杵	3層	49.4	7.0	6.3	ヤブツバキ	
26	梯子	3層	46.0	13.1	6.0	シイ属	
27	サザエ突き	3層	79.6	3.5	3.0	コナラ属アカガシ亜属	
28	平鋏	3層	25.2	18.0	4.6	コナラ属アカガシ亜属	未製品
29	泥よけ具	3層	33.0	22.0	7.9	コナラ属アカガシ亜属	未製品
30	泥よけ具	3層	35.2	23.7	7.7	コナラ属アカガシ亜属	未製品
31	網の杵?	3層	15.6	2.1	1.8	カツラ	
32	器種不明の木製品	3層	10.6	4.6	1.6	コナラ属アカガシ亜属	
33	板状加工材	3層	23.7	11.0	1.0	コナラ属アカガシ亜属	
34	棒状加工品	3層	34.7	4.4	2.6	カツラ	
35	加工材	3層	63.7	9.0	4.4	コナラ属クスギ節	
36	加工材(杭状)	3層	55.6	6.4	5.6	サクラ属?	
37	杭	3層	40.3	2.6	2.2	サカキ	
38	杭	3層	42.5	6.1	4.3	サカキ	
39	建築部材	3層	119.2	10.1	9.4	サクラ属?	
40	薪	3層	82.1	2.9	1.8	アワブキ属	
41	薪	3層	15.6	4.6	1.6	マツ属複雑維管束亜属	
42	樹皮	3層	15.7	6.3	0.2	サクラか樺	
75	棒状加工品	2層	115.1	3.0	3.0	ツブラジイ	
76	棒状加工品	2層	27.8	3.5	2.3	カヤ	
77	棒状加工品	2層	55.2	2.8	1.3	シイ属	
78	板状加工品	2層	34.6	3.0	0.9	シイ属	
79	部材片	2層	37.4	9.0	8.3	サクラ属	
80	加工材(杭状)	2層	33.6	3.5	3.3	マツ属複雑維管束亜属	
81	加工材(杭?)	2層	19.2	1.6	1.1	ムクノキ	
82	杭	2層	63.0	2.7	2.2	散孔材	
83	杭	2層	59.6	4.1	3.1	スノキ属	
84	薪	2層	21.4	5.0	6.6	シイ属	
85	薪	2層	17.4	3.8	3.1	カヤ	
206	器種不明の木製品	1層	22.0	5.7	2.3	コナラ属クスギ節	
207	器種不明の木製品	1層	17.0	1.9	1.8	ヒノキ	
208	器種不明の木製品	1層	17.1	3.9	0.6	コナラ属アカガシ亜属	
209	板状加工品	1層	69.0	23.0	1.8	ヒノキ	
210	棒状加工品	1層	21.6	2.4	1.4	コナラ属アカガシ亜属	
211	棒状加工品	1層	19.9	1.9	0.9	カキノキ属	
212	加工品片	1層	6.9	2.5	1.6	散孔材	
213	建築部材?	1層	131.3	19.6	4.8	スノキ属	
214	部材片	1層	16.5	3.6	2.0	ヒノキ	
215	杭?	1層	8.0	4.3	4.2	マツ属複雑維管束亜属	
216	杭	1層	15.7	2.4	0.9	針葉樹	
217	薪	1層	10.8	7.2	4.1	ヒノキ	

4. 釜ノ口遺跡9次調査出土の線刻土器・搬入品（外来系土器）

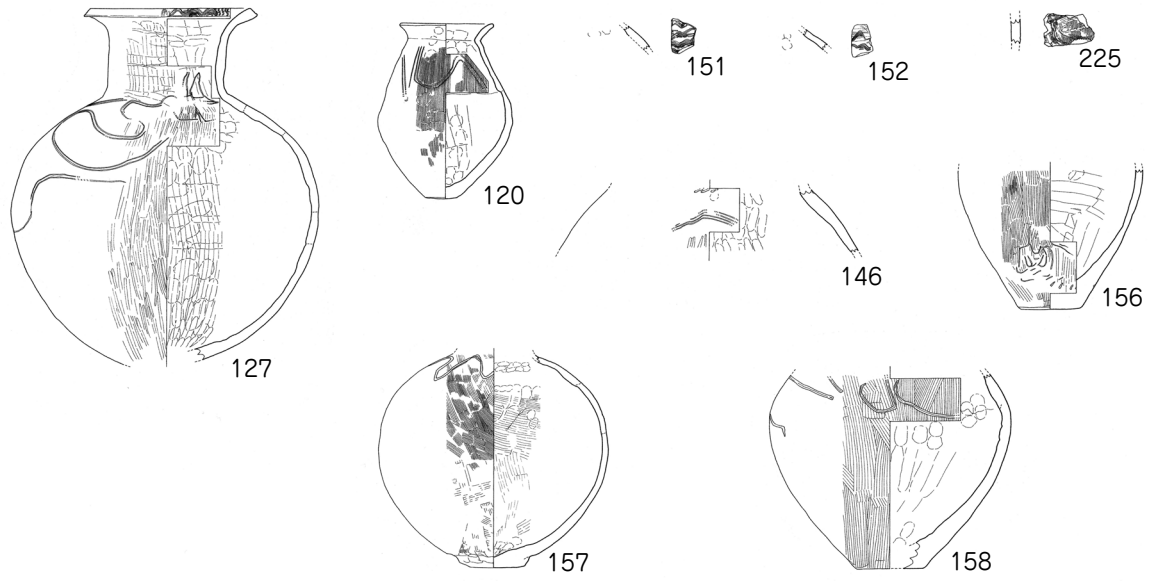
釜ノ口遺跡9次調査では弥生時代後期の溝SD3とSD6より、線刻を施した土器が破片を含めて36点出土した。線刻は波状のものや鳥足状のもの、弧状のものなど様々である。器種の内訳では甕形土器1点、壺形土器32点、鉢形土器3点である。これらを、以下の4種類（1類～4類）に分類した（第81・82図、表19、図版11～13）。

1類（直線文）は複数の沈線が直線的に描かれたもので16点あり、全体の44%を占めている。次いで、2類（波状文）は9点ある。また、3類（鳥足状文）は鳥の足跡のような線刻が描かれるもので7点ある。なお、鉢形土器に描かれる線刻は1類、甕形土器に描かれる線刻は3類のみである。4類は弧状の線刻が描かれたもので、4点ある。最も線刻の多い壺形土器では、長頸壺、細長頸壺、複合口縁壺などに描かれている。部位をみると、肩部が最も多く18点あり、全体の50%を占め、次いで胴部、頸部の順となり、1点のみ複合口縁壺の口縁部に施されている。

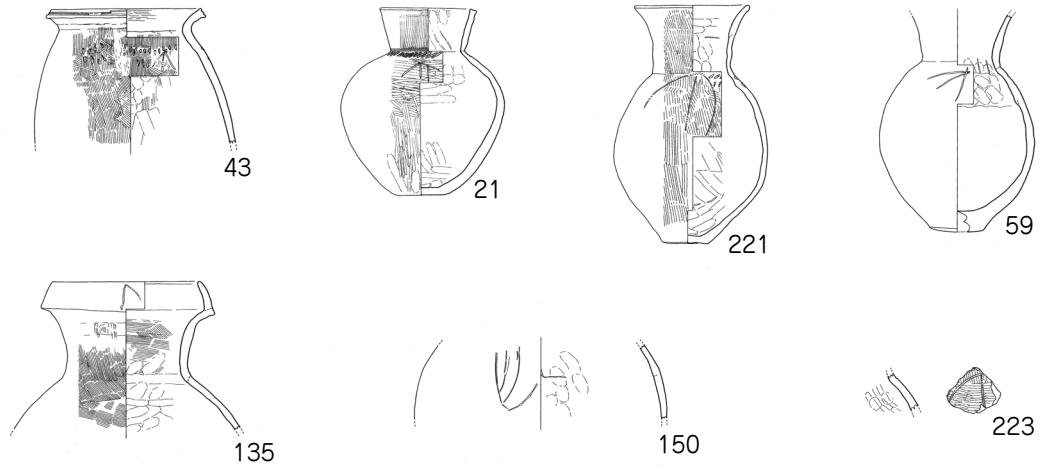
このほか、溝SD2とSD3からは搬入土器や外来系土器が合わせて18点出土している。このうち、搬入品と考えられる豊後産の壺形土器（完形品）は両溝から1点ずつが出土し、SD3からは西南四国型の甕形土器11点と壺形土器4点が出土した。なお、西南四国型土器のうち、2点の壺形土器（口縁部片）には赤色顔料が付着している。



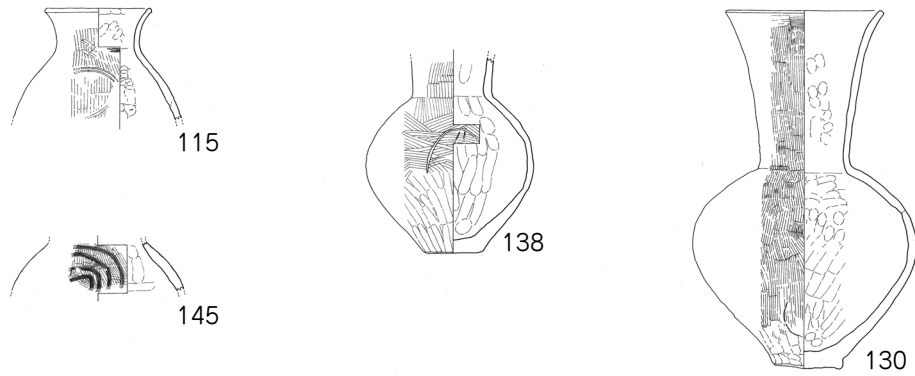
第81図 釜ノ口遺跡9次調査出土の線刻土器（1）



2類 (波状文)



3類 (鳥足状文)



4類 (弧状文)

(S=1:8)

第82図 釜ノ口遺跡9次調査出土の線刻土器(2)

表 19 釜ノ口遺跡 9 次調査出土の線刻土器一覧

分類番号	掲載番号	器種	出土遺構	出土層位	施文部位
1 類 (直線文)	61	壺	SD3	2 層	肩部
	111	鉢	SD3	1 層	胴下部
	113	長頸壺	SD3	1 層	肩部
	139	細長頸壺	SD3	1 層	頸部
	140	細長頸壺	SD3	1 層	肩部
	141	細長頸壺	SD3	1 層	肩部・胴下部
	147	壺	SD3	1 層	肩部
	148	壺	SD3	1 層	胴上部
	149	壺	SD3	1 層	胴上部
	154	壺	SD3	1 層	胴下部
	155	壺	SD3	1 層	胴下部
	166	鉢	SD3	1 層	口縁～胴上部
	170	鉢	SD3	1 層	胴上部
	220	長頸壺	SD3	層不明	胴上部
	224	壺	SD3	層不明	胴上部
	236	壺	SD6	1 層	肩部
	2 類 (波状文)	120	短頸壺	SD3	1 層
127		長頸壺	SD3	1 層	頸～胴上部
146		壺	SD3	1 層	肩部
151		壺	SD3	1 層	肩部
152		壺	SD3	1 層	肩部
156		壺	SD3	1 層	胴下部
157		壺	SD3	1 層	肩部
158		壺	SD3	1 層	肩～胴上部
225		壺	SD3	層不明	胴部
3 類 (鳥足状文)	21	長頸壺	SD3	3 層	肩部
	43	甕	SD3	3 層	胴上部
	59	長頸壺	SD3	2 層	肩部
	135	複合口縁壺	SD3	1 層	口縁部
	150	壺	SD3	1 層	胴上部
	221	長頸壺	SD3	層不明	肩～胴上部
	223	壺	SD3	層不明	肩部
4 類 (弧状文)	115	長頸壺	SD3	1 層	肩部
	130	細長頸壺	SD3	1 層	胴下部
	138	長頸壺	SD3	1 層	胴上部
	145	壺	SD3	1 層	肩部

写真図版

写真図版 1 ～ 17：釜ノ口遺跡 9 次調査

写真図版 18 ～ 22：釜ノ口遺跡 10 次調査

写真図版 23 ～ 30：釜ノ口遺跡 11 次調査

写真図版データ

1. 遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35mm判フィルムカメラ・デジタルカメラで補足している。一部の撮影には高所作業車・やぐらを使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド 45A	レンズ	スーパーアンギュロン 90mm他
	アサヒペンタックス 67		ペンタックス 67 55mm他
	ニコンニュー FM 2		ズームニッコール 28～85mm他
フィルム	白黒ネオパン SS・アクロス		

2. 遺物は、4×5判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カメラ	トヨビューー 45G
レンズ	ジンマー S 240mm F 5.6 他
ストロボ	コメット /CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド 101
フィルム	ネオパンアクロス

3. 単色図版は、一部を除き、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸機	ラッキー 450MD・90MS
レンズ	エル・ニッコール 135mm F5.6A・50mm F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードIV RC ペーパー

4. 製版：写真図版 175 線
印刷：オフセット印刷
用紙：マットコート 73.5kg

【参考】『埋文写真研究』 vol.1～20・『報告書制作ガイド』『文化財写真研究』 vol.1～4

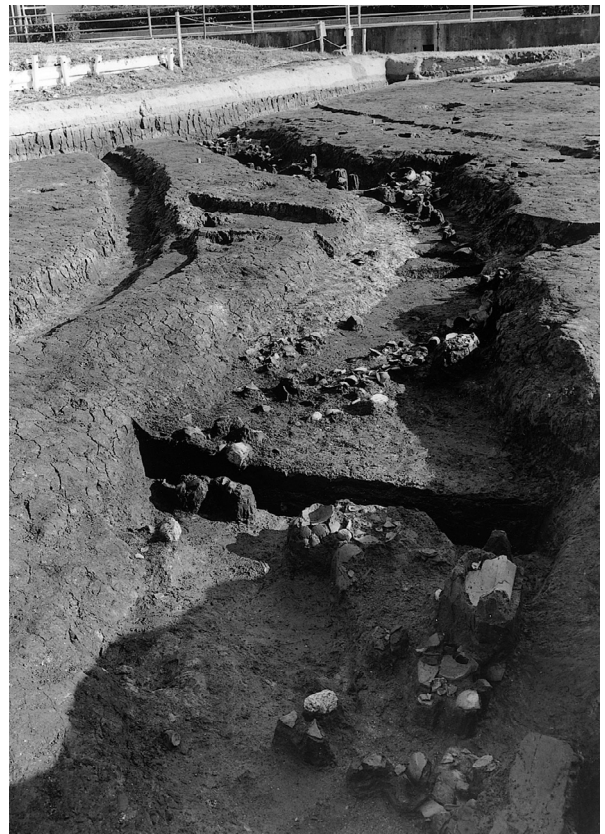
[大西 朋子]



1. 遺構検出状況（東より）



2. SD2 遺物出土状況（南西より）



3. SD3 遺物出土状況①（南西より）



1. SD3遺物出土状況②
(東より)



2. SD3遺物出土状況③
(南より)



3. SD3遺物出土状況④
(南より)



1. SD3遺物出土状況⑤（東より）



2. SD3・SD6完掘状況（東より）



1. SD2・SD3完掘状況（北東より）



2. 遺構完掘状況（東より）



1. SD2・SD3(3層)出土遺物 (SD2:9・12、SD3(3層):18・19・22・23)



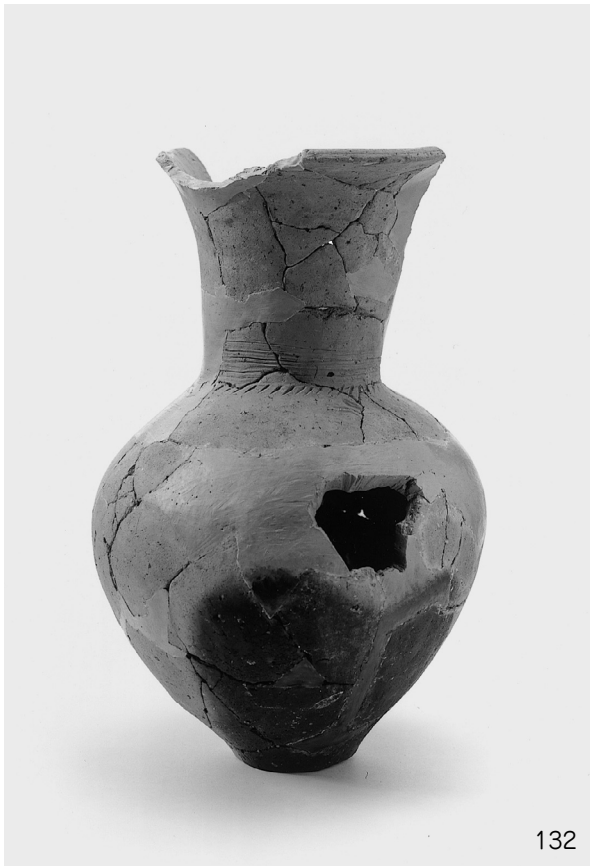
1. SD3(2層)出土遺物



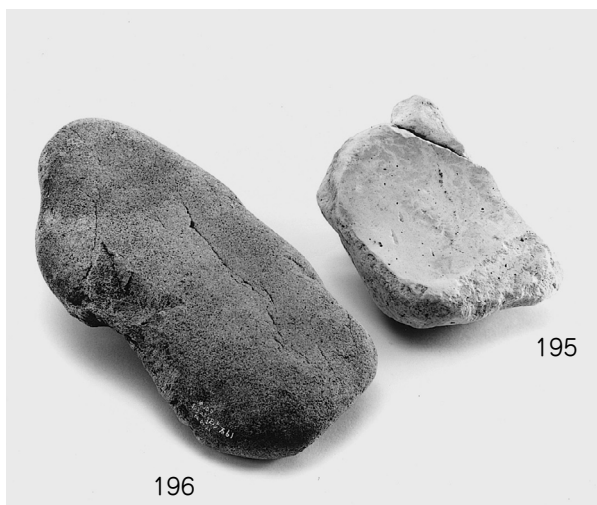
1. SD3(1層)出土遺物①



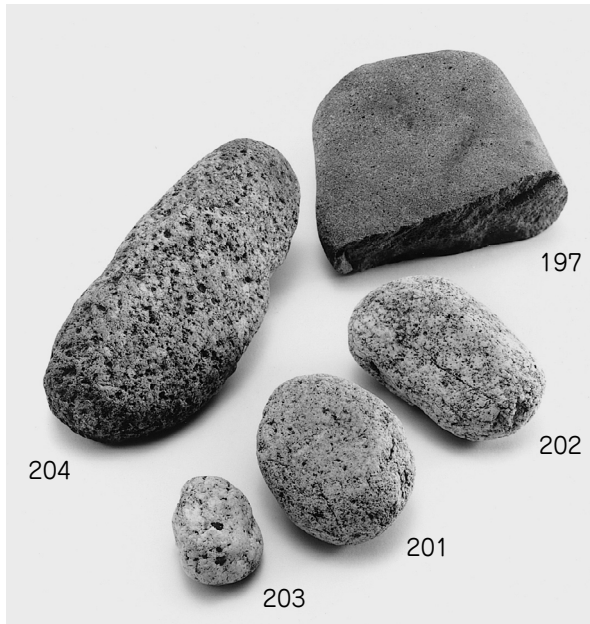
1. SD3(1層)出土遺物②



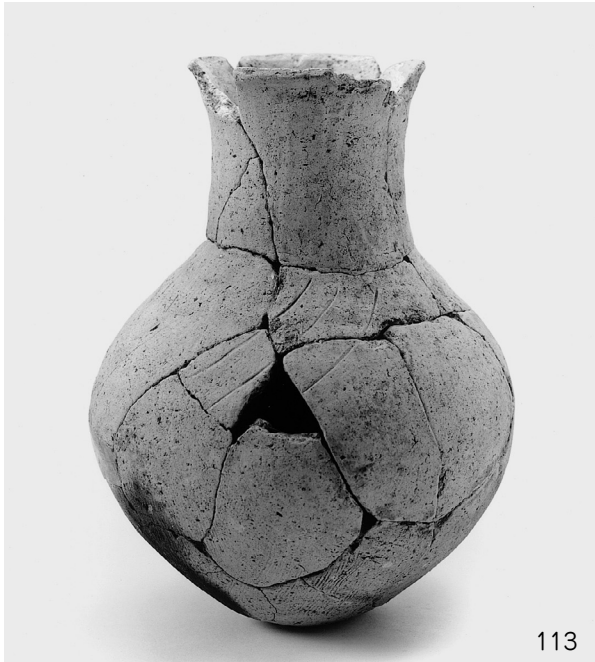
1. SD3(1層)出土遺物③



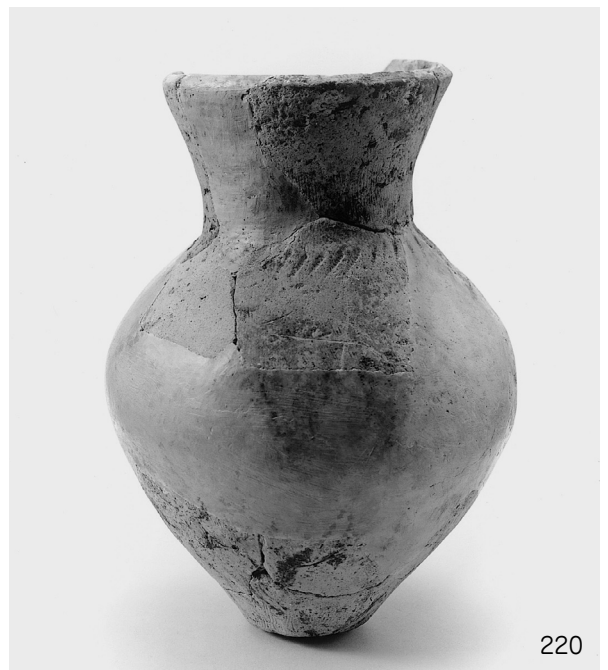
1. SD3(1層)出土遺物④



1. SD3出土遺物(1層⑤:197・201～205、層不明:218・222・228)、SD3出土の線刻土器①(21・43)



1. SD3出土の線刻土器②

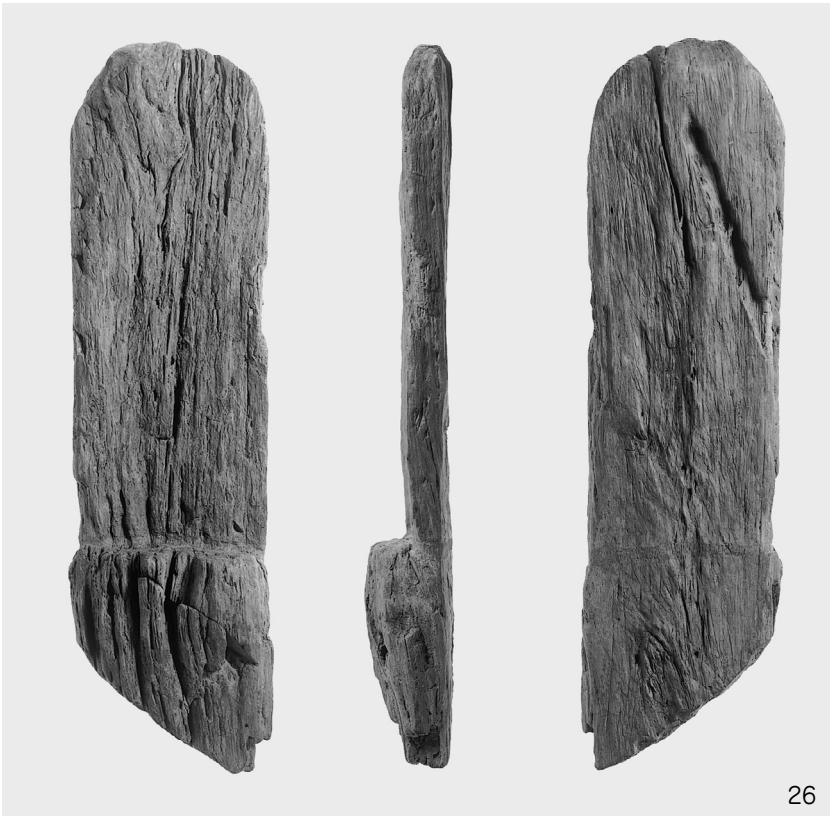


1. SD3出土の線刻土器③

図
版
14



24

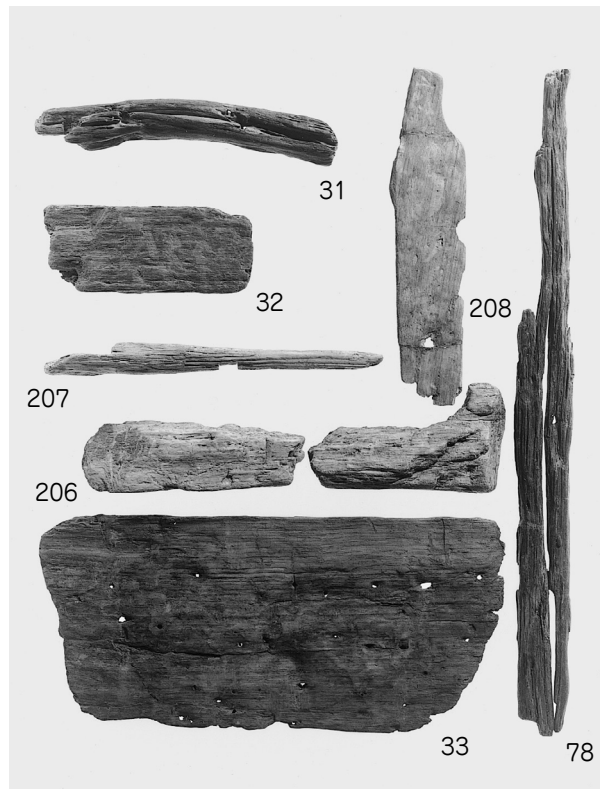


26

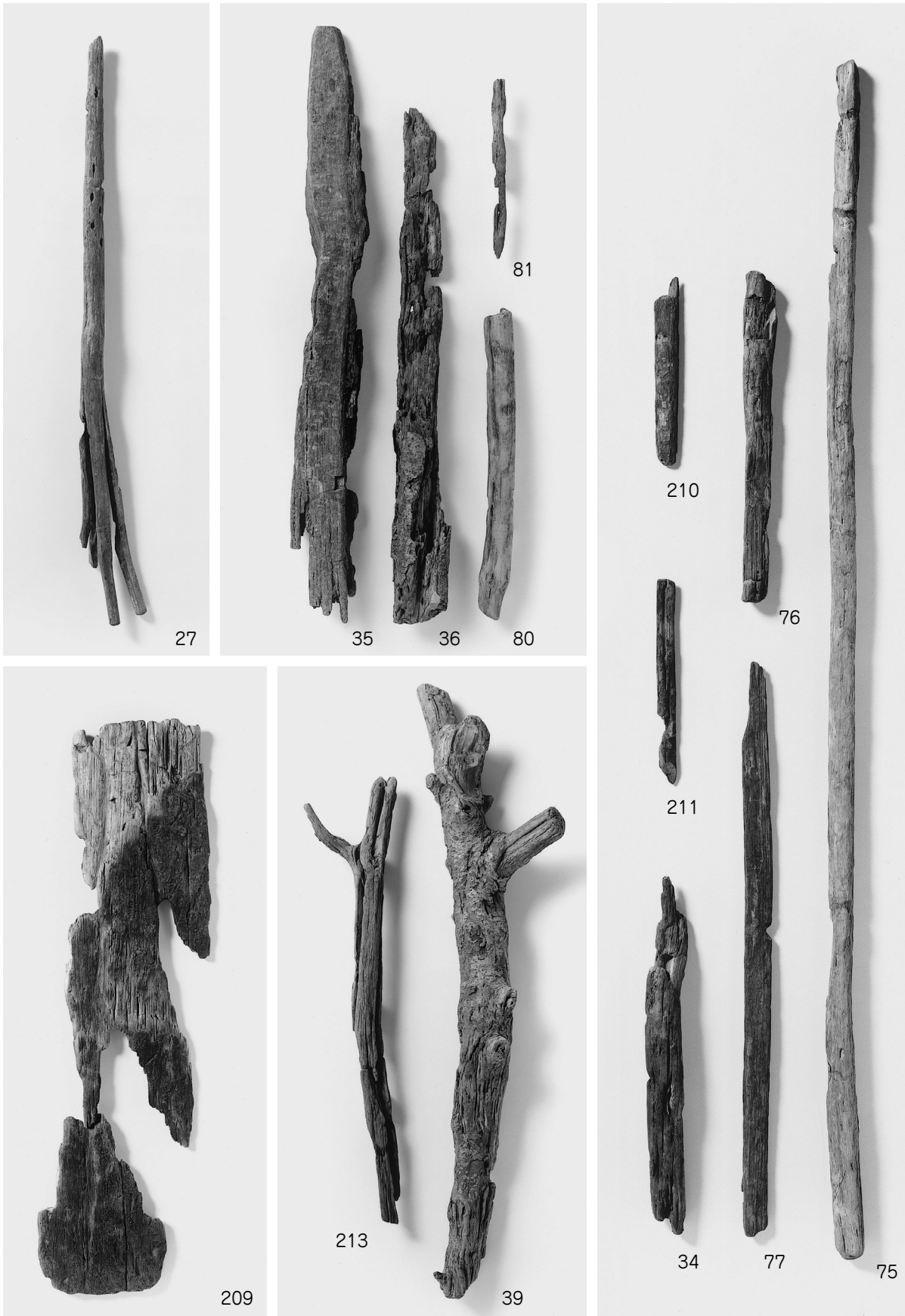


25

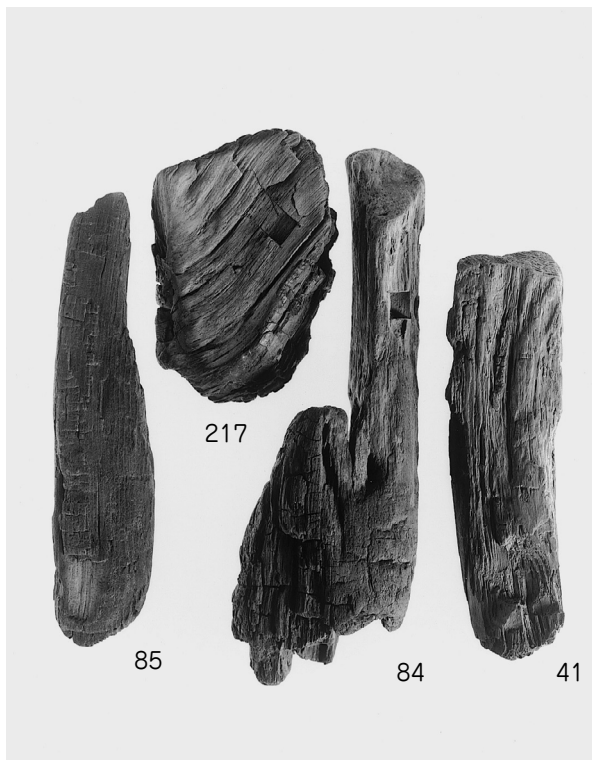
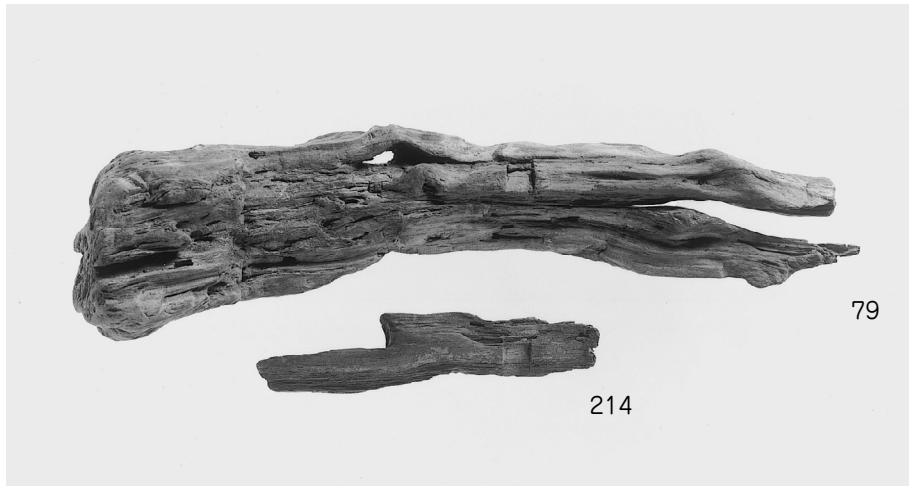
1. SD3出土の木製品①



1. SD3出土の木製品②



1. SD3出土の木製品③



1. SD3出土の木製品④



1. 東半部完掘状況（北より）



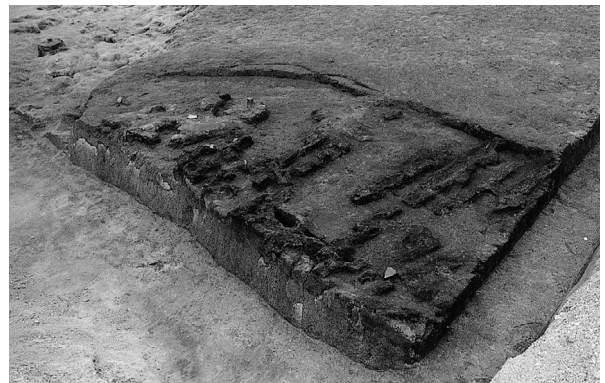
2. 中央部完掘状況（北より）



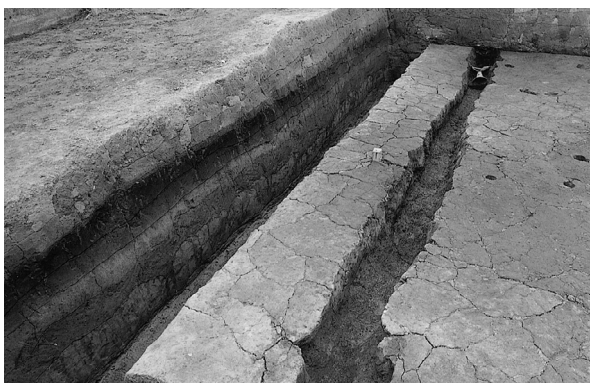
1. 西半部完掘状況 (東より)



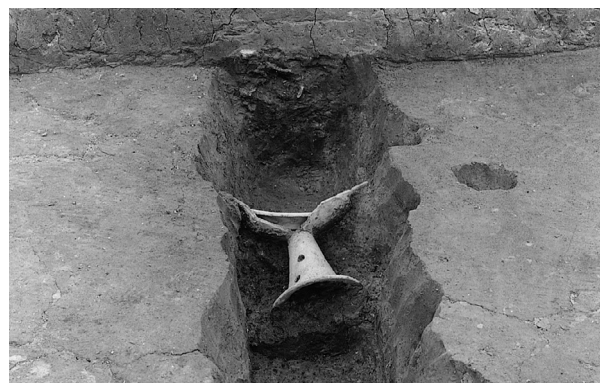
2. SB1完掘状況 (南東より)



3. SB1遺物出土状況 (北東より)



4. SD1遺物出土状況① (東より)



5. SD1遺物出土状況② (東より)



1. SD7 遺物出土状況① (北西より)



2. SD7 遺物出土状況② (北西より)



3. SK1 遺物出土状況 (北より)



4. SK3 完掘状況 (西より)



5. SA1 完掘状況 (南西より)



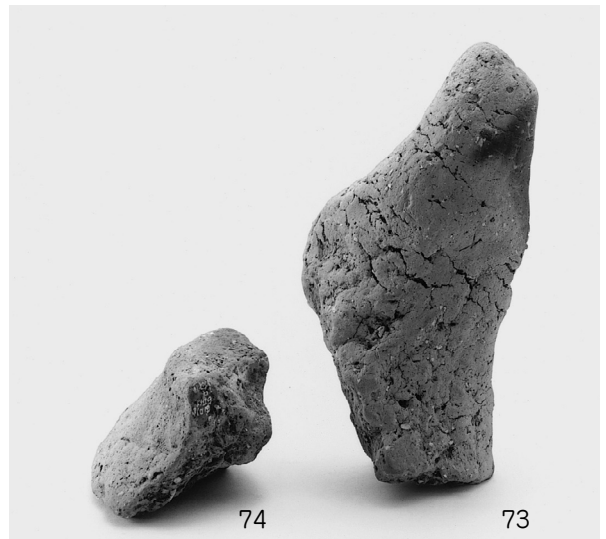
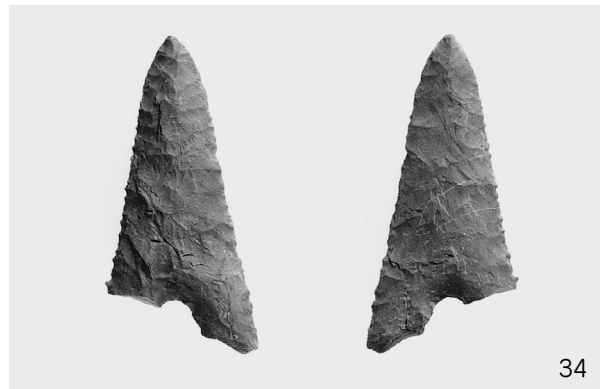
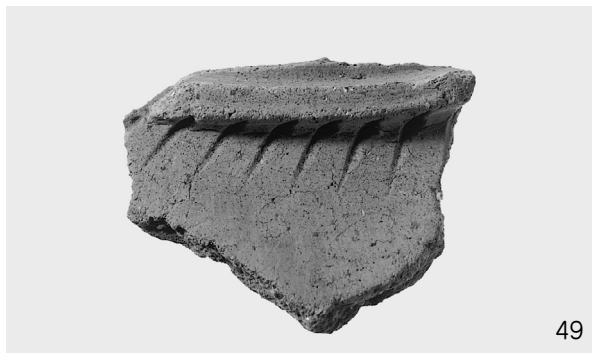
6. SA1 遺物出土状況 (南西より)



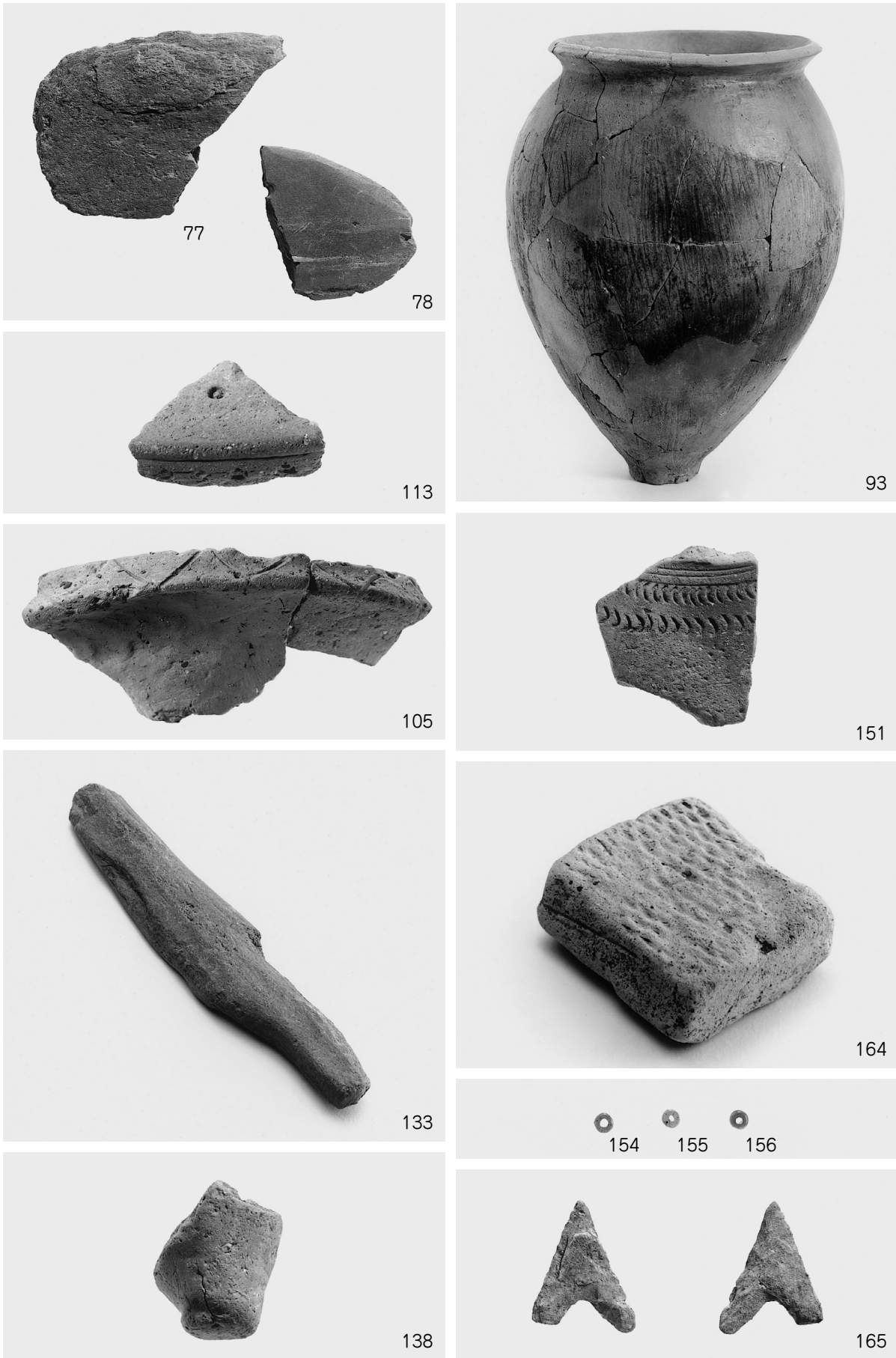
7. SA4・SA5 完掘状況 (南より)



8. SA6 遺物出土状況 (北東より)



1. 出土遺物① (SD 1 : 10・11、SD 2 : 28・34、SD 3 : 35、SD 7 : 49・73～75)



1. 出土遺物② (SD 7 : 77・78、SK 3 : 93、SK 8 : 105、SK 11 : 113、SA 6 : 133、SD 5 : 138、SK 12 : 151・154～156、第IV層 : 164、地点不明 : 165)



1. 遺構検出状況（西より）



2. SR1 遺物出土状況（北西より）



1. SR1 木製品出土状況（北より）



2. SR1 木製品出土状況（東より）



1. SR1 机出土状況（東より）



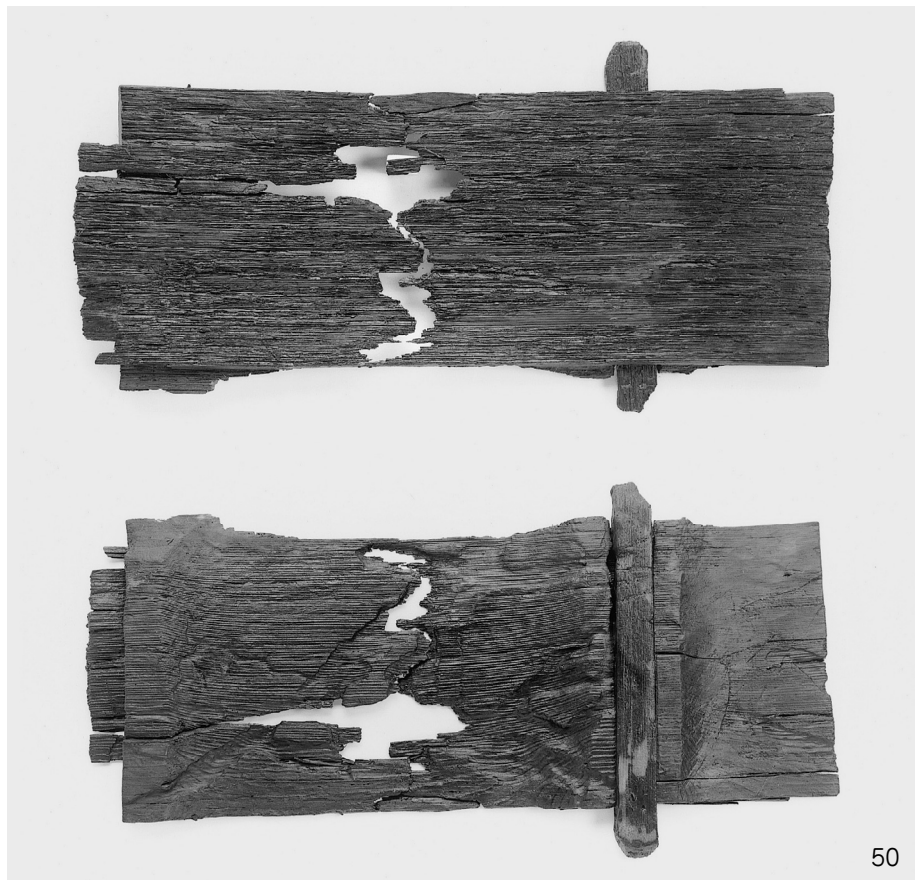
2. SR1 杓子出土状況（北より）



1. 遺構完掘状況（西より）



2. SR1 完掘状況（北東より）

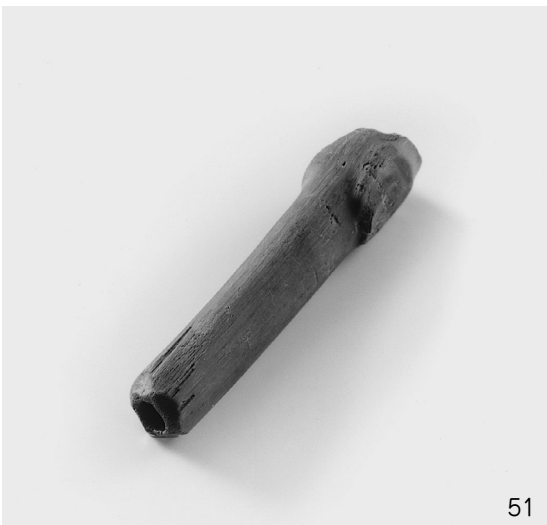


1. SR1 出土木製品①

図
版
28



50



51

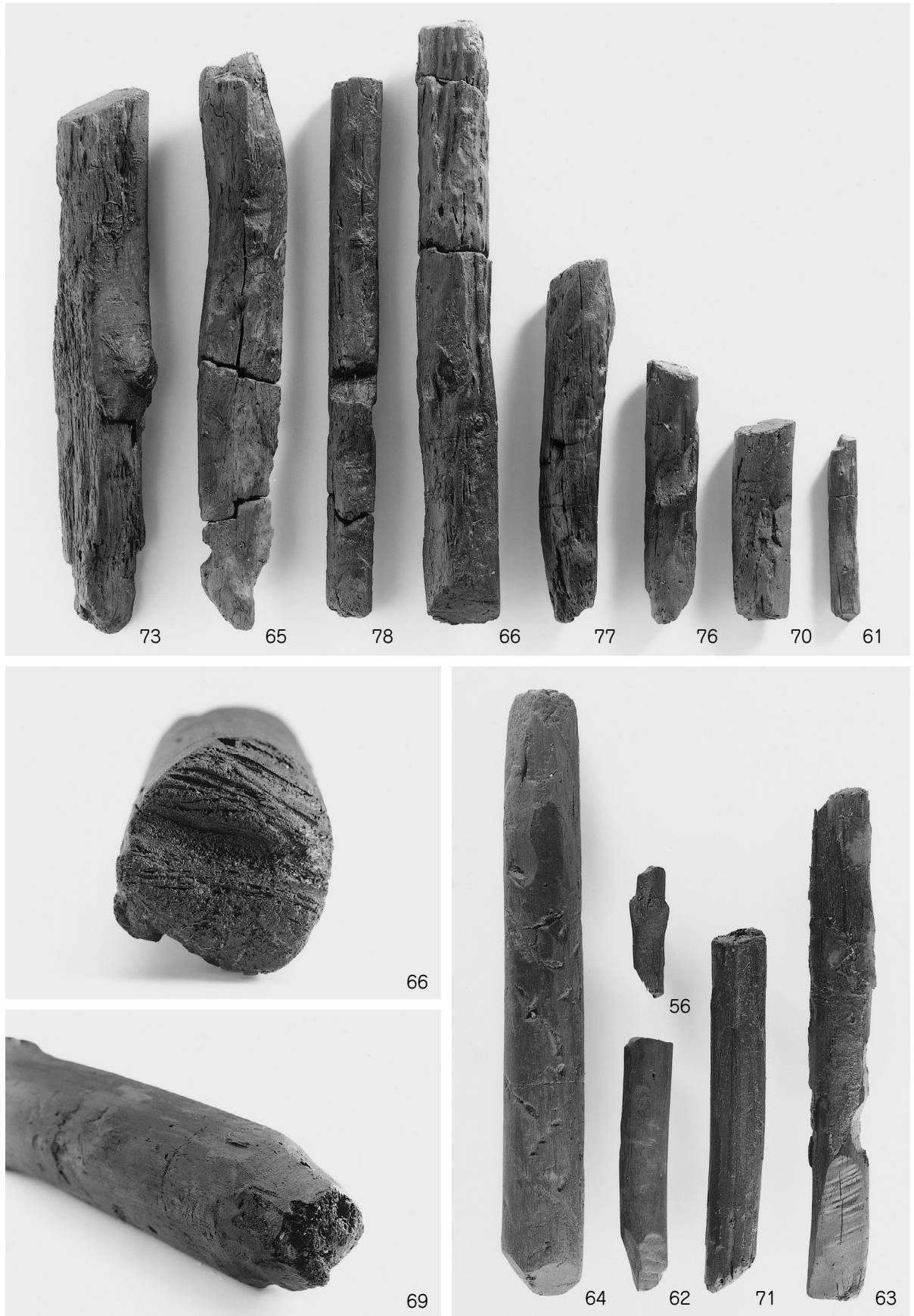


51



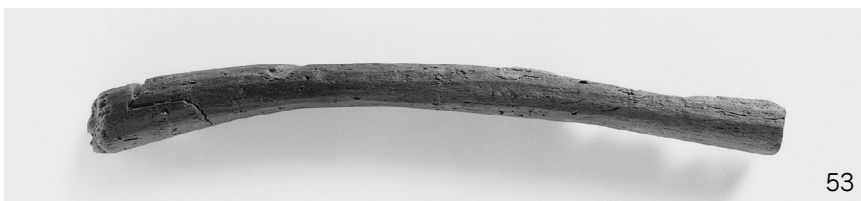
51

1. SR1 出土木製品②



1. SR1 出土木製品③

図
版
30



1. SR1 出土木製品④

報 告 書 抄 録

ふりがな	かまのくちいせき
書名	釜ノ口遺跡Ⅲ 9次・10次・11次調査
副書名	
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第174集
編著者名	水本 完児・高尾 和長・大西 朋子
編集機関	公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒791-8032 愛媛県松山市南斎院町乙67番地6 TEL 089-923-6363
発行年月日	西暦2014(平成26)年3月14日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' " (WGS84)	東経 ° ' " (WGS84)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かまのくちいせき 釜ノ口遺跡 9次調査	まつやましこさか 松山市小坂三丁目	38201	361	33° 49' 48" 387 33.830107500000004	132° 46' 48" 347 132.7800963888889	19991018 } 20000131	989.87	宅地開発
かまのくちいせき 釜ノ口遺跡 10次調査	まつやましこさか 松山市小坂四丁目	38201	369	33° 49' 41" 866 3.828296111111115	132° 46' 57" 327 132.78259083333336	20000410 } 20000804	2,514	宅地開発
かまのくちいせき 釜ノ口遺跡 11次調査	まつやましこさか 松山市小坂四丁目	38201	545	33° 49' 39" 999 33.8277775	132° 46' 44" 032 132.77889611111112	20101012 } 20101111	約68	宅地開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
釜ノ口遺跡 9次調査	集落	弥生 古墳	溝・柱穴 溝	弥生土器・石器・木器・種子 土師器・須恵器	弥生後期の溝から大量の土器や木器、種子が出土
釜ノ口遺跡 10次調査	集落	縄文 弥生 古墳	竪穴建物・溝・土坑・柵列 溝・土坑・性格不明遺構	縄文土器・石器 弥生土器・石器 土師器・須恵器	弥生後期の焼失住居を検出
釜ノ口遺跡 11次調査	集落	弥生 古墳	自然流路・柱穴・性格不明遺構 自然流路	弥生土器・石器・木器・種子 土師器・須恵器・木器	弥生～古墳時代の自然流路を検出し、流路内より木製机が出土

要 約	<p>今回報告する3遺跡では、縄文時代から古墳時代に至る遺構や遺物を確認した。縄文時代では釜ノ口遺跡10次調査において縄文時代早期と思われる石鏃や晩期の土器が出土した。弥生時代では3遺跡より竪穴建物をはじめ、溝や土坑などが確認された。このうち、9次調査検出の溝からは豊後地方や西南四国地方からの搬入品を含む大量の土器や石器のほか、杓子状木製品や堅杵、平鋏などの木器や種子が数多く出土した。また、11次調査検出の自然流路からは松山平野では初例となる木製の机が出土している。古墳時代では、9次調査と10次調査において溝や土坑が検出されたが、同地区における該期の遺構の検出は稀薄であり、古墳時代の集落様相を解明するうえで貴重な資料といえよう。このように、大量の木製品が出土する釜ノ口遺跡は、弥生時代後期の重要な集落のひとつであり、今後、更なる集落様相や構造解明が必要となろう。</p>
-----	---

松山市文化財調査報告書 第174集

釜ノ口遺跡Ⅲ

9次・10次・11次調査

平成26年3月14日 発行

編集 公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
発行 埋蔵文化財センター
〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地6
TEL (089) 923-6363

松山市教育委員会
〒790-0003 松山市三番町六丁目6番地1
TEL (089) 948-6605

印刷 セキ株式会社
〒790-8686 松山市湊町七丁目7番地1
TEL (089) 945-0111
